

北埋調報146

千歳市

ユカンボシ C 15 遺跡 (3)

— 北海道横断自動車道(千歳-夕張)埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成 8 ・ 9 ・ 10 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



千歳市

ユカンボシ C 15 遺跡 (3)

— 北海道横断自動車道(千歳-夕張)埋蔵文化財発掘調査報告書 —

平成 8 ・ 9 ・ 10 年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター





低湿部基本土層

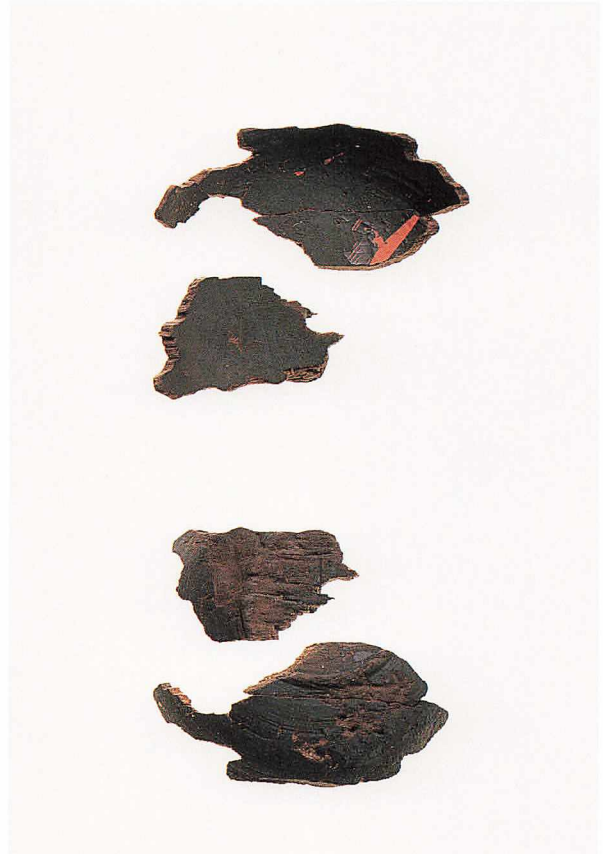


H-13出土の土器





AP-1の遺物



漆椀23



漆椀24



漆椀25



『蝦夷国測量図 (伊能中図)』(部分) 「ラサツ川」「ラサツ」の地名がある (VI-1 参照)



『蝦夷国』(部分) 「ラサツ」「井カンブシ」が並行して沼に注いでいる (VI-1 参照)



例 言

1. 本書は、北海道横断自動車道（千歳～夕張）建設工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施した、千歳市ユカンボシC15遺跡の発掘調査の報告書である。本書では、平成8・9・10年度調査のうち、西地区台地部のI黒層以上の調査分と、西地区低湿部のI黒4（IB4）層以下を報告する。ユカンボシC15遺跡の調査報告書としての3冊目となる。
2. I～IV・VI章の執筆は、西田茂・三浦正人・鈴木信が分担し、文責は各項目の文末に括弧で示した。編集は、三浦正人・鈴木信が主となって行った。
3. 遺構の遺物整理は各遺構担当者が行った。包含層の遺物整理は、土器・石器を鈴木、金属製品を三浦・鈴木、木製品等を三浦、動植物遺存体を鈴木が担当した。
4. 調査写真は全体を菊池慈人・吉田裕吏洋が、遺構を主に吉田が撮影した。遺物写真は主に吉田が担当し、木製品の一部を菊池が撮影した。写真図版の編集は吉田が行った。
5. 現場の遺構図・調査状況図などの作図、整理は、三浦・鈴木・吉田・倉橋直孝・大泰司統・藤内まゆみ・三浦千晴・原靖寿・大崎孝徳・増田潔威・梅木友子・井口隆子・小野哲也が担当、従事し、三浦・鈴木が統括した。
6. 遺物の実測・トレースは、土器・土製品を久末真紀子が、石器・石製品を高橋幸恵・三浦千晴が、木製品等をお林由里子・釜薮みどり・小畑麻弓が行い、各担当者が統括した。
7. 樹種同定は農林水産省森林総合研究所 平川泰彦氏の指導のもとに、菊池育子が行い執筆した。また、平川氏には、樹種同定方法において従来より明確にした事項について報文をいただき、これを掲載した。
8. 各種分析・同定は下記に依頼した。

花粉分析、珪藻分析、灰像分析、プラント・オパール分析、種子同定、昆虫同定は、株式会社パリーノ・サーヴェイに依頼した。

脂肪酸分析は、株式会社ズコーシャに依頼し、報文を掲載した。

放射性炭素年代測定(加速器質量分析法：AMS)は株式会社地球化学研究所に依頼し、報文を掲載した。

鉄製品・鉄滓等の材質分析等は岩手県立博物館の赤沼英男氏に依頼した。

非鉄金属製品・ガラス玉の材質分析は北海道立埋蔵文化財センターの蛍光X線分析装置（日本電子JSX-3220）を使用した。
9. 金属製品・木製品の保存処理は、美々8遺跡の方法を用いているが、木製品の一部は、(株)ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石文化財保存処理センターに依頼している。
10. V章自然科学的分析は依頼原稿のため、図・表には独自の番号が付されているので、図表目次には掲載していない。
11. 調査にあたっては下記の諸機関、各氏から御指導御協力をいただいた。

千歳市教育委員会埋蔵文化財センター、恵庭市教育委員会、恵庭市郷土資料館、北広島市教育委員会、北海道開拓記念館、大林東洋共同企業体、大場工業株式会社

大谷敏三、田村俊之、高橋 理、豊田宏良、松田淳子、遠藤昭浩、手塚新太、上屋真一、松谷純一、森 秀之、長町章弘、大林千春、佐藤幾子、遠藤龍畝、山田昌久、平川泰彦、赤沼英男、吉崎昌一、菊池徹夫、木村英明、辻誠一郎、鈴木正章、南 博史、佐藤宏之、熊木俊朗、野村 崇、三野紀男、赤松守雄、山田悟郎、平川善祥、小林幸雄、右代啓視、舟山直治、水島未記、横山英介、野中一宏、仙庭伸久、石川直章、赤石慎三、森岡健治、藪中剛史、澤田 健、北澤 実、山原敏朗、石川 朗、森田知忠、小野哲也、阿部明彦、伊藤武士、井上雅孝、宇部則保、大野 亨、利部 修、加藤道男、木村 高、工藤竹久、児玉 準、小松正夫、斉野裕彦、佐々木浩一、鈴木克彦、高橋与右衛門、高橋忠彦、仲田茂司、日野 久、船木義勝、藤沢 敦、保坂康夫、村田晃一、田畑信一、千葉 茂、清水恵一、畑 宏明、大沼忠春、千葉英一、田才雅彦、工藤研治、西脇対名夫、宗像公司

記号等の説明

1. 遺構の表記は以下に示す記号を用い、原則として調査順に番号を付した。

H : 住居跡 AP : 土坑墓
HP : 住居跡に伴うピット P : 土坑
HF : 住居跡に伴う焼土 F : 焼土

2. 遺構図の縮尺は、スケール等が入っているもの以外は、原則として40分の1である。

遺構平面図に方位記号がない場合は、上がN-22°-Wである。

遺構平面図の+はグリッドラインの交点で、交点傍らの名称記号は右下の区画を示す。

遺構平面図の・小数字は、その地点の標高(単位m)である。

3. 遺構平面図の出土遺物は記載のない限り、以下の記号を用いている。

● : 土器 ■ : 礫石器 ▲ : 剥片石器 × : フレイク・チップ
□ : 礫など * : 炭化物・骨片などの自然遺物 ◆ : 当該期の土器
★ : 金属製品

4. 遺構の規模は、「長軸の上端/下端×短軸の上端/下端×確認面からの最大深・最大厚」で示してある。

一部破壊されているものは現存長を()で示し、不明のものは-で示した。

5. 土層名は、下記の略号を用いた場合がある。

第0黒色土層 : 0B 0黒	樽前a降下軽石層 : Ta-a
第I黒色土層 : IB I黒	樽前b降下軽石層 : Ta-b
第II黒色土層 : IIB II黒	樽前c降下軽石層 : Ta-c (c ₁ ・c ₂)
漸移層 : IIB下	樽前d降下軽石層 : Ta-d
恵庭a降下軽石層 : En-a	白頭山-苫小牧火山灰層 : B-Tm
En-a起源のローム層 : En-L	支笏軽石流堆積物 : Spfl
En-a未風化軽石礫層 : En-P	

火山灰の略号は、曾屋龍典・佐藤博之(1980)『千歳地域の地質』

北海道火山灰命名委員会(1982)『北海道の火山灰』による。

6. 土層の混在状態は、基本土層や上記の略号などを用いておもに下記のように表わしてある。

A+B : AとBがほぼ同量混じる

A>B : AにBが少量混じる

A>>B : AにBが微量混じる

一部の土層説明には、『新版標準土色帖(1994年版)』を使用した。

7. 遺物実測図と土器拓影図の縮尺は、原則として以下のとおりである。一枚の図面に違う縮尺の図が配置されたものには、スケールを付したものもある。

復元土器 : 4分の1	土器拓影 : 3分の1	土製品 : 3分の1
剥片石器 : 2分の1	礫石器 : 3分の1	石製品 : 2分の1
金属製品 : 3分の1		

なお、木製品は図ごとにスケールを付した。

8. 石器・石製品・金属製品・木製品の大きさは、「最大長×最大幅×最大厚」で記してある。

目 次

口 絵
例 言
記号等の説明
調査要項

I 緒 言

1 遺跡の位置と環境	1
2 調査にいたる経緯	5
3 調査の方法	7
4 土層の区分	10
5 遺物の分類	19
6 調査の概要	21
7 本書の概要	22

II 台地部 I 黒層の遺構とその遺物

1 概要	29
2 住居跡	29
3 土坑墓	47
4 土坑	54
5 焼土	56
6 炭化物集中	62
7 灰集中 4	62
8 集石	68
9 土器集中 1	74
10 送り場 2	75
11 柱穴・柱穴列	76
12 馬蹄跡	79

III 台地部 I 黒層の遺物

1 概要	87
2 土器・土製品	87
3 石器等	94
4 金属製品・ガラス製品	103

IV 低湿部の調査－ⅡB・IB5・4層－

1	低湿部報告の概要	105
2	遺構	106
3	土器	108
4	石器等	115
5	木製品の出土状況と表説明	119
6	Ⅱ黒層の木製品	122
7	IB5層の木製品	122
8	IB4層の木製品	136
9	木製品の樹種同定	195

写真図版	203
------	-----

V 自然科学的分析

1	千歳市ユカンボシC15遺跡放射性炭素年代測定結果報告書 (株)地球科学研究所	353
2	ユカンボシC15遺跡から出土した遺構に残存する脂肪の分析 (株)ズコーシャ	362
3	数種の針葉樹の仮道管における分野壁孔の形状と大きさについて 森林総合研究所 木材利用部 平川 泰彦	375

VI 成果と問題点

1	ふたたび「ユカンボシ」の呼称について	391
2	H-13の竈廃用祭祀について	399
3	封土のある墓について	409
4	漆器について	415

報告書抄録

目 次

I 緒言		
図 I-1	遺跡の位置(1).....	2
図 I-2	遺跡の位置(2).....	3
図 I-3	調査前状況図.....	6
図 I-4	年度別調査区図・グリッド設定図.....	9
図 I-5	土層模式図.....	10
図 I-6	土層図(1).....	14
図 I-7	土層図(2).....	15
図 I-8	土層図(3).....	16
図 I-9	土層図(4).....	17
図 I-10	土層図(5).....	18
図 I-11	西地区最終面コンター図.....	23
図 I-12	西地区遺構位置図.....	25
II 台地部 I 黒層の遺構とその遺物		
図 II-1	I 黒層遺構位置図.....	30
図 II-2	H-13(1).....	32
図 II-3	H-13(2).....	33
図 II-4	H-13(3).....	34
図 II-5	H-13(4).....	35
図 II-6	H-13の土器.....	36
図 II-7	H-13の石器・土製品.....	38
図 II-8	H-14の遺物.....	41
図 II-9	H-14.....	42
図 II-10	H-31.....	43
図 II-11	H-31の遺物.....	44
図 II-12	H-35.....	45
図 II-13	H-36.....	46
図 II-14	AP-1.....	48
図 II-15	AP-1の遺物.....	49
図 II-16	AP-2とその遺物.....	51
図 II-17	AP-3とその遺物.....	52
図 II-18	P-77.....	54
図 II-19	P-42.....	55
図 II-20	I 黒層上面の焼土・炭化物集中位置図.....	57
図 II-21	I 黒層上面の焼土(1).....	58
図 II-22	I 黒層上面の焼土(2)・炭化物集中.....	59
図 II-23	I 黒層上部の焼土・炭化物集中・ 灰集中位置図.....	60
図 II-24	I 黒層上部の焼土・炭化物集中.....	61
図 II-25	I 黒層上部の炭化物集中・灰集中と その遺物.....	62
図 II-26	I 黒層中部の焼土位置図.....	63
図 II-27	I 黒層中部の焼土.....	64
図 II-28	I 黒層下部の焼土位置図.....	65
図 II-29	I 黒層下部の焼土.....	66
図 II-30	I 黒層上面の集石 I・集石 3 の遺物.....	68
図 II-31	I 黒層上面の集石(2).....	69
図 II-32	I 黒層上面の集石(3).....	70
図 II-33	I 黒層上部の集石.....	71
図 II-34	I 黒層下部の集石・集石 19 の遺物.....	72
図 II-35	土器集中 1 とその遺物.....	74
図 II-36	送り場 2 とその遺物.....	75
図 II-37	柱穴・柱穴列位置図.....	76
図 II-38	柱穴列(1).....	77
図 II-39	柱穴列(2).....	78
図 II-40	馬蹄跡.....	80
III 台地部 I 黒層の遺物		
図 III-1	台地部の土器.....	88
図 III-2	台地部の復元土器分布.....	89
図 III-3	台地部の土器分布(1).....	91
図 III-4	台地部の土器分布(2).....	92
図 III-5	台地部の土器分布(3).....	93
図 III-6	台地部の石器等.....	95
図 III-7	台地部の石器等分布(1).....	96
図 III-8	台地部の石器等分布(2).....	97
図 III-9	台地部の石器等分布(3).....	98
図 III-10	台地部の石器等分布(4).....	99
図 III-11	台地部の金属製品・ガラス製品.....	104
IV 低湿部の調査 - II B・I B 5・4 層 -		
図 IV-1	低湿部範囲図.....	105
図 IV-2	杭列-10の杭.....	106
図 IV-3	杭列-10.....	107
図 IV-4	低湿部の土器・石器.....	109
図 IV-5	低湿部の復元土器分布.....	110
図 IV-6	低湿部の土器分布(1).....	110
図 IV-7	低湿部の土器分布(2).....	111
図 IV-8	低湿部の土器分布(3).....	112
図 IV-9	低湿部の石器等分布(1).....	113
図 IV-10	低湿部の石器等分布(2).....	114
図 IV-11	低湿部の石器等分布(3).....	115
図 IV-12	低湿部の石器等分布(4).....	116
図 IV-13	II B・I B 5・I B 4 層木製品分布図.....	121
図 IV-14	II B 層木製品分布図(1).....	123
図 IV-15	II B 層木製品分布図(2).....	124
図 IV-16	I B 5 層木製品分布図.....	129
図 IV-17	I B 5 層の木製品(1).....	131
図 IV-18	I B 5 層の木製品(2).....	132
図 IV-19	I B 4 層木製品分布図(1).....	136
図 IV-20	I B 4 層木製品分布図(2).....	137
図 IV-21	I B 4 層木製品分布図(3).....	138
図 IV-22	I B 4 層木製品集中地点.....	145
図 IV-23	I B 4 層の木製品(1).....	146
図 IV-24	I B 4 層の木製品(2).....	147
図 IV-25	I B 4 層の木製品(3).....	148
図 IV-26	I B 4 層の木製品(4).....	149
図 IV-27	I B 4 層の木製品(5).....	150
図 IV-28	I B 4 層の木製品(6).....	151
図 IV-29	I B 4 層の木製品(7).....	152
図 IV-30	I B 4 層の木製品(8).....	153
図 IV-31	I B 4 層の木製品(9).....	154
図 IV-32	I B 4 層の木製品(10).....	155
図 IV-33	I B 4 層の木製品(11).....	156
図 IV-34	I B 4 層の木製品(12).....	157
図 IV-35	I B 4 層の木製品(13).....	158
図 IV-36	I B 4 層の木製品(14).....	159
図 IV-37	I B 4 層の木製品(15).....	160
図 IV-38	I B 4 層の木製品(16).....	161
図 IV-39	I B 4 層の木製品(17).....	162
図 IV-40	I B 4 層の木製品(18).....	163
図 IV-41	I B 4 層の木製品(19).....	164
図 IV-42	I B 4 層の木製品(20).....	165
図 IV-43	I B 4 層の木製品(21).....	166
図 IV-44	I B 4 層の木製品(22).....	167
図 IV-45	I B 4 層の木製品(23).....	168
図 IV-46	I B 4 層の木製品(24).....	169
図 IV-47	I B 4 層の木製品(25).....	170
VI 成果と問題点		
図 VI-1	改修前の川と沼の様子.....	392
図 VI-2	ユカンボシ川の流路.....	394
図 VI-3	菱(水面の葉と花、実).....	397
図 VI-4	擦文～アイヌ文化期の墓構造の系譜.....	414

表 目 次

I 緒言

表 I - 1 掲載遺構一覧	27
----------------	----

II 台地部 I 黒層の遺構とその遺物

表 II - 1 H-13 掲載土器観察表	37
表 II - 2 H-13 掲載土器一覧	39
表 II - 3 H-13 掲載石器一覧	39
表 II - 4 H-13 掲載鉄製品一覧	40
表 II - 5 H-13 掲載炉壁片一覧	40
表 II - 6 H-13 遺物集計表	40
表 II - 7 H-14 掲載土器一覧	41
表 II - 8 H-14 掲載鉄製品一覧	41
表 II - 9 H-14 遺物集計表	41
表 II - 10 H-31 掲載土器一覧	44
表 II - 11 H-31 掲載鉄製品一覧	44
表 II - 12 H-31 遺物集計表	44
表 II - 13 H-31 掲載土器観察表	44
表 II - 14 A P - 1 掲載土器観察表	52
表 II - 15 A P - 1 掲載土器一覧	52
表 II - 16 A P - 1 掲載石器一覧	52
表 II - 17 A P - 1 ~ 3 掲載金属製品一覧	53
表 II - 18 A P - 3 掲載漆器一覧	53
表 II - 19 A P - 1 ~ 3 遺物集計表	53
表 II - 20 P-77 掲載石器一覧	55
表 II - 21 P-42・77 遺物集計表	55
表 II - 22 炭化物集中の掲載土器観察表	62
表 II - 23 掲載焼土等一覧	67
表 II - 24 焼土等掲載土器一覧	67
表 II - 25 焼土掲載鉄製品一覧	67
表 II - 26 焼土等遺物集計表	67
表 II - 27 集石掲載石器一覧	70
表 II - 28 集石掲載鉄製品一覧	70
表 II - 29 集石遺物集計表	73
表 II - 30 集石礫集計表	73
表 II - 31 土器集中 1 掲載石器一覧	73
表 II - 32 送り場 2 掲載鉄製品一覧	73
表 II - 33 土器集中 1・送り場 2 遺物集計表	73

III 台地部 I 黒層の遺物

表 III - 1 台地部の掲載土器観察表	89
表 III - 2 台地部の掲載土器一覧	90
表 III - 3 台地部の掲載石器一覧	94
表 III - 4 台地部の石質別礫集計表(1)	100
表 III - 5 台地部の石質別礫集計表(2)	101
表 III - 6 台地部の石質別礫集計表(3)	102
表 III - 7 台地部の掲載金属製品等一覧	103

IV 低湿部の調査 - II B・I B 5・4 層 -

表 IV - 1 低湿部の掲載土器観察表	108
表 IV - 2 低湿部の掲載土器一覧	110
表 IV - 3 低湿部の掲載石器一覧	110
表 IV - 4 低湿部の石質別礫集計表(1)	117
表 IV - 5 低湿部の石質別礫集計表(2)	118
表 IV - 6 II B 層未掲載木製品一覧(1)	125
表 IV - 7 II B 層未掲載木製品一覧(2)	126
表 IV - 8 II B 層未掲載木製品一覧(3)	127

表 IV - 9 II B 層未掲載木製品一覧(4)	128
表 IV - 10 I B 5 層掲載木製品一覧	133
表 IV - 11 I B 5 層未掲載木製品一覧(1)	133
表 IV - 12 I B 5 層未掲載木製品一覧(2)	134
表 IV - 13 I B 5 層未掲載木製品一覧(3)	135
表 IV - 14 杭列-10 の杭一覧	171
表 IV - 15 I B 4 層掲載木製品一覧(1)	171
表 IV - 16 I B 4 層掲載木製品一覧(2)	172
表 IV - 17 I B 4 層掲載木製品一覧(3)	173
表 IV - 18 I B 4 層掲載木製品一覧(4)	174
表 IV - 19 I B 4 層未掲載木製品一覧(1)	175
表 IV - 20 I B 4 層未掲載木製品一覧(2)	176
表 IV - 21 I B 4 層未掲載木製品一覧(3)	177
表 IV - 22 I B 4 層未掲載木製品一覧(4)	178
表 IV - 23 I B 4 層未掲載木製品一覧(5)	179
表 IV - 24 I B 4 層未掲載木製品一覧(6)	180
表 IV - 25 I B 4 層未掲載木製品一覧(7)	181
表 IV - 26 I B 4 層未掲載木製品一覧(8)	182
表 IV - 27 I B 4 層未掲載木製品一覧(9)	183
表 IV - 28 I B 4 層未掲載木製品一覧(10)	184
表 IV - 29 I B 4 層未掲載木製品一覧(11)	185
表 IV - 30 I B 4 層未掲載木製品一覧(12)	186
表 IV - 31 I B 4 層未掲載木製品一覧(13)	187
表 IV - 32 I B 4 層未掲載木製品一覧(14)	188
表 IV - 33 I B 4 層未掲載木製品一覧(15)	189
表 IV - 34 I B 4 層未掲載木製品一覧(16)	190
表 IV - 35 I B 4 層未掲載木製品一覧(17)	191
表 IV - 36 I B 4 層未掲載木製品一覧(18)	192
表 IV - 37 I B 4 層未掲載木製品一覧(19)	193
表 IV - 38 I B 4 層未掲載木製品一覧(20)	194
表 IV - 39 層位別樹種同定結果	201

VI 成果と問題点

表 VI - 1 当該する千歳市、恵庭市の主な遺跡	402
表 VI - 2 時期別集計	402
表 VI - 3 竈・地床炉のある焼失住居	402
表 VI - 4 竈があり地床炉がない焼失住居	404
表 VI - 5 竈がない焼失住居	404
表 VI - 6 竈があり焼失していない住居	404
表 VI - 7 時期別の竈型式	406
表 VI - 8 時期別の煙道構造	406
表 VI - 9 時期別の袖状態	406
表 VI - 10 袖の状態	406
表 VI - 11 時期別の煙出し閉塞状態	406
表 VI - 12 煙出し閉塞状態	406
表 VI - 13 時期別の粘土堆積状態	406
表 VI - 14 粘土堆積状態	406
表 VI - 15 竈・粘土の位置と袖の破壊部位	406
表 VI - 16 時期別の竈改変	406
表 VI - 17 竈改変	406
表 VI - 18 時期別の土器接合関係	406
表 VI - 19 土器接合関係	406
表 VI - 20 封土、周溝のあるアイヌ墓	414
表 VI - 21 ユカンボシ C15 遺跡漆碗等一覧	417

図 版 目 次

I 緒言

図版 I - 1	遺跡全景	205
図版 I - 2	低湿部対策施設	206
図版 I - 3	基本土層(1)	207
図版 I - 4	基本土層(2)	208
図版 I - 5	基本土層(3)	209

II 台地部 I 黒層の遺構とその遺物

図版 II - 1	H-13(1)	210
図版 II - 2	H-13(2)	211
図版 II - 3	H-13(3)	212
図版 II - 4	H-13の遺物(1)	213
図版 II - 5	H-13の遺物(2)	214
図版 II - 6	H-13の遺物(3)	215
図版 II - 7	H-13の遺物(4)	216
図版 II - 8	H-13の遺物(5)	217
図版 II - 9	H-14(1)	218
図版 II - 10	H-14(2)	219
図版 II - 11	H-14(3)とその遺物	220
図版 II - 12	H-31(1)	221
図版 II - 13	H-31(2)	222
図版 II - 14	H-31の遺物	223
図版 II - 15	H-35	224
図版 II - 16	H-36(1)	225
図版 II - 17	H-36(2)	226
図版 II - 18	AP-1(1)	227
図版 II - 19	AP-1(2)とその遺物(1)	228
図版 II - 20	AP-1の遺物(2)	229
図版 II - 21	AP-1の遺物(3)	230
図版 II - 22	AP-1の遺物(4)	231
図版 II - 23	AP-1の遺物(5)	232
図版 II - 24	AP-2(1)	233
図版 II - 25	AP-2(2)	234
図版 II - 26	AP-2(3)とその遺物	235
図版 II - 27	AP-3(1)	236
図版 II - 28	AP-3(2)とその遺物	237
図版 II - 29	P-77	238
図版 II - 30	P-77の遺物・P-42	239
図版 II - 31	I 黒層上面焼土(1)とその遺物	240
図版 II - 32	I 黒層上面焼土(2)とその遺物	241
図版 II - 33	I 黒層上面焼土(3)・炭化物集中	242
図版 II - 34	I 黒層上部焼土とその遺物	243
図版 II - 35	I 黒層中部焼土	244
図版 II - 36	I 黒層下部焼土	245
図版 II - 37	集石 3 とその遺物(1)	246
図版 II - 38	集石 3 の遺物(2)	247
図版 II - 39	集石 4・5・7	248
図版 II - 40	集石 6・21・22・23	249
図版 II - 41	集石 24・25	250
図版 II - 42	集石 29・33	251
図版 II - 43	送り場 2(1)	252
図版 II - 44	送り場 2 の遺物	253
図版 II - 45	集石 19 と土器集中 1 の遺物	254
図版 II - 46	柱穴列 1・2・3・4・5	255
図版 II - 47	柱穴列 3・4・5	256
図版 II - 48	柱穴列 6・7・8・9	257
図版 II - 49	柱穴列 10・11・12	258
図版 II - 50	馬蹄跡	259

III 台地部 I 黒層の遺物

図版 III - 1	Ta-a等除去作業(1)	260
図版 III - 2	Ta-a等除去作業(2)	261
図版 III - 3	調査風景(1)	262
図版 III - 4	調査風景(2)	263
図版 III - 5	調査完了状況(1)	264
図版 III - 6	調査完了状況(2)	265
図版 III - 7	調査完了状況(3)	266
図版 III - 8	台地部 I 黒層の土器(1)	267
図版 III - 9	台地部 I 黒層の土器(2)	268
図版 III - 10	台地部 I 黒層の土器(3)	269
図版 III - 11	台地部 I 黒層の土器(4)	270
図版 III - 12	台地部 I 黒層の石器(1)	271
図版 III - 13	台地部 I 黒層の石器(2)	272
図版 III - 14	台地部 I 黒層の石器(3)	273
図版 III - 15	台地部 I 黒層の石器(4)	274
図版 III - 16	台地部 I 黒層の石器(5)	275
図版 III - 17	台地部 I 黒層の金属製品(1)	276
図版 III - 18	台地部 I 黒層の金属製品(2) ・ガラス玉	277
図版 III - 19	台地部 I 黒層の金属製品(3)	278

IV 低湿部の調査-II B・I B 5・4層-

図版 IV - 1	Ta-a等除去作業(1)	279
図版 IV - 2	Ta-a等除去作業(2)	280
図版 IV - 3	Ta-a等除去作業(3)	281
図版 IV - 4	Ta-a等除去作業(4)	282
図版 IV - 5	Ta-a等除去作業(5)	283
図版 IV - 6	杭列 10(1)	284
図版 IV - 7	杭列 10(2)とその遺物	285
図版 IV - 8	調査風景(1)	286
図版 IV - 9	調査風景(2)	287
図版 IV - 10	調査風景(3)	288
図版 IV - 11	調査風景(4)	289
図版 IV - 12	調査風景(5)	290
図版 IV - 13	調査風景(6)	291
図版 IV - 14	木製品出土状況(1)	292
図版 IV - 15	木製品出土状況(2)	293
図版 IV - 16	調査完了状況(1)	294
図版 IV - 17	調査完了状況(2)	295
図版 IV - 18	調査完了状況(3)	296
図版 IV - 19	調査完了状況(4)	297
図版 IV - 20	低湿部の土器(1)	298
図版 IV - 21	低湿部の土器(2)・石器	299
図版 IV - 22	I B 5 層の木製品(1)	300
図版 IV - 23	I B 5 層の木製品(2)	301
図版 IV - 24	I B 5 層の木製品(3)	302
図版 IV - 25	I B 5 層の木製品(4)	303
図版 IV - 26	I B 4 層の木製品(1)	304
図版 IV - 27	I B 4 層の木製品(2)	305
図版 IV - 28	I B 4 層の木製品(3)	306
図版 IV - 29	I B 4 層の木製品(4)	307
図版 IV - 30	I B 4 層の木製品(5)	308
図版 IV - 31	I B 4 層の木製品(6)	309
図版 IV - 32	I B 4 層の木製品(7)	310
図版 IV - 33	I B 4 層の木製品(8)	311
図版 IV - 34	I B 4 層の木製品(9)	312
図版 IV - 35	I B 4 層の木製品(10)	313
図版 IV - 36	I B 4 層の木製品(11)	314

図版IV-37	I B 4 層の木製品(12)	315
図版IV-38	I B 4 層の木製品(13)	316
図版IV-39	I B 4 層の木製品(14)	317
図版IV-40	I B 4 層の木製品(15)	318
図版IV-41	I B 4 層の木製品(16)	319
図版IV-42	I B 4 層の木製品(17)	320
図版IV-43	I B 4 層の木製品(18)	321
図版IV-44	I B 4 層の木製品(19)	322
図版IV-45	I B 4 層の木製品(20)	323
図版IV-46	I B 4 層の木製品(21)	324
図版IV-47	I B 4 層の木製品(22)	325
図版IV-48	I B 4 層の木製品(23)	326
図版IV-49	I B 4 層の木製品(24)	327
図版IV-50	I B 4 層の木製品(25)	328
図版IV-51	I B 4 層の木製品(26)	329
図版IV-52	I B 4 層の木製品(27)	330
図版IV-53	I B 4 層の木製品(28)	331
図版IV-54	I B 4 層の木製品(29)	332
図版IV-55	I B 4 層の木製品(30)	333

図版IV-56	I B 4 層の木製品(31)	334
図版IV-57	I B 4 層の木製品(32)	335
図版IV-58	I B 4 層の木製品(33)	336
図版IV-59	I B 4 層の木製品(34)	337
図版IV-60	I B 4 層の木製品(35)	338
図版IV-61	I B 4 層の木製品(37)	339
図版IV-62	木製品樹種 顕微鏡写真(1)	340
図版IV-63	木製品樹種 顕微鏡写真(2)	341
図版IV-64	木製品樹種 顕微鏡写真(3)	342
図版IV-65	木製品樹種 顕微鏡写真(4)	343
図版IV-66	木製品樹種 顕微鏡写真(5)	344
図版IV-67	木製品樹種 顕微鏡写真(6)	345
図版IV-68	木製品樹種 顕微鏡写真(7)	346
図版IV-69	木製品樹種 顕微鏡写真(8)	347
図版IV-70	木製品樹種 顕微鏡写真(9)	348
図版IV-71	木製品樹種 顕微鏡写真(10)	349
図版IV-72	木製品樹種 顕微鏡写真(11)	350
図版IV-73	木製品樹種 顕微鏡写真(12)	351

調査要項

事業名：北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査

事業委託者：日本道路公団北海道支社

事業受託者：財団法人 北海道埋蔵文化財センター

遺跡名：ユカンボシC15遺跡（北海道教育委員会登録番号：A-03-263）

所在地：千歳市長都183-1,1190-1ほか

調査期間：平成8年4月1日～平成9年3月26日（発掘 6月26日～10月30日）

平成9年4月1日～平成10年3月31日（発掘 5月6日～10月31日）

平成10年4月1日～平成11年3月31日（発掘 5月6日～9月12日）

調査面積：平成8年度 3,025㎡

平成9年度 8,855㎡

平成10年度 3,000㎡

調査体制

	氏名	平成8年度	平成9年度	平成10年度
第2調査部長	鬼柳 彰			
第2調査部第2調査課長	西田 茂		★	★
“ 主査	三浦 正人		★	★
“ 主任	三浦 正人	★		
“ 主任	鈴木 信		★	★
“ 主任	中田 裕香		★	
“ 文化財保護主事	倉橋 直孝	★	★	
“ 文化財保護主事	吉田 裕吏洋	○	○	○
“ 文化財保護主事	大泰司 統		○	○
第1調査部資料調査課主任	田口 尚		○	
“ 主任	菊池 慈人		○	○

★：発掘担当者

○：調査員

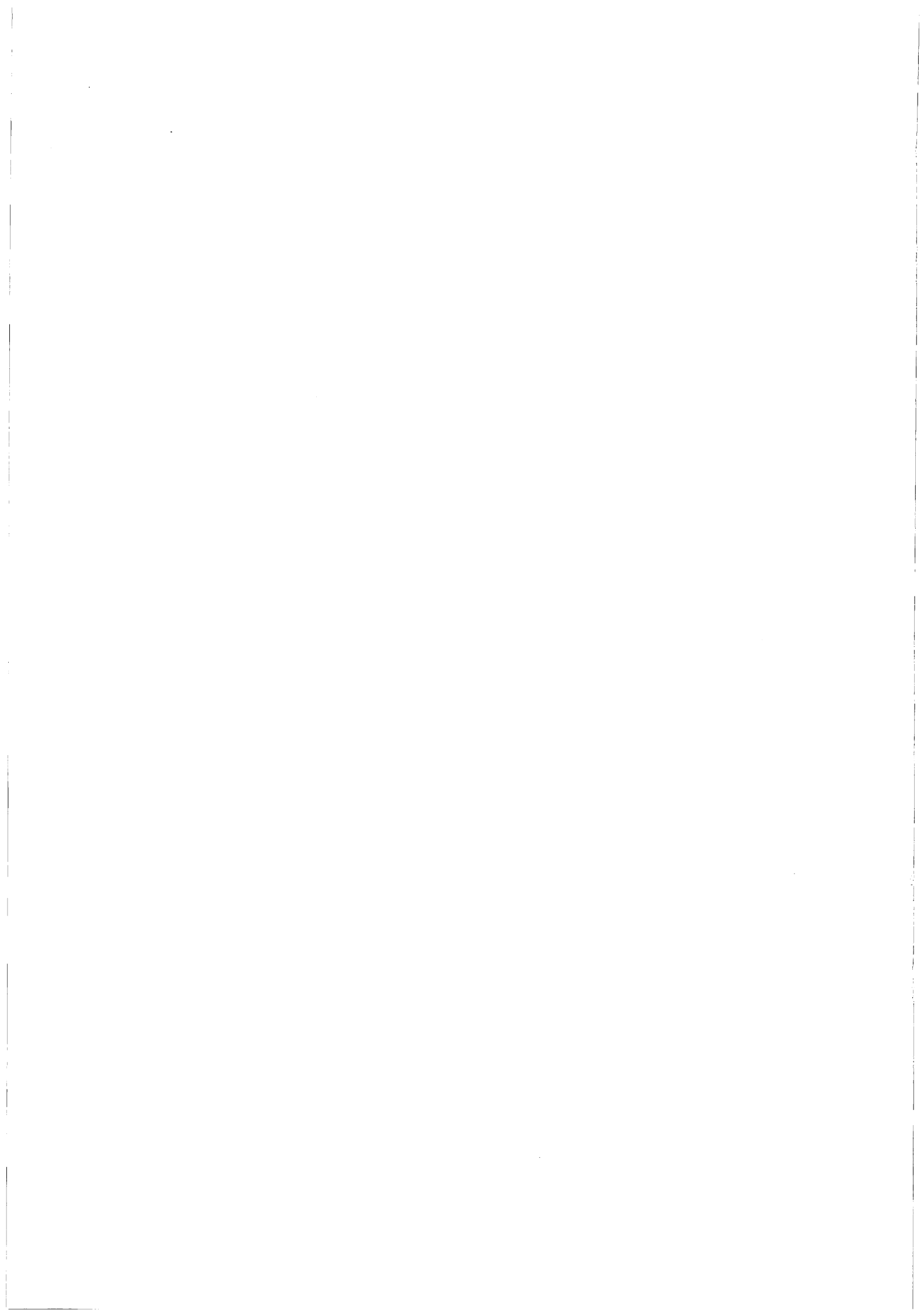
平成11年度 整理作業

第2調査部第3調査課 課長 西田 茂

主査 三浦 正人

主任 鈴木 信

文化財保護主事 吉田 裕吏洋



I 緒 言

1 遺跡の位置と環境

(1) 位置 (図 I-1・2)

ユカンボシC15遺跡は、JR千歳駅の北方約6kmに位置し、千歳川の西方500mにある。千歳川にかかる「長都大橋」から「東6線」(道道馬追原野北信濃線)を南に一区画進むと「市道南23号」に達する。この東6線と南23号とが交わるあたりから西側300mほどが遺跡の広がりとして確認できている。標高は5~9mである。現在のこころでの水位は通常6mほどであるが、千歳川の改修工事が一段落する30年以前は水位が高く、標高8mのあたりまでは沼沢地であった。この沼沢地は千歳川、長都川、ユカンボシ川の水を集め、干拓以前は「オサットー」または「長都沼」と呼ばれていた。

5万分の1地形図から割りだした遺跡の位置は、東の地区の中央部が東経141度38分49秒、北緯42度52分41秒である。

(2) 地形 (図 I-1・2・3・4、図版 I-1)

図 I-3 は道路工事予定図をもとにした地形図である。ユカンボシC15遺跡は、高速道路の本線車道と市道南23号の道路敷地、側溝部分を含んでいる。概略東西の長さ300m、南北の幅80mの範囲であり、遺跡の広がりには南北方向にのびることは確実であるが、東西方向にどれほど延びているのかは明らかでない。遺跡の調査区域は、年度毎の区別をおこなって図 I-4 に示した。一見平らなところに見えるが、相対的な地形として台地部と低湿部とがある。

東側の地区(東地区)と西側の地区(西地区)とは60~80mほどの距離がある(図 I-4)。この空隙は試掘調査の成果から、耕作等によって遺物包含層が消失した地域であるとの北海道教育委員会文化課の判断による。

3か年にわたる発掘調査の結果、東地区と西地区との間には流路の地形が横切って低湿部をなしており、東西の地区は別の地形単位として理解できることになった。この流路地形は自然河川としてのユカンボシ川である。古く縄文時代以来の流れであったが、農耕地拡大に伴って流路が変更された現在では「古ユカンボシ」あるいは「旧ユカンボシ」と称することになる。

図版 I-1 は1997年7月に西側上空から撮影した調査区の空中写真である。中央部のコンクリート構造体は1996年の調査区域であり、高速道路と交差する農道である。このコンクリート構造体の左上方の調査区には、掘り揚げ土搬出用のベルトコンベアが2列認められる。さらにその奥で白色のテントが設置されているあたりは東地区である。この東地区が自然地形として周囲よりいくぶん高く、半島状に伸びるものだと理解できたのは、発掘調査が終了した後であった。

中央部のコンクリート構造体の手前では市道23号部分と水田部分の盛り土、表土、火山灰(Ta-a)の除去を建設用重機で行っている。市道部分では側溝と水道管の埋設溝の痕跡が直線で伸びている。市道の左側手前はいくぶん高くなっておりジャガイモの畑であり、その向こうは一段低くてかつては水田であったが、最近では牧草畑として利用されている。

この写真にも明らかなように低平な地域であり、標高は10mに満たない。かつての沼沢地が排水路の整備によって耕作地となっているが、米作の減反政策もあってその大部分は乳牛用の飼料作物、牧草地となっており、水田は右側に認められるに過ぎない。左辺上方に伸びる高速道路の橋脚は、千歳川を飛び越える「千歳川橋」である。この橋の近くで長都川は千歳川に合流している。

(3) 周辺の環境 (図 I-1・2・3、図版 I-1)

高速道路用地になる前は、東側の地区は民家、畑、水田、市道であり、西側の地区は畑、水田、市

1 遺跡の位置と環境



(この図は、国土地理院、平成7年発行の五万分の一地形図「恵庭」・「千歳」に加筆し、1/100,000に縮小複製したものである。)

図 I - 1 遺跡の位置(1)



この図は、陸地測量部、大正5年及6年測図、昭和10年修正測五万分の一地形図札幌第七號「恵庭」の一部を複製し加筆したものである。

図 I - 2 遺跡の位置(2)

1 遺跡の位置と環境

道であった。低平な地域であるが、相対的に高いところが宅地、畑、低いところが水田という土地利用である。

遺跡の西側には幅72m（40間）で南北に伸びる防風林（国有保安林）がある。これは北海道庁が1893年に完了した「植民地区画割」にもとづく樹林地帯であり、1918年（大正7年）から始められた「耕地防風林の人工造成」の成果である。トドマツやイチイなどの針葉樹、ヤチダモ、ハンノキ、カシワ、ミズナラ、コブシ、オニグルミ、クリ、ホオノキ、カエデなどの落葉広葉樹が目につく。ミズキは初夏に白い花が咲くので防風林内の多くの場所に育っていることがわかった。林内樹上の高いところにアオサギが営巣、繁殖しているのも認められた。

林床で目を引くのは早春であれば黄色のフクジュソウ、赤紫のタチツボスミレ、青のエゾエンゴサク、初夏は白色のエンレイソウである。遺跡の近辺にはヤマクワ、タラノキ、ヤマブドウ、コクワなどがみられた。林縁の一部には荒れ地をあらわすヨモギ、イタドリ、ヤナギなどが侵入している。

初夏に白く咲くスズランは畑の栽培種で換金作物である。周辺の畑では小麦、ジャガイモ、アスパラガス、カボチャ、ダイコン、キャベツ、飼料、牧草などが作ってある。夏の休耕田でホテイアオイの群落がなす青い花敷きは壮観である。道路の脇で目につく野の花には白いコンロンソウ、赤紫のムラサキケマン、青紫のナギナタコウジュ、黄色のツリフネソウ、曇天時の白いマツヨイセンノウなどがある。これらの作物、野草の分布は用水路、排水路の整備、水位の低下によるところが大きい。

(4) 古地図（図I-2）

ユカンボシC15遺跡は「オサツ」川の下流部にあたり、この付近の様子は1600年代以降の絵図にいくつか表現されている。また、伊能忠敬実測（1821年刊行）として知られている中図『蝦夷』では「勇払・石狩間山道」の東側に「オサツ沼」が書き込まれており、周辺の地名も読み取れる。さらに幕末期の見聞録である松浦武四郎の地図にも水航の要地として表現されている。

近代的な測量にもとづく地形図は、1894年（明治27年）北海道庁が刊行した「胆振国千歳郡千歳原野区画図」（これは25000分の1である）をはじめとし、5万分の1の図が、刊行主体や図幅名称を変えながら発行されている。

図I-2は1936年（昭和11年）「大日本帝国陸地測量部」発行の『恵庭』（えにわ）である。この図には左下に直線で伸びる「鉄道」が描いてあり、左端には「ゑには」駅もある。鉄道線路は1926年（大正15年）開業の「北海道鉄道札幌線」（苗穂-沼ノ端）の一部である。

広大な原野に格子目の道路が描き込まれている。これは北海道庁が農耕地開拓のために企画した「植民区画」の道路である。一つの区画を300間（540m）とするもので、東西に走るものを「号」と呼び、南北のものを「線」と称している。南北の道では「基線」「東三線」「東五線」「東六線」「東九線」が読み取れ、東西のものは「南十八号」「南二十一号」「南二十四号」「南二十六号」「南三十号」が読み取れる（「南23号」は加筆したものである）。これらの号線道路の基準となる「基線」「零（基）号」の交点は現在の長沼町にある。この「千歳原野植民地区画割」（号線の設定）は1893年には完了しており、翌1894年2月から「植民地払下」は始まっている。

この図によると「ユカンボシ川」の流路は、「東五線」と「東六線」との間を北流し、大きく東に折れて「長都川」に注いでいる。遺跡の周辺には「乾田」の記号が多くみとめられる。

現在の5万分の1地形図の図幅名称は『恵庭』（図I-1）である。千歳川、長都川などの河川改修により水位が低下し、かつての「長都沼」の湖沼は消失した。「植民区画」の道路、「防風林」が整然と直進している。現在のユカンボシ川は、改修工事による流路変更の結果「南24号」の南側を東に流れ、長都川に合流している。下流部にあたる千歳市域においては、河川改修の工事が進展し、護岸

はコンクリートブロックで覆われ、直線化した流路になっている。自然河川の姿が残るのは最上流部の恵庭公園内とその近辺のわずかな範囲だけである。

このユカンボシC15遺跡の発掘調査が終了し、高速道路の建設工事がすすんだので、東西に走る長大な構造物が、低平な地域に出現している。(西田)

2 調査にいたる経緯

日本道路公団が建設を進めている北海道横断自動車道(千歳市～夕張市)にかかる埋蔵文化財の保護についての活動は、北海道教育委員会が行っている。すなわち1988年(昭和63年)4月～5月の遺跡所在確認調査、1991年10月以降の遺跡範囲確認調査である。

範囲確認調査を終えた遺跡で、工事計画の変更が不可能であるために発掘調査を必要とする埋蔵文化財包蔵地は千歳市11か所、恵庭市3か所、由仁町2か所、夕張市3か所であった。千歳市内の11か所は、西から東に、次のような遺跡名である。オサツ16遺跡、オサツ18遺跡、オサツ15遺跡、ポンオサツ遺跡、ユカンボシC15遺跡、オサットー1遺跡、キウス4遺跡、キウス5遺跡、キウス7遺跡、ケネフチ5遺跡、ケネフチ8遺跡。

恵庭市内の3か所は、千歳市内のポンオサツ遺跡とユカンボシC15遺跡とのあいだに、西からシマコツナイC1遺跡、ユカンボシE10遺跡、ユカンボシE7遺跡である。これらの千歳市内、恵庭市内の遺跡14か所の発掘調査は、1998年秋をもって終了した。

ユカンボシC15遺跡については、道路の路線が決定したのちに遺跡であることが判明した。建設工事が予定されていることもあって、北海道教育委員会による範囲確認のための試掘調査が下記のような日程で行われた。

1995年(平成7年)5月29日～6月2日(調査員:大沼忠春。西側の低湿部)

1995年6月26日～27日(調査員:大沼忠春。防風林の西側)

1995年11月6日～10日(調査員:千葉英一、西脇対名夫。西側の台地部分、東端部)

1995年11月27日～12月1日(調査員:種市幸生、千葉英一、田才雅彦。中央の低湿部、東側の台地)

1996年(平成8年)4月17日(調査員:大沼忠春。民家、宅地部分、鶏小屋)

以上のように行われた範囲確認調査をもとに、1996年6月から財団法人北海道埋蔵文化財センターにより、発掘調査が3か年にわたり継続された。

発掘調査中の1997年5月27日(調査員:種市幸生、藤原秀樹)と6月24日(調査員:大沼忠春)に東地区の民家跡の西側部分で、追加の試掘がおこなわれた。さらに、1998年9月3日、深掘部分の調査範囲に関する判断もなされた(調査員:千葉英一、工藤研治)。(西田)

2 調査にいたる経緯

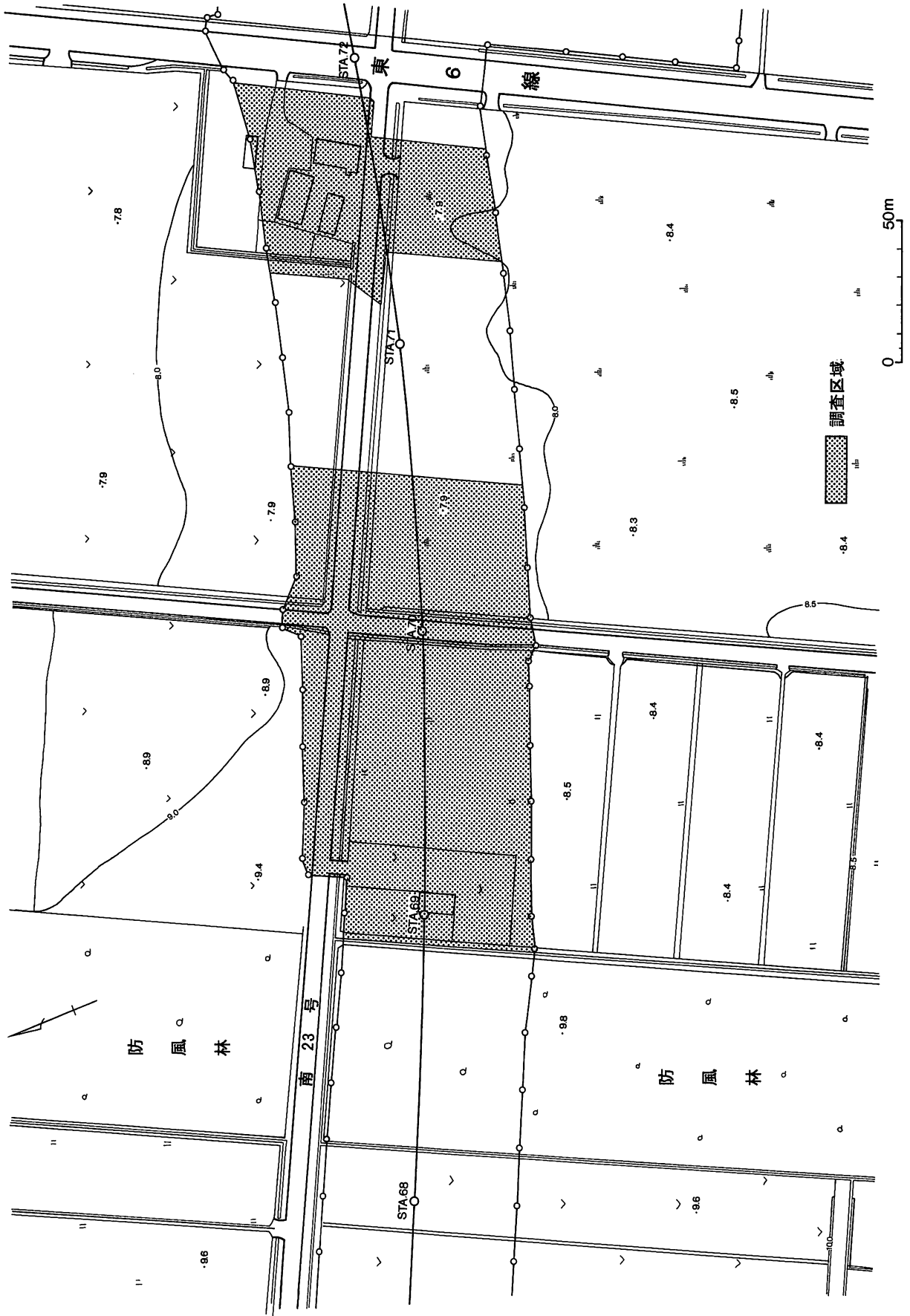


図 I - 3 調査前状況図

3 調査の方法

発掘区の設定 (図 I-3・4)

現地調査の基本図は、北海道横断自動車道工事予定図1,000分の1を使用した。発掘区の設定は、以下のおこなった。

まず、工事予定中央線のSTA69、STA70をそれぞれM10、M30とする。これを結ぶ直線を基軸として5mの方眼を設定する。この5mの方眼は、北西端の交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称される(例：K13)。さらにこの5mの方眼は2.5m四方に分割されて小発掘区となり、反時計まわりに、北西端からa、b、c、dと呼ぶ(例：K13b)。

この方眼の平面直角座標は、第Ⅱ系でつぎの通りである。

STA-69 (M10) : X = -124295.5363、Y = -49502.1207

STA-70 (M30) : X = -124332.6406、Y = -49409.2737

調査予定地の遺跡内容の推定 (図 I-3・4)

試掘調査によって推定される遺跡内容は以下のようなものであった。

- a : 調査区域は、東と西二つの地区に分かれている。
- b : 広い調査範囲は、低湿部を多く含んでいる。
- c : 台地部分とでも称すべき高まりでは農耕地として遺物包含層が削平を受けたところもある。
- d : ほぼ全面に樽前a火山灰がみられる。その厚さは30cmほどである。
- e : 低湿部では木製遺物の検出が予想される。その時期は擦文文化期・アイヌ文化期であろう。
- f : また、縄文時代後期の土器破片も出土している。

調査計画と結果

広い調査範囲であるから、発掘は3か年に渡るものとなった。このような長期の発掘において良好な調査記録を残すには、より周到な計画が必要となる。とりわけ調査範囲の大半は低湿部であり、湧水や滲水が予想される。結果的には、除水、排水にはウエル・ポイント法で対処することによって、安全確保とともに、遺物の検出にあたっては台地上の発掘に近い形で進行できた。

1996年の発掘調査 (日誌抄) 前前回の報告書に記したのでここでは省略する。

1997年の発掘調査 (日誌抄) 前前回と前回の報告書に記したので、ここでは省略する。

1998年の発掘調査 (日誌抄) 前回の報告書に記したので、ここでは省略する。

3か年の調査経過の概略は以上のものであった。東地区、西地区ともにそれぞれ調査区域が2か所づつあり、準備、発掘、最終確認、後始末の繰り返しであった。

発掘調査の進行と手順 東地区、西地区ともに広い調査予定地であるから遺構・遺物の全体的な濃淡を早めに把握する必要がある。はじめ5m四方の発掘区を飛び飛びに四分の一程度発掘した(25%調査)。これをもとに遺構・遺物の分布状況を推定し全体の調査に取りかかった。

低湿部ではIB層とII B層とは間層(Ta-c層)によって区別できるので分層発掘とした。さらに遺物包含層であるIB層とII B層の発掘はそれぞれに細かく分層しておこなった。台地部においてはTa-c層は希薄であるが、IB層にはTa-c層に由来する微小軽石が含まれているので、II B層とは分層し得た。これらの調査は人力による手掘り作業で、発掘区ごとにスコップ、ツルハシ、移植ゴテ、竹ヘラなどを用いて遺物の多寡、土層の変化をみきわめながらおこなった(包含層調査)。

遺構の調査 25%調査、包含層調査時に住居跡、土壌などを推定できたときは、その平面形の長軸と短軸方向に土層観察用の土手を残して掘り下げた。想定される床面の検出は、土層観察用の土手に接して小さな先行溝を掘るなどして、慎重に行った。遺物は、出土の状況を詳細に記録化してから取

3 調査の方法

り上げた。時期判定、遺構の判断は、Ta-a、B-Tm、Ta-cなどの火山灰混入の有無でなし得たものもある。

遺物の取り上げ 土器、石器等の遺物は出土の状況に応じて、位置や土層を記録してから発掘区ごとに取り上げた。とりわけ本来的な遺物包含層と考えられるI B層、II B層・II B下層とEn-Lの漸移層から検出される遺物については、出土状態の詳細な記録化をおこなった。集中的に出土する土器破片は、破損の状況を十分に検討して接合・復元作業を考慮した取上げにつとめた。微細遺物の密集部分では、水洗い、水篩選別によって取り上げたところもある。

深掘部の調査 前回の報告書に記したのでここでは省略する。

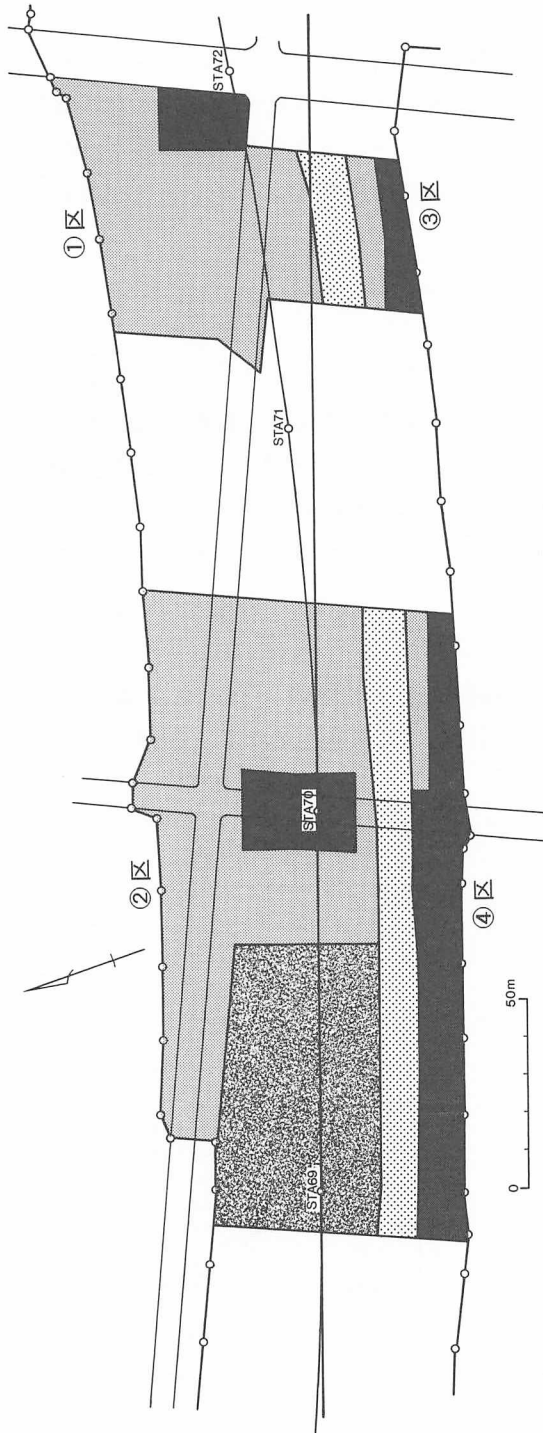
木製遺物の発掘、取上げ 発掘作業はスコップ、移植ゴテ、竹ヘラなどを用い、慎重を期した。木製遺物は乾燥による変形、変質が著しいので、これを防ぐために検出の後、速やかに水を含んだ晒布で保全しさらにビニールで蔽った。出土状態、位置の記録化の後に取上げるのは土器、石器等と同じである。取上げたものは、簡易プールや遺物収納箱などで水に浸けて、変形、変質を防いでいる。木製品の保存処理は美々8遺跡低湿部での方法と同じである。詳細は次回以降に記す予定である。

遺物整理の方法 出土した遺物は、野外作業と並行して現地で水洗・注記作業をおこなった。小片あるいは微細なものを除いて、大多数の遺物には発掘区と出土層、および取上げ番号を注記した。現地では遺物収集帳点検・補正（遺物台帳作成）、大まかな遺物の分類までおこなった。冬期の室内整理作業で、土器・木製品の接合・復元作業、石器や黒曜石剥片類の接合、土器・石器・木製遺物の実測・製図、集計およびそのほかの記録類の整理をおこなった。

土器の接合・復元作業においては、破片個々の出土位置を明記することによって、土器の破損状況を明らかにすることにつとめた。遺跡は縄文時代、続縄文時代、擦文文化期、アイヌ文化期において繰り返し人が利用する場所であったが、各時期における占地在り異なり、さらにTa-a火山灰の厚い堆積があり耕作等による攪乱を免れたことも幸いして、遺構・遺物の残存状態が比較的良好であった。このために、土器破損の様子を把握できたものが多い。したがって、いくつかの小地域において住居跡、土壌と多量の土器との相互の関係に関して、明確な結論が得られたものがある。

1999年の整理作業 1999年4月をもって、当埋蔵文化財センターが札幌市中央区から江別市西野幌（文京台小学校となり）へ移転した。これに伴って出土遺物その他すべての資料は、江別市に移動した。以後、土器、石器、木製遺物等の整理作業は、江別市西野幌でおこなっている。

木製遺物については、移動時の損傷、環境の変化による表面劣化等が推定されるが、個々に関しての実態は明らかにできない。移転後の保存処理施設の本格稼働が遅延しているため、木製遺物の一部については、釜石文化財保存処理センターへ処理を委託している。 (西田)



- 平成8年度調査区
- 平成9年度調査区
- 平成10年度調査区
- 後年度調査予定区

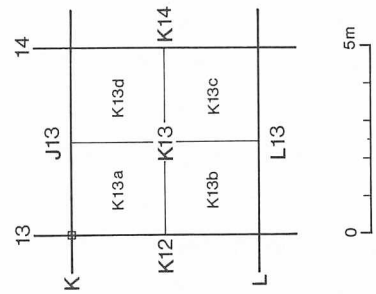
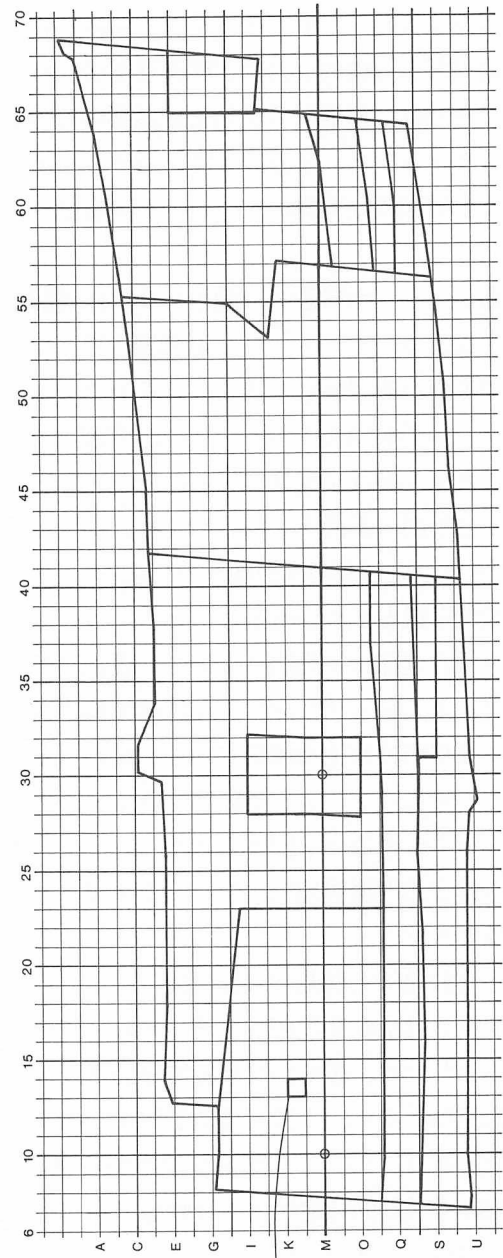


図 I - 4 年度別調査区図・グリッド設定図

4 土層の区分

調査にあたっての土層区分は、基本的には東地区・西地区とも通覧できるものとした。さらに台地と低湿部の有機的連続性が明確なものとなるよう意識した。図I-5はこれを模式化した柱状図である。今回は、西地区の台地と低湿部の報告ということで、平成8~10年度の3カ年にわたったOラインセクションと、平成9年度の23ラインセクション、平成10年度の15ラインセクションを掲載する。次に土層図の位置関係を示し、その特徴を示す。

図I-6 土層図(1)~図I-8 土層図(3)

3枚12本 [アース] で、遺跡調査範囲の中央南寄りの東西セクション。Oラインの西端からO32杭までを南から観察した様子になるセクション図である。実際は調査年度により観察方向が異なるため、若干の修正を加えてある。Ta-aと攪乱土の一部を除去した後の図。家屋や水田造成の溝・道路側溝などで深く攪乱を受けている部分がある。O23杭の西側からO27杭の東側までは、南から突出する低平な台地部の断面となる。つまり、[ア-オ]は西側台地部、[エ-クの東]と[コース]が低湿部、[ク-コの東]が南側台地部で、図I-6 [エ-オ]・図I-7 [ク-ケ]・図I-8 [コ-サ]が台地部と低湿部の交接帯にあたる。

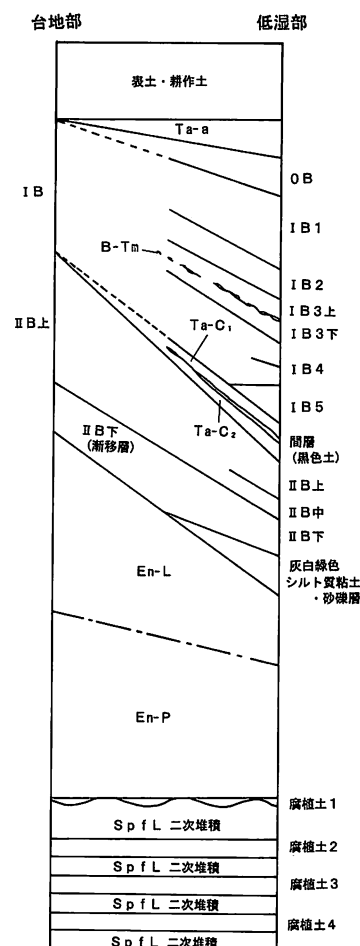
西側台地部はI黒層下部までの攪乱が多く、I黒層の残存は概して薄い。Ta-cも全体的に不明瞭だが、I黒層下部と混合した状態で確認はされる。II黒層は全域で黒褐色の上部と漸移層に分層できる。漸移層は凍上現象等で小さく乱れるところがあり、特に[ウ-エ]で顕著である。ここでは、En層中の構造土も観察できた(『ユカンボシC15遺跡(2)北埋調報133』参照)。I黒層では柱穴も確認できた。

西側台地部と低湿部の交接帯[エ-カ]は、水田造成の攪乱がII黒層まで達しており明確な認識はできないが、緩やかな傾斜でO15付近から東側が低湿部となる。I黒層は低湿部に向かって徐々に分層され、Ta-cも緩斜面の途中から見られる。II黒層も緩斜面の途中までは台地から連続するが、低湿部へは上部のみ続いていた。

南側低平台地部は、水浸き状態になることもあったようで、低湿部同様の未腐植土がみられた。擦文文化期の柱穴も確認できた。

南側台地部と低湿部の交接帯[ク-ケ]は緩斜面で浅く、[コ-サ]はやや段差があり深い。ともにB-TmやTa-cが確認でき、I黒層は低湿部に向かって徐々に分層される状態を観察できた。II黒層は[コ-サ]の低湿部で特に厚くなるが、台地からの連続性は確認できなかった。

低湿部ではI黒層が細分でき、IB3層中にはB-Tmが断続的に確認できた。IB5層やIB4



図I-5 土層模式図

層の上下細分は、O15から南側台地部との西側交接帯にかけてと、この東側交接帯からO29付近にかけて存在した。Ta-cは $c_1 \cdot c_2$ とその間層腐植土が確認できるところもあるが、これらが混合した二次堆積部分やI黒層との混合層もみられた。II黒層は上中下に分層できるが、II B中下層は部分的にしか確認できず、II B上層が主体となる。II B上層はさらに上下1・2に細分でき、その層界はII B上中の層界ともども白色粘土層を挟む。II黒層と基盤のEn-Lの間にはシルト質層や砂層が存在した。シルト質層が基盤?をなす面もあった。

図 I - 9 土層図(4)

遺跡調査範囲の西側の台地部15ライン南北セクションである。Ta-aと攪乱土の上方を除去した後の図。水田造成による削平で、I黒層は下部とTa-cとの混合層で確認できるのみの薄い残存である。II黒層は全域で黒褐色の上部と漸移層に分層でき、漸移層は全体が凍上現象等で小さく乱れている。O15以南は緩斜面で低湿部との交接帯となるが、水田造成により上部が削り取られ、水の影響を受けたと思われるII B下層が見られるだけであった。

図 I - 10 土層図(5)

遺跡調査範囲の西地区のほぼ中央部にあたる、低湿部23ライン南北セクションである。Oラインセクションとは、南側低平台地部と低湿部の交接帯の台地寄りで交差し、それ以南は南側低平台地の部セクションとなる。Ta-aと攪乱土除去後の図。北端I23付近は北側台地部と低湿部の交接帯、[ナーニ]は南側低平台地部と低湿部の交接帯、[ニーヌ]は南側低平台地部である。

北側台地部と低湿部の交接帯では、II黒層形成前・後に起こった台地からの崩落(水流による攻撃?)による堆積が見られた。上部のI黒層は低湿部に向かって徐々に分層できた。

低湿部ではI黒層が細分でき、I B 3層中にはB-Tmが断続的に確認できた。I B 5層やI B 4層の上下細分も全体で観察できた。Ta-cは、 $c_1 \cdot c_2$ とその間層腐植土が混合した二次堆積や砂との混合層で確認できた。II黒層はII B上層が主体で、II黒層と基盤の間には砂層やシルト質層が存在した。シルト質層が基盤?をなす面もあった。

南側台地部と低湿部の交接帯は、小さな段を形成しながら緩い傾斜となっており、I黒層は低湿部に向かって徐々に分層される状態を観察できた。斜面の小さな段は、台地の崩落土堆積であろうか。II黒層は台地からの連続性は確認できなかった。

南側台地部の層序は、Oラインと同様である。Ta-cはI B 4層と混在しており、II黒層はほかの台地部と同じく上下層に分層できる。

以下、土層図(1)~(5)で細分した層の説明を記す。低湿部で土壌の近似した層はまとめてある。全体的な色の傾向は、口絵-1を参照のこと。

攪乱：水田造成・道路・側溝・宅地・暗渠・耕作等で層を乱した部分。遺物の混入がある。なお、水田造成や道路基盤整備は、広くTa-aからII黒層まで達している部分がある。

T a - a：樽前a降下軽石層。1739年(元文4年7月)噴出。良好な残存部で層厚30~40cmあったが、攪乱されているところが多い。

O B：紫がかかった褐色泥炭層で、主に低湿部に形成されているが、南側低平台地部にも見られる。

層厚0~20cm。新千歳空港内の美々8遺跡低湿部で、I B層よりも上位の泥炭層として、Ta-a

4 土層の区分

とTa-b(1667年噴出、当遺跡では確認されていない)の間に確認されたのが最初の命名である。近世アイヌ文化期の包含層で、当遺跡では木製品が若干出土する。

I B : 西側や北側の台地上では分層されず、層厚5~20cmの黒色土層となる。低湿部のI B 1~3に対応する。

I B 1 : 黒褐色泥炭層。腐植進行中の層。層厚5~25cmと層厚差が著しい。低湿部全域と南側低平台地部に堆積する。アイヌ文化期にかけての主要包含層で、自然木とともに大量の木製品が検出される。

I B 2 : 濁暗灰褐色泥炭層。比較的腐植の進んだ層。層厚10~20cmで東側でやや厚いが、ほぼ均一に低湿部全域と南側低平台地部に堆積する。擦文文化期後期からアイヌ文化期にかけての主要包含層で、自然木とともに大量の木製品が検出される。

I B 3 : 濁暗褐色~暗褐色泥炭層。低湿部全域に堆積する。B-Tmで上下に分層するが、見られない部分でもわずかな色と植物質のちがいやB-Tmの連続性でほぼ分層できる。台地と低湿部の交接帯や南側低平台地部および低湿部東側では分層できない。大きな木根や自然木が多く、木製品多くも出土する。擦文文化期相当層。

I B 3上 : B-Tmより上位のI B 3層。やや暗い色で、下層よりは腐植発達。層厚10~15cmでほぼ均一に堆積する。

B-Tm : 白頭山-苦小牧火山灰。灰白色で粉状。低湿部や擦文文化期の遺構覆土に層厚0~2cmで断続的に分布する。これでI B 3の上下を分層する。10世紀前葉の降下。(* 1)

I B 3下 : B-Tmより下位のI B 3層。やや茶色がかった層で、I B 3上層より腐植未発達。層厚10~15cmでほぼ均一に堆積する。

I B 4 : 濁暗褐~濁黒褐色泥炭層。部分的には腐植の発達した腐植土層。色や未腐植分の違いで、上下に分層できることが多い。分層の成否地点はI B 3層と同一である。大きな木根や自然木が多く、木製品も出土する。統縄文時代~擦文文化期初頭相当層。

I B 4上 : 濁暗褐色。下層よりも腐植未発達で、部分的に砂質のことがある。層厚10~15cmでほぼ均一に堆積する。

I B 4下 : 濁黒褐色。上層よりもやや腐植が発達し、黒味がち。層厚10~20cmで、低湿部中央部でやや厚い堆積を見せる。

I B 5 : 黒褐色腐植土層。部分的には腐植未発達の泥炭層で、Ta-cと混合する部分もある。低湿部東側のように確認できないところもある。今掲載では無いが、昨年度報告『ユカンボシC15遺跡(2)北埋調報133』掲載のEラインなど、ごく一部で下部にシルト質や砂質が多く混合し、上部の方が腐植が発達しているなど、色や未腐植分の違いで上下に分層できることがある。層厚5~15cm。少量の木製品や土器が出土する。縄文時代晩期~統縄文時代の層。

I B + T a - c : 台地上ではTa-cが明確な層をなしておらず、I黒層の一部と混合している。層厚10~20cmの黒色土層で、低湿部のI B 4・5層に対応するものであろう。

T a - c + 黒色土・I B 4 + T a - c : 南側低平台地部およびその低湿部との交接帯では、Ta-cが、I II黒層やI B 4層と混合して出現する。

T a - c : 樽前c降下軽石・岩片層。2,000~2,500B.P.噴出。低湿部の浅い部分や斜面では1枚で確認される。c₁・c₂と間層の混合の場合とc₂主体のことがある。ごく少量、砂の混合する部分もある。層厚10~15cm。

T a - c₁ : 樽前c降下軽石層。層厚1~3cmで出現し、暗灰色を呈する。

間層 (黒色土) : Ta-c₁とc₂の間の黒色腐植土で、層厚1~2cm。堆積には約50年かかると推定される。従って、c₁とc₂の時間差も約50年と考えられる。遺物は確認できていない。

Ta-c₂ : 樽前c₂降下岩片層。層厚1~10cmで、一部直上層の黒色土と混合する部分もある。茶褐色~暗褐色を呈する。

II B上 : Ta-c下の茶褐色~黒色腐植土で、層厚10~50cm。縄文時代の包含層で、遺構も構築されている。低湿部では水の影響下でより粘質な部分と腐植土的なところがあり、色の違いやシルト質の混合具合または間層の白粘土で分層できることもある。低湿部でも土器・石器や少量の木を含む。平成9年度報告(東地区『ユカンボシC15遺跡(1)北埋調報128』)のII B1・2層に相当するものであろう。

白粘土 : 低湿部のII B上の間層やII B中層との層界、II B下の上層に均一層として現れる。層厚0~7cmの粘質土層。Spfl(支笏軽石流堆積物)やEn-a(恵庭a降下軽石層)の水成二次堆積と思われる。

II B中 : 茶褐色~黒灰色粘質土で、層厚5~20cm。斜面から低湿部で、II B上と分層できる。オンラインでは断続的に見られる。層界に白粘土層がみられることもある。少量の遺物を含む。低湿部では平成9年度報告(前掲)のII B3層に相当すると思われる。

II B下 : 漸移層で暗褐~暗黄褐色を呈す。層厚10~25cm。遺物はほとんどみられない。低湿部では層界に白粘土層を挟むことがあり、水流で削り取られているところも多い。台地部と低湿部の連続性はほとんどない。平成9年度報告(前掲)のII B4層以下に対応するものであろう。

橙色土 : 台地端のII B層で、鉄分等が集積した部分が酸化したものである。焼土層ではない。

シルト質層 : 主として水流後の砂礫層上にたまったシルト質で、場所や高低差・上下の層で発色が違う。未腐植層と互層になる部分もある。基盤層と思われるところもある。

砂層・砂質土 : II B層堆積後に水流があったと思われる箇所では、基盤層がEn-a系ではなく、径1mmほどの砂質や径3cmほどの礫、あるいはその混合土となる。暗灰~灰緑色を呈す。

粘土 : En-aが水などにより変化や二次堆積した層で、場所や高低差・上下の層で発色が違う。基盤層と思われるところもある。

En-L : En-a(恵庭a降下軽石層)起源のローム層。黄褐~濁黄褐色。低湿部では脱色し、白っぽかったり腐植土混じりになる部分もある。層厚25~50cm。

En-P : En-aの未風化軽石礫層。黄褐~明黄褐色。低湿部ではさらに脱色し、白っぽい。

構造土 : En-aの水成二次堆積物が、凍上現象によって断面が波状に観察できたもの。(*2)

腐植土1~4とSPfl二次堆積(図I-5土層模式図の下方の層) : 旧石器深掘調査区で見られた腐植土1~4と粘土・シルト(支笏軽石流堆積物の二次堆積)の互層。

無名柱穴 [ウーエ]・立杭 [クーケ]

あ : 灰黒色土 IB+Ta-a

い : 黒色土 IBに鉄分沈着の銹色土混じる

う : 黒褐色土 しまりのないボソボソの土

*1 B-Tmの降下年代については、1996年8月東京大学における「日本第四紀学会」大会で、町田 洋氏が、「A.D.923~A.D.938年」と口頭で発表されたとの情報を得た。

*2 昨年度報告『ユカンボシC15遺跡(2)北埋調報133』で報告済み。

土層の区分

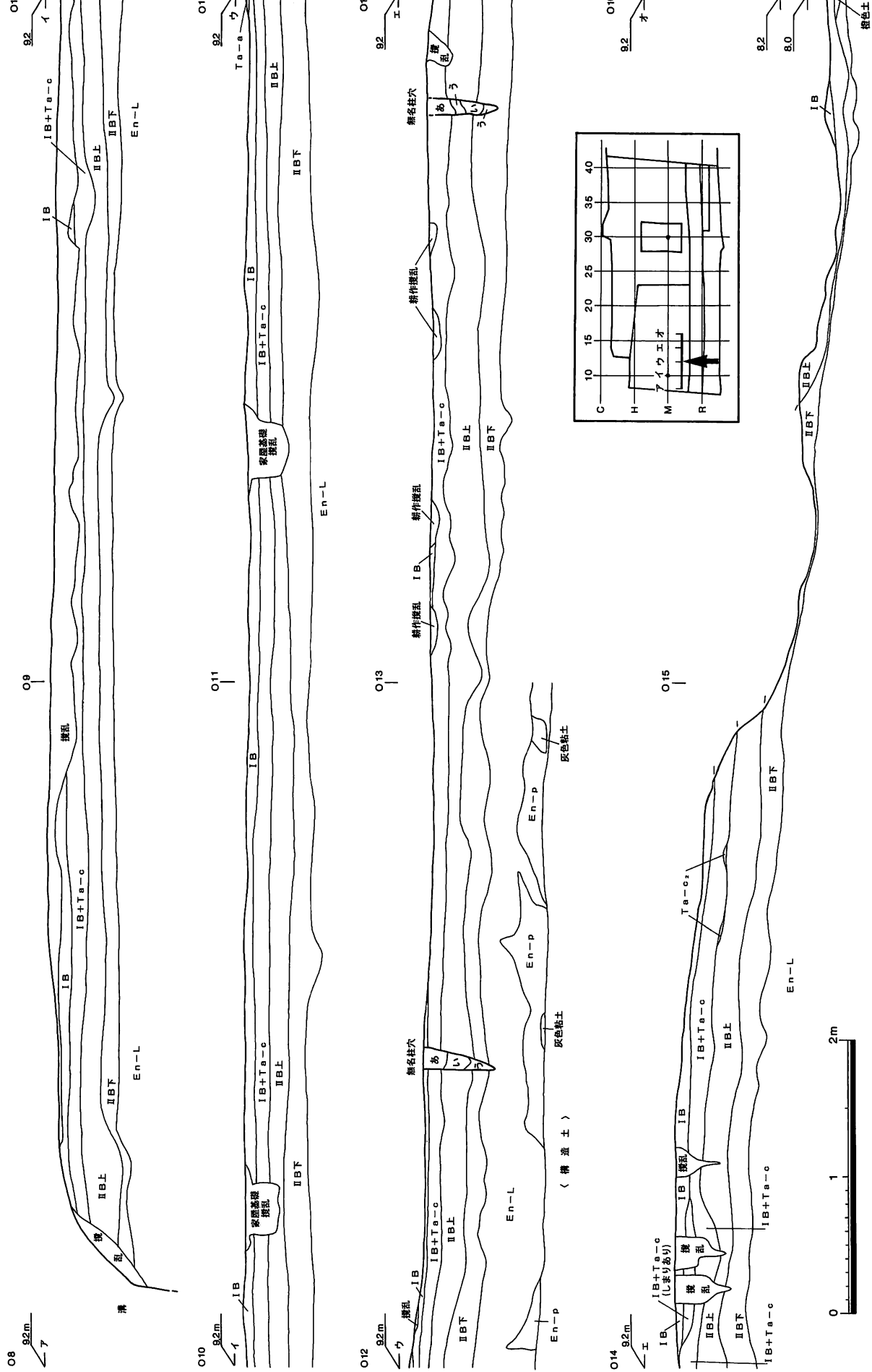


图 I - 6 土層図(1)

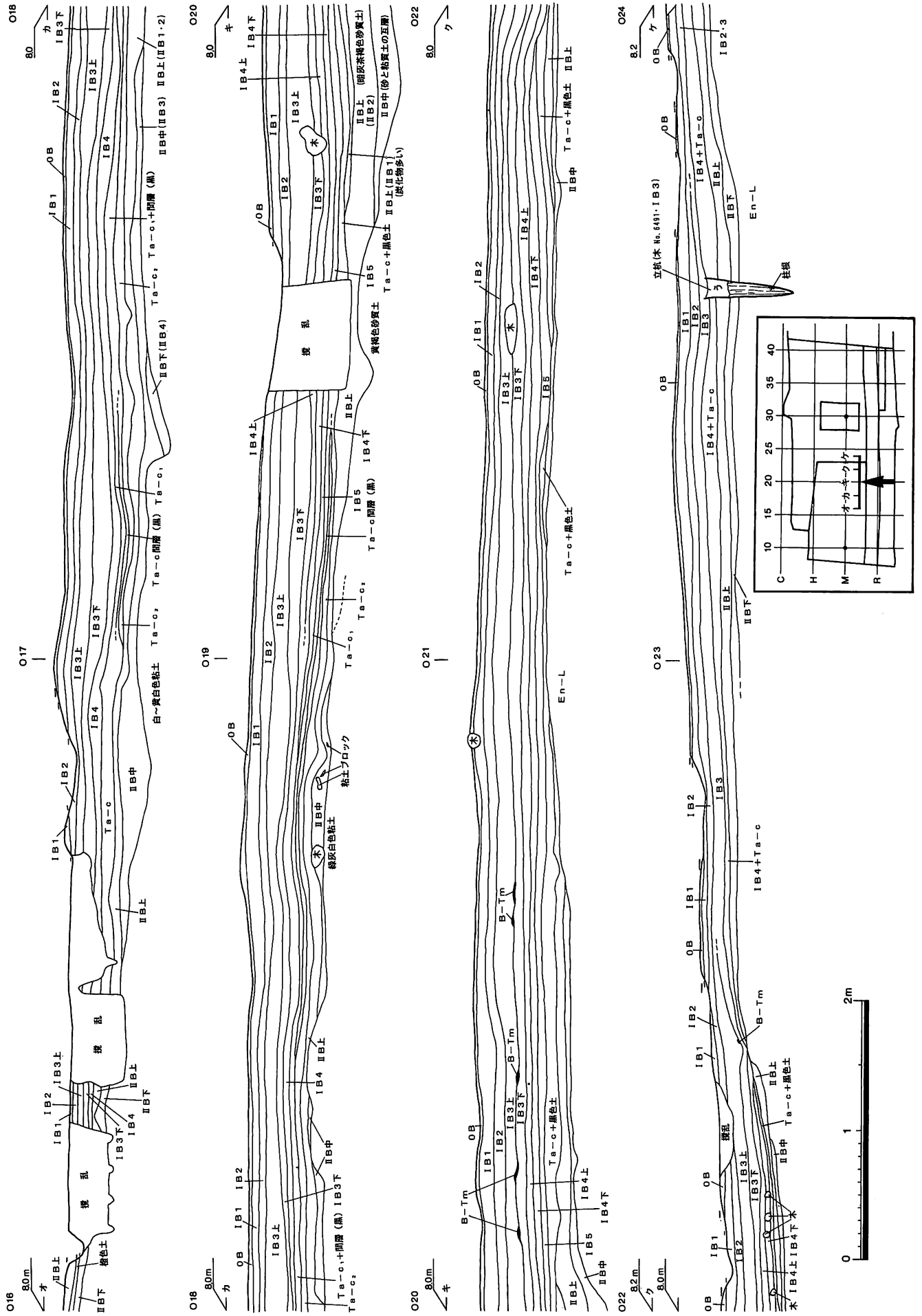


図 1 - 7 土層図(2)

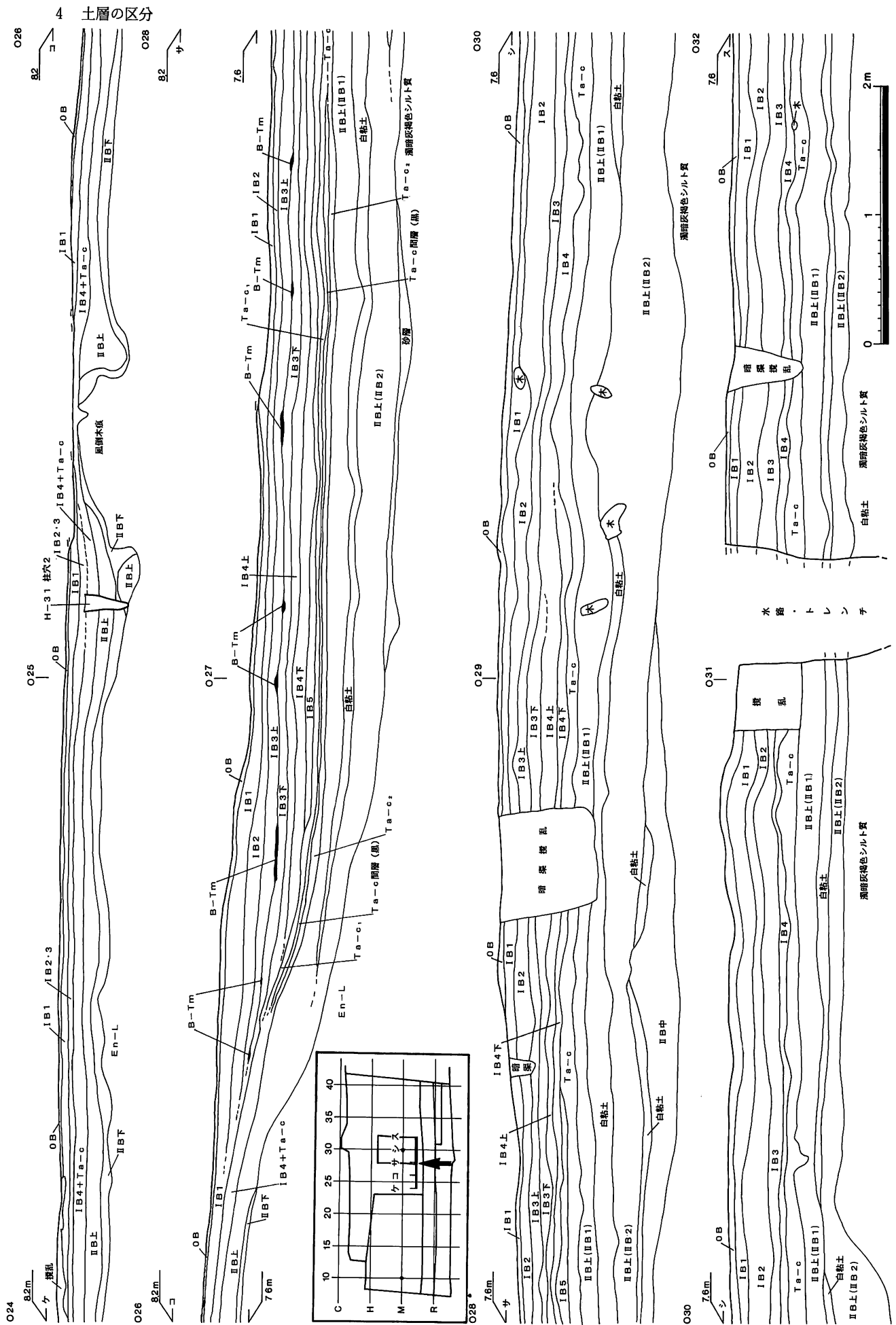
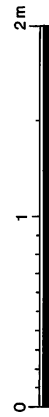
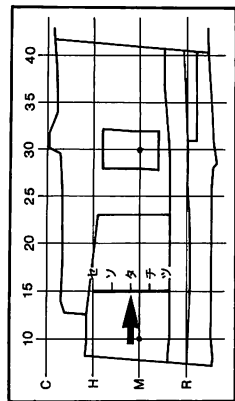
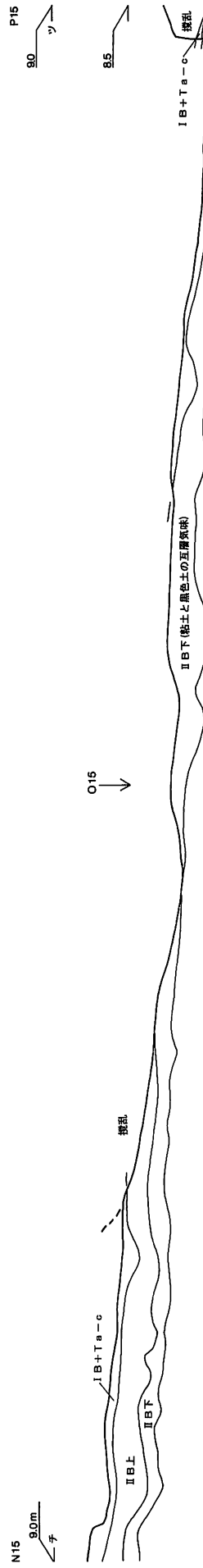
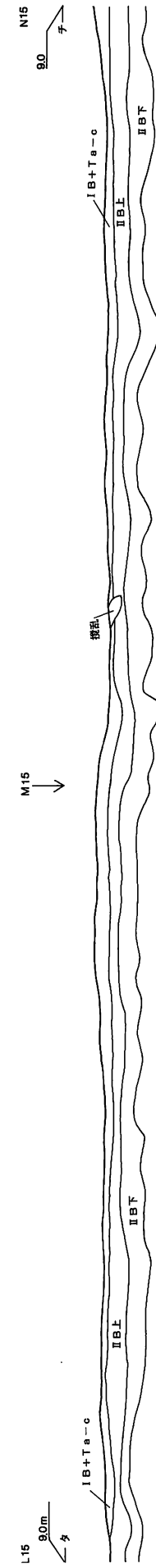
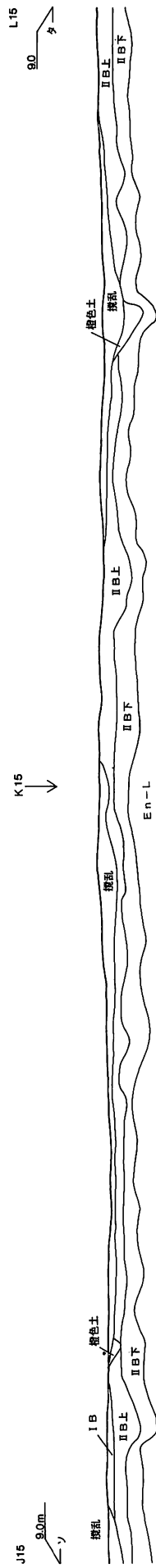
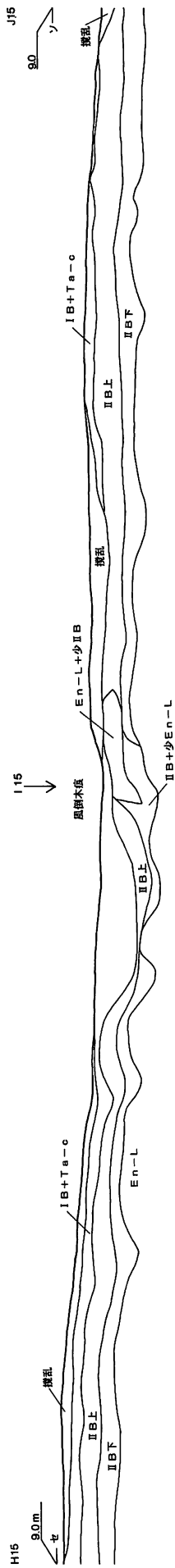


図 1-8 土層図(3)



I 階 叫

図 119 地層図(4)

4 土層の区分

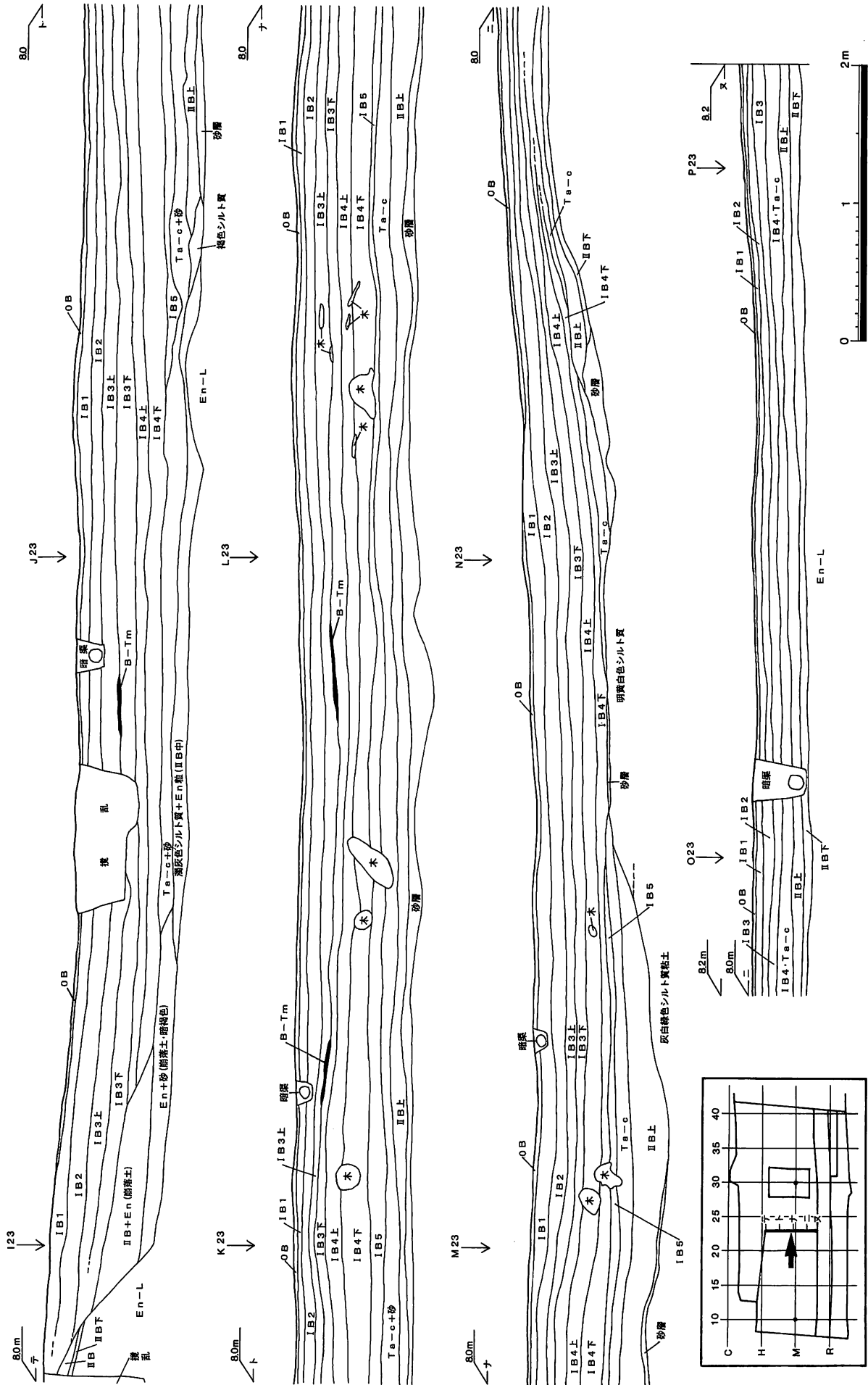


図 I - 10 土層図(5)

5 遺物の分類

(1) 土器

基本的な分類は、昭和51年の『美沢川流域の遺跡群』に準拠し、今回はこれに修正・加筆を加えながら使用した。今年度の報告対象は西地区台地部のⅠ黒層の土器で、西地区低湿部はⅠB-4層以下の土器である。したがって台地部ではⅦ群土器とⅥ群土器が、低湿部ではⅥ群土器が報告対象である。

Ⅰ群 縄文時代早期に属する土器群を本群とする。

a類：貝殻腹縁圧痕文、条痕文のある土器群。

b類：縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文のある土器群。

b1類：東釧路Ⅰ・Ⅱ式に相当するもの。

b2類：コッタロ式に相当するもの。

b3類：中茶路式に相当するもの。

b4類：東釧路Ⅳ式に相当するもの。

前々回・前回は報告して完了した。

Ⅱ群 縄文時代前期に属する土器群を本群とする。

a類：胎土に繊維を含み厚手で縄文が施された丸底・尖底の土器群。

a1類：網文、組紐回転文、羽状縄文が施された土器群。

a2類：静内中野式に相当するもの。

b類：円筒土器下層式、大麻Ⅴ式に相当するもの。

前回は報告して完了した。

Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器群を本群とする。

a類：円筒土器上層式、萩ヶ岡1式、萩ヶ岡2式に相当するもの。

b類：萩ヶ岡2式以降の土器群。

b1類：天神山式に相当するもの。

b2類：柏木川式に相当するもの。

b3類：北筒式（トコロ6類）、ノトップⅡ式、煉瓦台式に相当するもの。

前々回にa類・b3類、前回はa類・b1類・b2類・b3類を報告して完了した。

Ⅳ群 縄文時代後期に属する土器群を本群とする。

a類：余市式～入江式に相当するもの。

b類：船泊上層～エリモB式に相当するもの。

c類：堂林式～御殿山式に相当するもの。

前々回・前回は報告して完了した。

Ⅴ群 縄文時代晩期に属する土器群を本群とする。

a類：大洞B式、大洞BC式に相当するもの。

b類：大洞C式、大洞C1式に相当するもの。

c類：大洞A式、大洞A'式に相当するもの。

前々回にa類・b類・c類、前回はa類を報告して完了した。

5 遺物の分類

VI群 続縄文時代に属する土器群を本群とする。

a類：大狩部式、江別太中層・下層・最下層の土器群、後北式に並行しない恵山式(南川Ⅲ群・アヨロ2類以前)に相当するもの。

b類：後北A式、後北B式、後北C1式、後北式に並行する恵山式(南川Ⅳ群・アヨロ3類)に相当するもの。

c類：後北C₂・D式、北大I式に相当するもの。

d類：北大Ⅱ式、北大Ⅲ式に相当するもの。十勝茂寄式もこの範疇に入る。

前々回の報告内容ではb・c類が出土している。今年度は台地部においてb・c類が出土しており、当該型式は後北A式、後北B式、後北C₂・D式である。低湿部においてa・b・c類が出土しており、当該型式は後北A式、後北B式、北大I式である。

d類については前々回の報告において石狩市ワッカオイC地点遺跡1・2・3号墓、恵庭市ユカンボシE5遺跡GP-1、恵庭市ユカンボシE7遺跡で北大Ⅱ式と無文の北大Ⅲ式の共伴例があることから設定した。

VII群 擦文文化期に属する土器群を本群とする。

a類：千歳市美々8遺跡における佐藤和雄分類(『美沢川流域の遺跡群Ⅻ』北海道埋蔵文化財センター 1989年)のⅡ・Ⅲに相当するもの。

b類：佐藤和雄分類Ⅳ・Ⅴ・Ⅵに相当するもの。

c類：佐藤和雄分類Ⅶ・Ⅷに相当するもの。

d類：佐藤和雄分類Ⅸ・Ⅹに相当するもの。

前々回の報告内容では土坑墓・周溝のある墓からb類が、包含層からはc・d類が少量出土した。今年度は竪穴住居跡からb類が、台地部包含層からはb・d類が出土した。

(2) 土製品の分類

前々回の報告内容では紡錘車、フイゴ羽口が出土し、今年度は土玉、製鉄炉炉壁片などがある。

(3) 石器・石製品の分類

器種別の大分類にとどめ、記号等による細分はおこなっていない。

剥片石器には石鏃、スクレイパー、二次加工痕のある剥片(Rフレイク)、刃こぼれ状の使用痕のある剥片(Uフレイク)などがある。黒色片岩製の石鏃未製品が1点出土している。また、擦文文化期の土壌の擾乱によって石槍・ナイフ、スクレイパーが出土した。

礫石器には、たたき石、くぼみ石、すり石、台石・石皿、砥石などがある。また、擦文文化期の土壌の擾乱によって石斧、石斧未製品、石斧フレイク、北海道式石冠、石鋸が出土した。

そのほかには石核、原石、礫、礫片がある。

なお、「石斧」と分類したものは刃部や基部など明確な部位が遺存し識別できたもので、「石斧片」と分類したものは明確な部位が遺存していないものである。「石斧フレイク」とは背面の属性と石材(緑色泥岩・黒色片岩)を根拠に分類した(鈴木 信「美々3遺跡第Ⅱ黒色土層の調査 B礫石器」『美沢川流域の遺跡群Ⅺ 第1分冊』北海道埋蔵文化財センター 1992年)。

(鈴木)

6 調査の概要 (図 I-4・11・12)

調査予定地は概略東西の長さ300m、南北の幅80mの範囲である。このなかで調査区域は、東と西の二つの地区に別れている。さらに後年度調査予定区をふくむ道路工事の工程を考慮して①②③④の四区画に細分して調査を進めた(図 I-1)。

調査報告書は2冊を刊行しており、本書は3冊目である。

『千歳市ユカンボシC15遺跡(1)』1998年3月……東地区。前前回の報告書

『千歳市ユカンボシC15遺跡(2)』1999年3月……西地区Ⅱ黒層以下。前回の報告書

『千歳市ユカンボシC15遺跡(3)』2000年3月……西地区Ⅰ黒層以上と深部の木製遺物。本書未報告は、浅部の木製遺物である。

1996年の発掘調査 前前回の報告書に記したので、ここでは省略する。

1997年の発掘調査 前前回と前回の報告書にも記してある。

遺構、遺物の多くは台地部分から検出されている。遺構は、住居跡33基、土坑69基、Tピット54基、周溝のある墓3基、焼土382基である。遺物は土器43000点、石器等14000点、木製遺物90000点、金属遺物等38点が出土した。また土壌水洗等によって種子、骨片、昆虫等も見つかっている。市道南23号の区域では舗装、路盤砂利、盛り土を除去して調査した。水道管、排水管、側溝等により遺構、包含層が帯状に消失したところも多い。

西地区の遺構と遺物 ここでは西地区の第Ⅰ黒色土のみを記載する。

第Ⅰ黒色土の遺構と遺物 本書で報告する部分である。

擦文文化期の住居跡3、土坑墓2、アイヌ文化期の建物跡、杭列などがある。このうち平面形が方形の竪穴は、一辺が5.5m、深さ80cmほどであり、4本の支柱、煙道のある竈がある。これの覆土には、B-Tmが認められた。

低湿部からは多量の木製遺物が出土した。大多数は、擦文文化期、アイヌ文化期のものである。製品として個別の認定ができるものには、制裁棒、たたき棒、横槌、縦杵、樹皮製容器、箸類、串類、へら状製品、矢柄、矢中柄、やす、キテ中柄、鉄斧柄、下駄などがある。

前年度の調査でも注目されていた舟にかかわる部材、製品類が今回も多数出土した。具体的には舟底(舟敷)、舳先、鱸(とも)、舷側板、舟縁板、舟胴の支え板、車権、車権受台部、早権、あか汲みなどである。

このほか柱、杭などの建材、割材類、枝材、柱目板、切片、炭化材、樹皮、股木類、草本類のまとまりなどが断片を含めて多数出土している。竹棒、漆椀、曲げ物などのように移入品と考えられるものもある。これらの木製遺物とともにIB2層からは永楽通宝、青磁皿が、IB3層からは擦文後期の土器が検出された。

1998年の発掘調査 前回の報告書にも記してある。

西地区の台地部、低湿部を調査した。台地部と低湿部との交接帯では、水田造成に伴って遺物包含層が削平されてしまった区域がある(図 I-11)。また、台地部には高速道路建設計画よりも以前での廃絶民家の痕跡が認められ、家屋の基礎設置、水道管埋設等による攪乱が認められた。恵庭降下火山灰層よりも下位の遺物を確認するために深く掘り下げた(旧石器深掘調査区)。この旧石器時代の遺物有無確認調査において、埋没樹林を確認し、黒曜石製石器類3点を検出した。

検出した遺構は、住居跡4基、土坑墓1、土坑10基、Tピット25基、焼土26基などである。遺物は土器4210点、石器等3390点、木製遺物30100点、金属遺物等8点が出土した。また土壌水洗等によって種子、骨片、昆虫等も見つかっている。

第I 黒色土の遺構と遺物 本書で報告する部分である。

多くの柱穴が検出されており、住居跡(H-36)や柵列(柵?)を推定できるものがある。土器、石器等は続縄文時代、擦文文化期のものがある。低湿部からは多量の木製遺物が出土した。大多数は、擦文文化期、アイヌ文化期のものである。製品には、木槌、堅杵、機織具、箸類、串類、へら状製品、矢中柄、やす、キテ中柄などがある。前年度の調査でも注目されていた舟に関する部材、製品類が今回も多数出土した。具体的には舳先、艫(とも)、舳側板、舟胴の支え板、車櫂、車櫂受台部、早櫂などである。このほか柱、杭などの建材、割材類、枝材、柱目板、切片、炭化材、樹皮、股木類などが断片を含めて多数出土している。漆碗、曲げ物などの移入品もある。

第II 黒色土の遺構と遺物 前回の報告書で報告済みの部分である。

遺構は縄文時代中期、後期の住居跡、土坑、Tピット、焼土がある。土器、石器等は縄文時代中期、後期、晩期のものが、台地部のみならず、低湿部(標高6~7m)からも検出されている。

旧石器深掘調査区 前回の報告書で報告済みの部分である。

恵庭降下火山灰(En-L、En-P)よりも下位で埋没樹林が検出され、腐植土3、腐植土4からは黒曜石製の石器類3点が出土した。これらのうち2点には微細な剥離列が認められる。

1999年の整理作業 1999年4月以降、江別市西野幌(文京台小学校となり)で、土器、石器、木製遺物等の整理作業をおこなっている。
(西田)

7 本書の概要 (図I-11・12、表I-1・2)

本書は1996年、1997年、1998年に調査したうちの西地区(②④地区)11,095㎡の第I黒色土よりも浅い土層の遺構、遺物についての報告である。おおきく台地部と低湿部とにわけて説明する。さらに、木製遺物に関しては、第I黒色土よりも深い土層(II黒層相当)のものとI黒層のうちで深い土層のもの(IB5層、IB4層)とを報告する。時代区分で表すと、第I黒色土は縄文時代晩期よりも新しいものであり、続縄文時代、擦文時代、アイヌ文化期に関するものである。

西地区の範囲は、概略東西の長さ170m、南北の幅80mほどである(図I-11・12)。調査区の西半に幅20mほどで西から東に向かう低湿部がある。これは縄文時代以来の「古ユカンボシ川」の流路であり、調査区のなかほどでは蛇行している。屈曲の痕跡は流路の変化を示し、低湿部の拡大、縮小を暗示するものである。流路の変化が、遺跡の立地に影響をおよぼしたであろうことが推測される。

さらに、市道の側溝掘削工事、水田造成工事によって破壊され消滅してしまった遺構、遺物も多かったものと考えられる。

図I-12には西地区で検出したすべての遺構を示してある。遺構は台地部に密集して検出されている。以下の説明の()内は員数、あるいは遺構番号、名称である。

遺構(II章、図I-12、表II-1)

遺構は堅穴住居跡(2)、掘建柱建物跡(3)、土坑墓(3)、土坑(2)、焼土(50)、炭化物集中(12)、灰集中(1)、集石(14)、土器集中(1)、送り場(1)、杭列(10)、馬蹄跡などである。市道の側溝、水道管の埋設溝、民家建築などにより、部分的な消失を被っている遺構も多い。

堅穴住居跡はいずれも擦文文化期のものである。H-13は一辺が11mの正方形で、深さは0.9mである。床面には多量の炭化材、焼土が残っており、いわゆる火災住居である。柱穴は4か所で、平面が方形の掘り方であるが、一部に樹皮の残存が認められており、主柱は樹皮付きの丸木と考えられる。南辺の中央部にある竈は半トンネル式であり、その構築、廃絶においてなされた儀礼行為を推測させるものの出土がある。遺物は内黒坏、擦文式土器では小型甕があり、線刻のある須恵器壺、須恵器坏

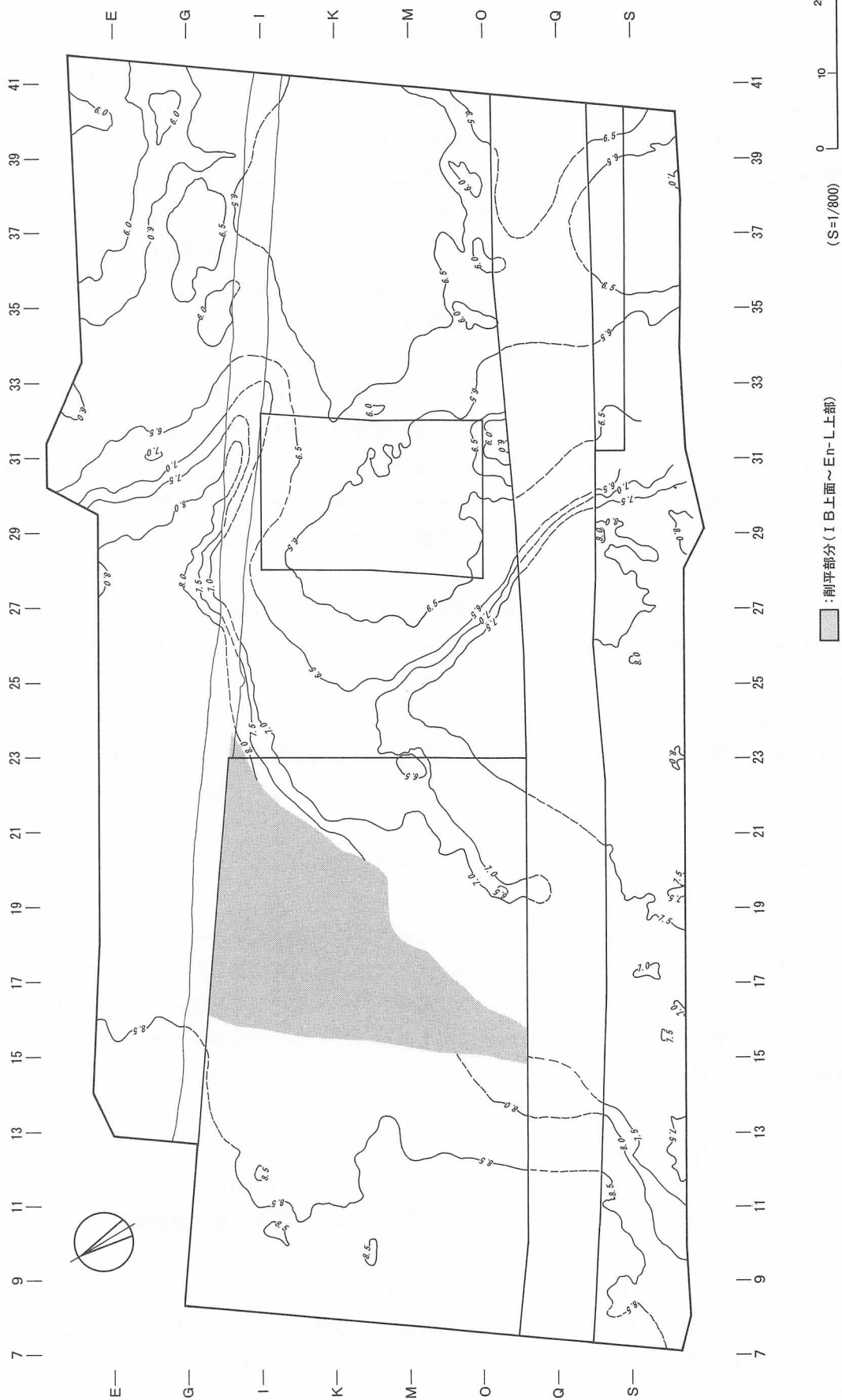


図 I-11 西地区最終面コンター図

もある。また鍛造鉄製品の破片も出土している。時期はB-Tm火山灰の降下以前、擦文文化期前期である。14C年代測定値は1190±60yB.Pが得られている。

H-14は、一辺が彎曲する隅丸四角形で、長軸3.2m短軸2.6m、深さ0.3mの小さなものである。床面には多量の炭化材、焼土が残っており、いわゆる火災住居である。時期はB-Tm火山灰の降下後であり、擦文文化期後期である。14C年代測定値は870±60yB.Pが得られている。

掘建柱建物跡は擦文時代後期のものとアイヌ文化期のものである。H-31は、柱穴は一辺が2間で、平面形が方形をなすもの。擦文式土器と袋状鉄斧が出土している。擦文文化期後期の可能性もある。H-35は、柱穴が1間で平面が方形をなすもの。時期は、アイヌ文化期と推定される。H-36の平面形は9mと6mの長方形である。長辺の9mは6間、短辺6mは5間である。ほぼ中央部に炉がある。時期は近世アイヌ文化期であろう。14C年代測定値は310±60yB.Pが得られている。H-36と送り場2と柱穴列は同一時期のものと考えられる。

土坑墓 AP-1は長軸が2mほどの近世アイヌ文化期の墓と考えられる。床面から太刀、刀子、鉤?、針などの鉄製品、錫製耳飾りが出土している。鉄斧は床面よりもいくぶん高い位置から検出された。AP-2は長軸が1.7mほどの近世アイヌ文化期の墓と考えられる。1mほど離れた位置に直径30cmの鉄鍋が、倒置の状態検出された。AP-3は長軸が1.4mほどの中世アイヌ文化期の墓と考えられる。刀子と漆塗椀が検出された。この漆膜片を使った14C年代測定値は、610±60yB.Pが得られた。

土坑 P-77は長軸が1.4mほどの床に礫の集積がみられるもの。樽前c火山灰よりも新しく、時期は縄文時代晩期後葉～続縄文時代中期を推定できる。P-42は平面が径0.5mほどの略円形で、二段の坑底をなしている。時期は擦文文化期とみなされる。

焼土は50を数えたが、これらは遺存状況から判断して次のように三分した。①屋外炉と考えられるもの。②炉などの焼土が廃棄されたもの。③焼土のみならず灰、燃え差しなどが廃棄されたもの。さらに、出土した鉄器、土器等および検出土層などから判断してアイヌ文化期、擦文文化期、続縄文時代後半期のものに区別した。

炭化物集中は12か所あり、アイヌ文化期のものと擦文文化期のものとにわけた。

灰集中は擦文文化期の可能性がある。

集石は14か所あり、まとまりの様子から密集型と疎散型にわける。さらに、出土した鉄器、土器等および検出土層などから判断してアイヌ文化期、擦文文化期、続縄文時代後半期のものに区別した。集石3は鉄斧、砥石を含みアイヌ文化期のものである。アイヌ文化期の集石24からはU字鋤先(鋤?)が出土している。集石19は黒曜石3点とたたき石1点からなるもので続縄文時代のものであろう。

土器集中は竪穴住居H-13から出土した擦文式土器、須恵器などと接合するものである。

送り場は鉄鍋、灰集中、刀子(マキリ)が同一線上に検出されたもの。鉄鍋の形態的な特色から判断して中世アイヌ文化期のものである。

柱穴、柱穴列 調査区の西側に多く検出された。直径は4～8cmで縦断面形は下端が尖るものが多い。列をなすものは柵あるいは柵を想定できる。列3、列4、列5は掘建柱建物跡H-36と関連するものであろう。

低湿部から検出された杭、杭列はIV章で記述した(杭列-10)。これは低湿部と台地部との斜面に設置されており、階段や通路、さらには船付きを推測しうる場所である。IB4層の遺構である。

なお、前回の報告書で縄文時代の遺構としては除外したH-38は、柱穴の埋積土の詳細な検討の結果、縄文時代の竪穴住居の一部をなすと判断するにいたった。

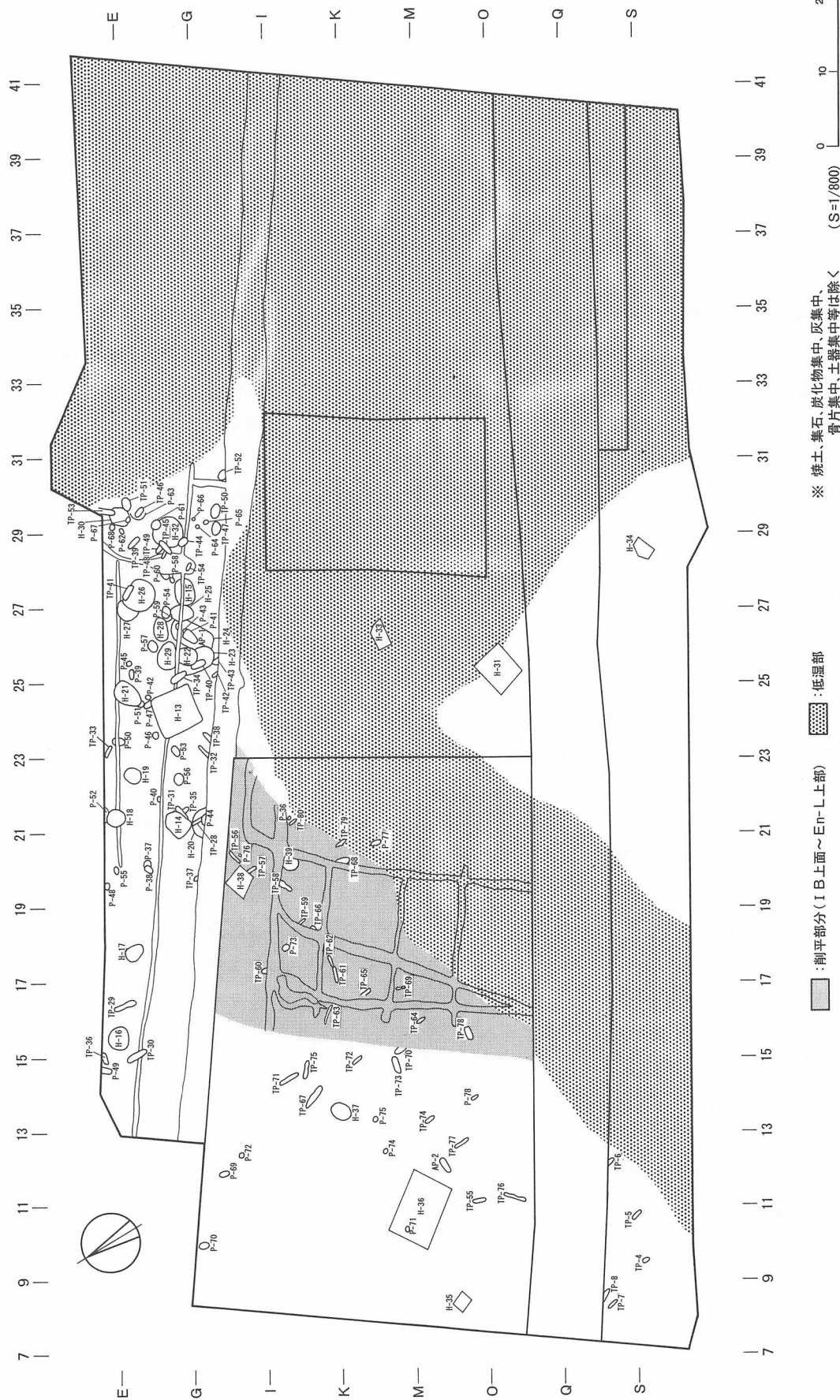


图 I - 12 西地区遺構位置図

馬蹄跡 標高8.7m付近に馬蹄跡が集中して検出された。古ユカンボシ川の水面から台地部へ緩やかな斜面を上りきった位置にあたる。樽前a火山灰(Ta-a)の降下直前の痕跡であり、1739年夏のものと考えられる。

遺物 土器、石器等は少量である。擦文文化期かと推定される土壌の攪拌によって縄文時代の遺物と一緒に検出されている。金属製品、ガラス製品はアイヌ文化期のものである。

土器 (Ⅲ章) 少量の縄文時代、擦文時代の土器である。縄文時代のものは後北A式、後北B式、後北C₂・D式である。擦文時代のものは、前期、中期、後期のものがある。

石器等(Ⅲ章) 台地部、低湿部ともに定形的な石器、および剥片・碎片類が出土している。定形的な石器は石鏃、たたき石、くぼみ石、すり石、砥石などがある。

金属製品、ガラス製品 鉄製品は断片的な残存であり判然としないが、鍋(?)、刀子、鎌などがある。銅製品のひとつはキセルの雁首であり、他の1点は薄い銅板の残片である。この銅板の残片は、検出の状態などを加味して推測すると「木芯銅板貼りの舌長鏡」の可能性はある。

銭は「熙寧元寶」「寛永通寶」の文字が読み取れるものである。製錬鉄滓も検出している。

ガラス玉は直径0.5cmほどのアルカリ石灰ガラスの小玉である。

木製遺物 (Ⅳ章) II黒層相当のもの(II B層)とI黒層のうちで深い土層のもの(I B 5層、I B 4層)を出土層毎に報告してある。土層と考古学的な時期区分は、II B層は縄文時代、I B 5層は縄文時代晩期～縄文時代、I B 4層は縄文時代～擦文文化期前葉である。いずれにしても10世紀前葉の降下とされる白頭山―苦小牧火山灰(B-Tm)よりも古い時期のものである。とりわけI B 4層の遺物は、擦文文化期における古期の資料として類例が乏しかったものであり、重要なものである。

ここで報告する木製品は製品、道具、材料、素材など多種多様であり、用途の確定が困難なものも多いが、次のように区分して示した。舟材とその道具類、狩猟漁労具、作業道具類、容器食器類、串類、祭祀具、板、杭や柱などの建材、材料である板材・割材・枝材・丸木材、これらの加工途中のもの、切片、炭化材、樹皮など。

I B 4層のもので用途、名称が明らかなのは舟敷、舟材、櫂、浮子、魚叩き棒、キテ中柄、矢、矢中柄、竪杵、掛矢、斧柄、縦槌、漆碗、篋、箸、串、イクパスイ、柱、股木杭、杭などである。

これら多種多様の木製遺物は、図、写真が未掲載のものであっても、つとめて樹種の同定をおこなった。これまでの成果によれば、遺跡近辺の在地生の樹木のみならず、はるか本州以南で生育する樹種も確認されている。たとえばスギ・ヒノキ属、アスナロ属、ブナ・ケヤキ属、トチノキ、タケなどである。これらのうちで樹種の識別が困難であった針葉樹スギ、ネズコ、サワラ、ヒノキ、アスナロおよびアスナロについては、識別の基準作成を試みている(Ⅴ章)。

年代測定値 (Ⅴ章) 調査で検出された遺構、遺物の年代を明らかにするために、良好な試料が得られたもの¹⁴C年代測定を行った。

自然科学的分析 (Ⅴ章) 遺構のいくつかについて残存脂肪の分析をおこなったが、泥炭層の影響下にあるためか、明確な結果は得られなかった。

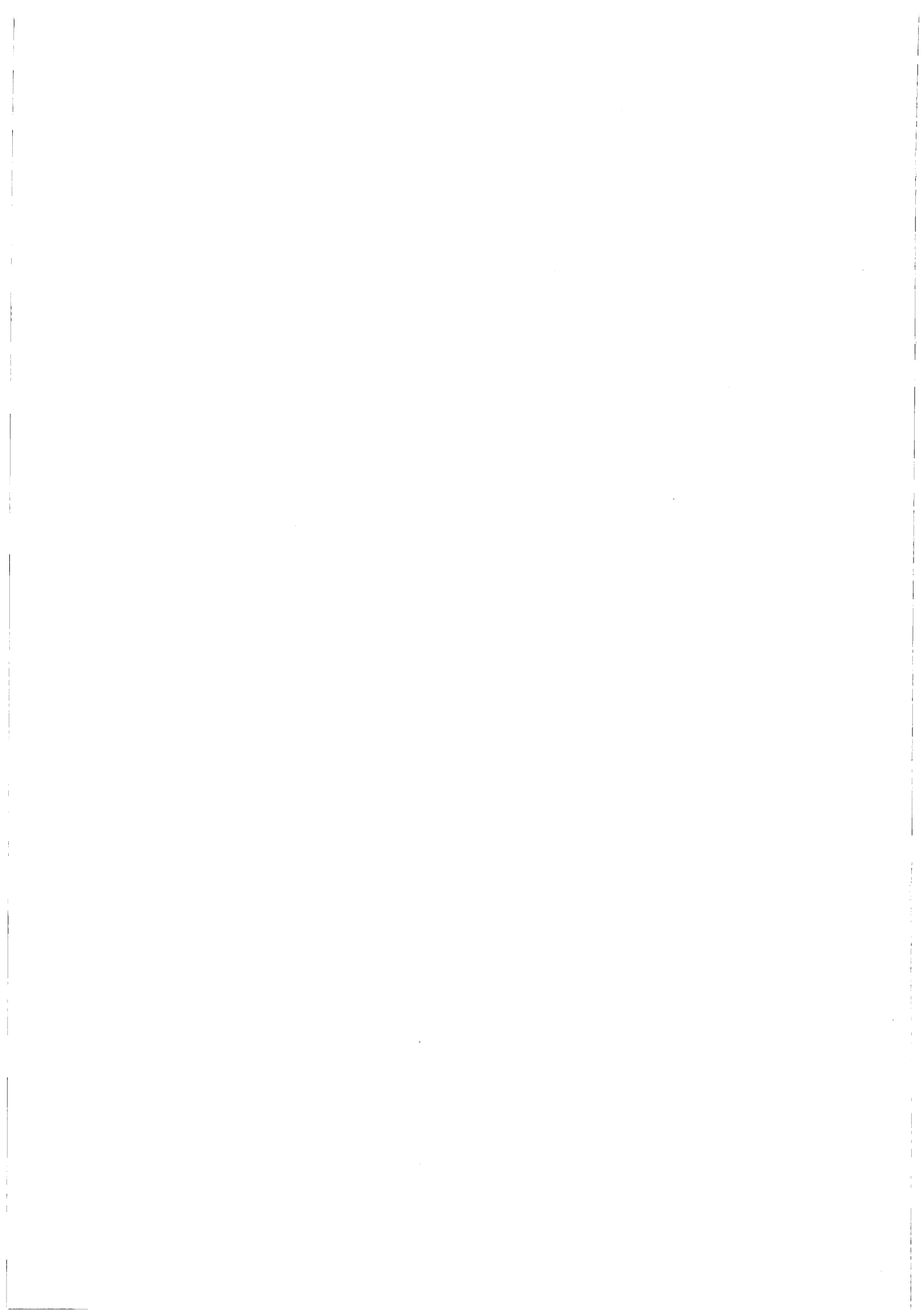
成果と問題点 (Ⅵ章) 発掘調査で得られ資料をもとに、成果と問題点を論述してある。

(西田)

表 I-1 掲載遺構一覧

種別	遺構名	グリッド	層位	時期
住居跡	H-13	E24, F23・24, G24	I B 上部	擦文文化期
	H-14	F20・21, G21	I B 上部	擦文文化期
	H-31	N25, O24・25・26	I B 上部	擦文文化期
	H-35	N8	I B 上部	アイヌ文化期
	H-36	L9・10・11, M9・10・11	I B 上部	アイヌ文化期
土坑	AP-1	F26b, G26a	I B 上部	アイヌ文化期
	AP-2	M11c・12b	I B 上部	アイヌ文化期
	AP-3	E19c・20b	I B 上部	アイヌ文化期
	P-42	F23c	I B 上部	縄文時代晩期後葉～縄文時代中葉
	P-77	K20c, L20d	I B 上部	擦文文化期
集石	集石3	F21cd・22abc, G21ad・22ad	I B 上面	アイヌ文化期
	集石4	E25a	I B 上面	アイヌ文化期
	集石5	E25c, 26a	I B 上面	アイヌ文化期
	集石6	D25b	I B 上面	アイヌ文化期
	集石7	D25bc, E25abcd	I B 上面	アイヌ文化期
	集石8	F27c	I B 上部	擦文文化期
	集石16	F29bc, G29abcd	I B 上部	擦文文化期
	集石19	I25b	I B 下部	続縄文時代
	集石21	H12c・13b	I B 上面	アイヌ文化期
	集石22	N11bc	I B 上面	アイヌ文化期
	集石23	N10d・11a	I B 上面	アイヌ文化期
	集石24	O8cd	I B 上面	アイヌ文化期
	集石25	N11ad	I B 上面	アイヌ文化期
	集石26	O14bc, P14a	I B 上部	擦文文化期
	集石29	O14a	I B 上部	擦文文化期
	集石33	K19c・20b	I B 下部	続縄文時代
集石34	G24d	I B 上部	擦文文化期	
土器集中	1	F25・26	I B 上部	擦文文化期
送り場	2	N13・14	I B 上部	アイヌ文化期
柱穴列	柱穴列1	I12, J12	I B 上部	アイヌ文化期
	柱穴列2	J12	I B 上部	アイヌ文化期
	柱穴列3	K11・12	I B 上部	アイヌ文化期
	柱穴列4	L11・12	I B 上部	アイヌ文化期
	柱穴列5	L11	I B 上部	アイヌ文化期
	柱穴列6	K8・9	I B 上部	アイヌ文化期
	柱穴列7	L9, M9	I B 上部	アイヌ文化期
	柱穴列8	O9	I B 上部	アイヌ文化期
	柱穴列9	O9	I B 上部	アイヌ文化期
	柱穴列10	H14, I14	I B 上部	アイヌ文化期
	柱穴列11	I14	I B 上部	アイヌ文化期
	柱穴列12	I14, J14	I B 上部	アイヌ文化期
馬蹄跡		D25・26, E25・26, F25・26, G25・26	I B 上面	アイヌ文化期
杭列	杭列10	O21, O22, P22	I B 4層	擦文文化期

※ 焼土・炭化物集中・灰集中は多数に及ぶため、位置図と共に一覧表(表II-23)で示す。



II 台地部 I 黒層の遺構とその遺物

1 概要 (図II-1)

調査区中央部分は造田による削平を受けていた。遺構は調査区北東部分と南西部分の標高8.5~9.0mにやや偏る傾向がある。掘建柱建物跡3軒、竪穴住居跡2軒、土坑墓3基、送り場1箇所、灰集中1基、焼土50基、炭化物集中12基、集石14か所、土器集中1か所、杭列10か所、馬蹄跡を検出した。

層準と時期はほぼつぎのように対応する。I黒層の上面はアイヌ文化期、上部は擦文文化期から続縄文時代後葉、中部と下部は続縄文時代後半である。

アイヌ文化期の遺構は調査区西側に集中する。H-36と送り場2と柱穴列は配置から見て一時期の遺構群ととらえられる。擦文文化期の竪穴住居跡は2軒検出されており、H-13の出土遺物は土器集中1と接合関係があり竪穴住居廃用に係る祭祀行為がみられる。

遺構のおもな遺物は、H-13と土器集中1から擦文土器・須恵器・鉄製品・炉壁片が出土し、AP-1からは鉄製品・錫製耳飾、AP-3からは刀子・漆塗椀が出土している。

包含層の遺物は、擦文土器が竪穴住居跡付近、続縄文時代後半の土器は調査区東側に多く出土する。また、竪穴住居跡周辺からはII黒層に包含されていた縄文時代の遺物が多数出土した。(鈴木)

2 住居跡

H-13 (図II-2~7、表II-1~6、図版II-1~8)

位置 D24、E23・24、F23・24

竈軸方位 N-5°-W

規模 11.2/10.8×11.0/10.2×0.9m

調査 Ta-a層除去後、0黒層の上面に深さ90cm位のくぼみを確認した。くぼみは水道管の埋設溝によって断面の観察ができ、擦文文化期の焼失竪穴住居跡であると判明した。くぼみはアイヌ文化期の送り場として利用されている可能性もあるため0黒層の上面の精査を行なった。その結果、くぼみが送り場ではなかったのでH-13の調査を行なった。

調査はくぼみの中心から東西南北に土層観察と土壌採取を兼ねる畦を設定した。土層断面の観察よりB-Tm層が堆積していること、掘り揚げ土があること、竪穴内には炭化材が多数あることがわかった。掘り揚げ土の範囲と構築面での上端平面形を検出するため少しづつ下げはじめたところ、7層上面で焼土と炭化材の拡がりを確認した(図II-4上段)。床面の調査では、支柱穴・壁際の溝・小柱穴・粘土の集積が検出された。東西南北畦・竈の火床・竈の袖・煙道内・粘土集積の土壌をフローテーション用に採取した。

覆土 覆土1~5層は竪穴中央部分ではやや薄く、住居火災後に流れ込んだものである。覆土6層は平面形と堆積状況から火災によって屋根土(覆土7層)が焼土となったものと判断できる。覆土7層は竪穴内部全面に広がっていることから屋根全面を覆っていたとみられる。覆土8層は壁面崩落の際に堆積したものである。覆土9層は構築面が踏み歩きによって汚れて黒色化したものである。

形態 平面は方形。En-L層上面を床面とする。壁は床構築面より約90cmでほぼ垂直に立ち上がる。

付属遺構 柱穴は4か所で平面が方形の掘り方をもち、先端が平らな柱がやや内傾して立てられていた。柱痕の横断面は円形で柱穴4には樹皮が残存していたことから、樹皮付きの丸木を支柱穴に用いたことがわかる。壁立上り際には土留めにかかわる小柱穴・小溝が廻っていた。

竈は右袖部が壊され、煙道の貼り天井部が崩落し、煙出し部分は汚れた灰白色粘土で塞がれていた。構築方法はトンネル式とオープン式の間中式で、袖は灰白色粘土を主体とし、炉壁片を加えて構築されている。左袖には構築材の芯として坏(図II-6-4)が埋め込まれていた。

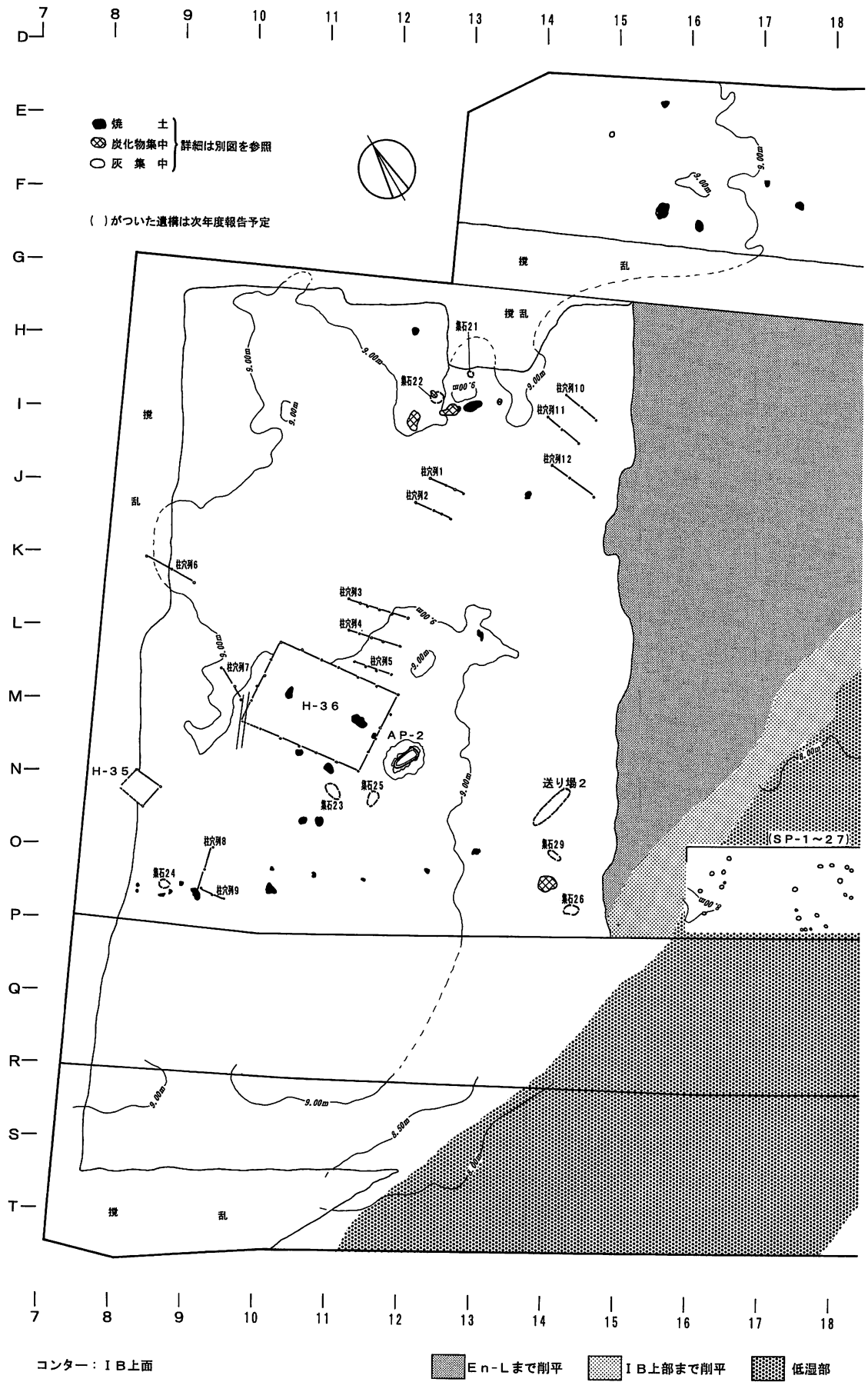
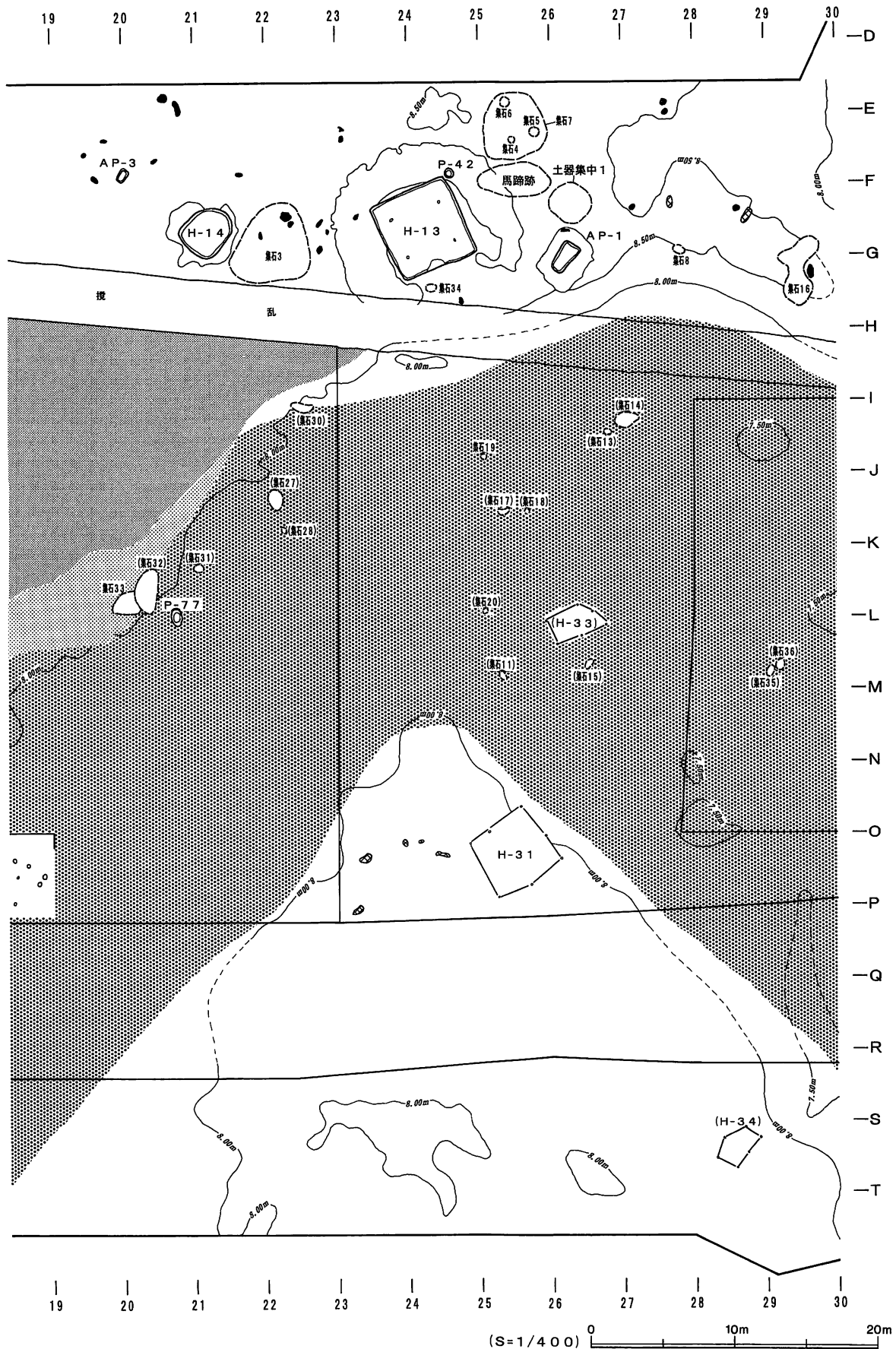


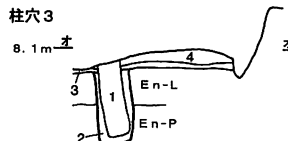
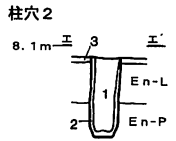
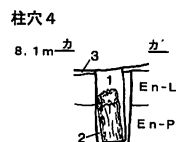
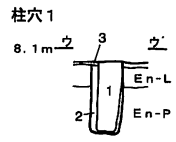
図 II - 1

II 台地部 I 黒層の遺構とその遺物



I 黒層遺構位置図

2 住居跡



- 柱穴1~4 土層註記
- 1 黒褐色土 7.5YR3/1 (しまり弱 柱が腐植したもの)
 - 2 灰褐色土 7.5YR4/1 (ややしまり弱 φ0.5cmのEn-Pを含む)
 - 3 黒色土 5Y2/1 (床面)
 - 4 にぶい黄褐色粘土 10YR7/2~灰白色粘土 10YR8/1 (しまり弱 竈の袖の構築材土と土質が類似)

- 竈内 覆土 土層註記
- 1 極暗赤褐色土 5YR2/4 (粘り強 低湿度部0B層に相当)
 - 2 黒色土 2.5Y2/1 (En-Lを僅かに含む)
 - 3 黄褐色土 2.5Y5/6 (En-L, En-Pを含む)
 - 4 明黄褐色土 2.5Y6/6 (粘土集積 上面に焼土粒, 炭化物を含む En-L, En-Pを含む)
 - 5 明黄褐色土 2.5Y7/6 (4に同じ)
 - 6 赤褐色土 2.5YR4/6 (炭化材を含む)
 - 7 明黄褐色土 2.5YR6/6 (焼土, 炭化材を含む En-L, En-Pを含む)
 - 8 明黄褐色土 2.5YR6/8 (En-Lを多量に含む)
 - 9 黒色土 5Y2/1 (床面 柱穴1~4土層註記の3層にあたる)
 - 10 明黄褐色土 10YR6/8 (掘り掛け土 En-Lを含む)

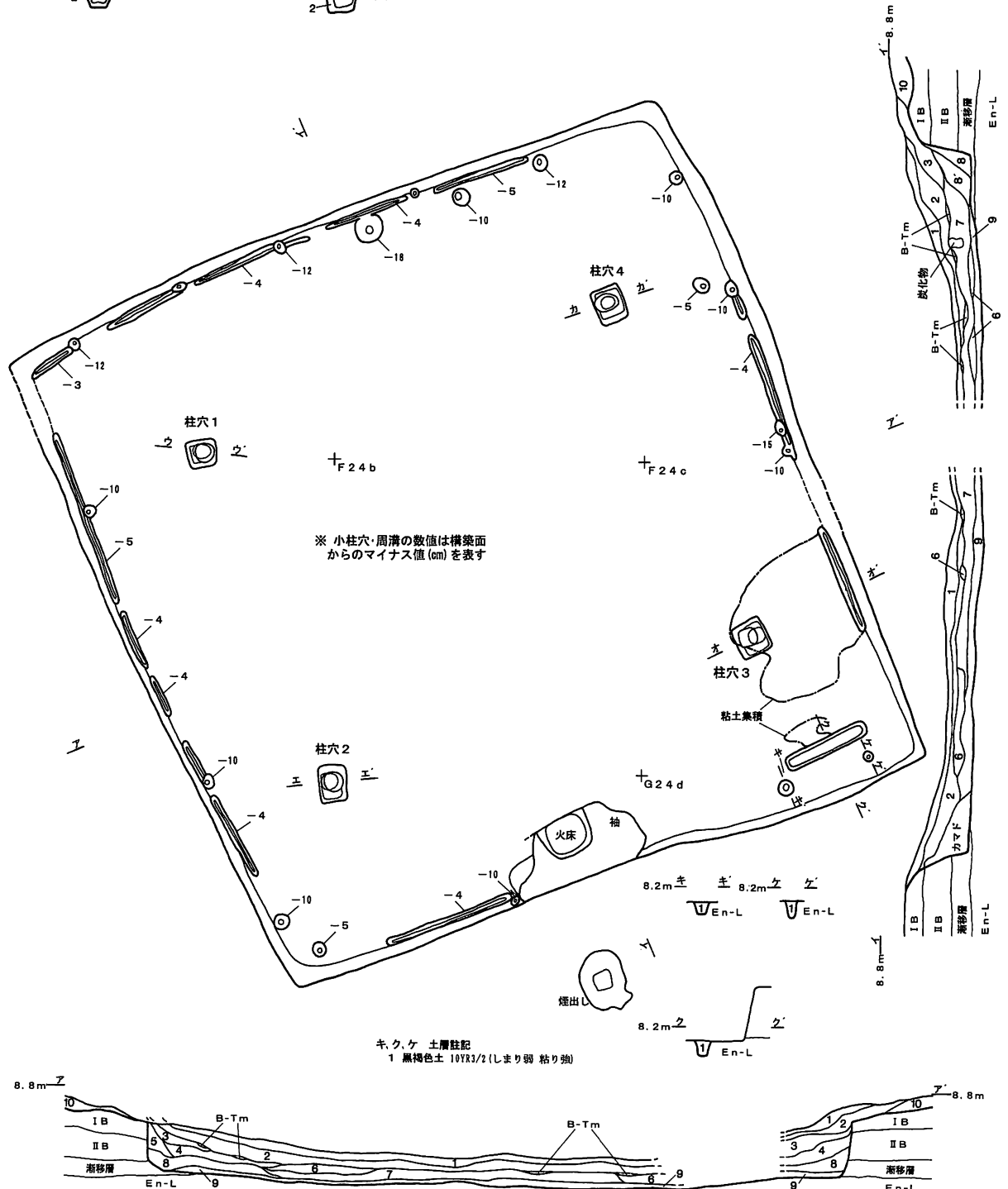


図 II - 2 H - 13(1)

(S=1/50)

竪穴東南部分の柱穴 3 付近に約 1 m 四方、厚さ 10cm の粘土集積があった。粘土には袖の構築材と同じものがブロック状に混じり、締まりがなかった。粘土は覆土 7 層(屋根土)の下位にあり、主柱穴が残っているうちに堆積している。粘土出土の須恵器壺は竈・土器集中 1 と接合関係がある。以上より、粘土集積は右袖部の破壊された土を主とする竈構築材が置かれたものと考えられる。須恵器壺は被熱していないので後になって粘土集積・竈・土器集中 1 にそれぞれ置かれたと考えられる。入り口部分は、土留めにかかわる小柱穴・小溝とは異なる遺構が竪穴東南隅にあることから、そこに想定される。

掘り揚げ土は竪穴の東・西・北側を囲み、竈のある南側が途切れている(図 II-4 下段)。

遺物出土状況 竪穴は縄文時代・続縄文時代の包含層を破壊して構築されているため、掘り揚げ土・覆土 1~6 層にそのころの土器・石器が多く出土した。覆土 7~9 層では礫と当該期の土器・須恵器が住居の南東隅(粘土集積の南側)と南西隅(竈付近)にかたよって出土している。床面では当該期の土器が粘土・竈から出土している。

火災時の焼土、竈袖、竈火床、粘土集積、床面・煙道内の土壌をフローテーションした結果、種子・炉壁片・魚獣骨が検出された。詳細は分析中である。

遺物 土器は全て VII 群 b 類である。1 はロクロ回転成形の内黒坏で、竈右袖付近に集中して出土した。土器集中 1・F 25 c と接合関係を持つ。2 はロクロ回転成形の内黒坏で、床面中央から集中して出土した。土器集中 1・F 25 d と接合関係を持つ。3 は非ロクロ内黒坏で、竈右袖付近と北側の床面で出土した。土器集中 1・E 26 b・F 25 b c d・G 24 d・G 25 a と接合関係を持つ。4 は非ロクロ内黒坏で、竈左袖中・粘土集積の南側から集中して出土した。竪穴外の入り口付近・土器集中 1・F 25 d と接合関係を持つ。5 は甕口縁部破片で、覆土と竪穴外の接合例で、A P-1 の掘り揚げ土の破片(図 II-15-1) と同一個体である。

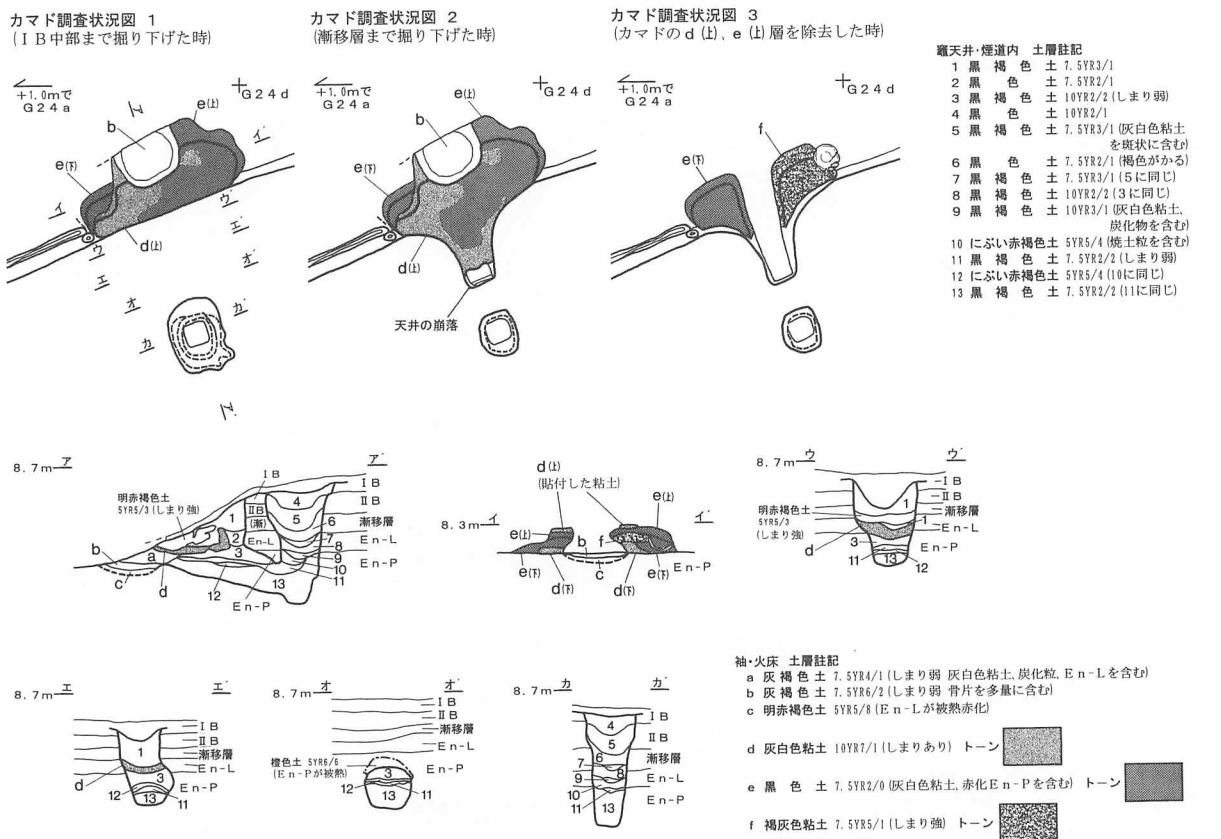
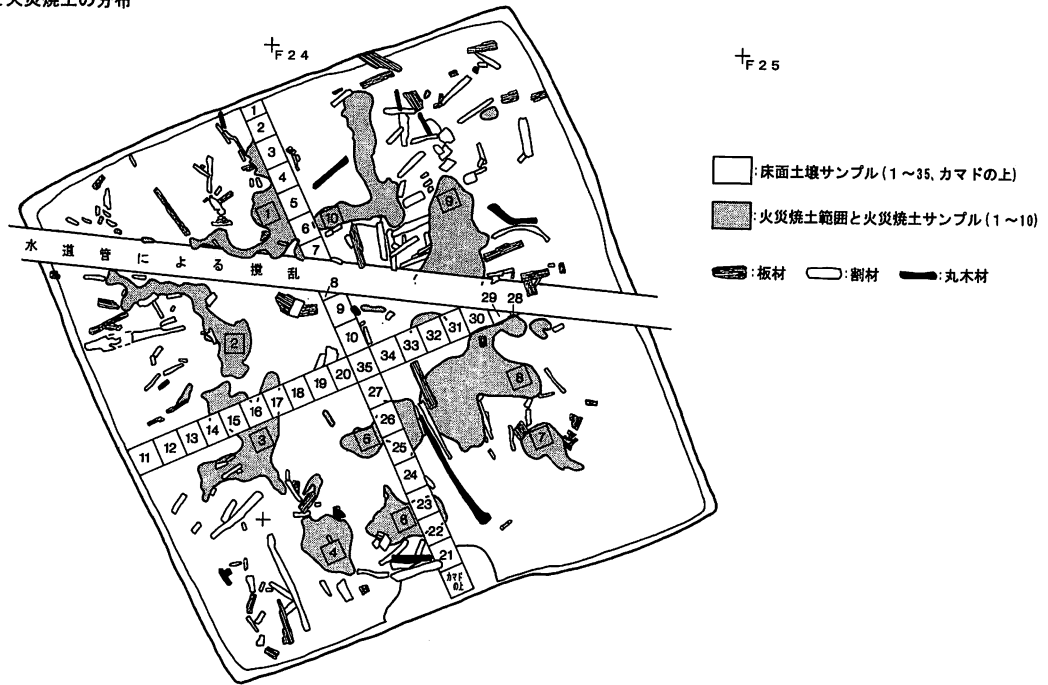


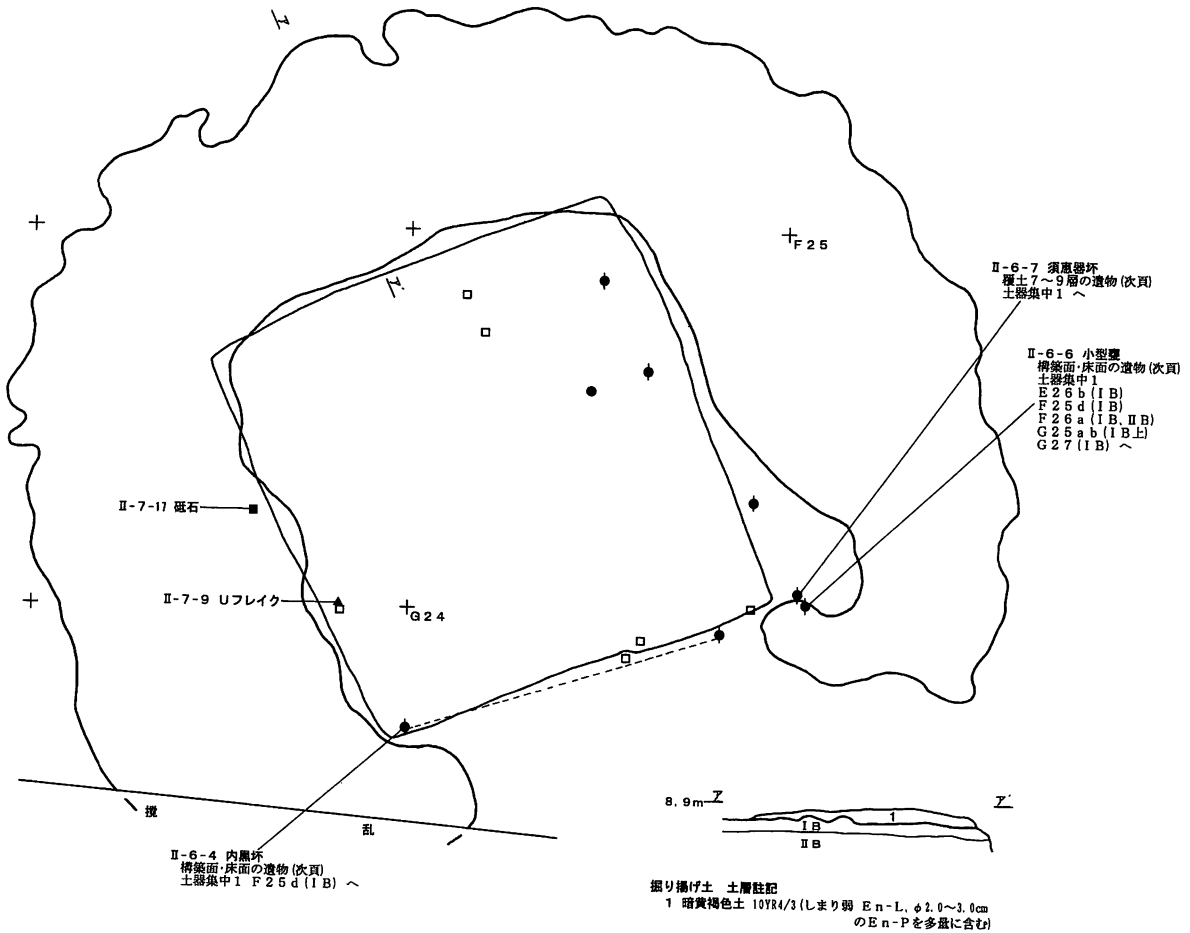
図 II-3 H-13(2)

2 住居跡

炭化材出土状況と火災焼土の分布

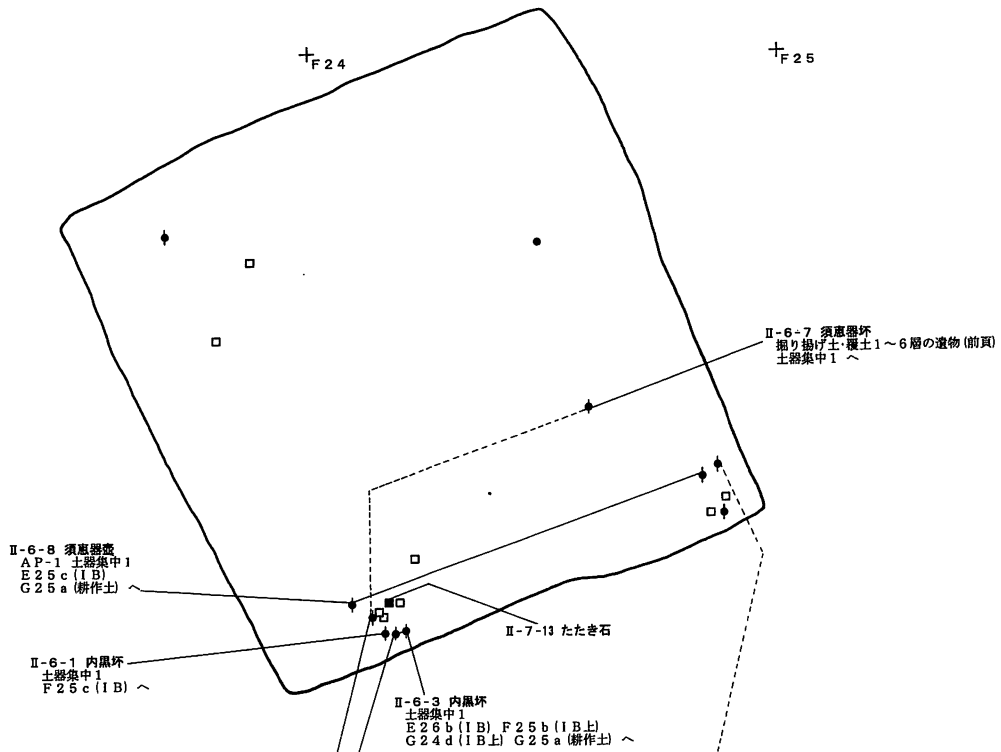


掘り揚げ土・覆土1~6層の遺物



図II-4 H-13(3)

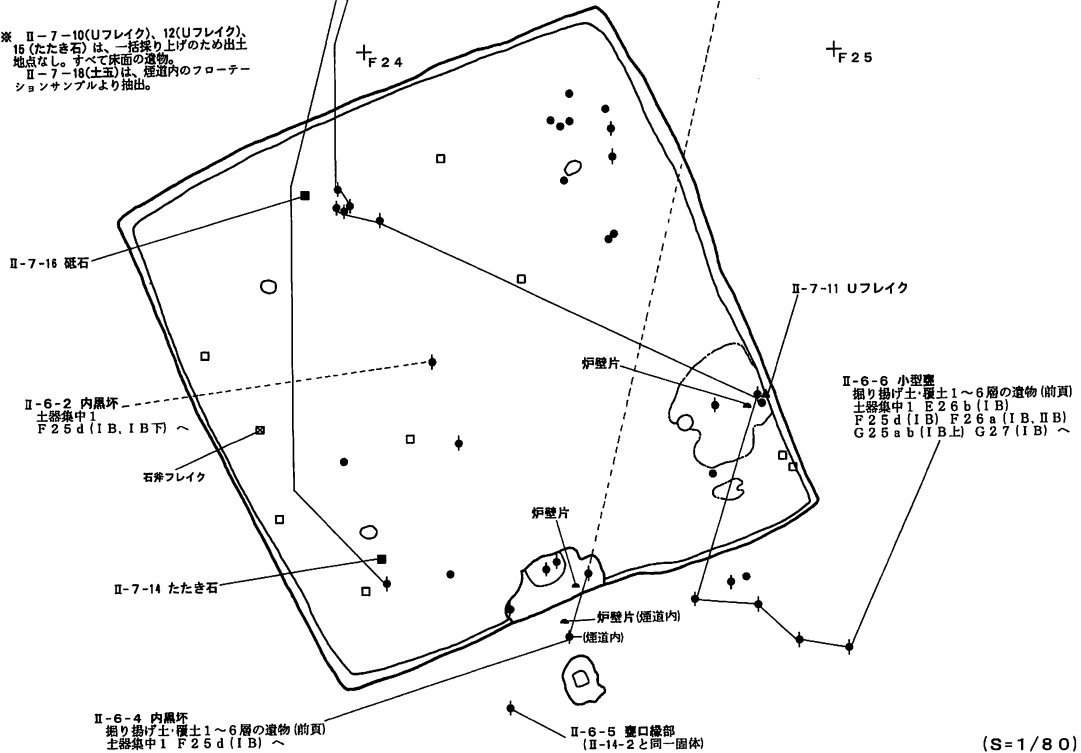
覆土 7～9 層の遺物



(S=1/80)

構築面・床面の遺物

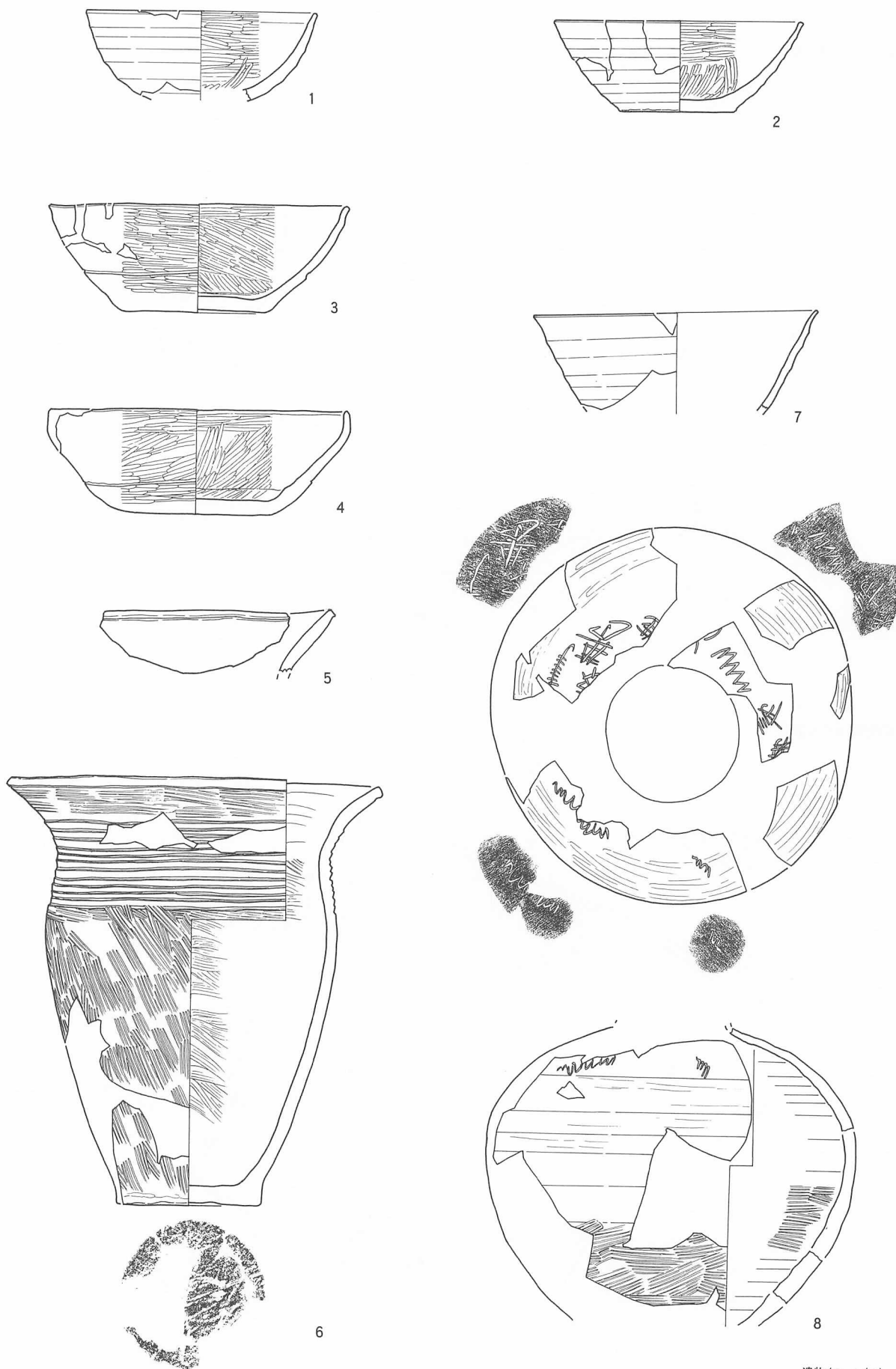
※ II-7-10(Uフレイク)、12(Uフレイク)、
15(たたき石)は、一括採り上げのため出土
地点なし。すべて床面の遺物。
II-7-18(土玉)は、経道内のフローテー
ションサンプルより抽出。



(S=1/80)

図 II-5 H-13(4)

2 住居跡



遺物(S-1/3)

図Ⅱ-6 H-31の土器

6は小型甕で、粘土集積・北側の床面から集中して出土した。竪穴外入り口付近・土器集中1・E26b・F25d・F26a・G25adと接合関係を持つ。7は須恵器坏で、竈右袖付近・南東側床面・竪穴外入り口付近・土器集中1と接合関係を持つ。8は線刻のある須恵器壺で、竈両袖・竈右袖付近・粘土集積・粘土集積の南側・土器集中1・AP-1覆土・E25c・G25aと接合関係を持つ。

9は末端部縁に微細な剥離がある。10は背面に礫皮を残す。近位端部の折れ面を含む全周縁に微細な剥離がある。11は末端部片を素材とし、折れ面縁と末端部縁礫面に微細な剥離がある。12は打面と背面右側に礫皮を残す。13は偏平な縁礫の周縁の一部を使用する。14は偏平垂角礫の周縁を使用する。15は垂角礫の角を主に使用する。16は極細粒砂岩、垂角礫の両主面の一部を使用する。17は偏平垂角礫の両主面のやや凹んだ部分を使用する。18は土玉、角棒状の工具に巻き付けて成形しているため綴り孔が方孔気味である。煙道内より出土した。

図版II-8上段左は厚さ2mmの鍛造鉄製品片で、鎌の可能性がある。図版II-8は炉壁片。竈の構築材に転用されたものである。竈袖・竈火床・煙道内・床・粘土集積から出土している。胎土は転磨した支笏軽石と極少量の輝石が含まれており、水籤を行なわない支笏火砕流・恵庭火山灰の二次堆積物で、それに寸莎を加えたものである。これらの中には内面が発泡しているものもある。

表II-1 H-13掲載土器観察表

II-6-1

	口唇部	体部	底部	備考
外面		粘土紐巻上げ 回転ヨコナデ	(欠失)	・外面7.5YR8/6 (橙色) ・内黒 ・外面被熱
		粘土紐巻上げ 回転ヨコナデ	(欠失)	
内面		ヨコミガキ		・VII群b類 ・上半1/2残存

II-6-2

	口唇部	体部	底部	備考
外面		粘土紐巻上げ 回転ヨコナデ		・外面10YR8/2 (灰白色) ・内黒 ・外面磨減
			回転糸切り	
内面		粘土紐巻上げ 回転ヨコナデ		・VII群b類 ・1/3残存
		ヨコミガキ	ミガキ	

II-6-3

	口唇部	体部	底部	備考
外面		粘土紐巻上げ ナデ 段状沈線 ヨコミガキ	ミガキ	・外面上半は黒色 下半は10YR7/6 (明黄褐色) ・内黒
		粘土紐巻上げ ナデ ヨコミガキ		
内面		ヨコミガキ	ミガキ	・VII群b類 ・ほぼ完形

II-6-4

	口唇部	体部	底部	備考
外面		粘土紐巻上げ ナデ 段状沈線 ヨコミガキ	ミガキ?	・外面10YR7/6 (明黄褐色) ・内黒
		粘土紐巻上げ ナデ ヨコミガキ		
内面		ヨコミガキ	ミガキ	・VII群b類 ・ほぼ完形

II-6-6

	口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部側面	備考
外面				粘土紐巻上げ ヨコナデ タテハケ ヨコハケ		・外面7.5YR7/4 (にぶい橙色) ・内面10YR7/6 (明黄褐色) ・外底面に砂目 の後に笹葉圧痕 ・補修孔あり
			沈線 ナナメハケ			
			ヨコナデ			
				粘土紐巻上げ ヨコナデ ヨコハケ		
内面				ヨコナデ		・VII群b類 ・ほぼ完形
				ヨコナデ		

II-6-7

	口唇部	体部	底部	備考
外面		粘土紐巻上げ 回転ヨコナデ	(欠失)	・内外断面 N4/0 (灰色) ・胎土:チャート粒 長石
内面		粘土紐巻上げ 回転ヨコナデ	(欠失)	・VII群b類 ・上半2/5残存

II-6-8

	口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部	備考
外面	(欠失)	(欠失)	(欠失)	粘土紐巻上げ 回転ヨコナデ 回転ヨコハケ 回転ヨコナデ 沈線文様	ヨコ・ナナメハケ	・内外断面 N6/0 (灰色)
				粘土紐巻上げ 回転ヨコナデ 回転ヨコハケ 回転ヨコナデ		
内面	(欠失)	(欠失)	(欠失)			・VII群b類 ・胴部1/4残存

遺跡内の同時期の擦文土器には輝石・角閃石が多量に含まれているが、炉壁片には含まれていない。素材選択がまったく異なっていたことがわかる。H-13付近から出土した鉄滓（図版Ⅲ-19）にも軽石が含まれており同様の素材が使用されていたことを示している。

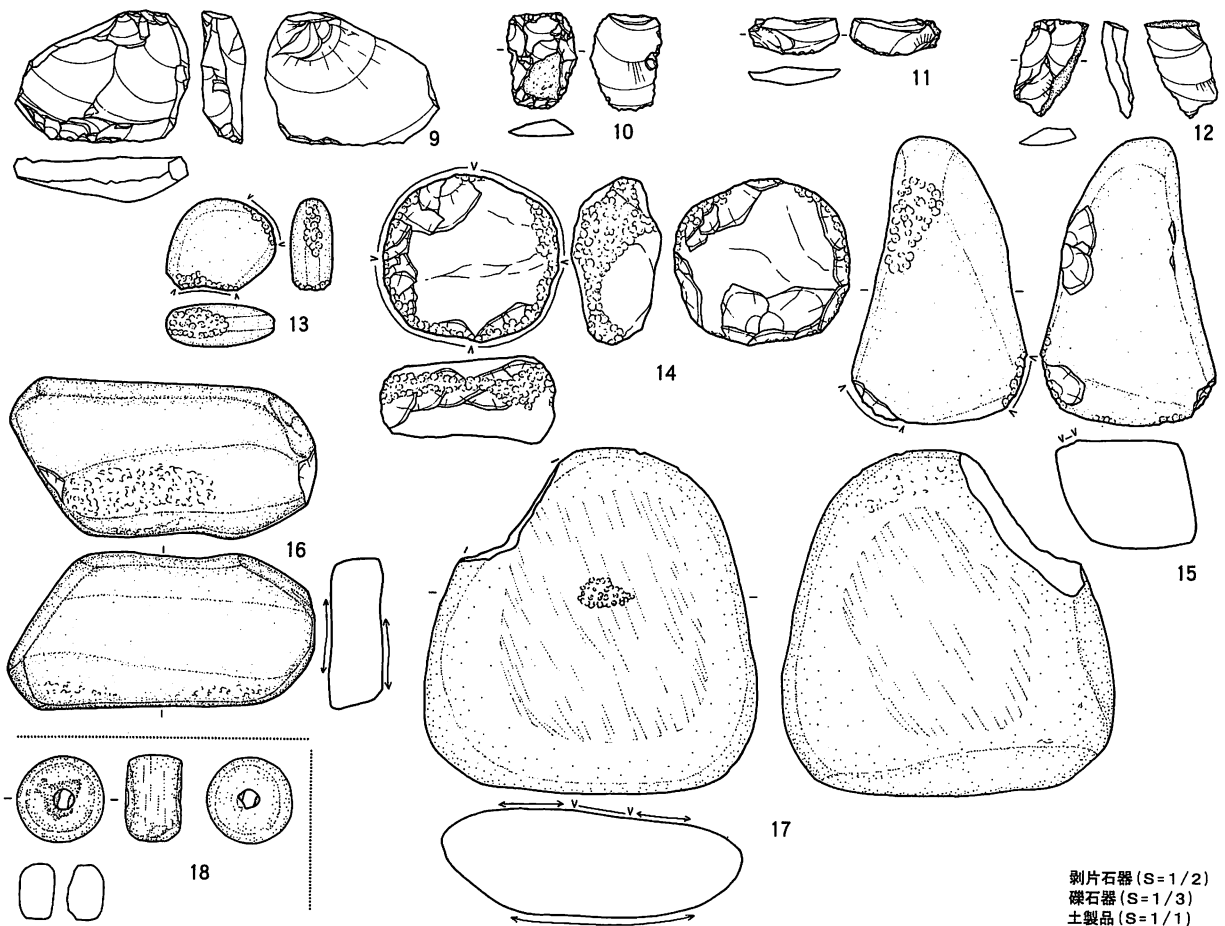
恵庭市中島松7遺跡において鉄鉋様鉋物と報告されているものがある（恵庭市教育委員会『中島松6・7遺跡』1988年）。岩手県立博物館の赤沼英男氏によると炉壁の溶解物の可能性が高いという御教示を得た。これらは主に火山灰二次堆積砂で構成され、淡水性珪藻・鉄バクテリアが含まれることから内陸湖沼が起源の土壌と推定されている。第4・7号住居址の構築は覆土中にB-Tm火山灰（10世紀第2四半期頃降下）の堆積がないことから降灰以後で、第4号住居址床から出土した甕がⅦ群c類（佐藤和雄分類のⅦに相当、10世紀中葉～後葉：北海道埋蔵文化財センター『美沢川流域の遺跡群Ⅳ』1989年）である。両者に齟齬はなくこのことから炉壁の溶解物もこの時期の遺物と考えられる。

本遺跡例も支笏火砕流・恵庭火山灰の二次堆積物である。H-13の土器がⅦ群b類（佐藤和雄分類のⅤに相当）であること、転用材であることから9世紀前葉を遡る時期の製鉄炉炉壁片の可能性も考えられる。寸苳入り甕の例として末広遺跡IH-32、ユカンボンシE10遺跡1号住居がある。

時期 B-Tmが壁際の崩壊後に堆積していること。床面などからⅦ群b類の土器・須恵器が出土していること。A.M.S.を用いた補正¹⁴C年代測定結果（煙道出土のキハダ属種子を測定）が1190±60y B.P.であることからⅦ群b類期の擦文文化期である。（鈴木）

土器観察表の見方について

土器観察表の見方は、成形・調整・施文の内容を外面を上段に、内面を下段に分けて示した。外面または内面の枠内の上下方向は成形・調整・施文の新旧を表し、下段に行くほど新しい。列方向枠は部



図Ⅱ-7 H-13の石器・土製品

位毎の区分である。同一部位内において異なる調整等がある場合はその境界を破線で示した。ただし、甕形・深鉢形の底部については外面の底部側面と外底面を分け、外面底部側面の内容を表中「外面×底部側面」の欄に記述し、外底面の内容は備考に記した。内面は底部側面が存在しないので、内底面の内容を表中「内面×底部側面」の欄に記述した。非ロクロ坏形については外面に底部側面が存在しないので、底部側面という欄はない。調整等の欄に「？」があるのは技法不明を表す。施文は網掛けで示している。施文に括弧内の数字は沈線などの本数などを示している。備考には、土器外面の全体的な土色を目安で示し、胎土等・型式名・残存状態を記した。

表 II-2 H-13 掲載土器一覧

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類					
II-6-1	G24a	H-13	覆土中層	VII b	F25b	H-13	掘揚土		
	F26a	土器集中1	I B	内黒坏	G24d	"	構築面		
	F25c	包含層	I B		G25a	"	"		
II-6-2	F24b	H-13	床面	VII b	F26a	土器集中1	I B		
	F25c	土器集中1	I B	内黒坏	E26b	包含層	I B		
	F26a	"	"	"	F25d	"	"		
	F26b	"	"	"	F26a	"	"		
	F25d	包含層	I B		F26a	"	II B		
II-6-3	F23d	H-13	床面	VII b	G25a	"	I B 上部		
	G24a	"	覆土中層	内黒坏	G25b	"	"		
	E26b	土器集中1	I B		G27	"	I B		
	F26a	"	"						
	E26b	包含層	I B						
	F25b	"	I B 上部						
	G24d	"	"						
G25a	"	耕作土							
II-6-4	F24c	H-13	覆土下層	VII b	II-6-7	F24c	H-13	覆土下層	VII b 須恵器坏
	G24a	"	覆土上層	内黒坏		F25b	"	掘揚土	
	"	"	煙道			G24a	"	覆土中層	
	G24d	"	構築面			"	"	床面	
	F26a	土器集中1	I B			F26a	土器集中1	I B	
	F25d	包含層	I B						
II-6-5	G24a	H-13	構築面	VII b	II-6-8	F24b	H-13	床面	VII b 須恵器壺
		(II-15-1 と同一個体)	甕口縁部			F24c	"	覆土下層	
						"	"	粘土	
						G24a	"	覆土中層	
						"	"	竈の上	
II-6-6	F23d	H-13	床面	VII b	F26b	AP-1	埋土1層		
	F24a	"	"	小型甕	E25c	土器集中1	I B		
	F24c	"	粘土		F26a	"	"		
					F26c	"	"		
II-7-18	G24a	H-13	竈	土玉	E25c	包含層	I B		
					G25a	"	耕作土		

表 II-3 H-13 掲載石器一覧

図番号	発掘区	層位	分類	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
II-7-9	F23c	覆土上層	Uフレイク	頁岩	3.3	4.6	1.1	19.6	
II-7-10	F24a	床面	Uフレイク	黒曜石	2.2	1.9	0.6	2.0	
II-7-11	F24c	粘土	Uフレイク	黒曜石	0.8	2.4	0.4	0.9	
II-7-12	F24a	床面	Uフレイク	黒曜石	2.6	1.3	0.4	1.8	
II-7-13	G24a	覆土下層	たたき石	砂岩	3.6	4.2	1.7	31.7	焼けあり
II-7-14	G24a	床面	たたき石	メノウ	6.5	6.9	2.8	183.6	
II-7-15	F24a	床面	たたき石	安山岩	11.3	5.5	4.2	454.6	
II-7-16	F23d	床面	砥石	砂岩	6.0	11.3	2.2	301.6	
II-7-17	F23c	掘揚土	砥石	凝灰岩	13.8	12.8	4.2	1158.6	石英質

2 住居跡

表Ⅱ-4 H-13掲載鉄製品一覧

図版番号	発掘区	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
Ⅱ-8	G24a	掘揚土	鍛造鉄製品片	—	—	0.2	(1.4)	鎌? 図版のみ

表Ⅱ-5 H-13掲載の炉壁片一覧

図版番号	発掘区	層位	分類	備考
Ⅱ-8	F24c、G24a	煙道内、他	炉壁片	大きめの物を掲載 細片多数出土 図版のみ

表Ⅱ-6 H-13遺物集計表

		上層	中層	下層	床面	煙道	粘土	焼土	覆土	掘揚土	構築	不明	合計
土	I b									1			1
	I b 4		3										3
	Ⅱ a									1			1
	Ⅲ	8	12		8			2	2	43	1	2	78
	Ⅲ a	6	8		3				2	24		1	44
	Ⅲ b	17	80		4	2			16	243			362
	Ⅲ b 1	4	2		1	1			1	31			40
	Ⅲ b 2	1	3							2			6
	Ⅳ	17	22		9	1			13	140	1		203
	Ⅳ a	3	3		2				1	10			19
	Ⅳ b	12	20		13	1		1	1	128	2		178
	Ⅳ b ~ c										8		8
	Ⅳ c		4	1	1					24			30
	Ⅴ	5	9		4		1		2	102			123
	Ⅴ a	1	7		1				2	23			34
	Ⅴ b									12			12
	Ⅴ c		3							1			4
	Ⅵ		1							2	1		4
	Ⅵ b		2		2					10			14
	Ⅶ	1	1		2	3			5	3	14		29
Ⅶ b	4	6	9	13		3		10	3	18		66	
縄文	22	43		3				10	184	1		263	
不明	11	2					21	1	14		1	50	
土器合計	112	231	10	66	8	4	24	66	1001	46	4	1572	
土製品					1								1
炉壁片		1		1	1			1					4
石	石 鎌	1	2							9			12
	石 鎌 片									2			2
	石槍・ナイフ	1			1					2		1	5
	石槍・ナイフ片									1			1
	スクレイパー									7			7
	スクレイパー片								1				1
	R フレイク	1	3		1					3			8
	U フレイク	5	11		2			1	2	15			36
	石 斧	1	1							2			4
	石 斧 片	2								5		1	8
	石斧フレイク	1	1		1	1				6			10
	たたき石			1	2								3
	すり石	1								8			9
	砥石	3			1					2		1	7
	台石片	1			1					1			3
	挟り入石器									1			1
	石 核		1							4			5
	フレイクチップ	18	59		12	1			2	239			331
	礫	3	2	1	5	2			1	29			43
	礫 片	21	9	5	30	5			1	97		2	170
石器合計	59	89	7	56	9		1	7	433		5	666	
金属										1			1

※「構築」は、「構築面」を表す。

※ 炉壁片は、粘土集積、カマド袖、焚き口から、細片が多数出土。

H-14 (図II-8・9、表II-7~9、図版II-9~11)

位置 F20・21

長軸方位 N-21°-E

規模 3.5/3.2×2.8/2.6×0.3m

調査 Ta-a層除去後、I黒層の上面に深さ30cm位のくぼみを確認した。くぼみがアイヌ文化期の送り場として利用されていることが多いのでI黒層の上面の精査を優先したが送り場はなかった。

調査はくぼみの中心から南北に土層観察用畦を設定した。土層断面の観察より層をなしているB-Tm層が堆積していないこと、掘り揚げ土があること、堅穴内には炭化材があることがわかった。揚げ土の拡がりによって上端平面形が確定できたので堅穴内調査を開始した。下端平面形を検出するため堅穴周辺を少しづつ下げはじめたところで、くぼみの北半に炭化材・焼土の拡がりを検出した。堅穴内の覆土を除去し床面の精査を行なった。床面では浅い土坑1か所・地床炉1か所を検出した。焼土の拡がりや地床炉の土壌をフローテーション用に採取した。

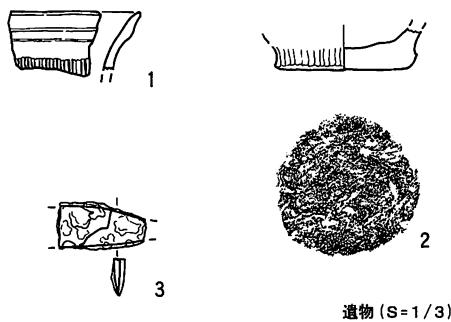
覆土 覆土1~4層は堅穴中央部分で極めて薄く、住居焼失後に流入層。2~4層は掘り揚げ土が流入したもので、覆土3層はブロック状を呈する。覆土5・6層は平面形と堆積状況から火災によって屋根土とそれが焼土となったものと考えてよい。覆土7層は堅穴内部全面に広がること、壁際でやや厚いことから、屋根土・壁面崩落土・踏み歩きによる黒色化した土が一括されたものである。

形態 一辺が彎曲する隅丸四角形。漸移層上面を床とし、壁は床より直線的に外上方に立ち上がる。

付属遺構 柱穴は壁付近に5か所、長軸上に2か所ある。掘り方はなく、平面形は円形で、先端が尖る。長軸上の柱は内傾して立てられていた。

地床炉の長軸方向は堅穴の長軸方向と同じ。浅い土坑も同じ長軸方向を持つ。土坑の覆土には炭化物が含まれることから地床炉に関連した施設の可能性はある。入口部分は、掘り揚げ土は堅穴の北東側が途切れているところに想定される。

遺物出土状況 堅穴は縄文時代・続縄文時代の包含層を破壊して構築されているため、掘り揚げ土・



図II-8 H-14の遺物

表II-7 H-14掲載土器一覧

図番号	発掘区	層位	分類
II-8-1	F21b	覆土1層	VII d 甕口縁部
II-8-2	F21b	覆土1層	VII d 甕底部

表II-8 H-14掲載鉄製品一覧

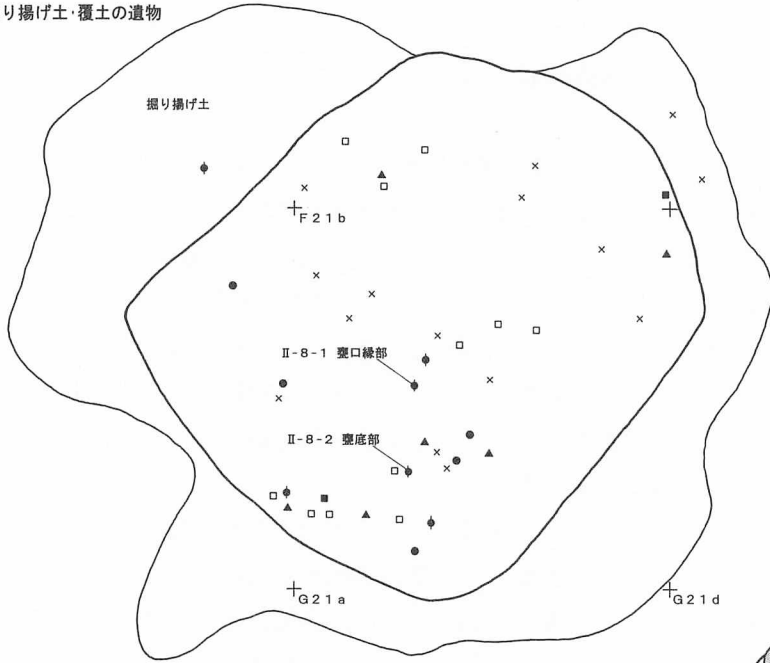
図番号	発掘区	層位	分類	備考
II-8-3	F21b	HF1	刀子	
長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	
(3.6)	1.6	0.3	(5.4)	

表II-9 H-14遺物集計表

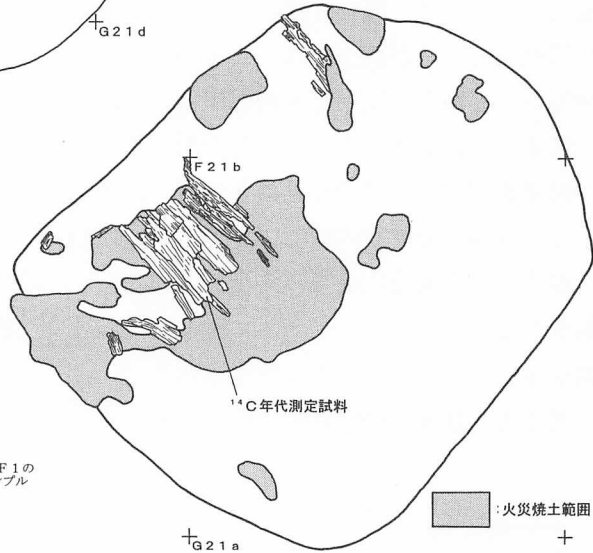
		1層	床面	揚土	HF	合計
土	III	20	5		2	27
	III a	20				20
	III b-3	1				1
	IV	6	2			8
	IV a	2				2
	IV b	20	1			21
	V	1				1
	VII b	4				4
	VII d	2				2
	器	縄文	11			
	不		2			2
	土器合計	87	10		2	99
石	石	1				1
	石	1				1
	石	1				1
	石	3	1			4
	石	3				3
	石		1			1
	石		1			1
	石	17				17
	石	3	1	1		5
	石	9		2		11
器	石器合計	38	4	3		45
金	属				1	1

2 住居跡

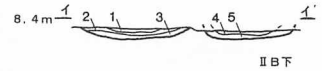
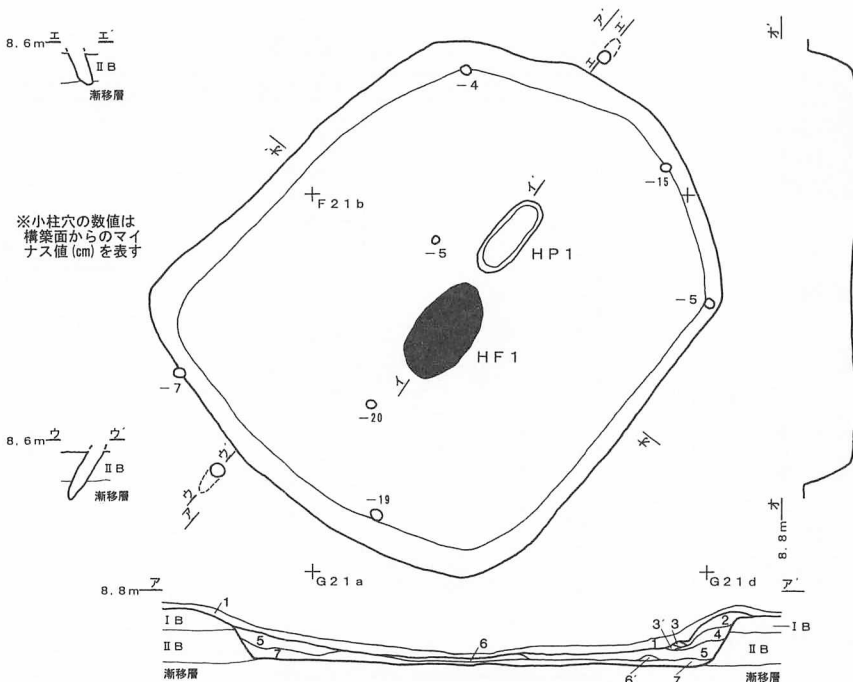
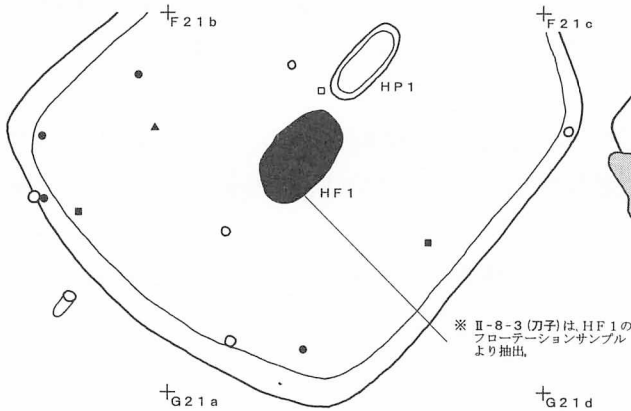
掘り揚げ土・覆土の遺物



炭化材出土状況と火災焼土の分布



床面の遺物



- HF 1・HP 1 土層註記
- 1 明褐色土 (骨片を多量に含む)
 - 2 橙褐色土 (ややしまり強)
 - 3 暗褐色土 (ややしまり弱)
 - 4 黒褐色土 (φ 1.0cmの炭化物を少量含む)
 - 5 暗褐色土 (3より明るい)
- H-14 覆土 土層註記
- 1 黒褐色土 (ややしまり弱)
 - 2 暗褐色土 (しまり弱 T a-cを僅かに含む)
 - 3 暗黄褐色火山灰 (住居南側に多く堆積)
 - 3' 暗黄褐色火山灰 (3に黒色が混ざったもの)
 - 4 黒褐色土 (しまり弱 T a-cを多量に含む)
 - 5 黒褐色土 (ややしまり弱)
 - 6 明褐色土 (ややしまり強 火災時の焼土)
 - 6' 明黄褐色土 (φ 0.5~1.0cmのE n-Pを多量に含む)
 - 7 暗褐色土 (しまりあり 粘りあり T a-cを僅かに含む)

(S=1/50)

図 II-9 H-14

覆土1～7層・床面にそのころの土器・石器が多く出土した。覆土1・掘り揚げ土からは当該期の土器片が6点出土している。なお床面から当該期の遺物は出土していない。

火災時の焼土、地床炉の土をフローテーションした結果、種子・魚獣骨が検出された。詳細は分析中である。

遺物 1はVII群d類の甕口縁部、外面はタテハケ→ヨコナデ、内面はミガキ。2はVII群土師器の技法に近い甕底部、高台脇はタテケズリ、外底面はケズリ、内面はミガキ。3は地床炉出土の刀子片で体部と茎の境界部。全体に刃がある。フローテーションによって検出された。

時期 B-Tm層が覆土中にないこと、A.M.S.を用いた補正¹⁴C年代測定結果(住居炭化材を測定)が870±60y B.P.であることからVII群類d期の擦文文化期である。(鈴木)

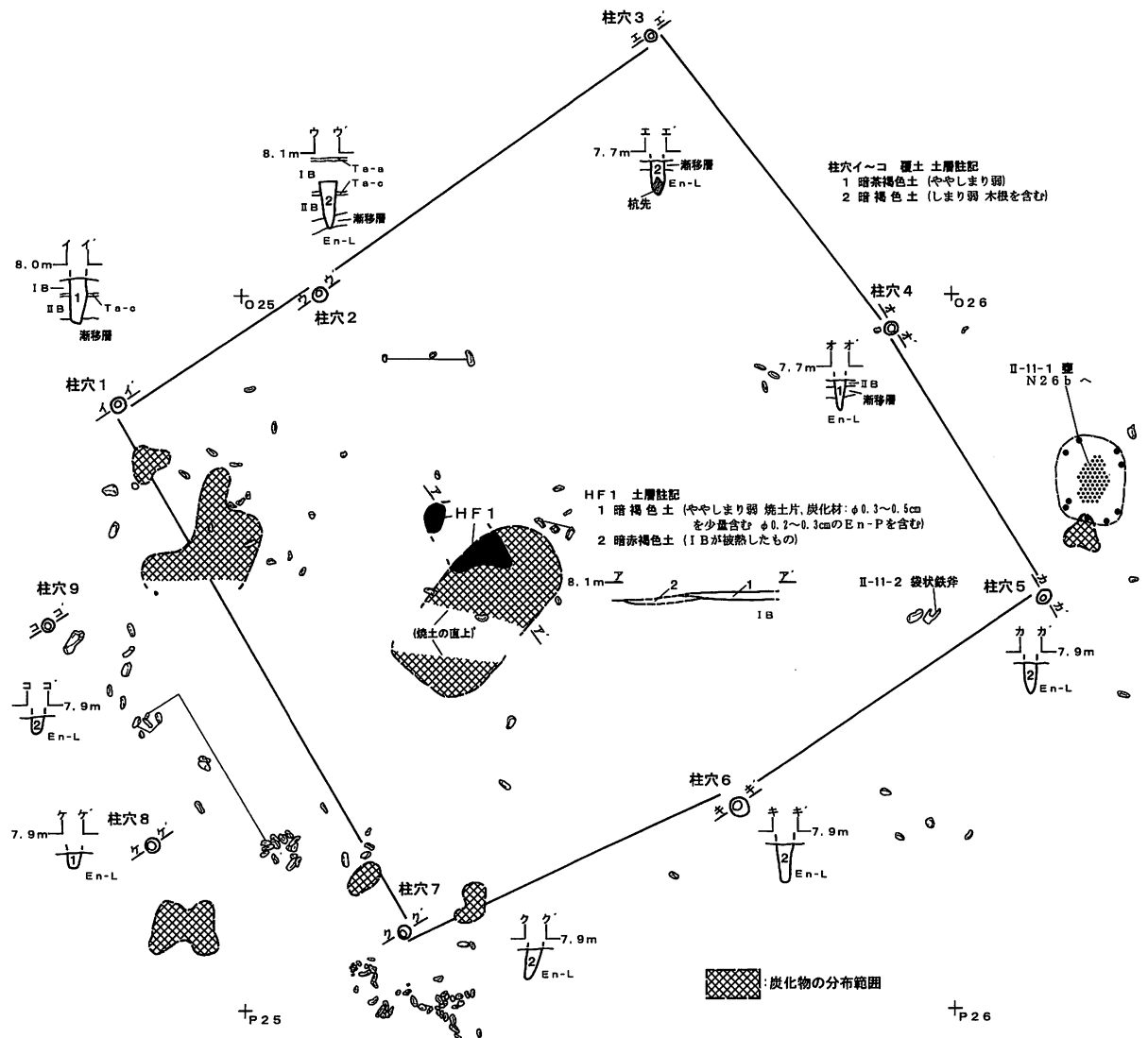
H-31 (図II-10・11、表II-10～13、図版II-12～14)

位置 L10・11、M10・11

長軸方位 N-23° - E

規模 4.8×4.6m

調査 I 黒層上部(低湿部にかかる北側においてはI B-2層)で炭化物集中や集石や土器片が、ほぼコ字を呈して分布しているのを確認した。またその内側には遺構・遺物はなく、中央に焼土が検出



図II-10 H-31

された（検出過程において焼土を削除する過ちを犯した）。焼土（HF-1）の上面には炭化物集中が広がっていた。以上のことから掘建柱建物跡の可能性があるのでそれらを残しながら柱穴の検出を行なった。炭化物集中・地床炉の土壌をフローテーション用に採取した。A.M.S.を用いた補正¹⁴C年代測定結果（HF-1上面の炭化物集中出土のヤマブドウ属種子を測定）350±60y B.P.と出た。

覆土 柱穴の覆土はEn-Lを少量含む褐色土で、柱穴8・9の先端がほぼ円筒形、柱穴1～7の先端が截頭円錐形である。深さは上面検出が困難であったため確かなことはわからないが、柱穴1・2よりI黒層上部より打ち込まれている可能性が高い。柱穴1以外は先端がEn-L層に達している。

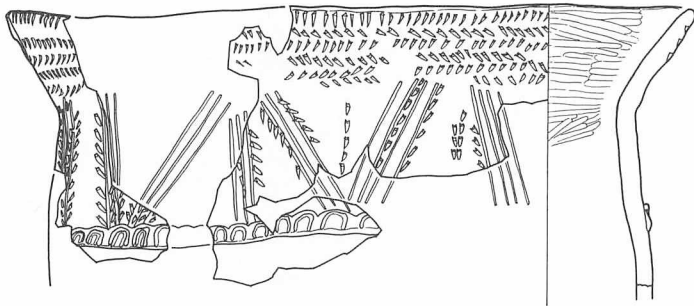
形態 平面形は方形で、柱穴の間隔2間×2間である。

付属遺構 炉は地床炉で、あまりよく焼けていない。炭化物集中は壁際に7箇所、炉の上面に1箇所ある。集石は住居跡の南西隅に3箇所密集している。その他の礫は住居跡の西側と南側に散在する。

遺物出土状況 礫(203個)、袋状鉄斧、擦文土器VII群d類甕がIB-2層相当層の上面で出土した。炭化物集中・地床炉の土をフローテーションした結果、種子が検出された。詳細は分析中である。

遺物 1はVII群d類甕の上半部、口縁部は刺突文、頸部は馬蹄形圧痕文を付した貼付帯と鋸歯状沈線文。2は袋部分の大半と刃部角が欠失している。袋部は斧台の3面を覆う形である。断面は蒲鉾形で、主面と側面との角が丸く、側面と極短い折返し部の角とは直角をなす。斧台先端を受ける部分は張出しが少なくなだらかである。斧台先端との密着部には楔状の鉄板が嵌め込まれている。

時期 柱穴・炉の検出層準と擦文土器甕からVII群d類期の擦文文化期の可能性がある。（鈴木）



表II-10 H-31掲載土器一覧

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類
II-11-1	O26 a	H-31	IB2	VII d
	N26 b	包含層	IB	甕

表II-11 H-31掲載鉄製品一覧

図番号	発掘区	層位	分類	
II-11-2	O25 d	IB2	袋状鉄斧	
	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)
	(11.9)	5.2	(3.7)	(237.1)

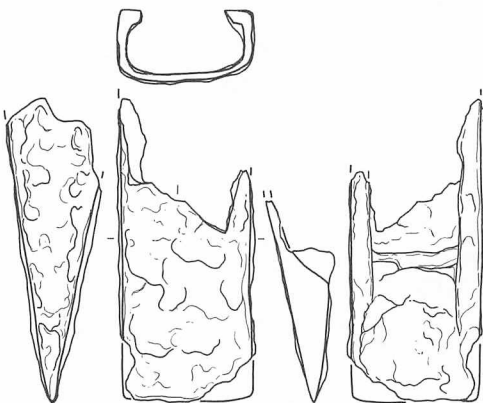
1 表II-12 H-31遺物集計表

		IB2	炭化物	合計
土	VII	2		2
	VII d	79		79
器		81		81
石	フリックチップ		1	1
	礫	88		88
器		115		115
類	石器合計	203	1	204
	金属	1		1

表II-13 H-31掲載土器観察表

II-11-1

	口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部	備考
外		粘土紐巻上げ ヨコナデ		(欠失)	(欠失)	・外面10YR5/2 (灰黄褐色) ・内面10YR2/2 (黒褐色) ・全体に摩滅
	面	刺突	貼付帯 馬蹄形圧痕文			
内			鋸歯文 鋸歯文の間や上に刺突			・VII群d類 ・上半1/4残存
	内面	粘土紐巻上げ ?		(欠失)	(欠失)	
		タデミガキ ヨコミガキ				



遺物(S=1/3)

図II-11 H-31の遺物

H-35 (図II-12、図版II-15)

位置 N 8

長軸方位 N-77°-W

規模 2.0×1.8m

調査 En-L層上面で柱穴の並びを確認した。西隅の柱穴は攪乱によって失われていた。

覆土 柱穴の覆土は第 I 黒色土が主体で締りがいい。柱穴の縦断面形は先端が円錐形である。深さは検出が遅れて上面が削平されて確かなことはわからないが、先端がEn-L層上部で止まっているので打ち込み面は I 黒層と考えられる。

形態 平面形は方形で、柱穴の間隔 1 間×1 間である。

付属遺構 付属遺構はない。

遺物出土状況 柱の先端が出土している。

時期 柱穴の覆土・検出層準・長軸方向から H-36 と同じ頃のアイヌ文化期と考えられる。(鈴木)

H-36 (図II-13、図版II-16・17)

位置 L10・11M9・10・11

長軸方位 N-88°-W

規模 9.0×5.9m

調査 II 黒層下部や漸移層上面で柱穴の並びを確認した。また、柱穴の並びに囲まれた同一面には焼土が 1 基 (HF-1) 確認された。西側隅の柱穴は攪乱によって失われていた。

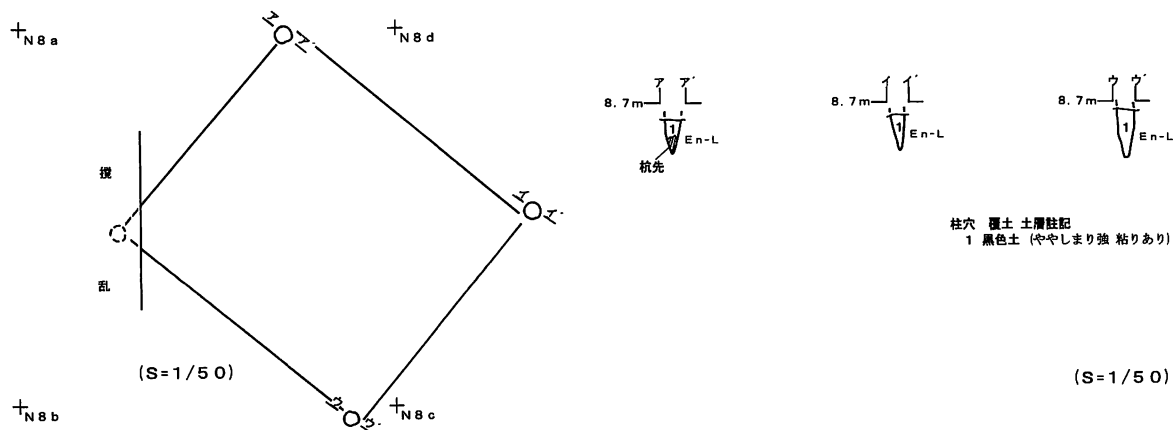
覆土 柱穴の覆土は第 I 黒色土を多量に含む黒色土と暗黄褐色土で構成されている。柱穴の縦断面形は先端が円錐形である。深さは、先端がEn-L層上部で止まるもの、En-L層上部より深く刺さるものがある。両者の配置に規則性はみられない。地床炉の土壌をフローテーション用に採取した。

形態 平面形は長方形で、柱穴の間隔 6 間×5 間である。柱穴の間隔は、長軸並が約 0.7m、短軸並が約 0.5m である。四隅柱と隣接する長短軸並の柱の間隔が 0.1m 程度とやや離れている。

付属遺構 炉は地床炉で長軸方向が住居の長軸と同じである。HF-1 はよく焼けている。

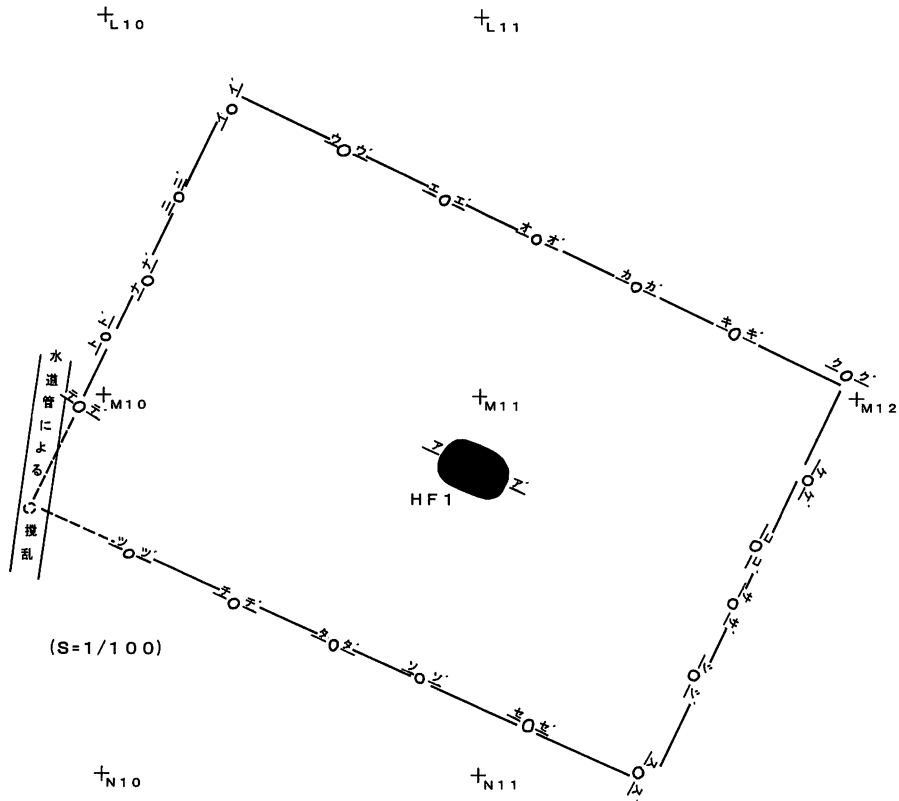
遺物出土状況 地床炉の土をフローテーションした結果、種子、サケ科・獣類の遺存体が検出された。詳細は分析中である。

時期 HF-1 の上面に I 黒層が 5 cm 位堆積していること、A.M.S. を用いた補正 ¹⁴C 年代測定結果 (HF-1 のトクサ科を測定) 310±60y B.P. より近世アイヌ文化期と考えられる。(鈴木)

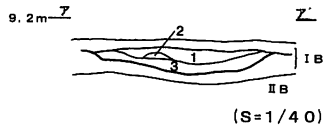


図II-12 H-35

2 住居跡

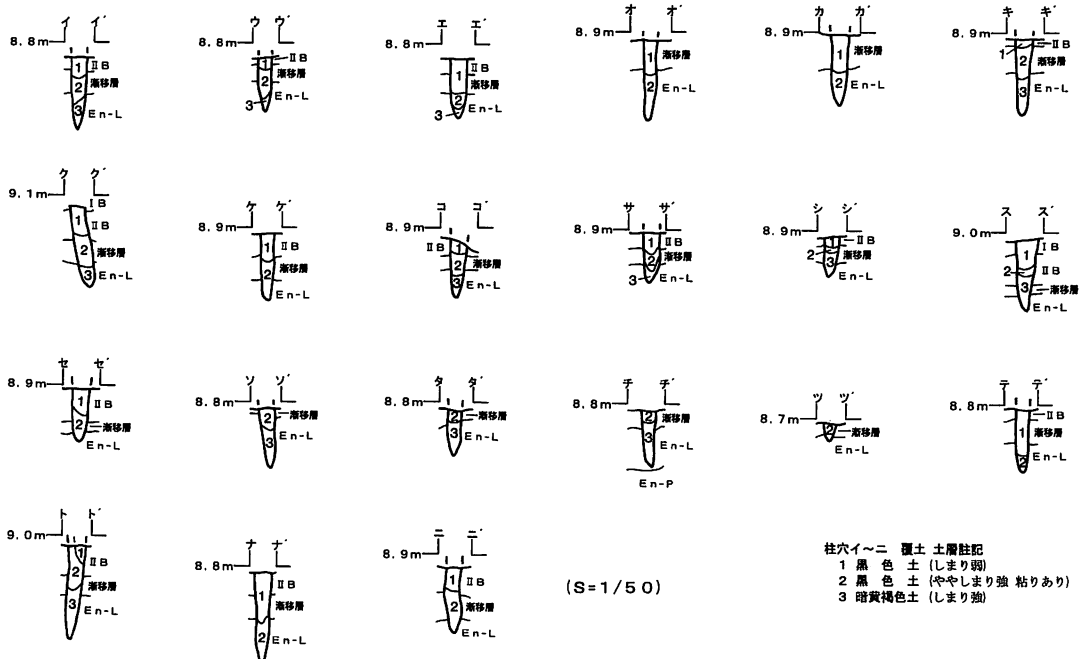


HF1 断面



HF1 土層註記

- 1 黒色土 (ややしまり強 粘り弱 極細粒の骨片を僅かに含む)
- 2 黄褐色土 (しまりあり 粘り弱 骨片を少量含む 礫然による焼け)
- 3 赤褐色土 (しまりあり 粘り弱 φ1.0cmのEn-Pを僅かに含む 礫然による焼け)



柱穴イ～ニ 覆土土層註記

- 1 黒色土 (しまり弱)
- 2 黒色土 (ややしまり強 粘りあり)
- 3 暗黄褐色土 (しまり強)

図Ⅱ-13 H-36

3 土坑墓

AP-1 (図Ⅱ-14・15、表Ⅱ-14~19、図版Ⅱ-18~23)

位置 F26、G26

長軸方位 N-12°-E

規模 2.14/2.00×1.06/0.96×0.47m

調査 Ta-a層を除去後、暗褐色土(0黒層相当)が長楕円形に広がっていた。長楕円形の短軸方向に土層観察用畦を設定して暗褐色土とI黒層を4cm位下げたところ、にぶい黄褐色土が隅丸長方形を呈して広がっていた。少し掘り下げ土坑の輪郭を検出し、輪郭確定のあと土坑内の調査を開始した。

覆土 1層は墓坑上面の陥没停止後に堆積した。2・3は陥没継続中の覆土。5層は陥没開始時の覆土で封土の土が混じる。4層は墓坑の封土。

形態 墓坑平面形は長台形、壙底は平坦で、壁は直線的でやや外傾する。封土の形は隅丸長方形。

遺物出土状況 封土ではⅦ群d類擦文土器高杯が炭化物集中1(図Ⅱ-25-1)と接合する。埋土上部ではⅦ群b類擦文土器・須恵器、石器が出土しており、H-13・炭化物集中1と接合関係を持つ。埋土下部からは礫・鉄斧が出土している。床面からは太刀、刀子、鉤状鉄製品、針、錫製耳飾が北壁に沿うようにして置かれていた。

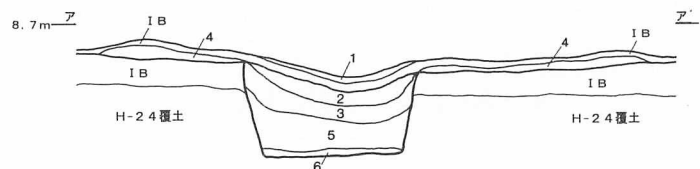
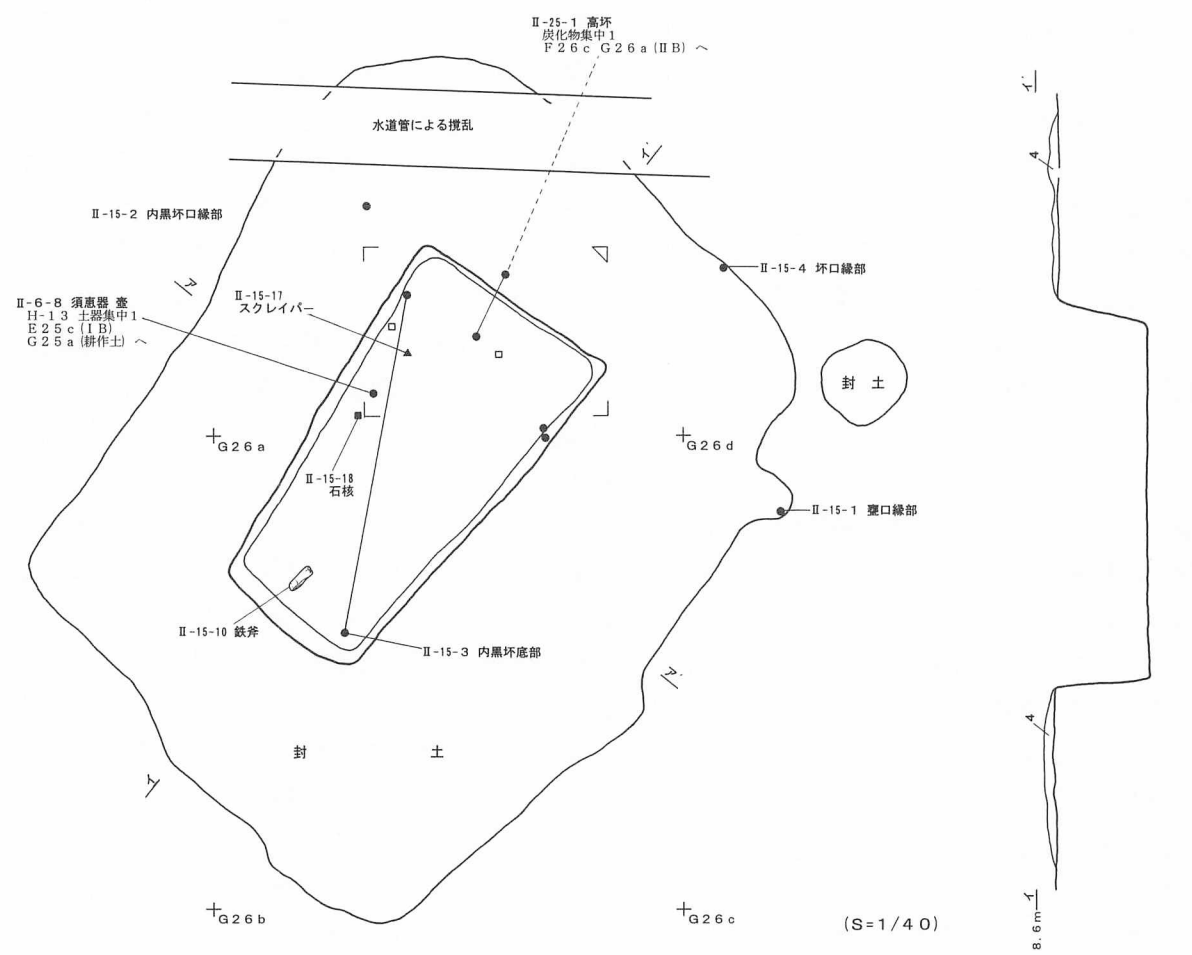
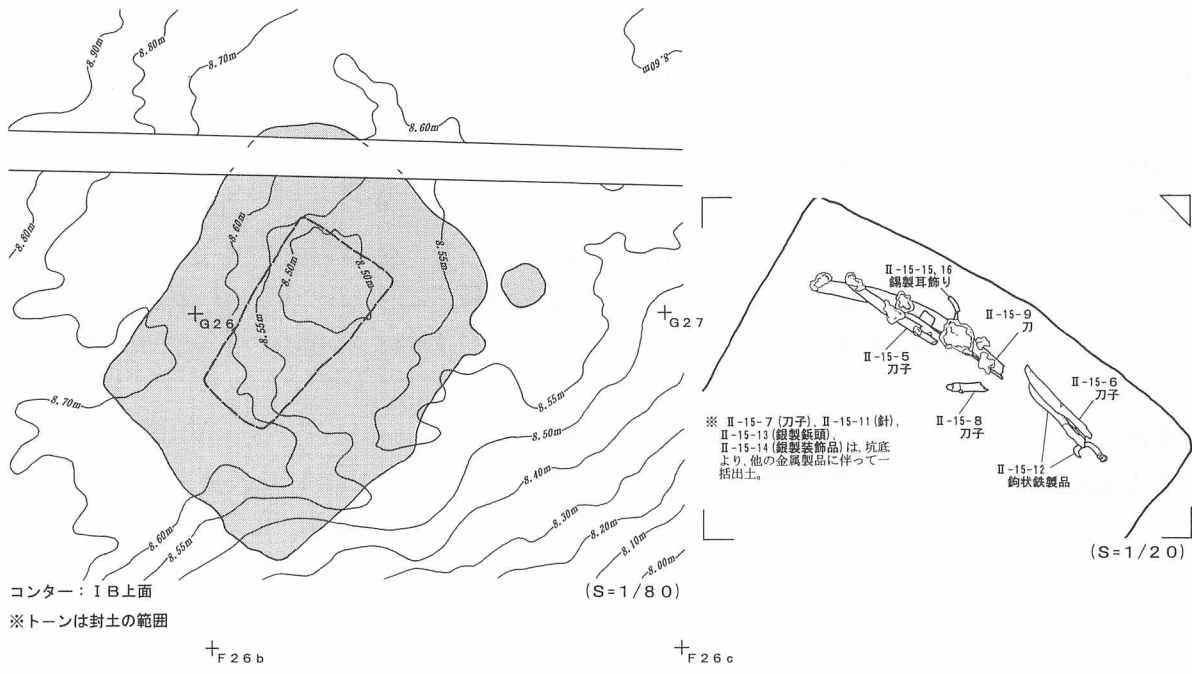
遺物 1はⅦ群b類甕口縁部片で(図Ⅱ-6-5)と同一個体、内外面ヨコナデ。2はⅦ群非ロクロ内外黒杯の口縁部破片、内外面ミガキ。3はⅦ群b類非ロクロ内外黒杯の底部、床面出土破片と覆土2層の破片が接合、内外面ミガキ。4はⅦ群d類坏口縁部片、外面に山形の刺突文、内面はナデ。(鈴木)

5は平棟平造りの刀子。緩い棟区と直角の刃区があり、刃には使い減りがみられる。茎には目釘孔が1つある。鞘・柄の木質が残存している。6は平棟平造りの刀子。中央約三分の一と切先棟側を欠失する。刃には使い減りがみられる。茎には目釘孔が1つあり、柄には木質が残存している。7は平棟平造りの小刀子。刃区に段はなく、茎には柄の木質が残存している。8は刀子の茎部。柄の木質・樹皮巻き痕跡があり、黒漆塗が残存する。9は外反りが大きい平棟平造りの太刀。棟側と刃側の両区があり、茎には目釘孔が1つある。一部分に鞘・柄の木質・樹皮巻きが残存している。10は鉞形の鉄斧。正面観は長二等辺三角形、側面観は長方形で刃部に向かって彎曲する。柄孔は長方形で、孔壁の接合部分にあたると思われる一部が欠失する。11は鉄針。断面は長方形に近い。12は鉤状鉄製品。曲がり付近の一部を欠き接合できない。鉤部は内傾する深い彎曲があり、先端は尖っていない。断面は鉤部から中央以上までは長方形で、柄にあたると思われる木質残存部は円形である。13は銀製鉾。14は銀製薄板の装飾品片。表と裏とが二枚になって癒着している。13・14は12の柄に銹着しており、土と銹とで観察が困難である。15・16は一对の錫製耳飾。これらの実測図は他の鉄製品(14にも付いていた)に付着した部分と手掘りで採集した部分の接合復元である。蛸様を呈する異形耳飾の出土例はアイヌ文化期の土坑墓にある。羅臼町植別川遺跡3号墓(羅臼町教育委員会 1981『植別川遺跡』)と千歳市末広遺跡I P-111墓坑(千歳市教育委員会 1982『末広遺跡における考古学的調査(下)』)から一対ずつ出土している。13~16の蛍光X線による材質分析において、13が銀:約90%、14が銀:約73%、15・16が錫:約70~80%と鉛:約20~30%という概略の結果を得ている (三浦)

17は剥片の遠位端部を素材とし、その遠位端背面に刃部を設ける。18は円礫で、長軸端を打面とする両極打法によって剥離した後に、短軸端に打面転移している。稜には摩滅が見られる。

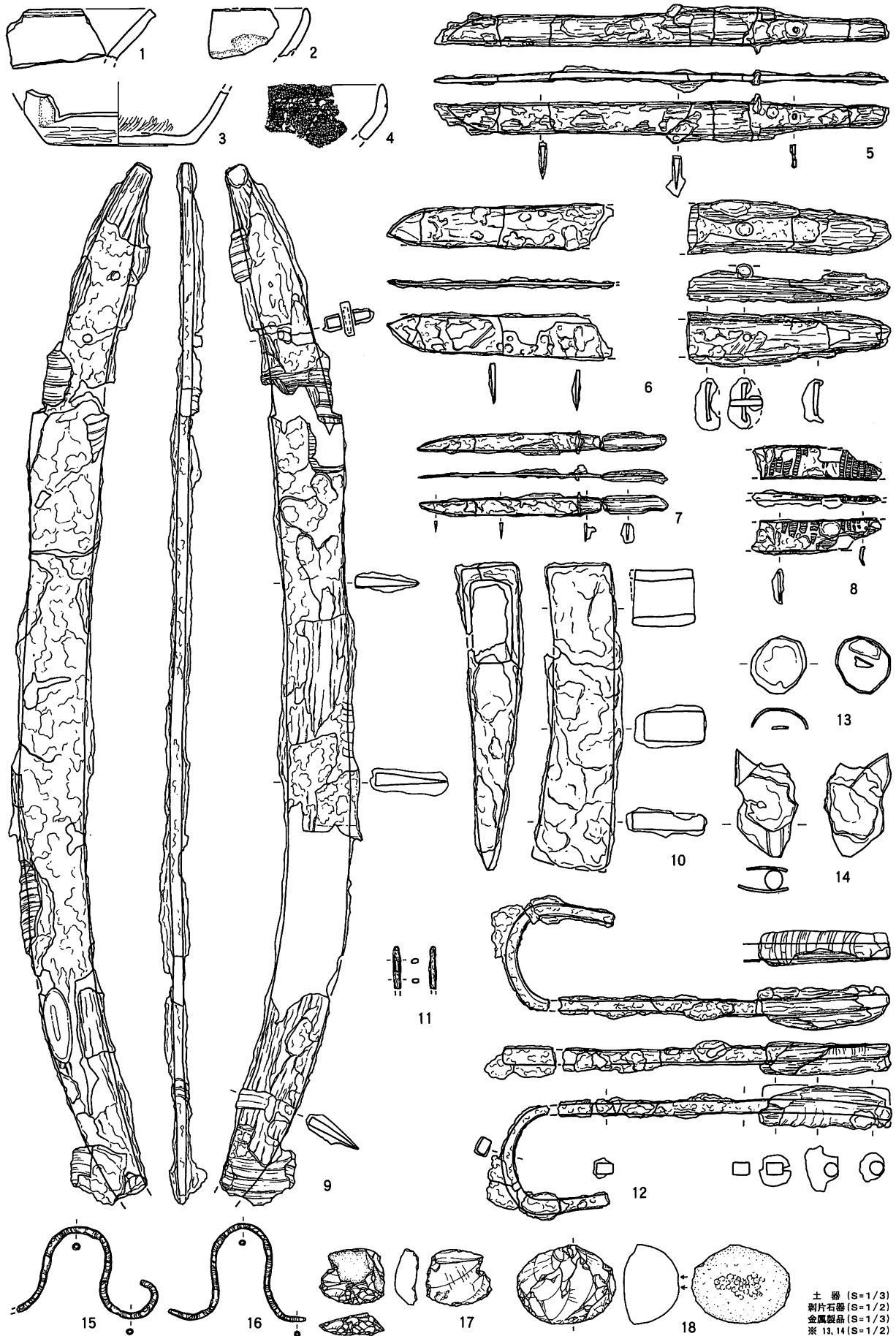
時期 封土、埋土上部、坑底面と埋土2層の接合例より、墓坑はⅦ群b類~Ⅶ群d類期の包含層を破壊して構築されたと考えられる。封土のうえにI黒層が4cm位堆積していることから近世アイヌ文化期の可能性が高い。なお、A.M.S.を用いた補正¹⁴C年代測定結果(坑底の土壌を測定)は2620±60y B.P.と出ている。(鈴木)

3 土坑墓



- AP-1 埋土土層註記
- 1 暗褐色土 10YR3/3 (粘り強)
 - 2 黒色土 10YR2/1 (I B > E n-P: φ 0.5cm 縄文土器、フレイクを含む)
 - 3 黒色土 10YR1.7/1 (I B > E n-P: φ 0.5cm しまり弱)
 - 4 にぶい黄褐色土 10YR4/3 (E n-P: φ 1.0cm > I B 封土 漆文土器を含む)
 - 5 黒色土 2.5YR2/1 (I B > E n-L > E n-P: φ 0.5cm)
 - 6 黄褐色土 2.5YR5/6 (E n-L > I B しまり弱)

図II-14 AP-1



図II-15 AP-1の遺物

土器 (S=1/3)
 銅片石器 (S=1/2)
 金属製品 (S=1/3)
 ※ 13, 14 (S=1/2)

3 土坑墓

AP-2 (図Ⅱ-16、表Ⅱ-17・19、図版Ⅱ-24~26)

位置 M12

長軸方位 N-33° - E

規模 1.86/1.66×0.64/0.50×0.44m

調査 Ta-a層を除去後、暗褐色土(0黒層相当)が長楕円形に拡がっていた。長楕円形の両軸方向に土層観察用畦を設定して暗褐色土とI黒層を4cm位掘り下げたところ、黄褐色土が楕円形を呈して拡がっていた。黄褐色土を少し掘り下げて土坑の輪郭を検出した。土坑の平面形が確定後に土坑内の調査を開始した。

覆土 1層は墓坑上面の陥没停止後に堆積した。2層は陥没停止後に封土が動いたもの3・4は陥没継続中の覆土。6層は陥没開始時の覆土で封土が混じる。5層は墓坑の封土。

形態 墓坑平面形は長台形で墓坑の角はやや丸く、墳底は平坦で、壁立上り際はいったん彎曲しそのあとやや外傾気味に立上って直線的になる。封土の高さは非常に低く、平面形はほぼ楕円形で、断面は上辺が長い台形を呈する。

遺物出土状況 封土の西側(墓坑短辺長のより短い方が足元側と推定されるので、鉄鍋は足元側におかれたと考えられる。)で鉄鍋が倒置の状態出土した。封土・墓坑内に遺物はなかった。

遺物 1は内耳鉄鍋片。銹化が著しく復元実測ができなかった。1-a・bは口縁部片、c・dは口縁部と胴部の境、eは胴部と底部の境。口縁部は段があり、口唇は内側に尖り気味に肥厚する。耳は段に対し垂直に付く。鍋の直径は出土状況断面図から計測すると約30cmである。

時期 封土のう上にI黒層が4cm位堆積していること、AP-2の掘り揚げ土に堆積したI黒層がH-36のHF-1上面の堆積より薄いので、H-36→AP-2という先後関係考えられることから近世アイヌ文化期の可能性が高い。なお、A.M.S.を用いた補正¹⁴C年代測定結果(鉄鍋に付着していた土壌を測定)は990±60y B.P.と出ている。(鈴木)

AP-3 (図Ⅱ-17、表Ⅱ-17~19、図版Ⅱ-27・28)

位置 E19・20

長軸方位 N-12° - E

規模 (1.76)/1.37×(1.28)/0.98×(0.48)m

調査 E19区包含層調査中に黒褐色の土の拡がり刀子を検出した。E19区とE20区の境界を土層観察用畦とした。土層を記録したあとに畦を撤去して残存する平面形の確認を行なった。

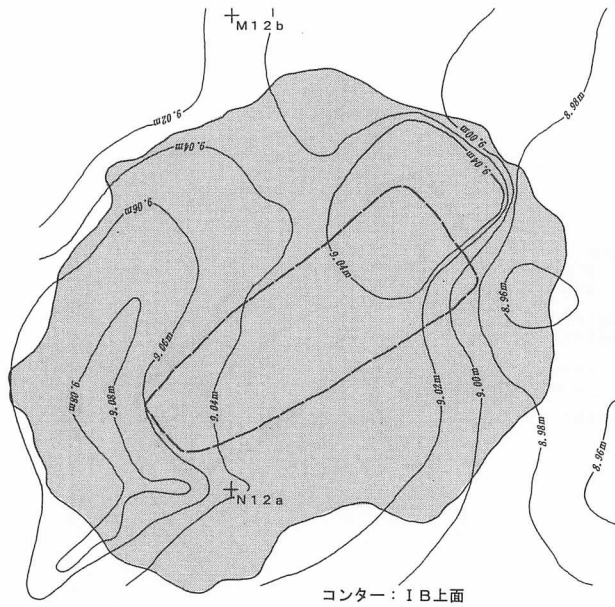
覆土 埋土の層界全体の印象は流れ込みの曲線を描いている。1層は墓坑が陥没停止後に堆積した(0黒層相当)。2~5層は陥没継続中の覆土埋土。6・7層は陥没開始時の覆土である。

形態 墓坑平面形はやや角が丸い長方形、墳底は平坦で漸移層上部に及んでいる。壁は直線的で緩く外傾しながら立ち上がる。

遺物出土状況 遺物は6層上面からの出土である。刀子は墓坑中央に墓坑長軸方向に沿って置かれていた。漆塗椀は刀子柄の付近から出土している。(鈴木)

遺物 1は平棟平造り刀子。棟区・刃区の両区がある。鞘の木質とそれに巻いた樹皮(桜?)が残存している。茎には柄の木質と柄口に巻いた樹皮、佩表には象嵌した双円形の飾り金具(銅?)とその痕跡など拵えがある。図版Ⅱ-26中段は内外面が茶褐色の漆器(塗椀)片、木胎は腐朽しきっていて、塗膜片のみが残存していた。外面に赤色で文様が描かれている。文様の内容は不明。(三浦)

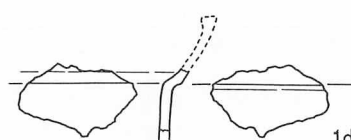
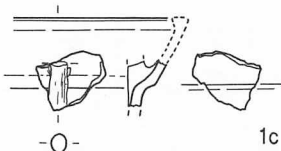
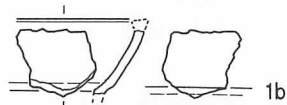
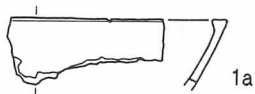
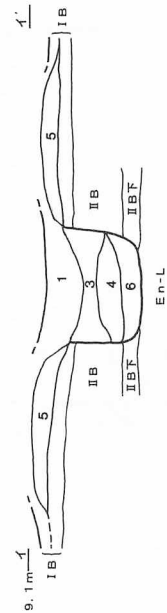
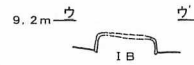
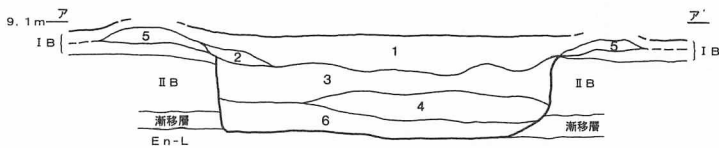
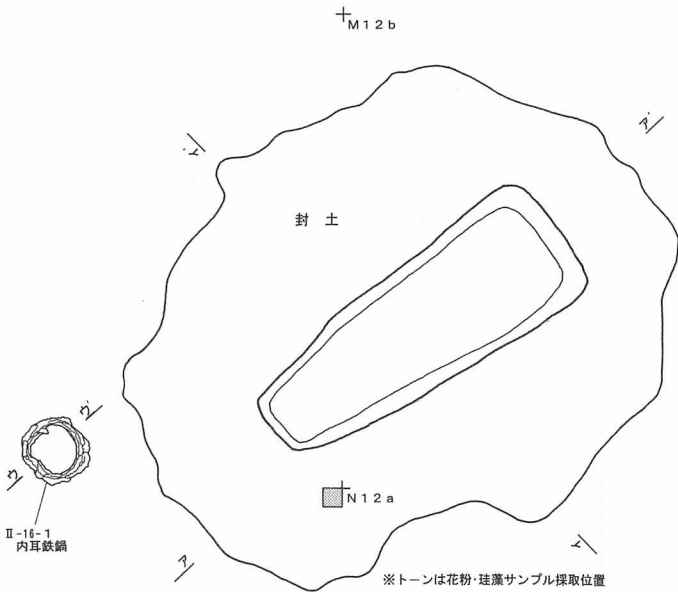
時期 埋土の土質・堆積状況、副葬品の種類と、A.M.S.を用いた補正¹⁴C年代測定結果(漆塗椀片を測定)は610±60y B.P.であることより中世アイヌ文化期と考えられる。(鈴木)



※トーンは封土の範囲

AP-2 埋土 土層註記

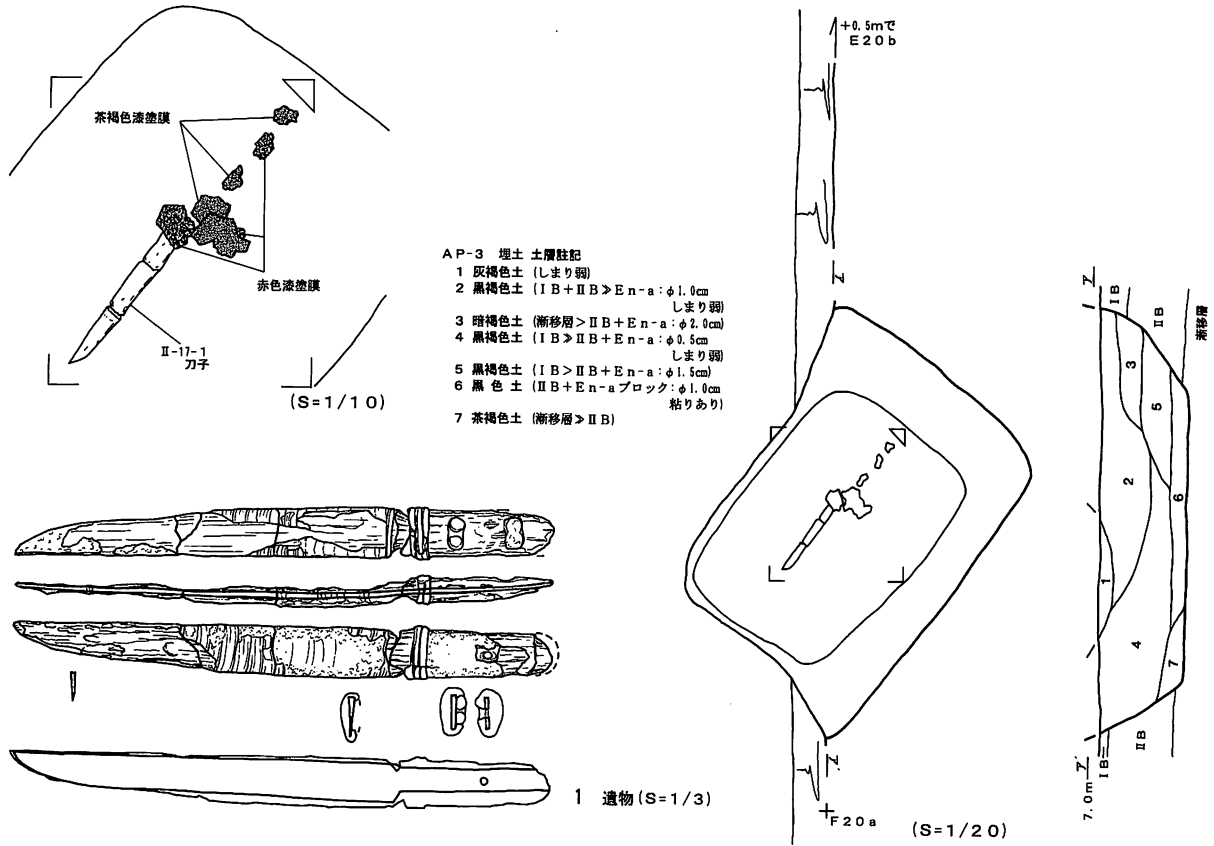
- 1 暗褐色土 (IB>En-P ややしり強)
- 2 暗黄褐色土 (En-P:φ1.0~2.0cm>IB>En-L ややしり強)
- 3 褐色土 (En-L+En-P>IB ややしり強)
- 4 黒褐色土 (IB>En-L+En-P:φ2.0cm ややしり弱)
- 5 黄褐色土 (En-L+En-P>IB ややしり強 掘り揚げ土)
- 6 黒褐色土 (IB>En-L+En-P ややしり弱)



遺物(S=1/3)

図 II-16 AP-2 とその遺物

3 土坑墓



図II-17 AP-3とその遺物

表II-14 AP-1 掲載土器観察表

II-15-3

	口唇部	体部	底部	備考
外面	(欠失)	(欠失)	粘土紐巻上げ ナデ ヨコミガキ ミガキ	・外面5YR5/8 (明赤褐色) ・内黒
	(欠失)	(欠失)	粘土紐巻上げ ナデ ヨコミガキ ミガキ	
	(欠失)	(欠失)	粘土紐巻上げ ナデ ヨコミガキ ミガキ	
内面	(欠失)	(欠失)	粘土紐巻上げ ナデ ヨコミガキ ミガキ	・VII群b類 ・下半1/6残存

表II-15 AP-1 掲載土器一覧

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類	備考
II-15-1	G26d	AP-1	封土	VII b 甕口縁部	II-6-5と同一個体
II-15-2	F26b	AP-1	"	VII 内黒坏口縁部	
II-15-3	F26b G26a	AP-1	埋土1層 坑底	VII b 内黒坏底部	
II-15-4	F26c	AP-1	封土	VII d 坏口縁部	

表II-16 AP-1 掲載石器一覧

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
II-15-17	F26b	AP-1	埋土3層	スクレイパー	黒曜石	2.0	2.1	0.6	2.9	
II-15-18	"	"	埋土5層	石核	黒曜石	2.8	3.4	2.2	23.5	

表 II-17 AP-1~3 掲載金属製品一覧

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
II-15-5	F26 b	AP-1	坑底	刀子	23.8	1.7	0.3	34.2	小刀、中間部欠損
II-15-6	"	"	"	刀子	(22.5)	2.4	0.3	(47.2)	
II-15-7	"	"	"	刀子	13.6	1.0	0.2	6.0	茎部、漆塗
II-15-8	"	"	"	刀子	(6.9)	1.7	0.1	(5.7)	
II-15-9	"	"	"	刀	(55.9)	3.8	0.7	(124.7)	
II-15-10	G26 a	"	埋土5層	鉄斧	16.4	3.9	3.5	347.8	
II-15-11	F26 b	"	坑底	針	(2.2)	(0.2)	(0.15)	(0.3)	
II-15-12	"	"	"	鉤状鉄製品	20.9	0.7	0.9	(52.0)	
II-15-13	"	"	"	銀製鋌頭	2.1	1.2	0.7	(1.2)	刀装具か
II-15-14	"	"	"	銀製裝飾品	1.1	1.0	0.4	0.6	"
II-15-15	"	"	"	錫製耳飾り	(7.6)	4.9	0.3	(5.3)	異形
II-15-16	"	"	"	錫製耳飾り	(7.4)	5.3	0.3	(4.3)	"
II-16-1	M12 b	AP-2	坑外	内耳鉄鍋	(34.2)	(33.0)	0.6	—	厚さ：口唇部
II-17-1	E19 c	AP-3	埋土6層	刀子	(3.4)	2.1	0.1	(3.1)	刀装残存

表 II-18 AP-3 掲載漆器一覧

図版番号	発掘区	遺構名	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
II-28	E20 b	AP-3	埋土6層	漆塗椀	—	—	—	—	図版のみ

表 II-19 AP-1~3 遺物集計表

		AP-1							AP-2	AP-3		合計	
		1層	2層	3層	4層	5層	坑底	封土	埋土	坑外	2層		6層
土	III								4				4
	III a								2				2
	III b									1			1
	III b 2								3				3
	IV								1	1			1
	IV b								2				2
	IV c								3		2		5
	V								1				1
	VII	1		1					1				3
	VII b	2					1	1					4
	VII d			1				2					3
縄文								3				3	
土器合計	3		2			1	4	2	9	3		4	
土製品								1				1	
石器類	スクレイパー			1									1
	Uフレイク								4				4
	石核					1							1
	フレイクチップ								3				3
	礫								3				3
	礫片		1		1				5				7
石器合計		1	1	1	1			1	5			1	
金属	刀子							4				1	5
	刀							1					1
	鉄斧					1							1
	針							1					1
	鉤状鉄製品							1					1
	銀製鋌頭							1					1
	銀製裝飾品							1					1
	錫製耳飾り							2					2
	内耳鉄鍋									1			1
金属合計						1	1	1		1	1	1	
漆塗り椀											1	1	

4 土坑

4 土坑

P-77 (図II-18、表II-20・21、図版II-29・30)

位置 K20、L20 長軸方位 N-22° -W 規模 (1.92)/1.42×1.28/0.78×0.60m

調査 L20区包含層調査中に黒褐色の土の拡がり集石を検出した。拡がりの長軸を土層観察用断面とした。土層を記録したあとに畦を撤去して配石の状態と残存する平面形の確認を行なった。墓の可能性があるので配石調査後に脂肪酸サンプル用の土層を採取した(第V章2節参照)。

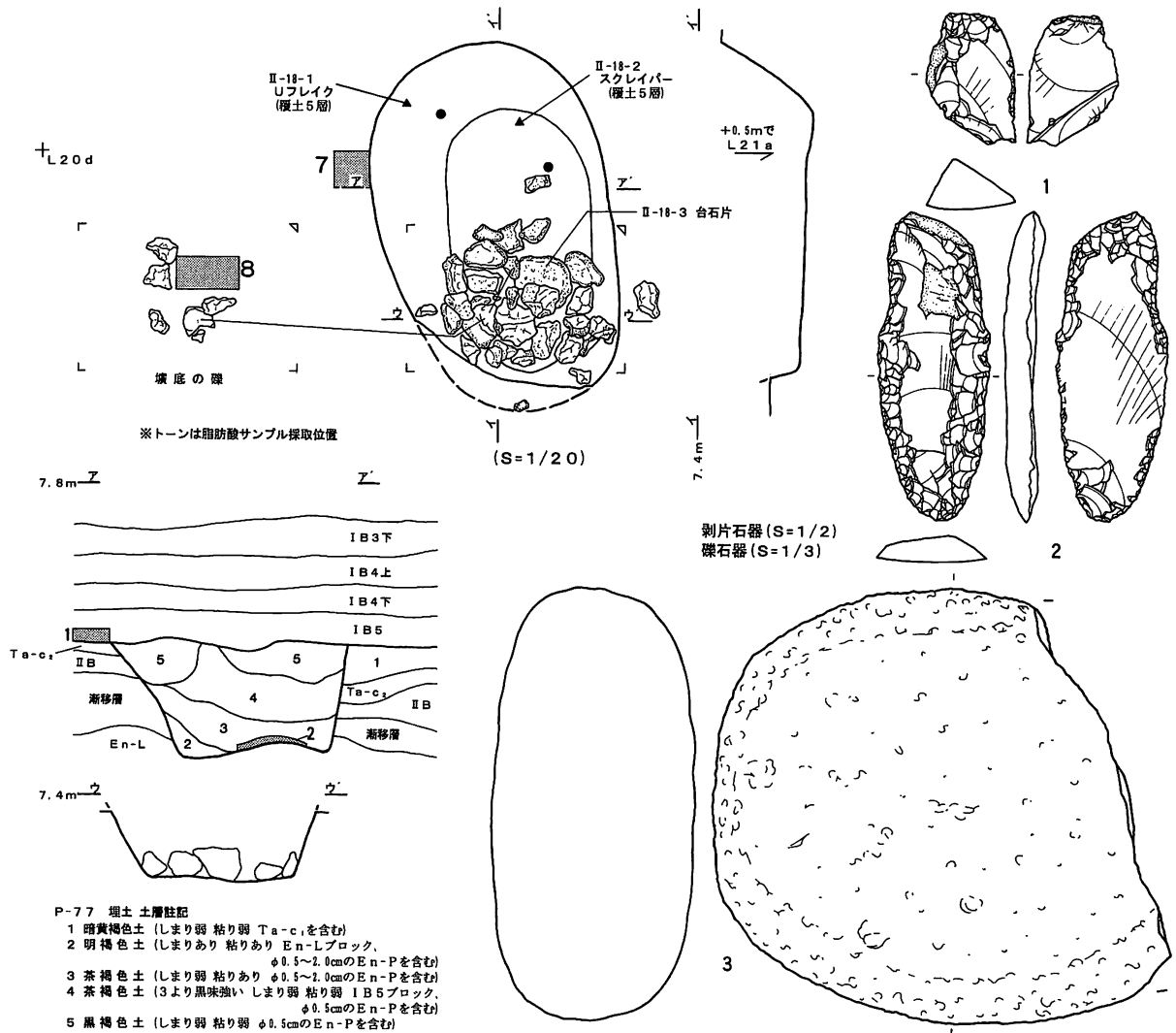
覆土 IB-5層土を含む4・5層は流れ込みの覆土。En-Lをブロックで含む2・3層は埋土。

形態 平面形は小判形、墳底は平坦でEn-L上面に及んでいる。壁は直線的で外傾する。配石は3層上面から墳底にかけて出土し、土坑の南側に偏っている。

遺物出土状況 4層からはスクレイパー・Uフレイクなどが、配石に混じって台石が出土した。

遺物 1は微細な剥離痕のある剥片、打面は礫打面で背面左側に礫皮をのこす。背面の稜・折れ面には磨耗がみられる。微細な剥離痕は左縁にある。2は縦長剥片を素材で、背面に残る礫皮の様子からある程度転磨を受けた垂角礫を原石としている。剥片の近位端側を刃部先端としている。調整は両面のほぼ全周に及んでいる。3は安山岩製、偏平垂円礫の主面を使用する。

時期 構築面がTa-c層上面にあること、4層中よりVI群a・b類期のスクレイパーが出土していることから縄文時代晩期後葉(V群c類期)～続縄文時代中葉(VI群a・b類期)と考えられる。(鈴木)



図II-18 P-77

P-42 (図II-19、表II-21、図版II-30)

位置 E24 規模 0.60/0.50×0.58/0.40×0.38m

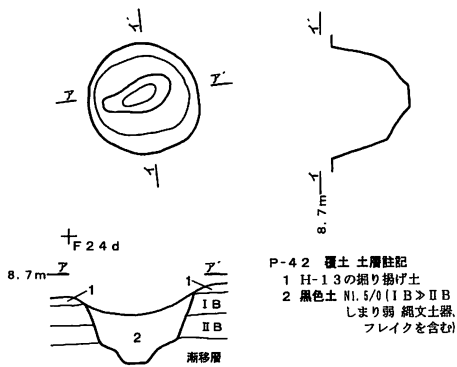
調査 H-13の掘り揚げ土上面を調査中に、黒色土の落ち込みを検出した。平面形はあきらかであるので、土層観察面を設定して半割した。

覆土 土坑内は流れ込みの単一層によって構成されている。

形態 平面形は円形、二段の坑底は漸移層中部に及んでいる。壁は直線的で外傾する。

遺物出土状況 覆土中から縄文土器の破片・フレイクが出土している。

時期 H-13の掘り揚げ土を切っていることからH-13の構築後で、周辺の土器の出土状況より擦文文化期と考えられる。(鈴木)



図II-19 P-42

表II-20 P-77掲載石器一覧

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
II-18-1	M20 c	P-77	埋土5層	Uフレイク	黒曜石	3.7	2.4	1.3	8.4	
II-18-2	"	"	"	スクレイパー	黒曜石	8.3	3.0	0.7	21.9	
II-18-3	L20 d	"	壇底	台石片	安山岩	17.7	(17.0)	8.3	(3305.0)	

表II-21 P-42・77遺物集計表

		P-42		P-77		合計
		埋土	3層	5層		
土器	III		1		1	
	III a		1		1	
	III b	1			1	
	IV b	1			1	
	土器合計	2	2		4	
石器	スクレイパー	1		1	2	
	Uフレイク			1	1	
	石斧		1		1	
	台石片		1		1	
	フレイクチップ	2			2	
礫	礫	3	1		4	
	礫片		5	3	5	3
	石器合計	6	5	2	6	4

5 焼土

焼土は遺存状況から3種に分類できる。第一に土色に橙色が加わっていて締まりのある焼土は屋外炉と考えられる。第二に土色に橙色が加わっていて締まりのないものは焼土遺構ではなく焼土が廃棄された遺構（廃棄遺構Ⅰと仮称）と考えられる。第三に土色が暗褐色で、締まりのないものは焼土遺構ではなく、灰・いろいろなものの燃えさしと一緒に廃棄された遺構（廃棄遺構Ⅱと仮称）と考えられる。フローテーションの結果については次年度以降にの詳細を報告する行なう。

(1) I 黒層上面の焼土（図Ⅱ-20～22、表Ⅱ-23～26、図版Ⅱ-31～33）

I 黒層上面の焼土はH-35・36や柱穴列がある台地西側の標高9.0mあたりに集中している。焼土の時期は層準からアイヌ文化期に形成されたと考えられる。

F-79・87・88・107・108・109・119・384・385・386・390・391・393・400・402・404・407・407・449は屋外炉である。F-159・396・406は廃棄遺構Ⅰである。F-399は廃棄遺構Ⅱである。

フローテーションの結果、F-87から鉄針片、F-384から鉄製品小片、F-390から鍛造製品小片が出土し、F-87・88・107・108・109・384～386・390・391・393・396・400～402・404・407・449から種子が、F-88・107・108・119・384から堅果類が出土し、F-390からカワシンジュガイ殻皮が出土している。F-87・107・108・109・119・384・390・391・393・396・402・449からサケ科の遺存体が、F-384・390・391・396からコイ科の遺存体が、F-390から鳥類の遺存体が、F-107～109・384・390・393から獣類の遺存体が、F-385から魚骨片が、F-407から骨片が出土している。

(2) I 黒層上部の焼土（図Ⅱ-23・24、表Ⅱ-23～26、図版Ⅱ-34）

I 黒層上部の焼土は上面の焼土とほぼ同じ場所にある。H-13・14などの擦文文化期の遺構の分布に関係を持ったような位置関係はみられず、伴出遺物がない。しかし、同一層準の炭化物集中1からVII群d類の高坏が出土し、同一層準の炭化物集中3～7がH-31の周辺にあることから、I 黒層上部の焼土も擦文文化期に形成されたと考えられる。

F-94・172・279・397・387・403・408は屋外炉である。F-405は廃棄遺構Ⅱである。

フローテーションの結果、F-94・172・387・397・403・405・408から種子は出土している。F-172から堅果類が出土している。F-94・172からサケ科の遺存体が出土している。F-279から魚骨片が、F-397から骨片が出土している。

(3) I 黒層中部の焼土（図Ⅱ-26・27、表Ⅱ-23～26、図版Ⅱ-35）

I 黒層中部の焼土は上部の焼土とほぼ同じ位置にある。近辺に住居などの明確な時期せる遺構はない。包含層出土土器の分布と焼土の層準から判断すると後北式期と考えられる。

F-86・90・222・223・392・394は屋外炉である。F-89・127・389は廃棄遺構Ⅱである。廃棄遺構ⅡはF-130である。

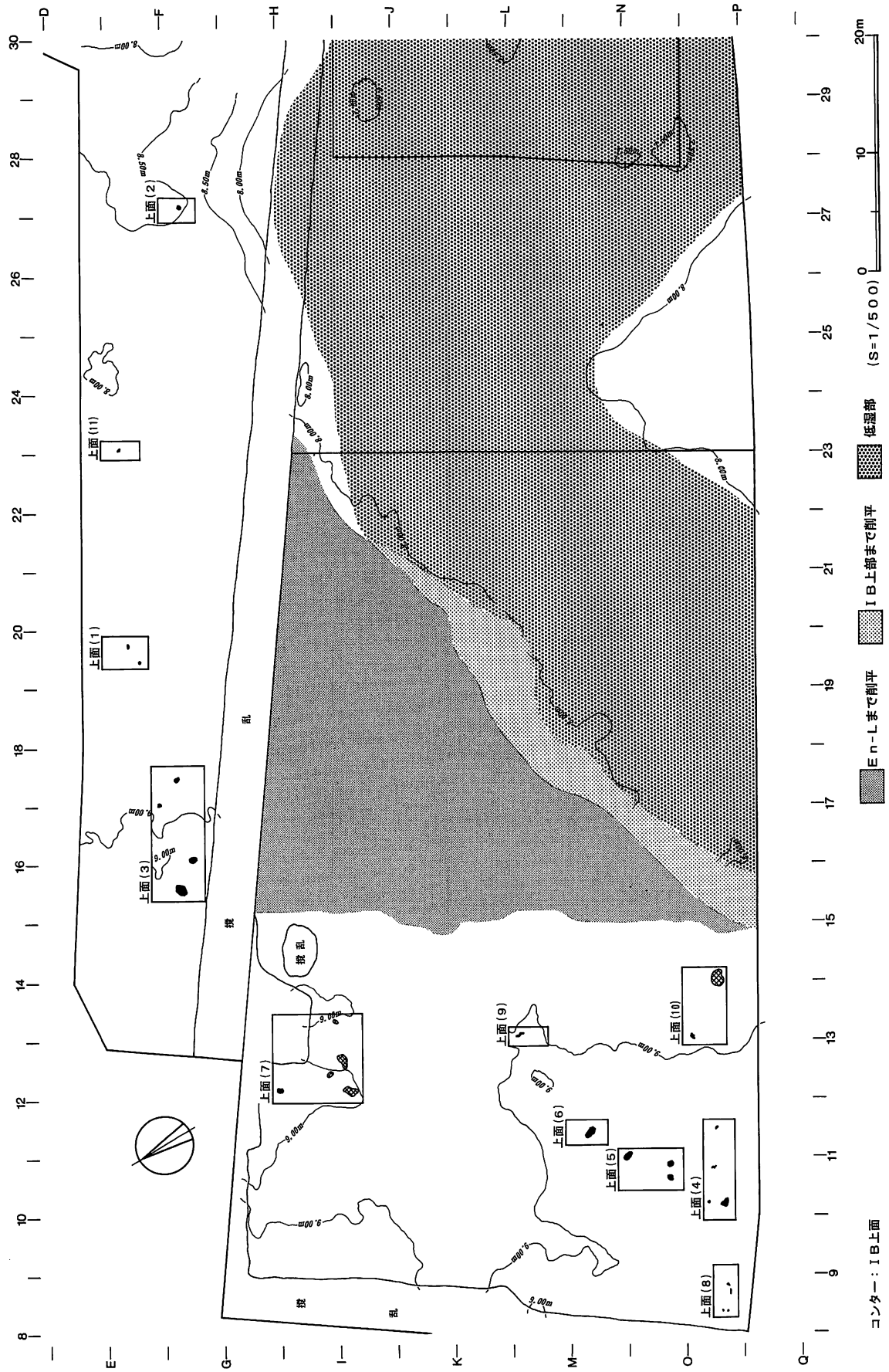
フローテーションの結果、F-89・90・389・392・394から種子が出土している。F-290から堅果類が出土している。F-290・389・394からサケ科の遺存体が出土している。F-394からコイ科の遺存体が出土している。F-290から獣類の遺存体が出土している。F-392から魚骨片が出土している。

(4) I 黒層下部の焼土（図Ⅱ-28・29、表Ⅱ-23～26、図版Ⅱ-36）

I 黒層下部の焼土は台地の東側寄りに偏っている。近辺に住居などの明確な時期せる遺構はない。包含層出土土器の分布と焼土の層準から判断すると後北式期と考えられる。

F-91・92・93・173・207・208は屋外炉である。F-230・388・398は廃棄遺構Ⅰである。

フローテーションの結果、F-398から種子が出土している。F-91・173から堅果類が出土している。F-398からサケ科の遺存体が出土している。F-388から骨片が出土している。（鈴木）



図II-20 I 黒層上面の焼土・炭化物集中位置図

5 焼土

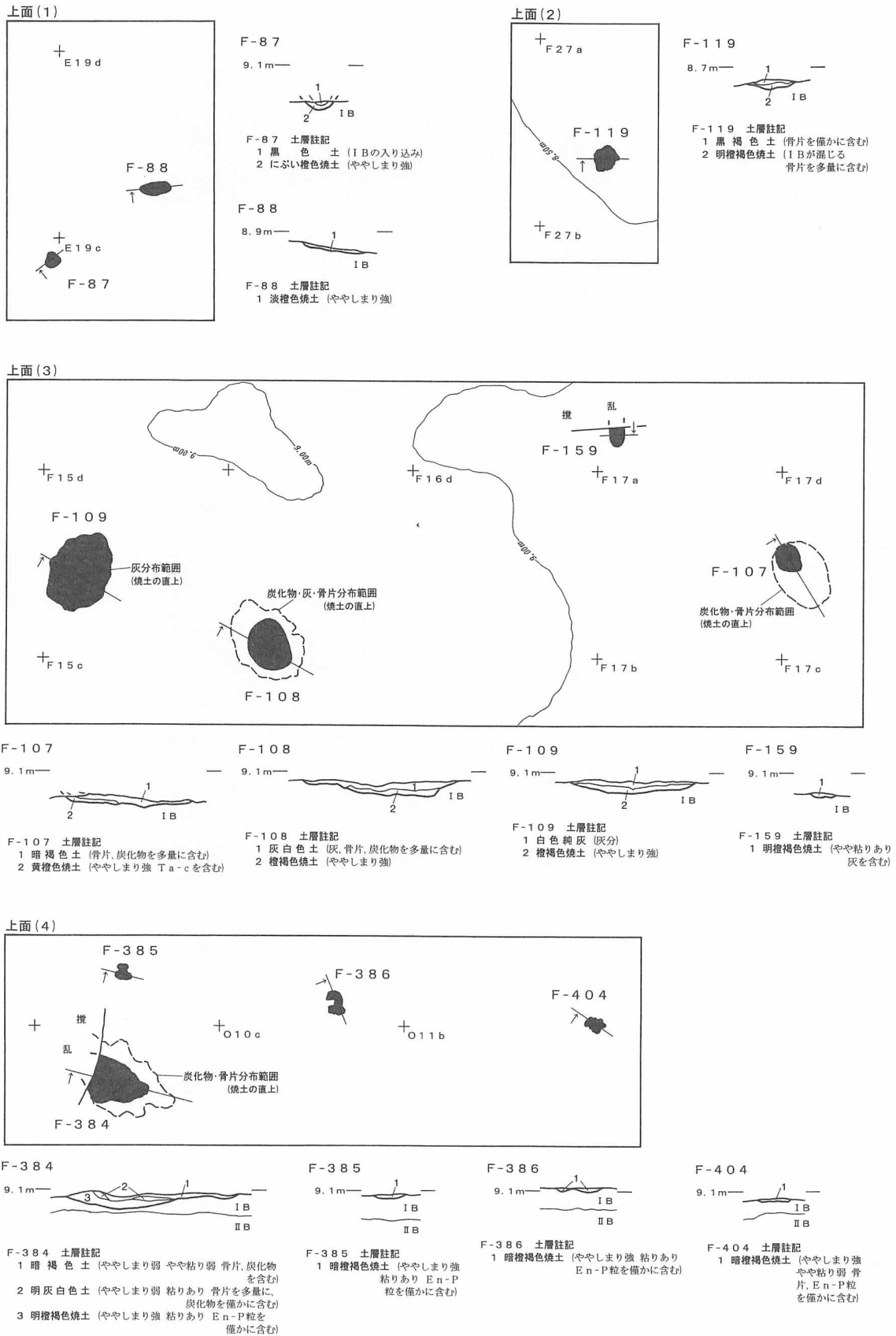


図 II - 21 I 黒層上面の焼土(1)

II 台地部 I 黒層の遺構とその遺物

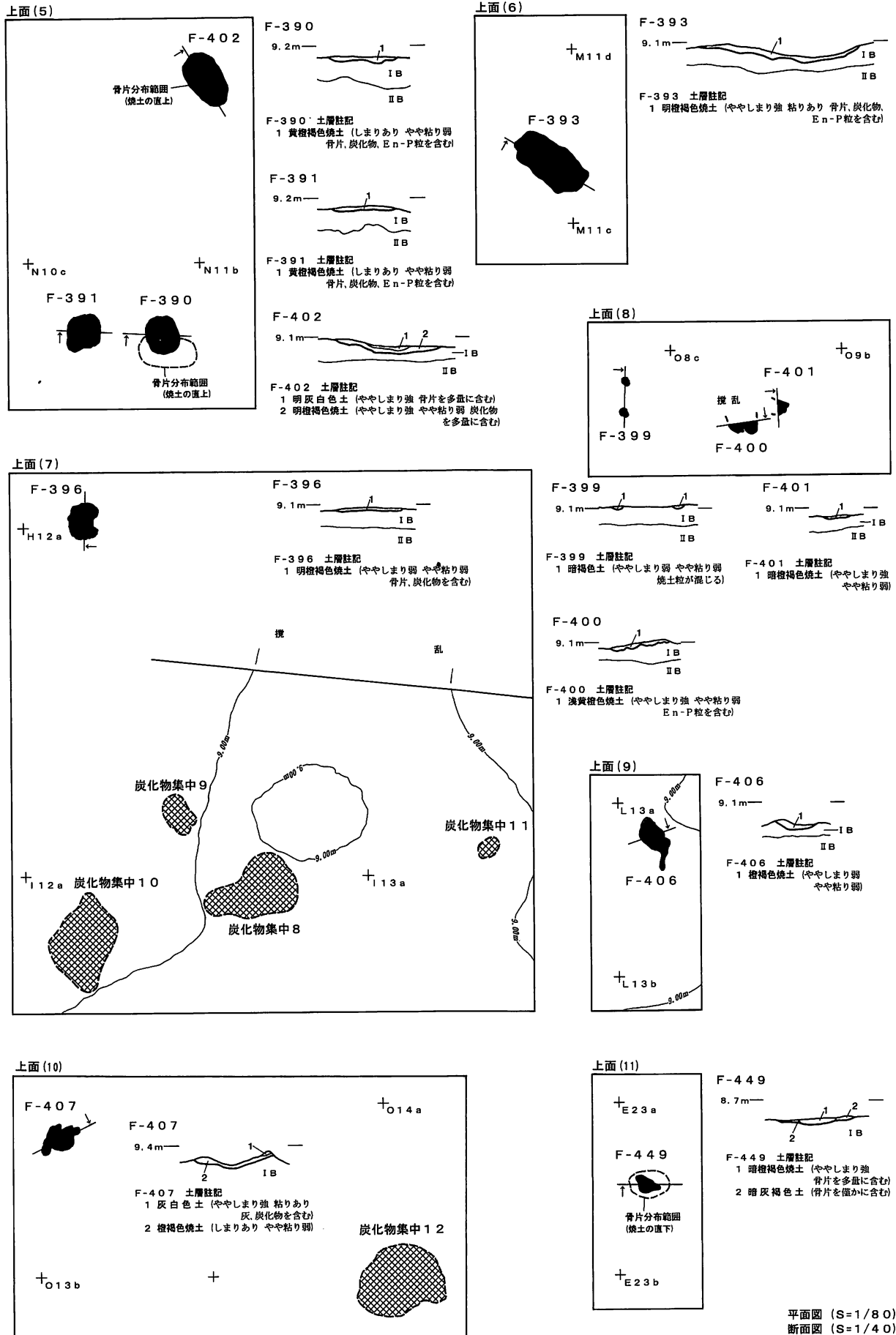


図 II-22 I 黒層上面の焼土(2)・炭化物集中

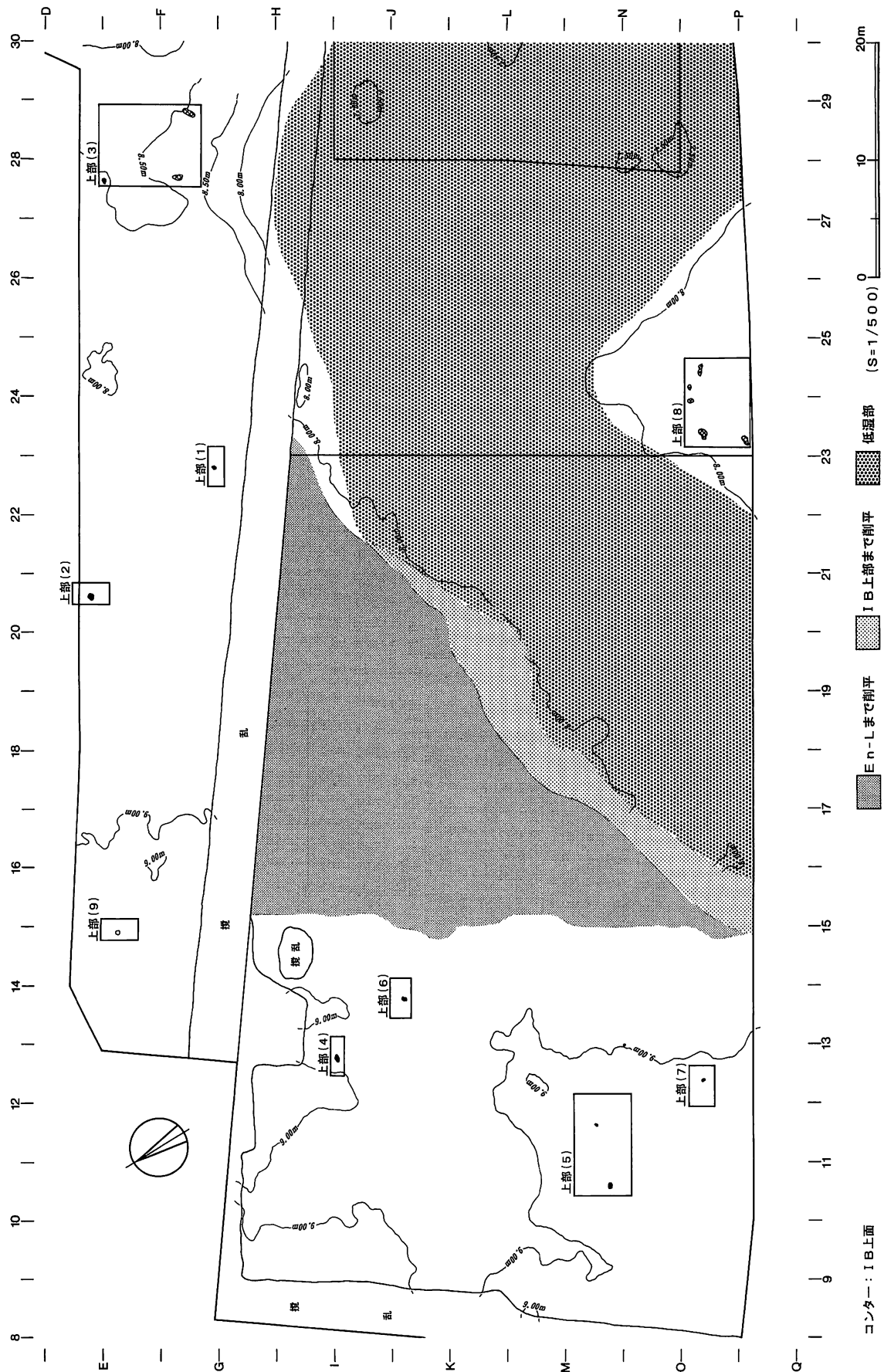
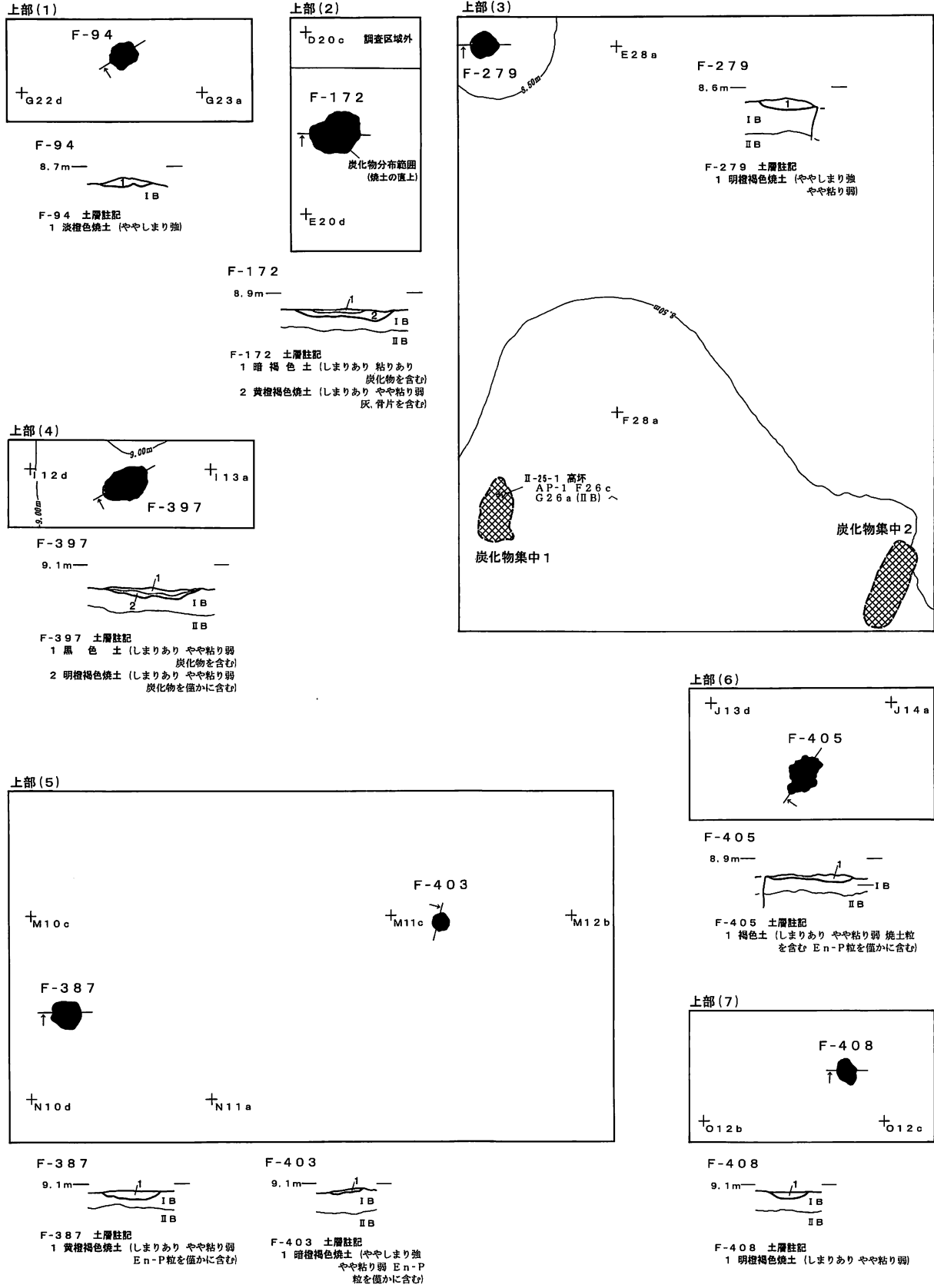


図 II - 23 I 黒層上部の焼土・炭化物集中・灰集中位置図

II 台地部 I 黒層の遺構とその遺物



平面図 (S=1/80)
断面図 (S=1/40)

図II-24 I 黒層上部の焼土・炭化物集中

6 炭化物集中

(1) I 黒層上面の炭化物集中 (図Ⅱ-20・22、表Ⅱ-23~26、図版Ⅱ-33)

調査区の北西部分(上面(7))にややまとまっている。いっぽう、北西部分の近くには集石21・22や柱穴列1・2、10~12がある。炭化物集中12は送り場2、F-407の近くにある。炭化物集中は同じ層準の焼土と分布は重複しない。時期は層準からアイヌ文化期に形成されたと考えられる。

(2) I 黒層上部の炭化物集中 (図Ⅱ-23~25、表Ⅱ-22~26、図版Ⅱ-33・34)

調査区の南東部(上部(3))、南分(上部(9))にまとまっている。焼土の分布とは重複しない。上部(3)の近くに土器集中1、集石8・16がある。上部(9)の近くにH-31がある。

炭化物集中1からはAP-1の封土と接合関係を持つⅦ群d類高坏(図Ⅱ25-1)が出土しており、同一層準の焼土が擦文文化期と推定されることから、I 黒層上部の炭化物集中も擦文文化期に形成されたと考えられる。

図Ⅱ25-1はⅦ群d類高坏の坏部、外面は横位綾杉沈線文と刺突文、内面はヨコミガキ。

フローテーションの結果、炭化物集中2・3・4・5・7から種子が出土し、炭化物集中2・3・4・5から堅果類が出土している。

7 灰集中4 (図Ⅱ-23・25、表Ⅱ-23~26)

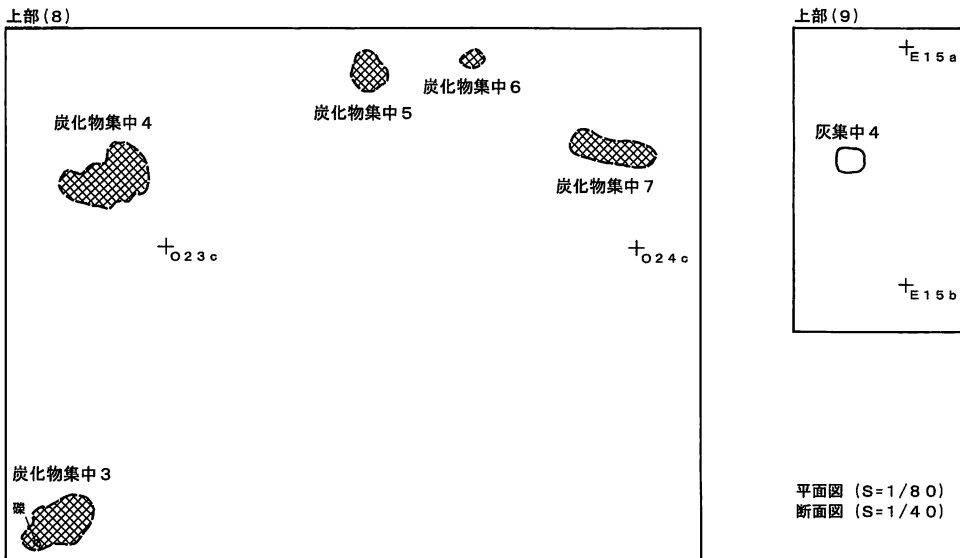
位置 E14d 規模 0.30×0.28m

調査 I 黒層調査中に検出した。

覆土 締まりのない単一の純灰層を形成していた。

遺物出土状況 フローテーションの結果、動植物遺存体は検出されなかった。

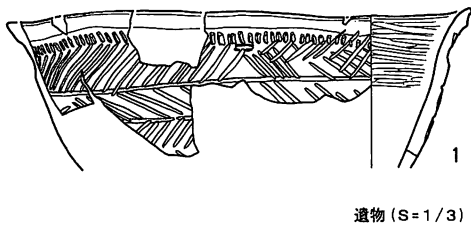
時期 遺構自体からは不明であり、付近に時期を示す遺構・遺物もない。I 黒層上部の遺構であることから擦文文化期の可能性がある。(鈴木)



表Ⅱ-22 炭化物集中の掲載土器観察表

Ⅱ-25-1

	口唇部	口縁部	体部	脚部以下	備考
外面			粘土紐巻上げ ヨコナデ	(欠失)	・外面10YR5/4 (にぶい黄褐色) ・内面10YR6/4 (にぶい黄褐色)
			横位綾杉 横位綾杉		
内面			粘土紐巻上げ ヨコナデ	(欠失)	・Ⅶ群d類 ・上半1/3残存
		ヨコミガキ	タテミガキ		



図Ⅱ-25 I 黒層上部の炭化物集中・灰集中とその遺物

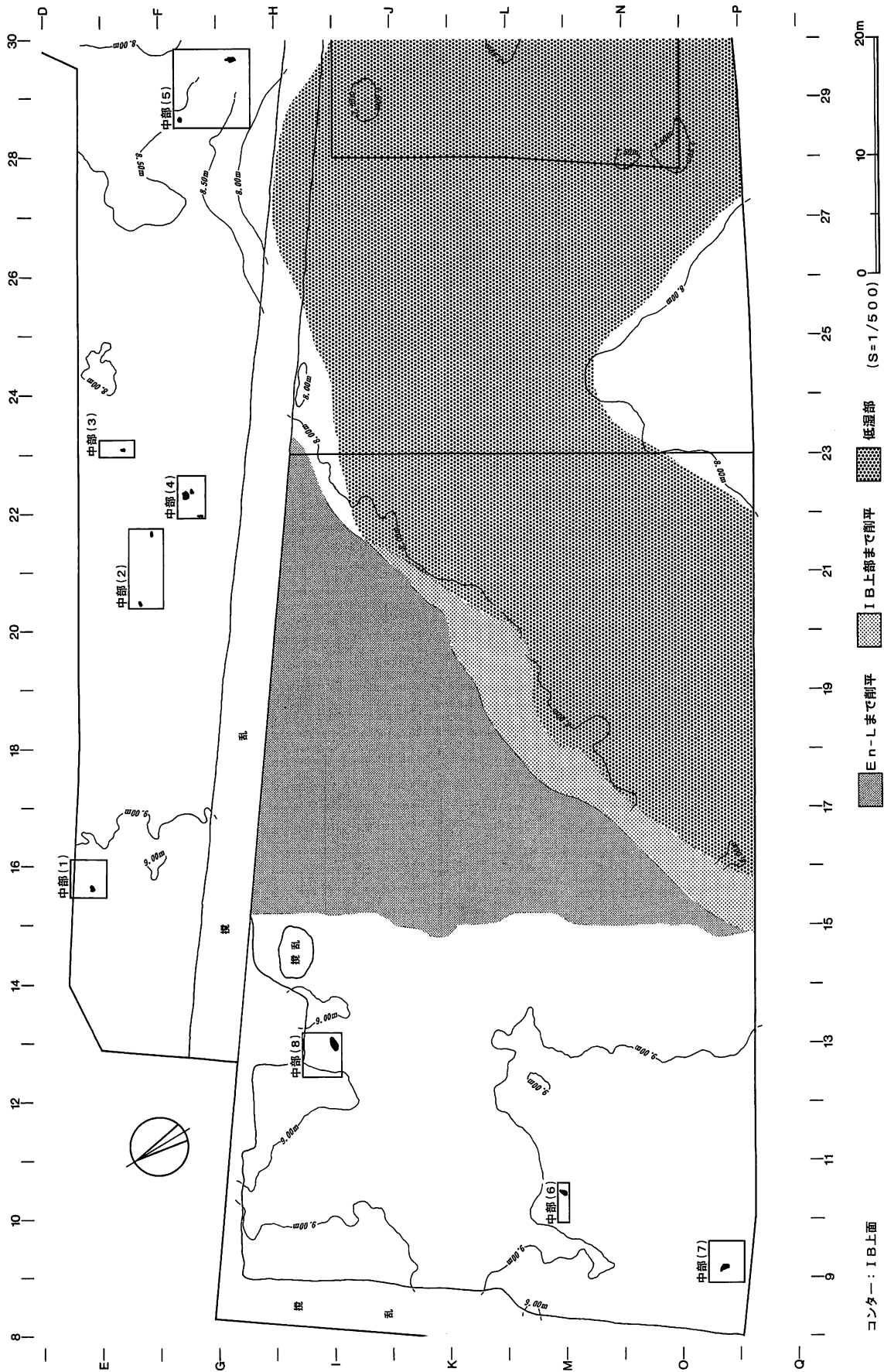
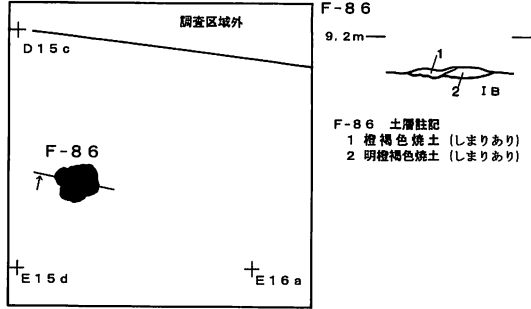
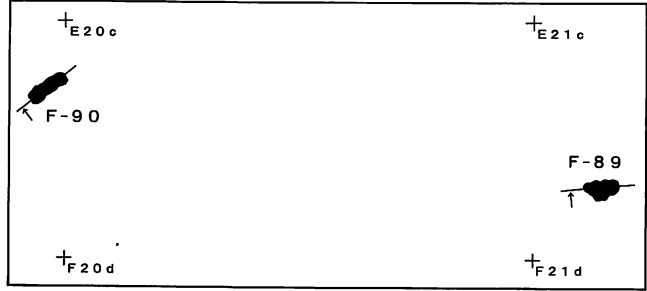


図 II - 26 I 黒層中部の焼土位置図

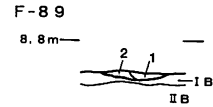
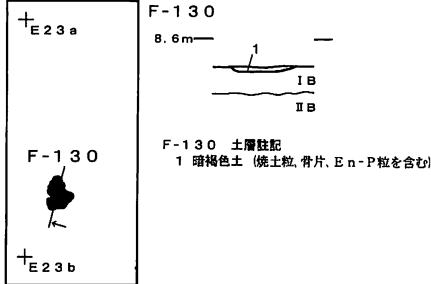
中部(1)



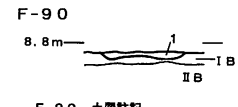
中部(2)



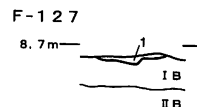
中部(3)



F-89 土層註記
1 橙褐色焼土 (ややしまり弱 やや粘り弱)
2 暗橙褐色焼土 (ややしまり弱 やや粘り弱)

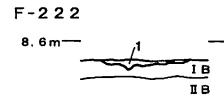
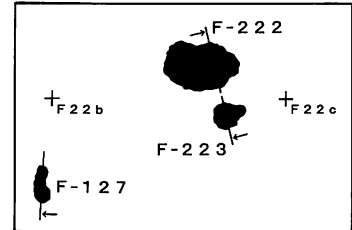


F-90 土層註記
1 淡橙色焼土 (ややしまり強
En-P粒を僅かに含む)

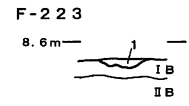


F-127 土層註記
1 明橙褐色焼土 (ややしまり弱
炭化物を多量に含む)

中部(4)

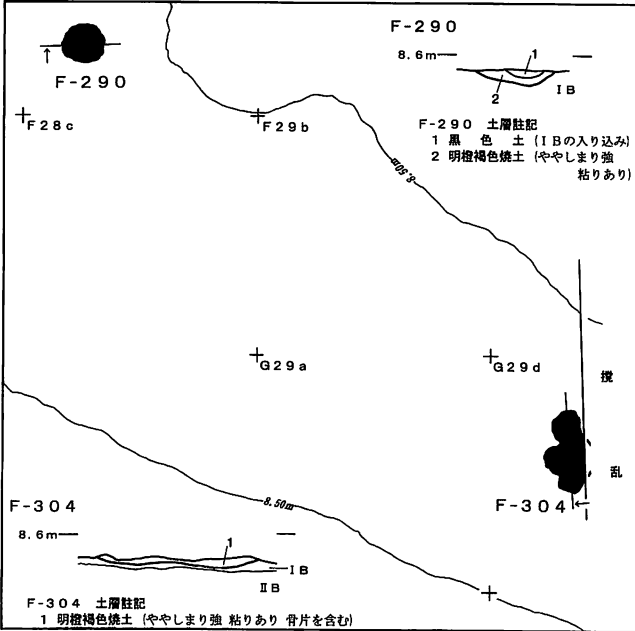


F-222 土層註記
1 にぶい黄橙色焼土 (ややしまり強
やや粘り弱)

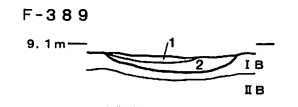
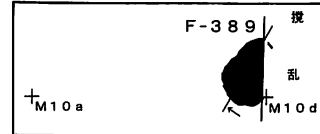


F-223 土層註記
1 にぶい黄橙色焼土 (ややしまり強
やや粘り弱)

中部(5)

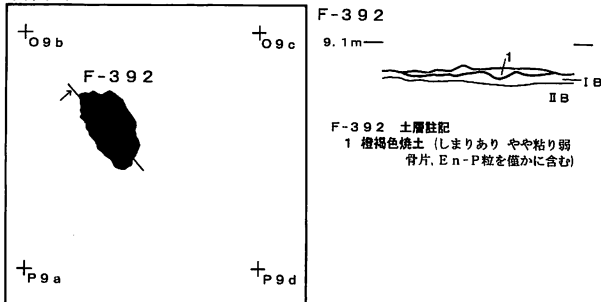


中部(6)

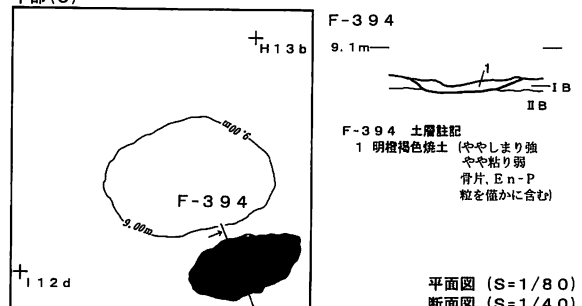


F-389 土層註記
1 黒色土 (IBの入り込み)
2 暗橙褐色焼土 (ややしまり弱 やや粘り弱)

中部(7)



中部(8)



平面図 (S=1/80)
断面図 (S=1/40)

図Ⅱ-27 I 黒層中部の焼土

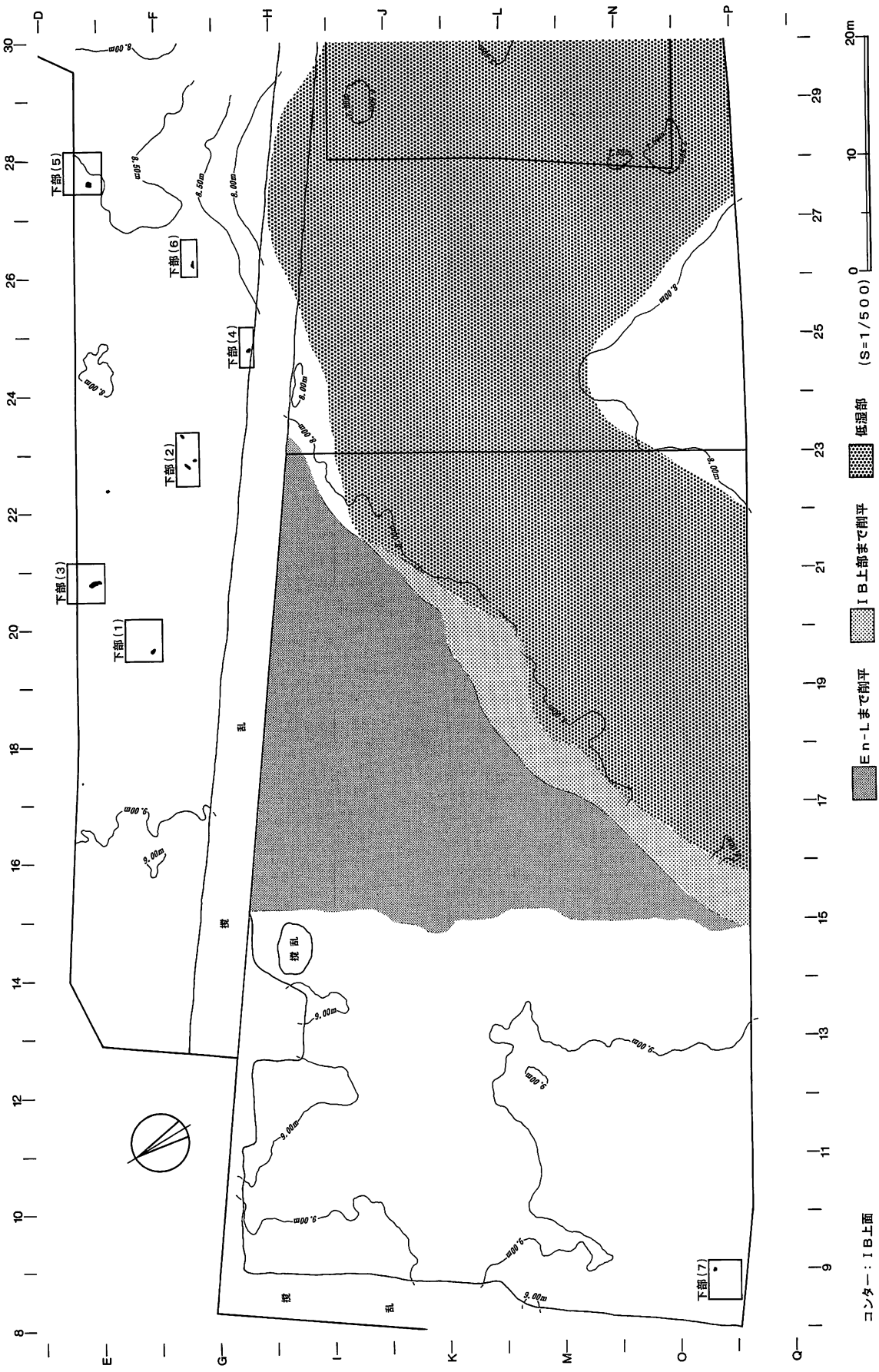
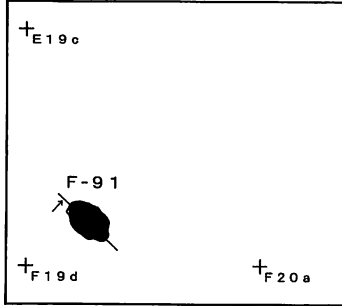


図 II - 28 I 黒層下部の焼土位置図

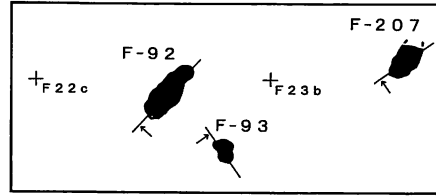
下部(1)



F-91
8.7m—
1
I B
I I B

F-91 土層註記
1 明橙褐色焼土 (しまりあり やや粘り弱)

下部(2)



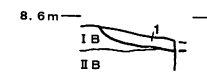
F-92
8.7m—
1
I B
I I B

F-92 土層註記
1 明橙褐色焼土 (しまりあり やや粘り弱)

F-93
8.7m—
1
I B
I I B

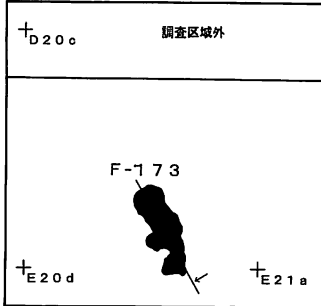
F-93 土層註記
1 明橙褐色焼土 (しまりあり やや粘り弱)

F-207



F-207 土層註記
1 明橙褐色焼土 (ややしまり強 E n-P粒を僅かに含む)

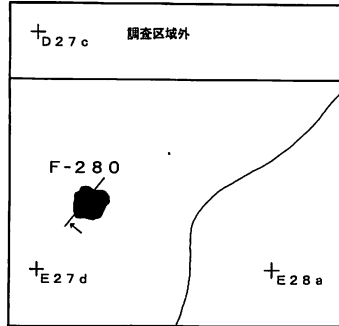
下部(3)



F-173
8.7m—
1
I B
I I B
漸移層

F-173 土層註記
1 暗橙褐色焼土 (しまりあり 粘りあり)

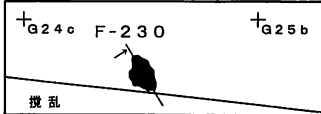
下部(5)



F-280
8.2m—
1
I B
I I B
漸移層

F-280 土層註記
1 橙褐色焼土 (しまりあり やや粘り弱)

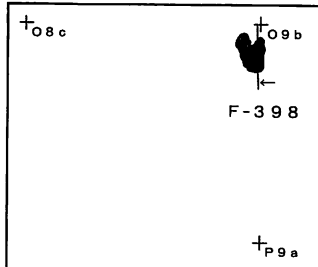
下部(4)



F-230
8.7m—
1
I B
I I B
漸移層

F-230 土層註記
1 明橙褐色焼土 (ややしまり弱 やや粘り弱)

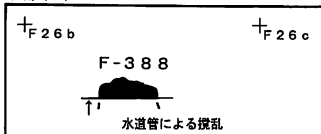
下部(7)



F-398
9.2m—
1
I B
I I B

F-398 土層註記
1 橙褐色焼土 (ややしまり弱 やや粘り弱)

下部(6)



F-388
8.5m—
1 2
3 4 5
I B
I I B
漸移層

F-388 土層註記
1 黒色土 (I Bの入り込み)
2 暗赤褐色焼土 (骨片を含む)
3 暗黄褐色焼土 (骨片を含む)
4 暗褐色焼土 (ややしまり弱, 骨片を含む)
5 暗灰黄褐色焼土 (骨片を含む)

平面図 (S=1/80)
断面図 (S=1/40)

図Ⅱ-29 I黒層下部の焼土

表 II-23 掲載焼土一覽

遺構名	発掘区	検出層位	長径×短径×厚さ (cm)	F-390	N10c	I B 上面	88.0 × 70.8 × 4.6
F-86	D15c	I B 中部	48.2 × 40.0 × 5.6	F-391	N10c	I B 上面	60.0 × 52.0 × 3.4
F-87	E19b	I B 上面	22.8 × 21.2 × 5.6	F-392	O9b	I B 中部	87.2 × 48.4 × 5.8
F-88	E19d	I B 上面	42.2 × 18.4 × 2.4	F-393	(M11a)	I B 上面	115.2 × 55.6 × 5.6
F-89	E21c	I B 中部	38.0 × 21.2 × 4.2	F-394	(H12c)	I B 中部	124.4 × 66.4 × 6.4
F-90	E20b	I B 中部	44.4 × 12.4 × 3.8	F-396	(G12b)	I B 上面	71.6 × 45.2 × 2.4
F-91	E19c	I B 下部	52.4 × 35.6 × 5.2	F-397	I12d	I B 上部	68.0 × 43.2 × 6.6
F-92	F22c	I B 下部	68.0 × 26.4 × 5.4	F-398	(O8c)	I B 下部	36.0 × 30.6 × 4.2
F-93	F22c	I B 下部	27.6 × 18.6 × 5.0	F-399	O8b	I B 上面	15.2 × 12.0 × 3.0
F-94	F22c	I B 上部	39.6 × 32.0 × 6.4	F-400	O8c	I B 上面	43.6 × (18.4) × 4.2
F-107	F17a	I B 上面	98.8 × 68.0 × 5.6	F-401	O8c	I B 上面	(16.4) × 22.0 × 1.8
F-108	F16a	I B 上面	122.4 × 84.8 × 10.0	F-402	(M11b)	I B 上面	83.2 × 49.6 × 5.6
F-109	F15d	I B 上面	111.6 × 84.0 × 8.2	F-403	(M11c)	I B 上部	26.4 × 23.2 × 2.0
F-119	F27a	I B 上面	34.0 × 32.8 × 7.4	F-404	(O11d)	I B 上面	23.6 × 20.0 × 2.2
F-127	F21c	I B 中部	38.0 × 16.4 × 4.2	F-405	J13d	I B 上部	59.6 × 45.2 × 5.2
F-130	F23a	I B 中部	35.2 × 27.6 × 2.8	F-406	L13a	I B 上面	79.6 × 39.6 × 5.8
F-159	E27b	I B 上面	(26.4) × 19.6 × 3.6	F-407	O13a	I B 上面	62.4 × 38.8 × 5.6
F-172	D20c	I B 上部	69.6 × 56.4 × 7.2	F-408	O12a	I B 上部	36.4 × 26.4 × 4.2
F-173	(D20c)	I B 下部	100.4 × 41.8 × 7.6	F-449	E23a	I B 上面	57.6 × 40.0 × 4.2
F-207	F23a	I B 下部	(37.2) × 24.4 × 6.4	炭化物集中1	F27d	I B 上部	88.0 × 44.4 × —
F-222	F22a	I B 中部	79.2 × 52.4 × 5.6	炭化物集中2	(F28c)	I B 上部	122.0 × 46.4 × —
F-223	F22b	I B 中部	35.2 × 24.4 × 5.0	炭化物集中3	P23a	I B 上部	82.4 × 52.0 × —
F-230	G24c	I B 下部	42.4 × 24.0 × 3.6	炭化物集中4	O23a	I B 上部	94.8 × 68.4 × —
F-279	(E27d)	I B 上部	39.2 × 36.8 × 7.8	炭化物集中5	O23d	I B 上部	42.8 × 40.0 × —
F-280	D27c	I B 下部	36.4 × 35.6 × 3.2	炭化物集中6	O24a	I B 上部	26.4 × 20.2 × —
F-290	F28d	I B 中部	46.0 × 40.8 × 8.0	炭化物集中7	(O24a)	I B 上部	93.6 × 26.6 × —
F-304	G29d	I B 中部	87.2 × (44.0) × 5.2	炭化物集中8	(I12d)	I B 上面	138.0 × 86.4 × —
F-384	O10b	I B 上面	(115.2) × 94.8 × 9.6	炭化物集中9	H12b	I B 上面	59.2 × 35.2 × —
F-385	O10a	I B 上面	23.6 × 20.4 × 2.6	炭化物集中10	I12a	I B 上面	142.8 × 99.6 × —
F-386	O10d	I B 上面	32.8 × 20.0 × 3.0	炭化物集中11	H13b	I B 上面	36.0 × 24.4 × —
F-387	M10c	I B 上部	40.8 × 36.4 × 6.0	炭化物集中12	(O14b)	I B 上面	126.4 × 98.8 × —
F-388	F26b	I B 下部	62.4 × (21.6) × 20.2	灰集中4	E14d	I B 上部	30.6 × 24.8 × —
F-389	(L10b)	I B 中部	69.2 × (44.8) × 8.0	※ 発掘区に () があるものは、代表グリッドを表す。			

表 II-24 焼土掲載土器一覽

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類
II-25-1	F27d	炭化物集中1	I B 上部	VII d 高坏
	F26c	AP-1	埋土3層	
	"	"	封土	
	F26c	包含層	不明	
	G26a	"	II B	

表 II-25 焼土掲載鉄製品一覽

図版番号	発掘区	遺構名	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
II-31	E19b	F-87	焼土内	針	(2.2)	0.15	0.15	(0.90)	図版のみ
II-31	O10b	F-384	焼土内	鉄製品片	—	—	—	(0.76)	"
II-32	N10c	F-390	焼土内	鍛造剥片?	—	—	—	(0.23)	" 分析依頼中

表 II-26 焼土等遺物集計表

	土 器				石 器 類				金 属				
	III	III b	IV a	VII	合 計	フリク	礫	礫片	合 計	針	鉄製品片	鍛造剥片?	合 計
F-87					0				0	1			1
F-119					0		2		2				0
F-173	1	2			3	1			1				0
F-230	1	3	3		7	1	1		2				0
F-384					0				0		1		1
F-390					0				0			1	1
F-396					0			2	2				0
F-402					0			1	1				0
F-403					0		1		1				0
炭化物集中1				3	3				0				0
炭化物集中2					0	1			1				0
炭化物集中3					0	1			1				0
合 計	2	5	3	3	13	4	4	3	11	1	1	1	3

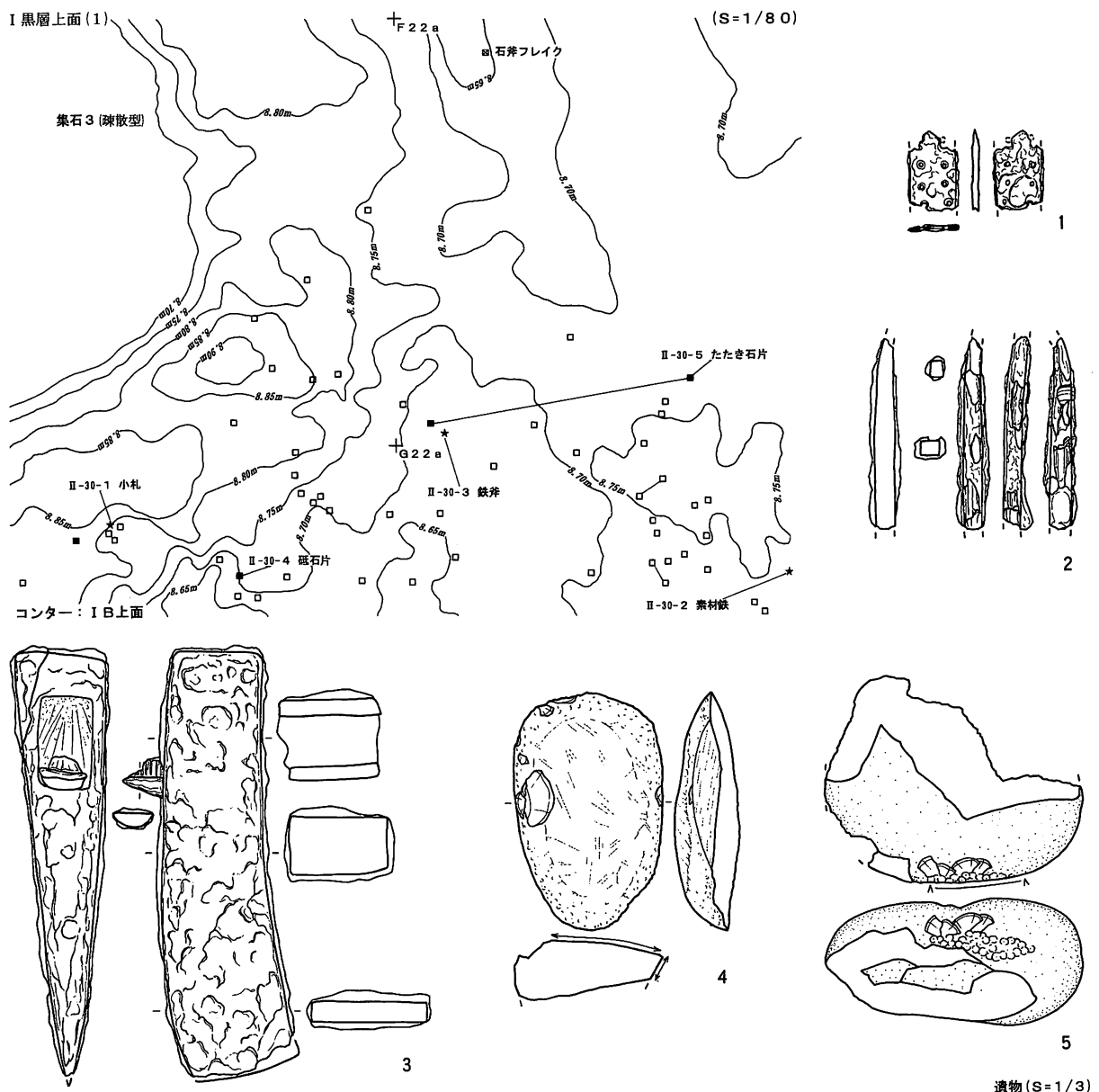
8 集石 (図Ⅱ-30~34、表Ⅱ-27~30、図版Ⅱ-37~42・45)

集石は分散のあり方から大きく2種類に分けられ、個数によって細分できる。第一に、礫と礫がくっつくように密集しているもの：密集型。第二に、礫と礫がやや離れて散っているもの：疎散型。そして、密集型には個数が10個未満の少数と10個以上の多数がある。構築層準ごとに説明してゆく。

(1) I 黒層上面の集石

集石4は少数密集型である。集石5、6、21、24、25は多数密集型である。集石3、7、22、23は疎散型である。上面の集石の時期は層準からアイヌ文化期と考えられる。

集石3からは金属製品が3点、石器2点出土している。図Ⅱ-30-1は小札。上下端を欠くが二列六孔確認できる。図Ⅱ-30-2は鉄素材。断面長方形で、細い方の端部は振り取りられたようにみえる。図Ⅱ-30-3は鉞形の鉄斧。上面観は長二等辺三角形、側面観は長方形で刃部に向かって彎曲する。柄孔は長方形で正面下辺に鉄楔と柄の木質が残存している。両側面に樋は見られない。図Ⅱ-30-4は凝灰岩の砥石片、垂角礫の2面を使用する。一面は礫面の凹凸が残っており使用頻度はすくない。図Ⅱ-30-5はよく固結している中粒砂・砂岩のたたき石片、偏平垂角礫の1側縁を使用し、一部に

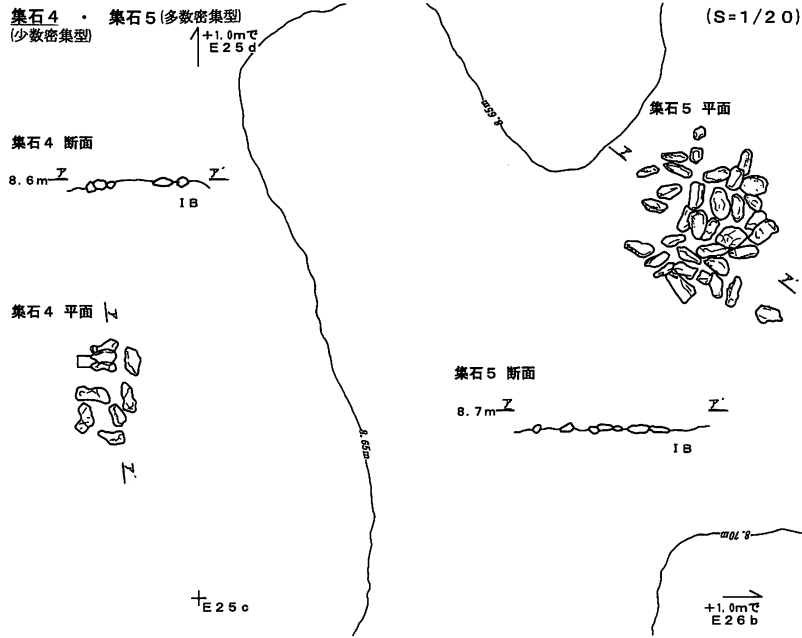


図Ⅱ-30 I 黒層上面の集石(1)・集石3の遺物

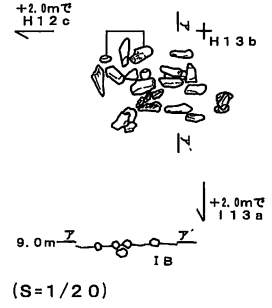
II 台地部 I 黒層の遺構とその遺物

I 黒層上面 (2)

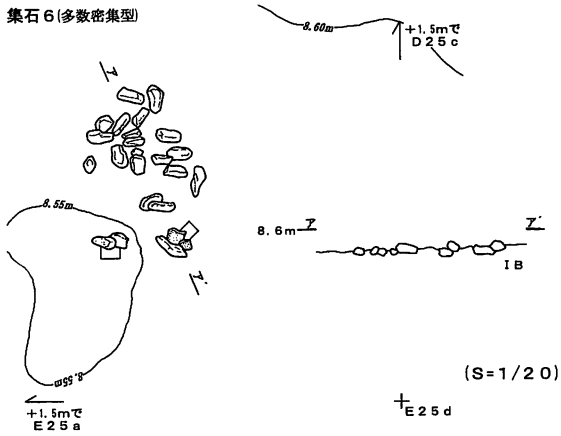
集石 4 (少数密集型) 集石 5 (多数密集型)



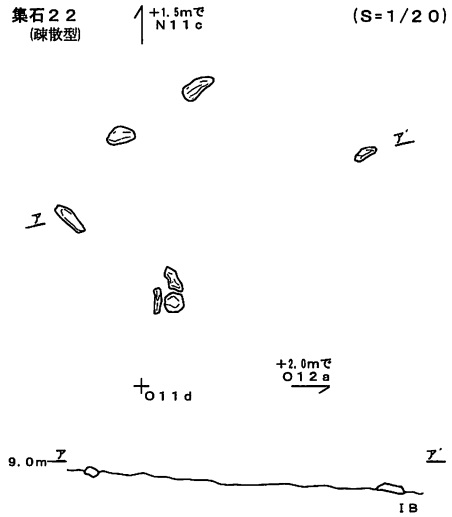
集石 21 (多数密集型)



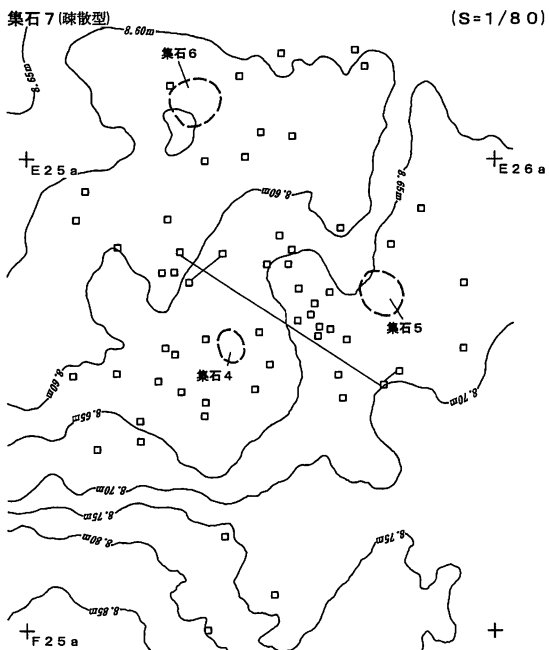
集石 6 (多数密集型)



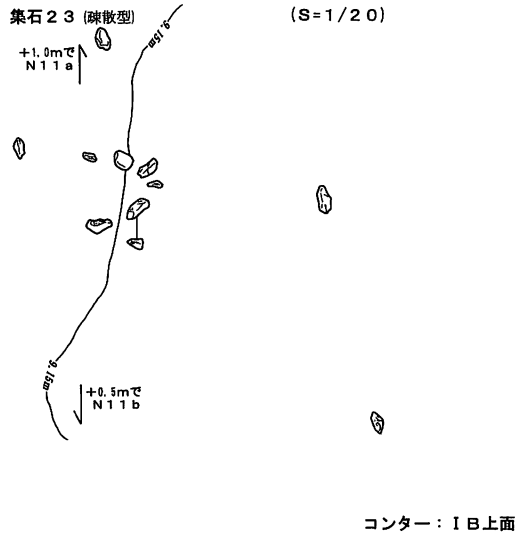
集石 22 (疎散型)



集石 7 (疎散型)



集石 23 (疎散型)



コンター: I B 上面

図 II-31 I 黒層上面の集石(2)

被熱痕がみられる。集石24からはU字鋏先（用途は鋏か鋤かは不明）が出土（図版II-41）している。錆化が著しく図化できなかつた。

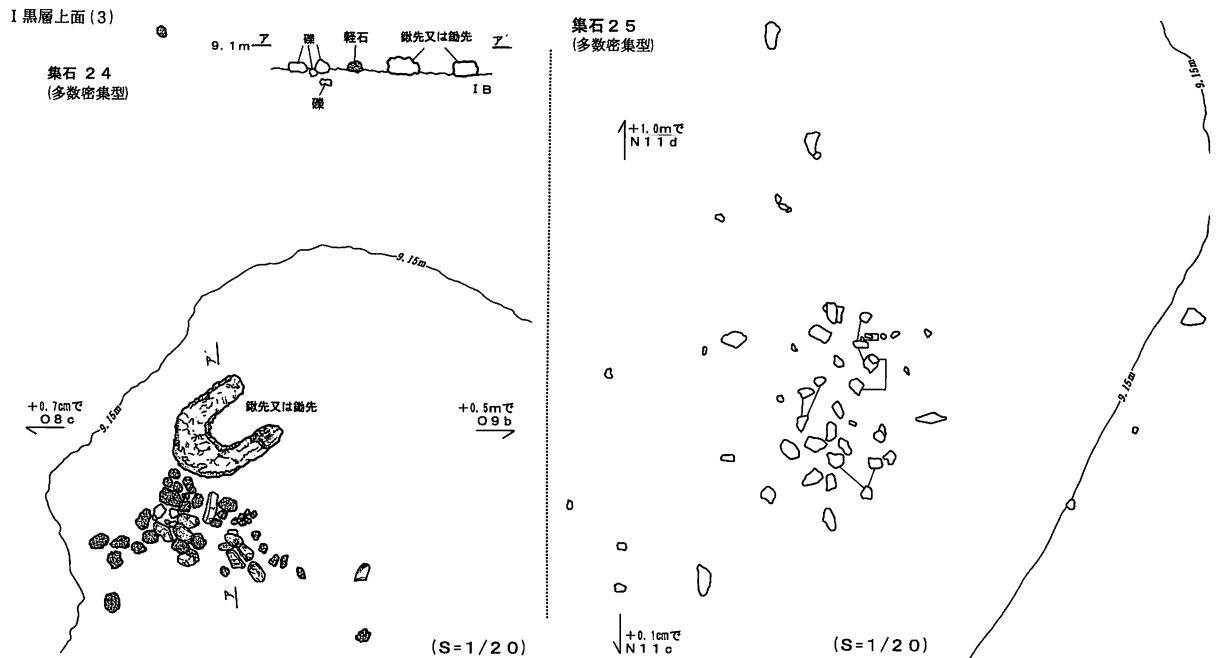
(2) I 黒層上部の集石

集石16、29は多数密集型である。集石8、26、34は疎散型である。I 黒層上部には少数密集型がない。上部の集石の時期は同一層準の焼土、炭化物集中が擦文文化期と推定されることから擦文文化期と考えられる。

(3) I 黒層下部の集石

集石19は少数密集型で、構成する石はすべて黒曜石の石器等であることから貯蔵を目的として集められていたと考えられる。集石33は疎散型である。I 黒層下部には多数密集型がない。形成された時期は層準から統縄文時代と考えられる。

図II-34-1は垂角礫の礫端片、背面の左側縁の一部、遠位端部左側に調整が施される。図II-34-2は垂角礫の礫端片で覆面の様子から両極打法で剥離されたと思われる。背面の遠位端部右側縁の一部、遠位端部に調整が施される。図II-34-3は棒状垂角礫の一端を使用する。図II-34-4は垂角礫の転石で爪形のクラックが顕著である。1~3に比べると転磨は著しくない。（三浦・鈴木）



図II-32 I 黒層上面の集石(3)

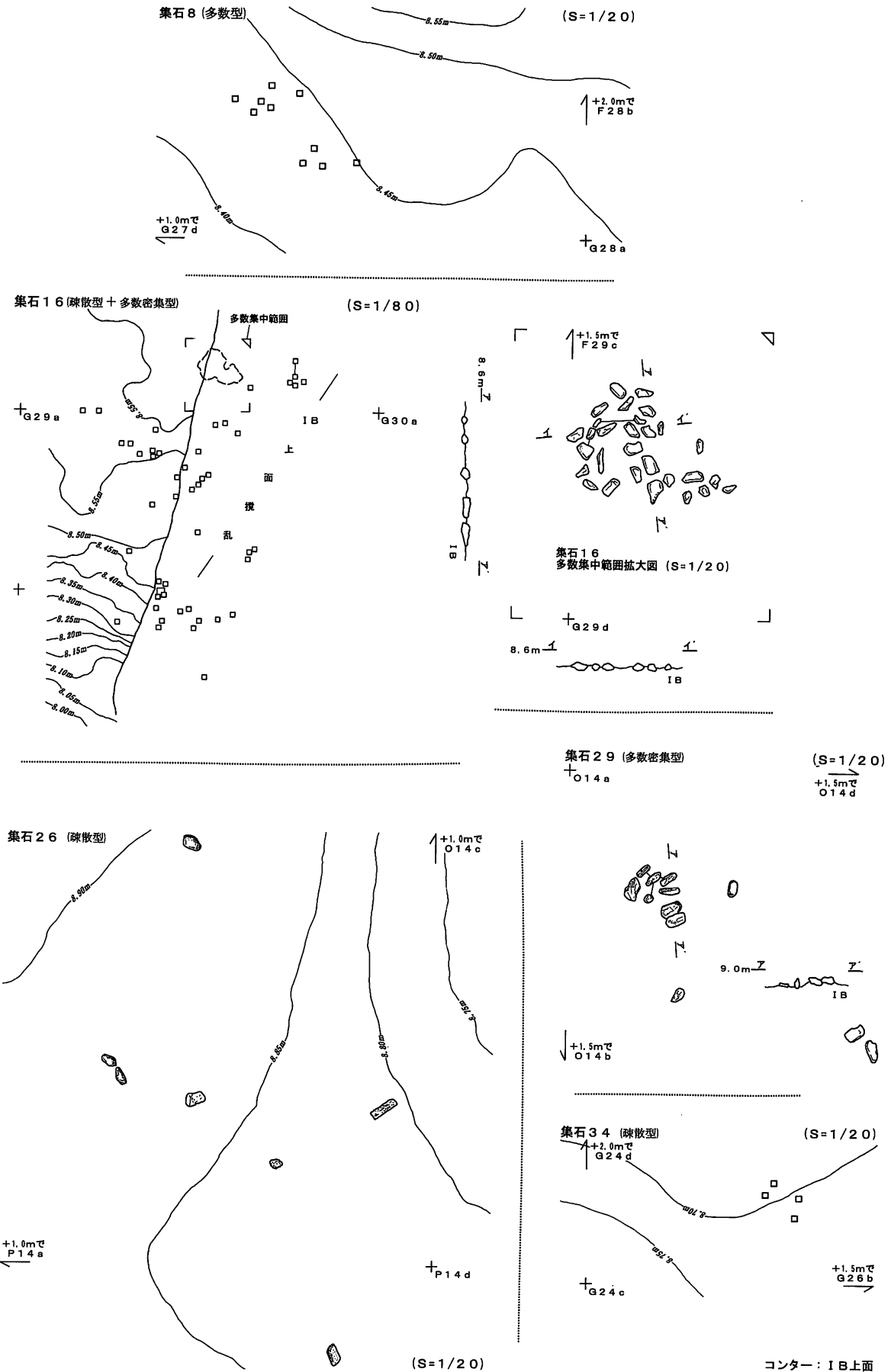
表II-27 集石掲載石器一覧

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
II-30-4	G21d	集石3	I B上面	砥石片	凝灰岩	10.4	6.5	2.6	177.4	中粒砂
II-30-5	F22c	"	"	たたき石片	砂岩	(8.6)	11.4	5.8	(477.7)	
II-34-1	I25b	集石19	I B5層	Rフレイク	黒曜石	6.5	7.3	1.8	96.5	
II-34-2	"	"	"	Rフレイク	黒曜石	7.1	6.3	2.8	124.4	
II-34-3	"	"	"	たたき石	黒曜石	10.3	5.4	4.0	281.7	
II-34-4	"	"	"	原石	黒曜石	5.9	4.7	3.1	94.8	

表II-28 集石掲載鉄製品一覧

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
II-30-1	G21d	集石3	I B上面	小札	(8.3)	0.9	0.6	(11.1)	
II-30-2	G22a	"	"	素材鉄	(21.3)	1.6	0.2	(29.9)	
II-30-3	F22a	"	"	鉄斧	18.7	4.3	4.0	1050.1	
図版番号	発掘区	遺構名	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
II-41	O8cd	集石24	I B上面	鋏先又は鋤先	約20.0	約17.0	—	—	U字、腐食著しい 図版のみ

I 黒層上部

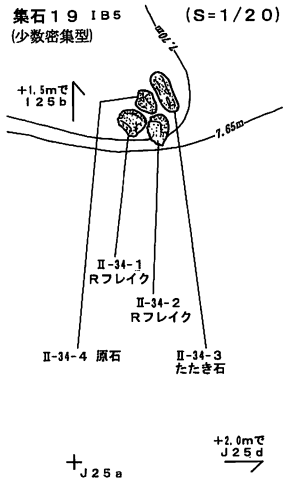


図II-33 I黒層上部の集石

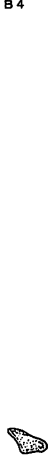
8 集石

I 黒層下部

集石 19 IB5
(少数密集型)



集石 33 (疎散型)
IB4



+1.0mで
K 20 b

I B上面
前平部分

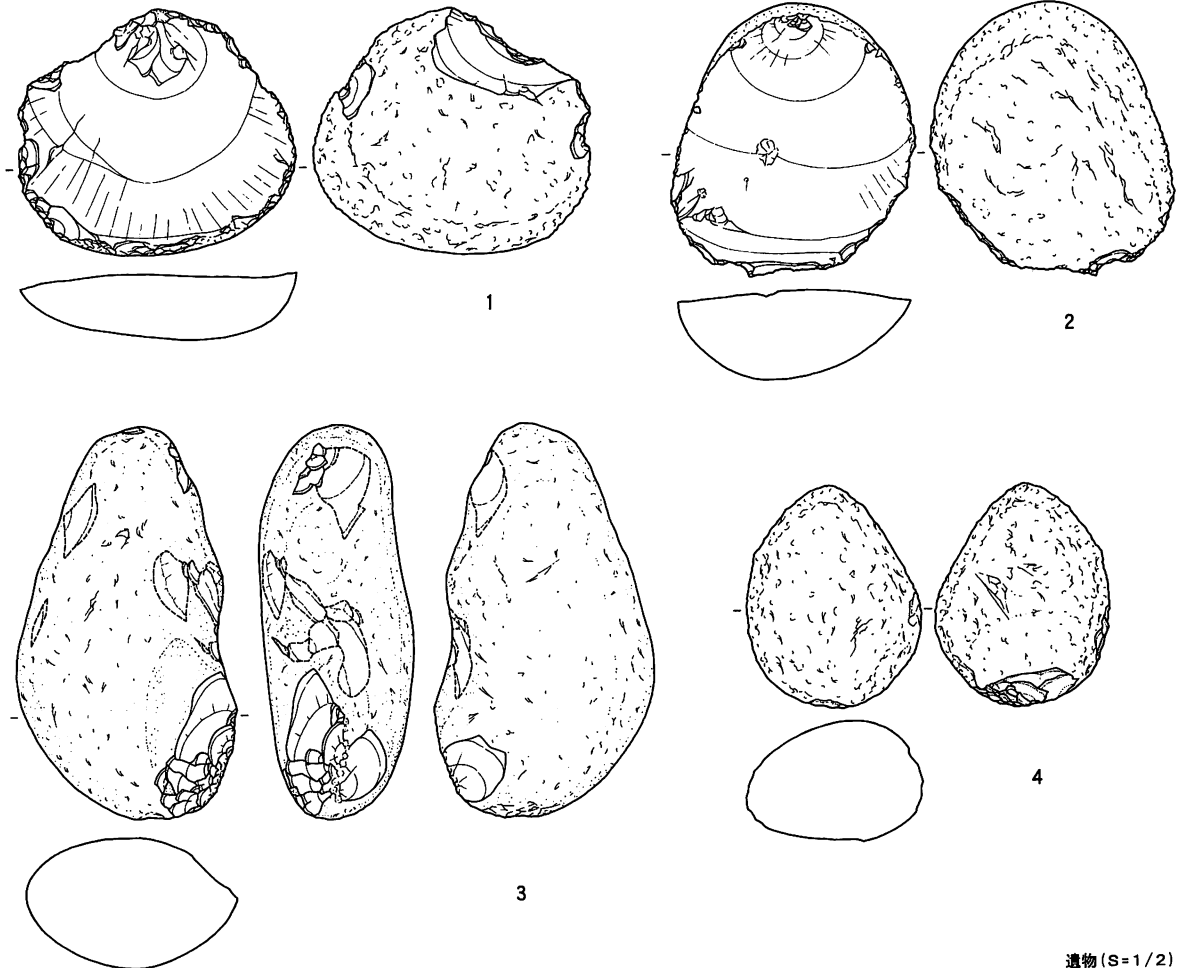
I B上面
削平部分

コンター: IB上面

(S=1/20)

+L 20 a

+1.0mで
L 20 d



遺物 (S=1/2)

図 II - 34 I 黒層下部の集石・集石19の遺物

表 II-29 集石遺物集計表

		集石3	集石19	集石30	合計			集石3	集石24	合計
石 器 類	Rフレイク		2		2	金 属	小 札	1		1
	石 斧	1			1		素材 鉄	1		1
	石斧フレイク	1			1		鉄 斧	1		1
	たたき石		1		1		鋏先 or 鋤先		1	1
	たたき石片	3			3		金 属 合 計	3	1	4
	砥石片	1			1					
	原 石		1		1					
フレイクチップ			1	1						
石器合計		6	4	1	11					

表 II-30 集石礫集計表

		安山岩	流紋岩	砂 岩	泥 岩	凝灰岩	チャート	片麻岩	礫岩	軽石	不明	合計
集石 3	礫片	7	4	10	4			2				27
集石 4	礫片	2	4	17	7	2						32
集石 5	礫片	1	2	3					1			7
集石 6	礫片	3										3
集石 7	礫片	2		21	2							25
集石 8	礫片	2		6	2	6						14
集石 9	礫片	8		5	2	1		1				17
集石 10	礫片	1	5	1								7
集石 11	礫片	14	4	9	5	2						34
集石 12	礫片	7	19	8	1							35
集石 13	礫片	4		1	2							7
集石 14	礫片	1	1	1	1							3
集石 15	礫片	17	8	13	4	1	3				1	47
集石 16	礫片	19	4	7	2				2			34
集石 17	礫片											0
集石 18	礫片											0
集石 19	礫片	5	1	4	2	3						15
集石 20	礫片	1	5	2	2							10
集石 21	礫片	4		1	2							7
集石 22	礫片	4	4		1							9
集石 23	礫片	4	2									6
集石 24	礫片	4	1		1	5			5	1		17
集石 25	礫片	4				10						10
集石 26	礫片	15	13									28
集石 27	礫片	6	23									29
集石 28	礫片	1										1
集石 29	礫片	2	4		2							8
集石 30	礫片		4									4
集石 31	礫片	5	1			2						8
集石 32	礫片	1			2							3
集石 33	礫片	2			1	1						4
集石 34	礫片											0
合計	礫片	89	42	67	28	15	3	3	1	51	1	300
	礫片	53	67	41	15	18	0	0	2	0	0	196

図 II-31 土器集中1 掲載石器一覧

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
II-35-1	F26c	土器集中1	IB上部	たたき石	安山岩	19.4	7.9	4.3	954.0	

図 II-32 送り場2 掲載鉄製品一覧

図番号	発掘区	遺構名	層位	分類	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
II-36-1	N14a	送り場2	IB上面	刀子	(20.1)	2.0	0.3	(54.7)	
II-36-2	N13c	"	"	鉄 鍋	—	—	0.6	—	内耳か 厚さ:口唇部

図 II-33 土器集中1・送り場2 遺物集計表

		土器集中1 (IB上部)			土器集中1 (IB上部)			送り場2 (IB上面)
土 器 類	IV	1	石 器 類	たたき石	1	金 属	刀 子	1
	VII b	37		フレイクチップ	2		鉄 鍋	1
	土器合計	38		礫 片	20		金 属 合 計	2
				礫 片	3			
			石器合計	26				

9 土器集中1 (図Ⅱ-35、表Ⅱ-31・33、図版Ⅱ-45)

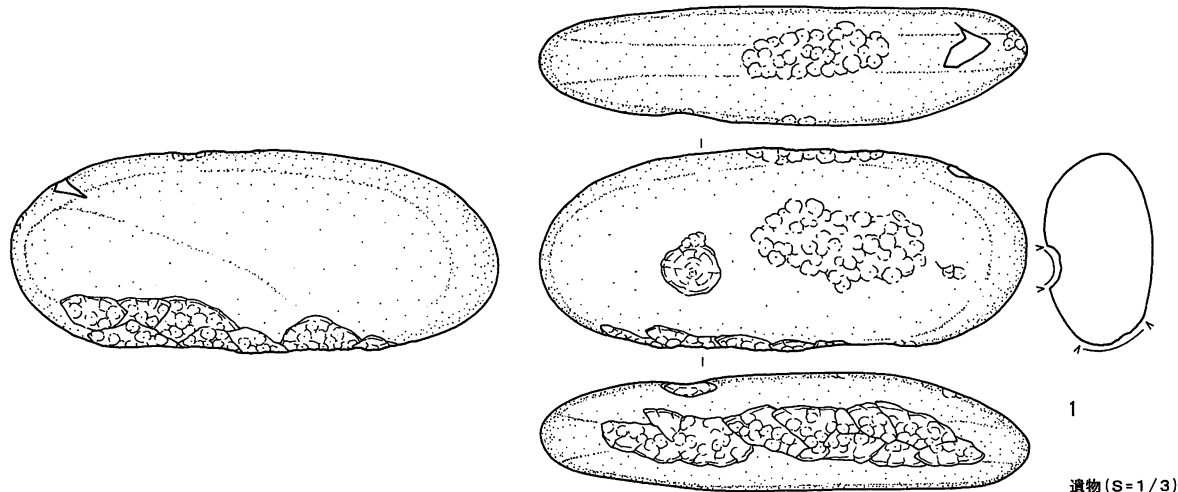
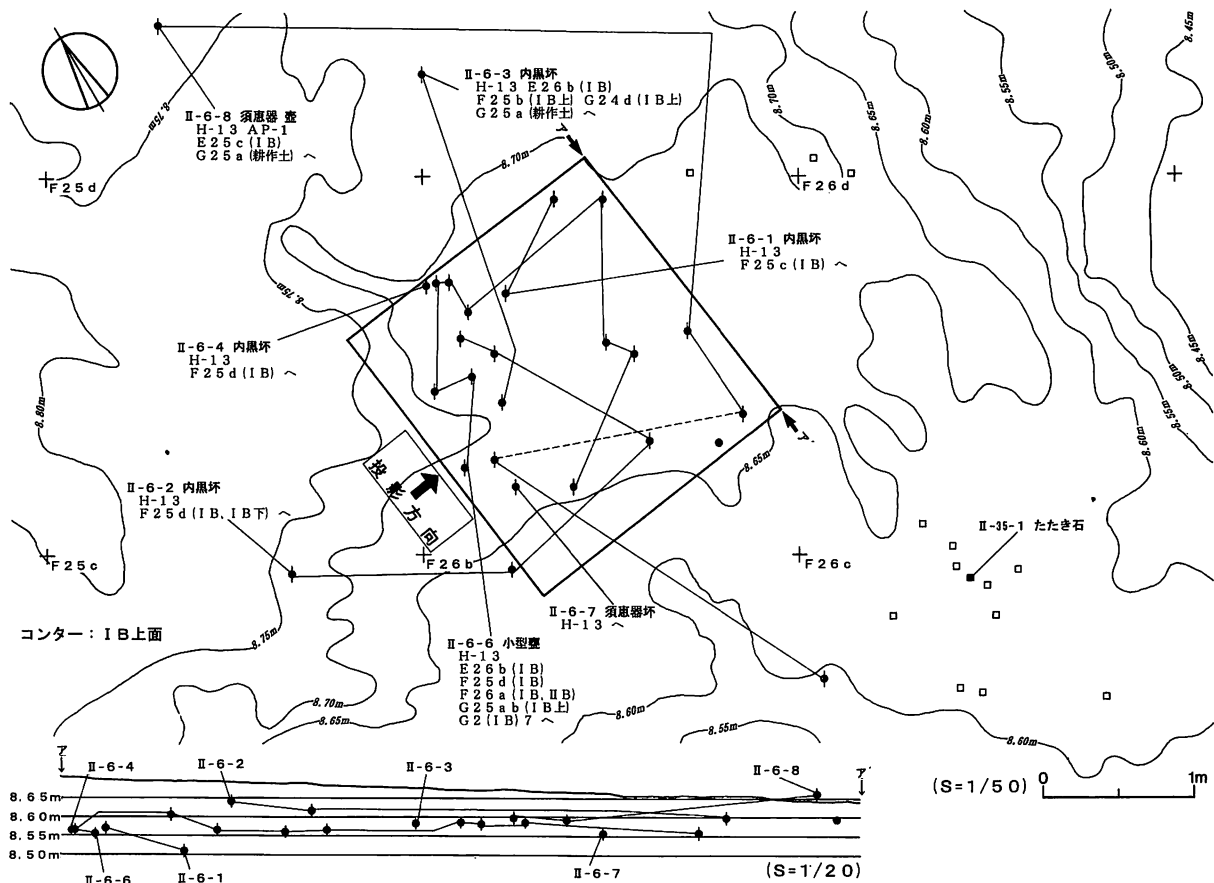
調査 調査区F26のI黒層上部で検出した。接合関係より、土器集中1はH-13の廃用にかかわる祭祀行為の一部を構成すると考えられる。

遺物出土状況 ロクロ回転成形の内黒坏、非ロクロ内黒坏、擦文土器小型甕、須恵器坏、線刻のある須恵器壺、たたき石、礫などが出土している。土器の中にはH-13の床面、竈袖、粘土集積、竪穴外入り口付近やAP-1覆土出土の破片と接合関係を持つものがある。

遺物 1は偏平垂円礫の両側縁を使用する。片主面の一部に被熱痕がみられる。土器の詳細についてはH-13の項(図Ⅱ-6)を参照。

時期 出土遺物接合関係からH-13の廃用と同じ頃と考えられる。

(鈴木)



図Ⅱ-35 土器集中1とその遺物

10 送り場 2 (図 II-36、表 II-32・33、図版 II-43・44)

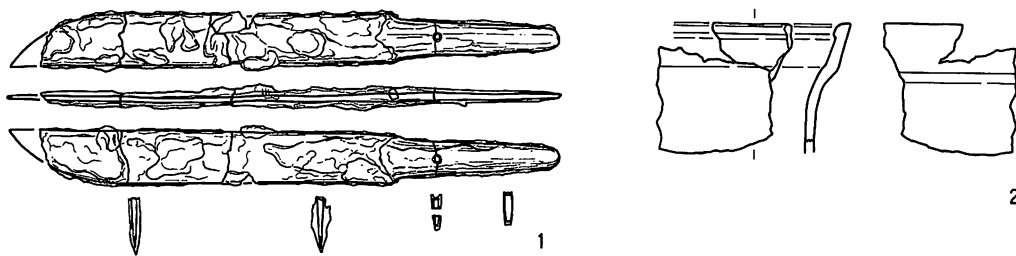
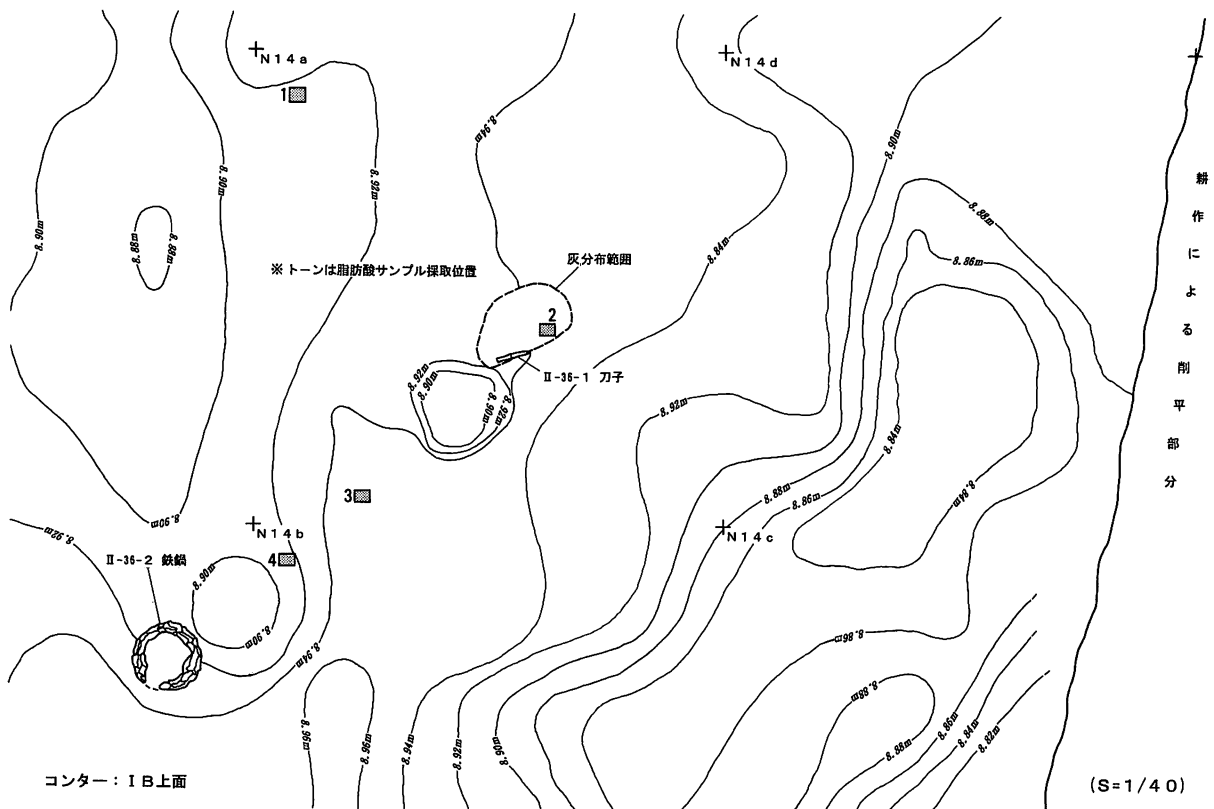
位置 N14

調査 Ta-a層除去後、I 黒層の上面で鉄鍋、やや下げて灰集中と刀子を検出した。鉄鍋、マキリ、灰集中が軸線を形成するように並んでいたため土坑墓・送り場を想定した。付近に墓らしい凹みや掘り揚げ土がないので送り場と結論した。しかし土坑のない墓の可能性もあるので、墓小屋が建つかどうか付近の柱穴の配置で検討したが可能性が極めて低いと考えられた。念のため脂肪酸分析のために土壌を採取した(第V章2節参照)。

遺物 1は平棟平造りの刀子。棟側・刃側の両区がある。茎には目釘孔が一つあり柄の木質も薄く残存している。切先が欠失し、元寄りに浅く使い減りがみられる。2は鉄鍋口縁部片。口縁部には緩い段があり、口唇は内側に丸みを帯びて肥厚する。AP-2の内耳鉄鍋よりは段が明瞭ではなく口唇も丸い。

灰集中をフローテーションした結果、植物遺存体が少量検出された。

時期 I 黒層上面の遺構であること、鉄鍋の形態から近世アイヌ文化期である。(鈴木)



遺物 (S=1/3)

図 II-36 送り場 2 とその遺物

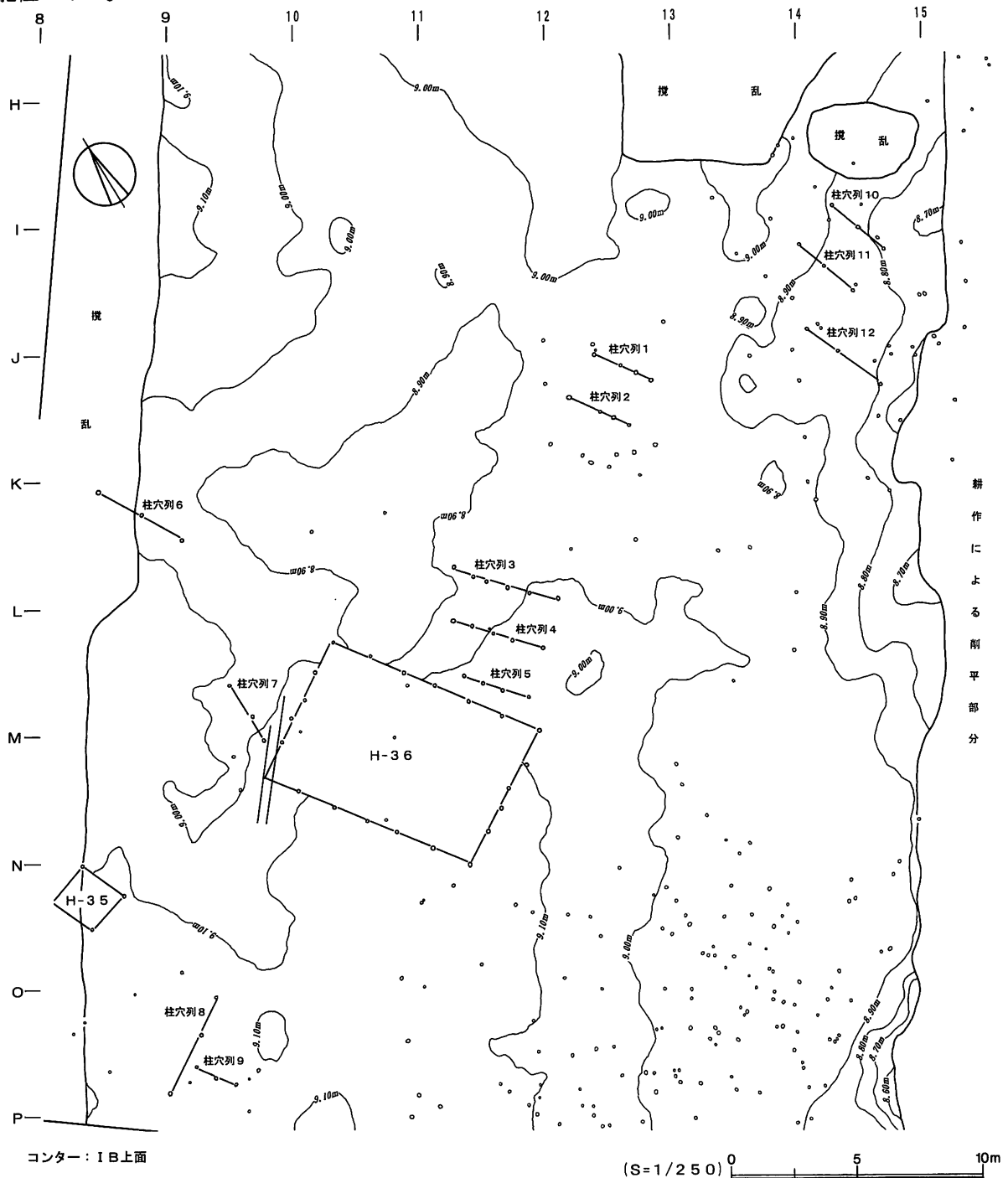
11 柱穴・柱穴列

11 柱穴・柱穴列 (図Ⅱ-37~39、図版Ⅱ-46~49)

柱穴は調査区西側に多く検出された。なかでもH-36の南西側に集中しており、ここには送り場2がある。柱穴の平面形はほとんどが円形で楕円形で、直径は4~8cm、縦断面形は先端を尖がらせたものが大半である。検出面以下における覆土は締まりのない黒色土である。

柱穴列は揃った間隔の直線的配列で、先端の標高が同じであるという条件を持った柱穴群のことである。柱穴個々の形態は上述した柱穴のものと同じである。

柱穴列3~5はH-36の東隣にあることから、この住居に付随した施設の可能性がある。柱穴列1・2、10~12は集石21・22、炭化物集中8~11の近くにあることから、これらの遺構と関連している可能性がある。(鈴木)



図Ⅱ-37 柱穴・柱穴列位置図

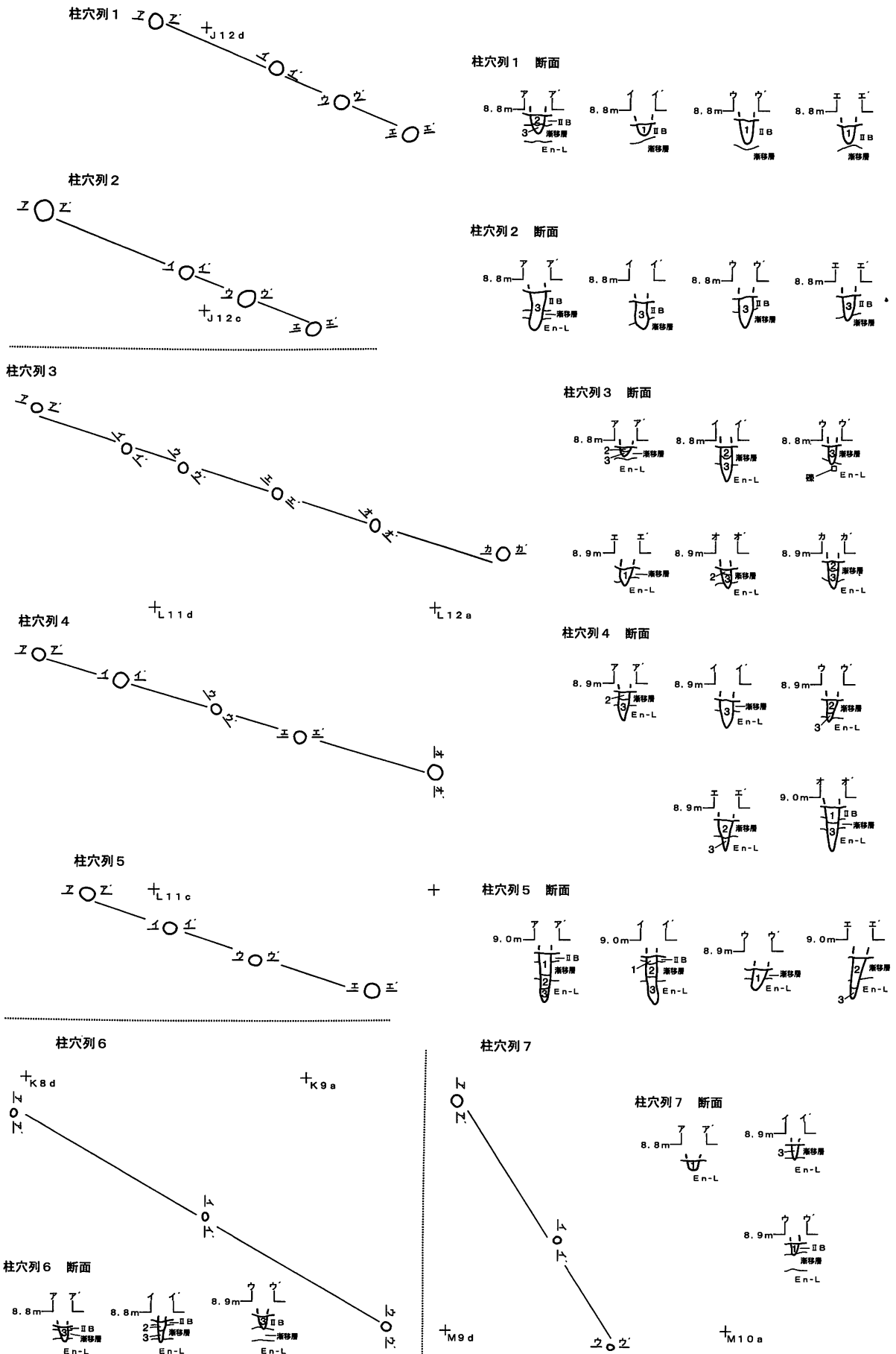


図 II-38 柱穴列(1)

(S=1/50)

11 柱穴・柱穴列

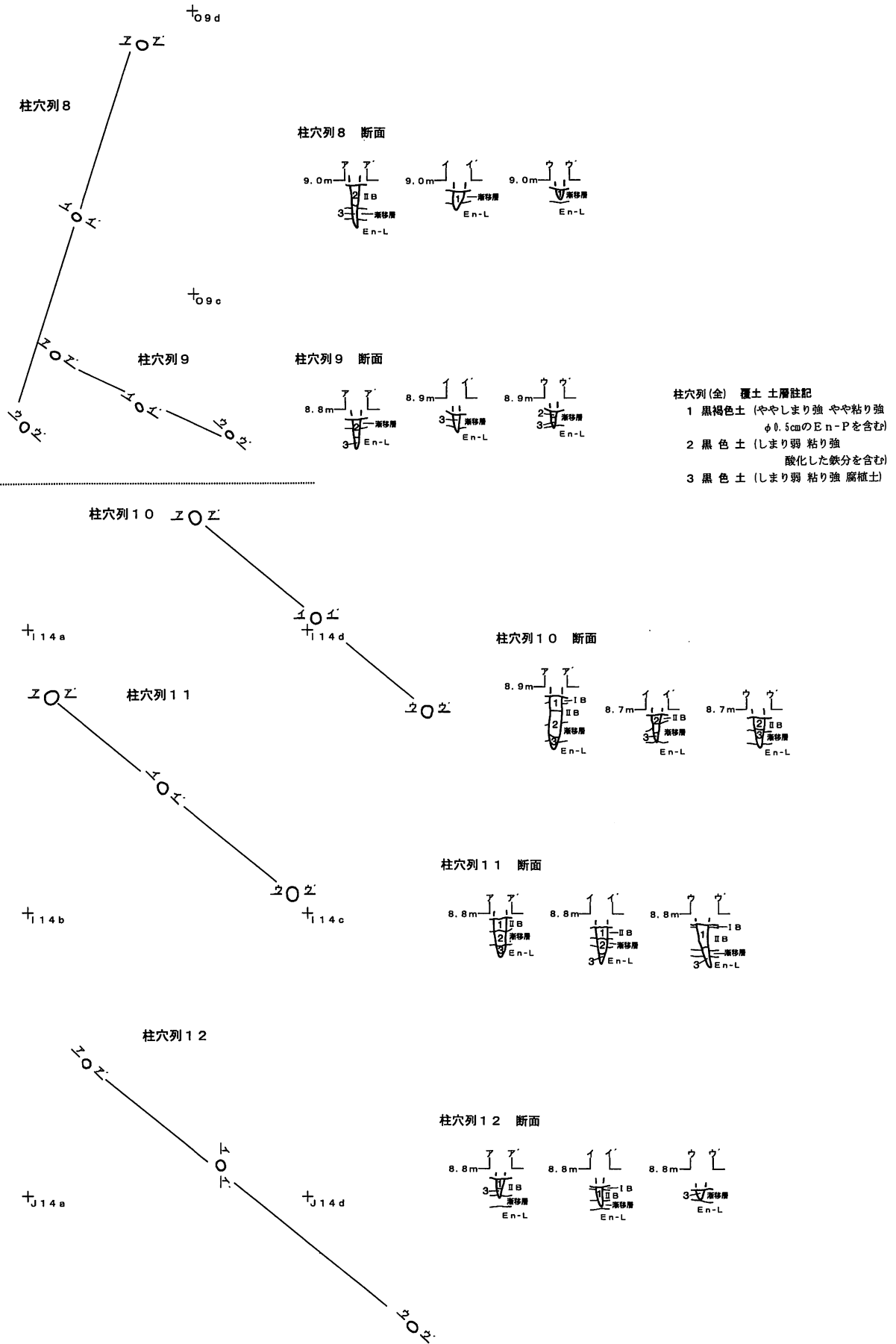


図 II - 39 柱穴列(2)

(S=1/50)

12 馬蹄跡 (図 II-40、図版 II-50)

調査と類例

D~G・25~26における I 黒層上面で Ta-a が詰まった弧形・楕円形・半円形の浅い馬蹄が多数かつ方向性がない状況で検出された。馬蹄跡の最大幅は残りのよいもので 9 cm 前後である。1994年に千歳市教育委員会によって調査されたユカンボシ C 2 遺跡においても Ta-a 層直下から馬蹄跡が検出されている (豊田宏良「ユカンボシ C 2 遺跡」『1994年度遺跡調査報告会』北海道考古学会1994年)。

豊田氏のご教示によるとユカンボシ C 2 遺跡の馬蹄の大きさには大小があり、最大幅は 11 cm 前後のものが多いようである。千歳市教委がその値・状況を宮崎重雄氏に確認したところによると、木曾馬などの日本産中型馬の範疇にあたり馬蹄の大小は年齢差であるとの助言をうけている。(宮崎重雄「馬蹄跡」『白井大宮遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993年、井上昌美「姿なき白井馬を追う」『遺跡に学ぶ 3』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1994年、宮崎重雄「白井北中道 II 遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡の馬蹄跡」『白井北中道 II 遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団1996年、宮崎重雄・井上昌美「ウマの蹄跡の認定について」『白井遺跡群』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997年)

木曾馬などの馬蹄幅から復元される体高は 130 cm 前後であり北海道和種馬 (俗称は土産馬、ドサンコ) の体高 (松本久喜「北海道和種馬 (土産馬) に就て」『札幌農林學會報128號』1936年、松本久喜「北海道在來馬について」『日本在來馬に関する研究』1953年) と同じくらいである。

また、松本久喜 (1936年・1953年) や八戸芳夫 (「北海道和種馬編」『日本在來馬の保存活用に関する調査成績』日本馬事協会 1973年) によれば南部馬の体高は北海道和種馬よりも高い。享保 2 (1717) 年『松前蝦夷記 一、馬』「(前略) 大形乗馬は仙臺南部より調申候よし」とあるので江戸時代においても同様であった。従って、ユカンボシ C 2 遺跡例は北海道和種馬の馬蹄跡である可能性が非常に高い。

検討

本遺跡の馬蹄跡の大きさにもばらつきがある。最大幅の平均は 9 cm 前後であり、ユカンボシ C 2 遺跡例よりは小さい値である。この値はトカラ馬などの日本産小型馬の範疇にあてはまる。

しかし、馬蹄跡の大きさは同一種においても性差・年齢・馬蹄跡の遺存状態の違いによる可能性がある。西中川 駿氏らの研究 (『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の起源、系統に関する研究』昭和63年度文部省科学研究費補助金研究成果報告 1989年) では末節骨最大長等の計測値に雌雄差は見られないというので、馬蹄跡の大小が性差である可能性は低いであろう。

本遺跡とユカンボシ C 2 遺跡との距離は約 500 m と極めて近いこと、同じ土質 (I 黒層上面) に遺存していたこと、馬蹄跡の時期 (Ta-a 層降下直前) がほぼ同じであること、現在の日本産小型馬の分布は愛媛県野間馬が東限であることより、最大幅の平均がユカンボシ C 2 遺跡例に比べて小さいことは同一種 (北海道和種馬) における年齢構成の違いの可能性が高い。しかし、過去により小さい馬が存在していた可能性もある。

北海道における馬の遺存体例は縄文時代と云われている 3 例を除くと、上之国町勝山館跡 (上ノ国町教育委員会『上之国勝山館 IV』1983年、『上之国勝山館 VII』1992年) と寿都町津軽陣屋跡 (寿都町教育委員会『寿都町文化財調査報告書 II』1983年) の 2 箇所である。

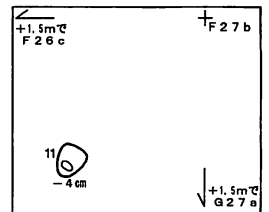
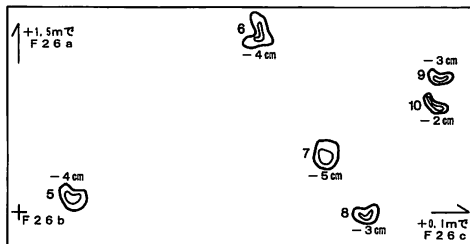
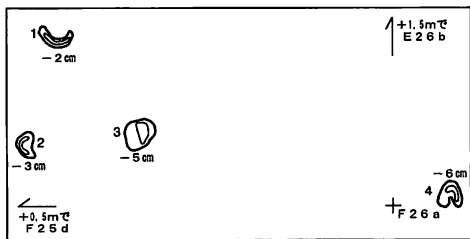
勝山館跡 1983 年例では幼獣と老獣に近い成獣が出土しており、成獣例は上臼歯列長・中足骨長より北海道和種馬などの日本産中型馬の範疇に入る。時期は 15 世紀後半~16 世紀末である。津軽陣屋跡例も成獣で橈骨長・脛骨長より北海道和種馬などの日本産中型馬の範疇に入る。時期は安政 2 (1856) 年~慶應 4 (1868) 年である。出土例は極めて少ないが、道南地方の 15 世紀後半~16 世紀末には北海道和種馬が存在していたことがうかがえる。



コンター：I B上面

● は、馬蹄跡の位置を示し、矢印の方向は蹄の前方を表す。

(S=1/80) 0 2m



(S=1/40)

図 II - 40 馬蹄跡

松前家・藩領内における馬産文献史料の検討

松前家の馬産記録の初出は『新羅之記録 下巻』「天正十一（前略）是偏慶廣朝臣以討留浅利左衛門尉義正此時愛季朝臣賜河北郡内田子村於馬飼所。」「是偏に慶廣朝臣浅利左衛門尉義正を討留めしを以てなり。此時、愛季朝臣、河北郡内田子村を馬飼所に賜ふなり。」とある。天正11（1583）年に河北郡（現在の秋田県山本郡にほぼ該当）内の田子村に馬飼所を持ったことがわかる。

また、『福山秘府年歴部 卷之六』「四己亥（前略）春三月、呈上國産馬^{三四}。是有台命也。」「春3月 國産馬を呈上する^{三四}。 是台命有るなり。」の記載があり、享保4（1719）年に將軍に呈上した馬2頭とは、國に産する馬と明記されていることから松前産と解釈できる。これは文献史料における北海道和種馬に関する最古例となる。

松前家と他家における贈答品の中にも馬の記述がある。『松前年捷徑』「元和乙卯（前略）是月於津軽越中守信牧送短刀駿馬干慶廣（中略）義宣大蘆毛馬送干慶廣。」「是月於津軽越中守信牧短刀駿馬を慶廣に送る。（中略）義宣大蘆毛馬を慶廣に送る。」の記載があり、元和元（1615）年に慶廣が津軽信牧から駿馬を、佐竹義宣から大蘆毛馬を送られている。『松前年捷徑』「壬午十二（前略）同月賜南部産栗毛馬干松前廣長。」「同月南部産栗毛馬を松前廣長に賜はる。」の記載があり、宝暦12（1762）年に松前廣長が南部産栗毛馬を送られている。

武家の乗用としての飼育は中世後葉に始まり、近世前半には北海道和種馬が成立している。また、他家との贈答は津軽・出羽・南部産馬との交配の可能性をうかがわせる。

藩領内における一般の馬運やそれに関する飼育はどうだったのであろうか。「西在」については津軽藩士則田安右衛門の報告『寛文拾年狄蜂起集書』（1670年）「一、上國より馬足立申所は熊石迄、（後略）」とあり、「東在」については天和元（1681）年頃成立『松前國蝦夷図』の記載に「しおくびのさき 是より東はま通馬足相叶不申候（後略）」とある。日本海側は「熊石」（現在の熊石町）、津軽海峡側は「しおくびのさき」（現在の戸井町汐首岬）までは馬による運送が成立していた。

元和4（1618）年に松前で布教したアンジェリスの報告書（児玉作左衛門ほか後掲1954年）によると「（前略）蝦夷には馬が多数居り、（後略）」とあり蝦夷とは松前のことを指す。また『逢坂氏日記』「亀田郷中、馬・船・網改覚」（函館市史 史料編1）に、寛延3（1750）年亀田郷（現在の函館市）中に馬893頭がいたことが記されている。すでに北海道和種馬の飼育が本格化していたことがわかる。

東西蝦夷地における馬に係わる文献史料の検討

蝦夷地においての馬に関する初出は、寛文9（1669）年シャクシャインの蜂起に関する3つの報告中にあり、内容はその性格から主に馬の交通が可能かどうかについての記載に絞られている。

津軽藩士則田安右衛門の報告『寛文拾年狄蜂起集書』（1670年）「一、上ノ國より下ノ國へ山中通筋、嶋小巻里程手前瀬田内と申所よりくんぬい二日程に參着申由。（中略）平地にて、馬も通申候由。先年より蝦夷シャモ通り筋にて御座候と申候。（後略）」、「一、日日中又は二日にも通申由、馬足も自由にて瀬田内より越申候も瀬田内の川上へのぼり、右の所をくんぬいへ出て申候由。（中略）くんぬい金山迄は馬足成程自由に通申候事。」。津軽藩史『津軽一統志 第卷十之下、六 くんぬいよりせたないへ山越口』（1727～1789年）「一 くんぬいより金山なるこや迄馬足の自由に御座候。（後略）」、『津軽一統志 第卷十之下、六 しつかりよりすつつへ山越口』「一（前略）しつかりよりすつつ迄急候へは一日にも越申候。（中略）足場能候間、馬も通可申由申候事。」。

寛文年間頃までに、内浦湾側と日本海側を結ぶ山越ルート：「くんぬい（現在の長万部町国縫）」～「瀬田内（現在の瀬棚町）」の一部、「くんぬい」と「くんぬい金山（現在の今金町）」や、「しつかり（現在の長万部町静狩）」と「すつつ（現在の寿都町）」の間で馬通があったことがうかがえる。

渡島半島よりさらに東方についてもシャクシャインの蜂起に関する2つの報告中にある。

『寛文拾年狄蜂起集書』「一、下ノ國へ馬足相叶不申所、くすり、アツケシ。但ウスノ内難所壹所有之由。常はノタ合見合候て馬通し申によく御座候由。天気悪候へは海荒く候て通兼申候由の事。」

幕臣松前八左衛門泰広が幕府に報告した『蝦夷蜂起』(1671年)「一、しぶちやりより奥七ヶ村悪事一味の夷人御座候に付、彼地へは馬足相叶不申、(後略)」。

2書の記述に矛盾は見られるものの、寛文年間頃は少なくとも「しぶちやり(現在の静内町)」までは馬通があると考えてよく、下記に掲載した報告より寛政元(1789)年頃の東限は「しやまに(現在の様似町)」と考えてよい。

寛政元(1789)年国後・目梨の蜂起に対する鎮撫の顛末を記した『寛政蝦夷亂取調日記』(1789年)「(六月)同廿二日(前略)新井田奥右衛門儀兼て被仰付侯馬、無相違相渡侯由。尤二十疋の内、砂原出船致候處、餘程沖合にて壹疋海え飛込陸地え歸り山中え馳入、(後略)」、「(六月)同廿四日(前略)夫より馬拾疋、人足百廿人程にてほろへつへ晝八時前着。(後略)」、「(閏六月)二日(前略)しやまにえ着。是より先々大難所に付馬通路無之由、(中略)依之馬をば當所へ差置申候。(後略)」とある。砂原(現在の砂原町)から廻漕した馬29頭をしやまに(現在の様似町)に留置したことがわかる。

なお松前から様似の間で最大の難所は、「しつかり(長万部町静狩)~「れふんけ(豊浦町礼文華)」であった。寛政12(1800)年、文化(1804)元~3年の2度にわたる改修で人馬の往来が円滑になった。

それ以前は下記に示した3件より、船がを主で徒歩・馬による山越もあったと考えられる。

『寛文拾年狄蜂起集書』「松前より下狄地迄所付」「一、しつかり 是より山越うすへ出る みちの間五里斗」には山越の道筋、同書中「但ウスノ内難所壹所有之由。(後略)」には海岸に沿う道筋が記されている。「常はノタ合見合候て」のノタはアイヌ語のオタ：砂浜の誤記であろう。

いっぽう『津軽一統志 第卷十之下、六 下の国道積』「一 くんぬいよりうす迄 二日^恒 七里の渡有」とあり、『津軽一統志 第卷十之下、七 松前より下国えの道積』「一 しつかりより三日路うす迄^{れふんけ一村へ、一村落四里有之由}」とある。日程と航行距離に矛盾があるものの、舟による通行と記されている。

遠山景晋の『未曾有之日記』には、寛政11(1799)年にヲシャマンベ(現在の長万部町)レフンケ(現在の豊浦町礼文華)の山道7里余を徒歩で移動し、その際に馬の通行が可能かどうかを試みたとある。

東西蝦夷地における馬産文献史料の検討

寛政元(1789)年国後・目梨の蜂起の際、様似に留め置いた馬のうち幾頭かは、伊達市有珠で飼育され、様似~有珠の運搬に使用されていたと寛政9(1797)年当時の記録に有る(『新北海道史 第二卷』頁563 1969年)。これが初出の史料である。以後馬産の記述が多くなるのは、寛政11(1799)年の東蝦夷地が仮上地になり、難所区間の道路の開削、会所・駅馬の整備が始められてからである。

『休明光記 卷之二』「先達て出立ちの官吏ども、南部に於て馬六十疋、牛四疋を買上げ來たり、場所々に畜ひ置いて日用を瓣ぜしむ。」とある。寛政11(1799)年の記録で「先達て出立ちの官吏ども」とは寛政10(1798)年に東西蝦夷地を巡検した三橋藤右衛門ら(西蝦夷地を宗谷まで)と大河内善兵衛ら(東蝦夷地を様似まで)のことである。三橋藤右衛門に随行した武藤勘蔵の『蝦夷日記』には馬を各場所に置いたという記載が見当たらないので、東蝦夷地の様似までに配置したと考えられる。

『休明光記 卷之五』「蝦夷地諸運送のため、先の年、南部より多くの馬を場所々に畜ひ置しに、追々駒を生じたり。(中略)文化二丑年下向の時、森越栗毛、八戸白栗毛、墨谷鹿毛といふ三疋の御馬を申下し、蝦夷地の内アブタといふ處へ牧をひらき、南部仙臺より駄馬を多く買上、御馬とともに是を放つ。夫より年々駒を生じ、良馬を出す事限りなし。(後略)」とある。「先の年」とは寛政10(1798)年のことである。

寛政12(1800)年に戸川安論が帰府の際に「追々駒を生じ」た馬の中から特に駿足なものを選んで持ち帰った牡馬が「三疋の御馬」である。これを種馬にして文化2(1805)年に虻田に牧を開いたのである。これ以後は西蝦夷地の上地、官営の牧設営によって蝦夷地全域に広がってゆく。

なお、安政七年(1860)作、松浦武四郎『蝦夷山海名産図解 卷二』(秋葉 実 翻刻・編『松浦武四郎選集 二』1997年)によると「又馬、猫等有も、此二種安永度始まりし彼地えわたりしと。」とある。安永年間(1775~1781年)初期という渡来時期は誤伝を記載したものであろう。

石狩低地帯における馬に係わる文献史料の検討

東蝦夷地海岸部の開削が一段落する文化年間に、東西蝦夷地を連絡する内陸の山越え道路の開削が始められる。それ以前に関しては、天和元(1681)年頃成立『松前國蝦夷図』中に内陸の道筋が川と沼を結ぶ朱線で表現されている。沼・川筋が道ということは、当時の内陸交通において船運が主であった事を示している。ただし、「しこつ」という記載の周辺のみには陸路部分が見られる。四里四方と注記される大きな沼は長都沼、その南の沼はウトナイ沼、さらに南は弁天沼を描いている。「しこつ」は長都沼とウトナイ沼に挟まれたところに書かれているので、図中の陸路部分は現在の千歳市内北東部(オサツ、ユカンボシ遺跡)~千歳市美々8遺跡にあたと考えられる。

寛政年間にはイサリブト(現在の恵庭市漁太)~千歳会所間に道が整備されていたことが、松浦武四郎『再航蝦夷日誌 卷之七』「此処ユウフツ支配番屋有 チトセ從六里。此間寛政度ニは陸道有し由。今は機ニ存せる斗也。奥人共は是を往來す。願ハクば此道筋を開き置度事ぞ」に記されている。しかし、他の旅行記によると陸路は不便として、舟を利用している。

松浦武四郎『再航蝦夷日誌 卷之七』「扱(割註略) 出立して此處より荷物は皆馬にて送り、多き時は車にても送る也。(中略)此道は六十年前山田屋文右衛門と申すものが初めて切整し由也。(中略)運上屋元馬二十七、八疋、車は式十輛斗也。(後略)」とあり、弘化3年頃迄には千歳会所~ビビ船着場間において車馬を使って干鮭の運搬が行われていた。

また、松浦武四郎『西蝦夷日誌』「(前略)是従りは文化度山田屋文右衛門なる者切開きしと云街道なれば道幅も広く、秋過ぎるころはイザリ・ムイザリの鮭を牛馬車の三品にてビビに下る道也。(後略)」とあり、安政5年頃からは牛も加わって干鮭の運搬していた。

千歳会所~ビビ船着場間の道路開削時期は『再航蝦夷日誌』と『西蝦夷日誌』とで異なっており、下記に示すよう3つの時期が考えられる。千歳を訪れた弘化3(1846)年から60年前とすると天明6(1786)年となり、『再航蝦夷日誌』が書かれた嘉永4(1851)年から60年前とすると寛政3(1791)年となり、『西蝦夷日誌』には文化(1804~1818)年間とある。天明6(1786)年から文化(1804~1818)年間に開削されたのであるから車馬の普及もその頃と考えられる。

なお、安政4、5(1857・58)年にはオタルナイ領セニハコ(現在の小樽市銭箱)~ユウフツ領チトセ(現在の千歳市)が本格的に開削され道幅二間となる。平成3、4年に北海道埋蔵文化財センターが調査した美々8遺跡道跡-1の終点部分である「ビビ船着」はこのとき廃止され、船着場はヒホエカリ(苫小牧市御前水付近)に移されて道路もそちらに付け替えられている。

文献史料の検討結果とユカンボシC15遺跡の馬蹄跡

武家の乗用としての飼育は天正11(1583)年に初出史料があり、享保4(1719)年にはすでに北海道和種馬が成立している。また東蝦夷地の運搬用馬の育成は寛政9(1797)年に始まり、寛政10(1798)年江戸幕府によって本格化した。石狩低地帯の千歳会所~ビビ船着場間においては遅くとも文化(1804~1818)年間には車馬による陸運が行われていた。

ところで、ユカンボシC15遺跡の馬蹄跡はTa-a火山灰降下直前の痕跡である。噴火は元文4(1739)年7月14日である。1739年以前でかつ千歳市付近と特定できる馬関係の文献史料はない。

しかし、間接的な状況を示唆すると思われる3件の文献より、2点の要点があげられる。寛文9(1669)年シャクシャインの蜂起に関する『寛文拾年狄蜂起集書』と『蝦夷蜂起』よると寛文年間頃は少なくとも静内町までは馬が通じていたこと。天和元(1681)年頃成立『松前國蝦夷図』によると「しこつ」という記載の周辺に陸路部分が千歳市内北東部～千歳市美々8遺跡にあたることである。

上述の2点をもって1739年以前の馬蹄跡を解釈すると、東蝦夷地の海岸部にいた馬を千歳市北東部において飼育・使用していたと考えることができそうである。では、だれがどのように飼育・使用していたのであろうか。

千歳市周辺における馬の飼育者・飼育方法

当時の東蝦夷地の海岸部と内陸を結びつける人々の動きに砂金採取がある。和田本『福山祕府年曆部』に寛永10(1633)年「是歳計乃麻恵又支布左利鑿砂金」。寛永12(1635)年「是夏東部宇武辺知及止加知初出砂金」とある「計乃麻恵」は現在の三石町、「支布左利」は現在の静内町である。その他は、天明5(1785)年作、林子平『三国通覧図説』の「蝦夷國全図」から、「宇武辺知」現在の様似町、「止加知」は現在の大樹町と推定される。この様に東蝦夷地の海岸部には人々の痕跡がある。くわえて『三国通覧図説』の「蝦夷國全図」には「ユウバリ山 金山○」「シコツ砂金出」とあるので、千歳市周辺において砂金採取の物資運搬のために飼育・使用されたと考えられないだろうか。

なお、伐材に関わって内陸部へ人が入ってはいるものの、南部地方からの季節労働者であること、徒歩で山を渡り歩いていることから馬の飼育・使用は行なっていなかった可能性が高い。

次に千歳市周辺のアイヌ民族は馬を知らなかったかどうかが問題になる。通説ではアイヌ語における馬と馬具に関する言葉が日本語からの借用であることから馬を知らなかったという。ではいったい、いつの時代に借用し、馬というものを認知したかが問題になる。

『休明光記 卷之二』「南部に於て馬六十疋、牛四疋を買上げ來たり、場所々々に畜ひ置ひて日用を辦ぜしむ。此牛馬廻りたる時、蝦夷人共はじめて見るがゆへに、驚き恐れて近寄るものなく、後にはつかい馴れ悦時かぎりなし。(後略)」とあり、東蝦夷地の海岸部に住むアイヌ民族は馬を知らなかったと解釈できる。しかし、元和4(1618)年、松前で布教したジラロモ・デ・アンジェリスの第1回蝦夷国報告書(児玉作左衛門ほか「蝦夷に關する耶蘇會士の報告」『北方文化研究報告第9輯』1954年)の訳文によると「(前略)彼等は乘馬に習熟している。(中略)蝦夷には馬が多数居り、それらは我國の馬に非常に似て居る。(後略)」とあり、松前地方のアイヌ民族は馬を大変よく知っていた。

また、ユカンボシC2遺跡において、馬が描かれた漆製品を副葬した土坑墓が発表されている(豊田宏良「ユカンボシC2遺跡」『1994年度遺跡調査報告会』北海道考古学会1994年)。豊田氏によると土坑墓もTa-a層下位から検出されたが馬蹄後との時期関係は不詳であるとのことご教示を受けた。これらのことから千歳市周辺のアイヌ民族が馬を全く知らなかったとは言えないのである。

以上より現時点では、千歳市周辺において砂金採取の関係者とアイヌ民族のどちらか、或は両者が係わりを持って飼育・使用していたと考えられる。

ではその飼育方法はどのようなものであったのだろうか。享保2(1717)年『松前蝦夷記 一、馬』「(前略)野山に放し置申ゆへに野牧のこづくに候へとも、(中略)五月節句頃より八九月頃まで家に牽入遣イ申候由、飼料草斗飼申ゆへに馬は能候へとも力なく候、草も煮草ハ不飼生草斗也、(中略)八九月過候へハ又野え放シ置申候、(後略)」とあり当時の飼育方法が記されている。これによると、10月から4月にかけて野に放牧し、野草を飼料としたようである。冬期間は野生状態である。

八戸芳夫「北海道和種馬編」(前出)によれば北海道和種馬の冬期間を通じての放牧を可能にする必須条件は越冬の主食となるミヤコザサが自生可能な地域である。ミヤコザサは平均最深積雪分布1m

以下の地域に相応して分布し、クマイザサよりも水湿に弱い性質を持つ。

千歳市内北東部（本遺跡を含む）から千歳市美々 8 遺跡にかけてはミヤコザサが自生可能な地域の範疇である。従って冬期間を通じての放牧が可能であり、また野生化することもありうる。

また、パリノ・サーヴェイの植物珪酸体分析の中間報告によると、本遺跡の台地部にはクマザサ属・ススキ属・イチゴツナギ亜科などが分布していたという。クマザサ属のなかにはミヤコザサも含まれる。ススキ属も馬の食料になり、本遺跡が馬の生息に適していたことを示している。

そうすると、放牧中の馬なのか野生化した馬のなのかが問題になる。本遺跡の馬蹄跡が詳細な状態で遺存していた原因は、降灰直前の痕跡であったことや降灰直前に降雨があったであろうことなどによるが、加えて次のことも考えられる。I 黒層上面には極めて貧弱な植生しか存在していなかったことということである。

I 黒層上面の裸地状態はこの時期の遺構がないことから人為ではなく、馬の恒常的な生息に起因している可能性が高い。馬蹄跡が多数かつ方向性がない状況で検出されたこととも一致する。このことは放牧の可能を支持する。

いっぽう、噴火した日時は元文 4 年 7 月 14 日直前の馬蹄跡であり、上記文献によると利用の最盛期にあたることになるので放牧されている頭数は少ないはずである。このことは利用頻度の低さか野生化のいずれかを支持する。ただし野生化説を採るならば、いつの時点でそうなったかということになり、北海道和種馬の起源について更に問題が深化する。

以上より 2 件の可能性を併記して一応の結論とする。千歳市周辺において砂金採取の関係者かアイヌ民族か、或は両者が係わりを持って飼育・使用していた。またはそれが野生化した。

北海道和種馬の起源について一付記 1

北海道和種馬は享保 4 (1719) 年にはすでに成立している。北海道和種馬は運搬用として寛政 11 (1799) 年から明治期にいたるまで南部馬との交配による品種の改良が行なわれている。いっぽう、享保 2 (1717) 年『松前蝦夷記 一、馬』(前略)大形乗馬は仙臺南部より調申候よしや松本久喜(1936年・1953年)、八戸芳夫(1973年)によれば、江戸時代から現代を通じて南部馬の体高は北海道和種馬よりも高く体型に差があったことを示している。

改良が行なわれているにもかかわらず、江戸時代以降は北海道和種が南部馬に比べて小さいのである。改良の精度・頻度が低いのか、亜種としての固有の性質があったのかが考えられる。

改良の精度・頻度が低い場合は当然の結果である。亜種としての固有の性質があった場合は江戸時代より以前に北海道和種馬の成立を考えなければならない。

小林和彦「前川遺跡から出土した動物遺存体」『前川遺跡』田舎館村教育委員会 1991年)によれば、青森県内の古代の馬には小型馬と中型馬の二種類がある。西中川 駿氏ら『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究』平成 2 年度文部省科学研究費補助金研究成果報告(1990年)の遺跡地名表から青森県の中世遺跡を概観すると、この傾向は中世においても変わることはないようである。

中世以前の東北地方における混在は、新しく弥生時代に朝鮮半島から入ってきた中型馬に対して、それ以前に入っていた小型馬との混在を示唆する。この問題は論旨からは逸れるので後日を期したい。

青森県の例より、中世の北海道でも小型馬と中型馬が混在していた可能性は否定できない。勝山館跡 1983 年例は 15 世紀後半～16 世紀末の中型馬で北海道和種馬と推定されている。勝山館跡においては武家の乗用にあたるので大きな北海道和種馬が選択されていた可能性があり、近世における運搬用馬の改良には南部馬のうち大きな個体を選択して交配したと考えられる。

擦文文化期に遡る馬の存在－付記 2

では、中世の北海道で小型馬と中型馬が混在していたとすれば、それ以前はどのような状況であっただろうか。残念ながら擦文文化期に遡る馬の遺存体の出土例はない。ただ存在を類推させるものがある。奥尻町青苗貝塚遺跡の投棄溝出土の坏(佐藤忠雄「北海道西南部の擦文文化」『どるめん 22号』1979年)に描かれた線刻画である。坏は擦文文化期の最終末の型式であり、暦年代は12世紀後半にあたる。

佐藤氏は「(前略)図の右が動物で馬の側面観のようである。背にあたる部分の刻み目はタテガミであろう。(後略)」。この見解については保留すべきであるという意見もある(横山英介『考古学ライブラリー59 擦文文化』ニューサイエンス社 1990年)。北海道和種馬はたて髪・尾毛の量が比較的多いのが他の馬と比べた時の特徴である(松本久喜 1953年)。背の上にある列点はたて髪の強調であり、私は佐藤氏の見解を支持する。同じ時期の近い例としては、青森県隠川(4)遺跡 6号住居出土の坏に描かれたものがある(木村高ほか『平成8年度 青森県埋蔵文化財発掘調査報告会』に付録の「絵画の描かれた土器について」、本報告は青森県埋蔵文化財調査報告第244集 1998年)。

青苗貝塚遺跡の坏より、擦文文化人は馬の存在を知っていたらと思われる。しかし、擦文文化期に遡る馬の遺存体の出土例がないこと。渡島半島におけるミヤコザサの自生地域は知内町以東の亀田半島側であり、奥尻島にはミヤコザサが自生しないことより、擦文文化期の奥尻島に馬がいた可能性は低い。馬の遺存体の出土例はミヤコザサの自生地域内において期待される。

(鈴木)

III 台地部 I 黒層の遺物

1 概要

VI群土器の総計は86点と極めて少ない。分布は台地部の東端に集中する傾向がある。VI群の主体はVI群b類の後北B式土器深鉢片である。VI群c類は分布範囲を西側にずらしておりVI群b類とは重複しない。VII群土器の総計は168点と少なく、分布は台地部の東端に集中する。VII群の主体はVII群b類とVII群d類で、VII群b類はH-13の東側に分布し、VII群d類は南側の中洲部分の集中は、甕上半部分の復元個体によるものである。

縄文土器がD~G×17~29の広い範囲にわたって出土している。V群c類を含むこれらは、本来II黒層に含まれている遺物である。従ってI黒層堆積以降の時期に大規模な土壌の攪拌があったことになる。VI群期には遺構がない。VII群b類・VII群d類期には竪穴住居が構築され、その掘り揚げ土の範囲に当たるグリットからは非常に多く出土している。アイヌ文化期には墓坑が1基ある。

以上より攪拌の時期はVII群期(擦文文化期)と考えられる。その原因は、竪穴住居の掘り揚げ土の範囲外からの出土も非常に多いことから、構築に係る攪拌以外に原因がある。耕作であると思われるが土壌分析の結果を待って結論を述べたい。

石器類は砥石を除いて縄文土器と同様にI黒層堆積以降の大規模な土壌攪拌によって包含されたものである。礫・礫片はすべて搬入されたものであるが、D~G×17~29の範囲に関しては石器類と同じ状況である可能性が高い。礫・礫片の岩質は安山岩・流紋岩・砂岩に偏る。(鈴木)

2 土器(図III-1~5、表III-1・2、図版III-8~11)

VI群b類(図III-1-1~5・8~10)

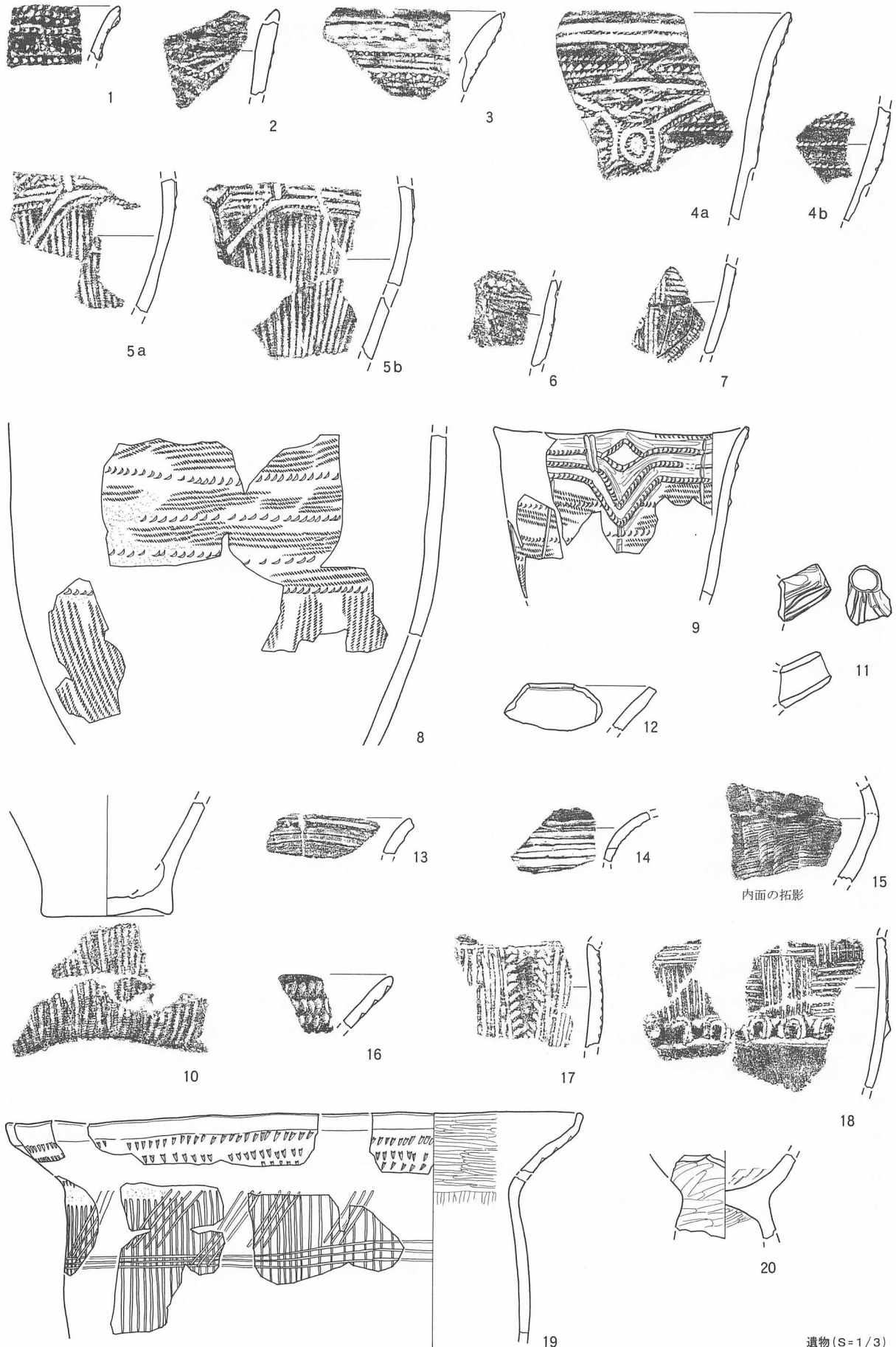
後北A式 1は深鉢の口縁部、外面は2本の横位隆起線→隆起線上と隆起線間に刺突、内面はヨコナデ。8は深鉢の頸部下半~胴部上半、外面はRL縦走帯縄文・RL横走帯縄文→頸部文様帯内に強い刺突、内面はヨコナデ。b段階(鈴木 信「後北A式深鉢の変遷」『ユカンボシC15遺跡(1)』1998年)。9は深鉢の口縁~頸部。外面は突起下に菱形隆起線、頸部文様帯内に3列の強い刺突文、突起間下に縦位押し引き文。内面はヨコナデ。e段階。

後北B式 2は深鉢の口縁部、外面は3本の付帯→開いたV字隆起線→隆起線脇をナデ→開いたV字隆起線を刺突、内面はヨコナデ。3は深鉢の口縁部、外面はRL横走→3本の横位隆起線→隆起線脇をナデ→最下段横位隆起線とRL横走に刺突、内面はヨコナデ。4-aは深鉢の口縁部、外面はナデ→3本の横位隆起線→X字隆起線・円形隆起線→隆起線脇をナデ→隆起線上を刺突→隆起線間を刺突、内面はヨコナデ。4-bは深鉢の頸部下半~胴部上半、外面は縦走・横走帯縄文→頸部文様帯内ナデ→横位隆起線→隆起線脇をナデ→隆起線上を刺突→頸部文様帯内に強い刺突文、内面はヨコナデ。5-aは深鉢の頸部下半~胴部上半、外面はRL縦走帯縄文→RL横走帯縄文→頸部文様帯内ナデ→隆起線→隆起線脇をナデ→隆起線上を刺突→頸部文様帯内に強い刺突文、内面はヨコナデ。5-bは深鉢の頸部下半~胴部上半、外面はRL縦走帯縄文→RL横走帯縄文→頸部文様帯内ナデ→隆起線→隆起線脇をナデ→隆起線上を刺突→頸部文様帯内に強い刺突文、内面はヨコナデ。10は深鉢の胴部下半~底部、外面はRL縦走帯縄文→縦位隆起線→隆起線脇をナデ→隆起線上を刺突、内面はナデ。

VI群c類(図III-1-6・7・11)

後北C₂・D式 6は深鉢の頸部下半、外面は斜走・横走帯縄文→微隆起線文→三角形刺突、内面はナデ。7は深鉢の頸部下半、外面はRL横走帯縄文→RL斜走帯縄文→頸部文様帯内ナデ→微隆起線文→三角形刺突、内面はナデ。11は注口部分、沈線が施される。

2 土器



図Ⅲ-1 台地部の土器

遺物(S=1/3)

表 III - 1 台地部の掲載土器観察表

III-1-8

	口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部	備考
外面	(欠失)	(欠失)	粘土紐巻上げ	ヨコナデ	(欠失)	<ul style="list-style-type: none"> ・外面5YR7/6 (橙色) ・内面7.5YR2/ (黒色) ・一部被熱
			?			
			RL縦走帯縄文			
			RL横走帯縄文			
内面	(欠失)	(欠失)	粘土紐巻上げ	ヨコナデ	(欠失)	<ul style="list-style-type: none"> ・VI群b類 後北A式 ・頸胴部1/6残存
			?			
			ヨコケズリ			
			ヨコナデ			

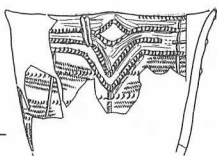
III-1-9

	口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部	備考
外面		突起貼付	粘土紐巻上げ	ヨコナデ	RL縦走帯縄文	<ul style="list-style-type: none"> ・外面7.5YR8/4 (浅黄橙色) ・内面7.5YR7/4 (にぶい橙色)
			?			
			RL横走帯縄文			
			横位隆起線・刺突(4本)			
			突起線下に八形隆起線・刺突			
			突起線下にV形隆起線・刺突(3個)			
			八形隆起線脇に短い縦位隆起線・刺突			
内面			横位に刺突(3列)	ヨコナデ	(欠失)	<ul style="list-style-type: none"> ・VI群b類 後北A式 ・上半1/2残存
			突起間とV形隆起線下に縦位押し引き刻み			
			?			
内面			粘土紐巻上げ	ヨコナデ	(欠失)	<ul style="list-style-type: none"> ・VI群b類 後北A式 ・上半1/2残存
			?			
			?			

III-1-19

	口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部	備考
外面		刺突	粘土紐巻上げ	ヨコナデ	(欠失)	<ul style="list-style-type: none"> ・外面10YR4/3 (にぶい黄褐色) ・内面10YR1.7/1 (黒色) ・全体に摩滅
			縦位沈線			
			横位沈線			
			斜位沈線			
内面		タテミガキ	粘土紐巻上げ	ヨコミガキ	(欠失)	<ul style="list-style-type: none"> ・VII群d類 ・上半で1/4残存
			?			
			?			

III-1-9	口唇部	胴部	底部	合計
復元	8	2	0	10
復元残	0	7	0	7
合計	8	9	0	17

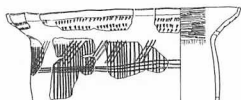


	2 3	2 4	2 5	2 6	2 7
E					
F	1	5	3		1
G		1	2		



III-1-19	口縁部	頸部	胴部	底部	合計
復元	6	10	0	0	16
復元残	5	4	5	0	6
合計	11	14	5	0	8

	2 1	2 2
S		
T	1	14



III-1-8	口唇部	胴部	底部	合計
復元	0	10 (2)	0	10 (2)
復元残	0	8	0	8
合計	0	18 (2)	0	18 (2)

※ () は、総数の内の出土場所不明分。

	2 5	2 6	2 7	2 8
D				
E			1	1
F		3	1	
G	1			



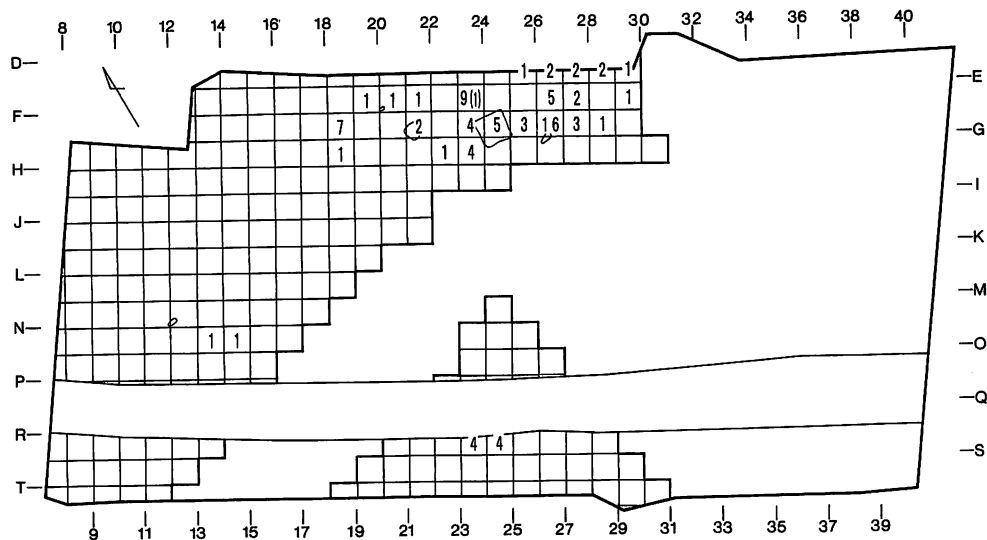
図 II - 2 台地部の復元土器分布

表Ⅱ-2 台地部の掲載土器一覧

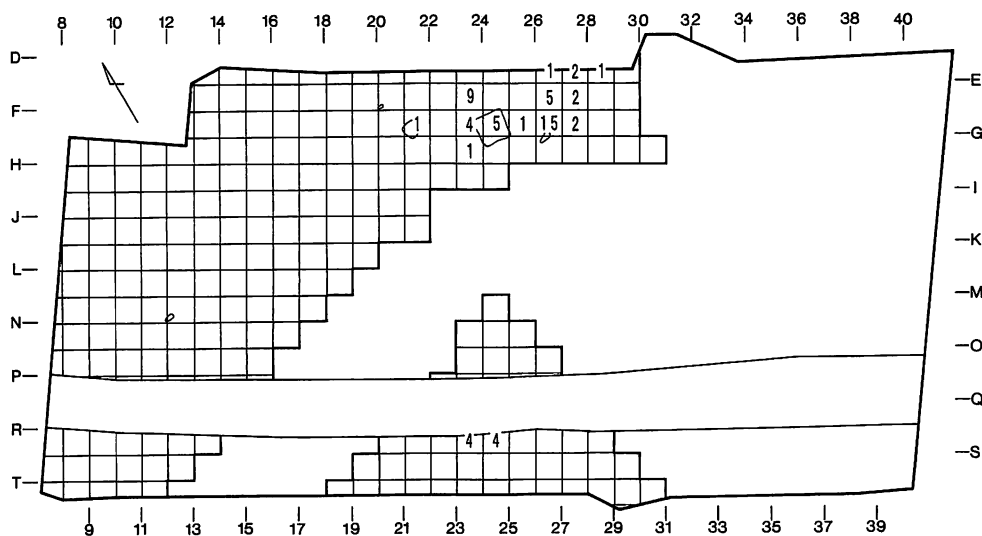
図番号	発掘区	層位	分類	備考
Ⅲ-1-1	F26b	Ⅱ B	Ⅵ群b類 後北A式 深鉢口縁部	
Ⅲ-1-2	F26b	Ⅱ B	Ⅵ群b類 後北B式 深鉢口縁部	
Ⅲ-1-3	D27b	I B	Ⅵ群b類 後北B式 深鉢口縁部	
Ⅲ-1-4a	F27b	攪乱	Ⅵ群b類 後北B式 深鉢口縁部	
Ⅲ-1-4b	E27c	I B	Ⅵ群b類 後北B式 深鉢頸部下半～胴部上半	
Ⅲ-1-5a	F23b	I B	Ⅵ群b類 後北B式 深鉢頸部下半～胴部上半	
	F24c	H-1 3 覆土中層		
	G23a	H-1 3 掘揚土		
Ⅲ-1-5b	F23b	I B	Ⅵ群b類 後北B式 深鉢頸部下半～胴部上半	
	"	H-1 3 掘揚土		
	F26b	攪乱		
	G23a	I B		
Ⅲ-1-6	N13c	I B	Ⅵ群c類 後北C ₂ ・D式 深鉢頸部下半	
Ⅲ-1-7	N14b	I B	Ⅵ群c類 後北C ₂ ・D式 深鉢頸部下半	
Ⅲ-1-8	D26c	I B	Ⅵ群b類 後北A式 深鉢頸部下半～胴部上半	
	E26a	"		
	E26d	"		
	F26b	"		
	"	攪乱		
Ⅲ-1-9	E23b	攪乱	Ⅵ群b類 後北A式 深鉢口縁～頸部	
	E23c	Ⅱ B		
	"	H-1 3 掘揚土		
	F23d	"		
	F24b	H-1 3 覆土中層		
Ⅲ-1-10	E23d	耕作土	Ⅵ群b類 後北B式 深鉢胴部下半～底部	
	E23	攪乱		
Ⅲ-1-11	E29d	I B	Ⅵ群c類 後北C ₂ ・D式 注口部分	
Ⅲ-1-12	G24a	I B 上面	Ⅶ群b類 甕口縁部	
Ⅲ-1-13	D29b	I B	Ⅶ群b類 甕口縁部	
Ⅲ-1-14	D26b	I B	Ⅶ群b類 甕口縁部	
Ⅲ-1-15	G22d	I B	Ⅶ群b類 球胴甕胴部	
Ⅲ-1-16	K18	攪乱	Ⅶ群c類 甕口縁部	
Ⅲ-1-17	J21a	(I B 3)	Ⅶ群d類 甕頸部	
Ⅲ-1-18	F28a	I B	Ⅶ群d類 甕頸部	
	"	耕作土		
Ⅲ-1-19	S21c	I B	Ⅶ群d類 甕口縁～頸部	
Ⅲ-1-20	F22b	Ⅱ B	Ⅶ群d類 高坏脚部	

Ⅵ群 (86点)

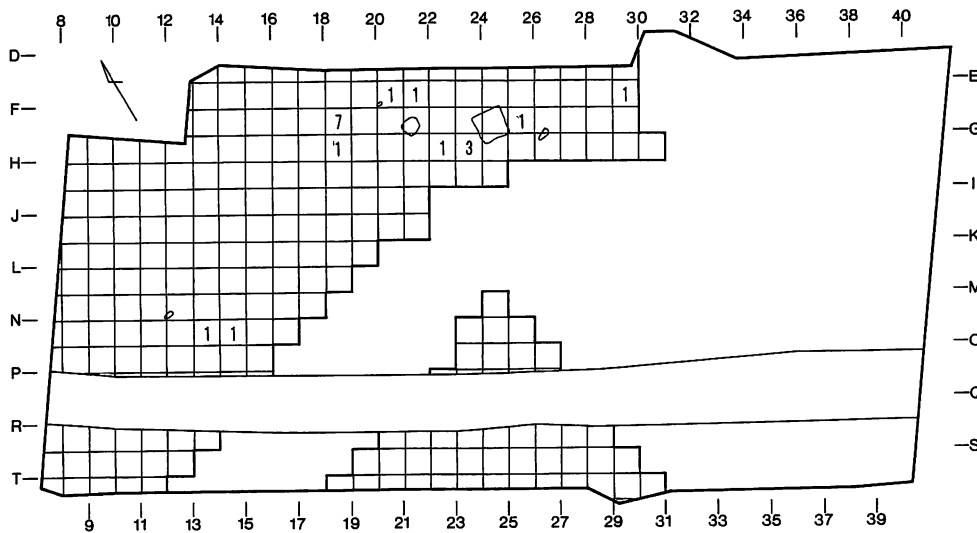
※ () は、攪乱から出土したことを表す。



Ⅵ群 b類 (57点)



Ⅵ群 c類 (18点)

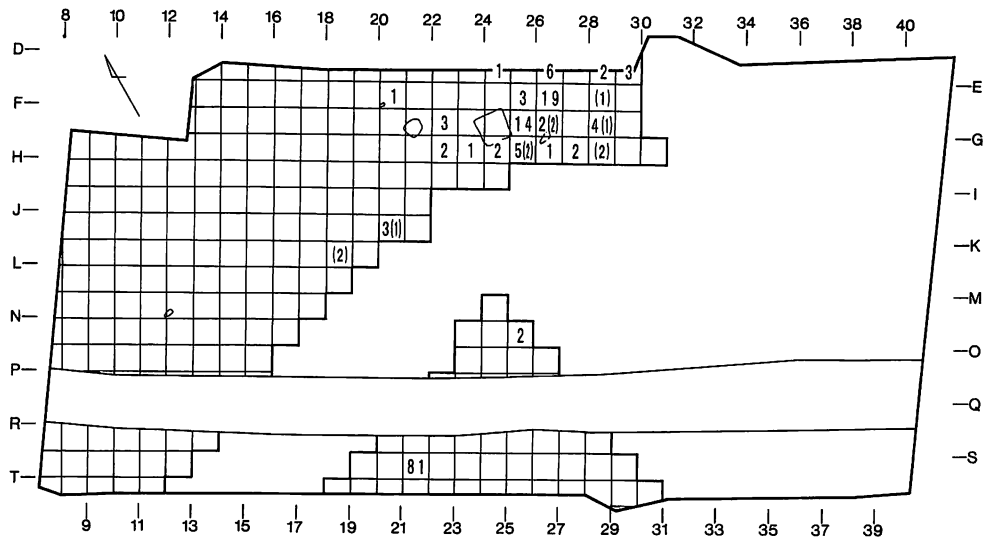


図Ⅲ-3 台地部の土器分布(1)

2 土器

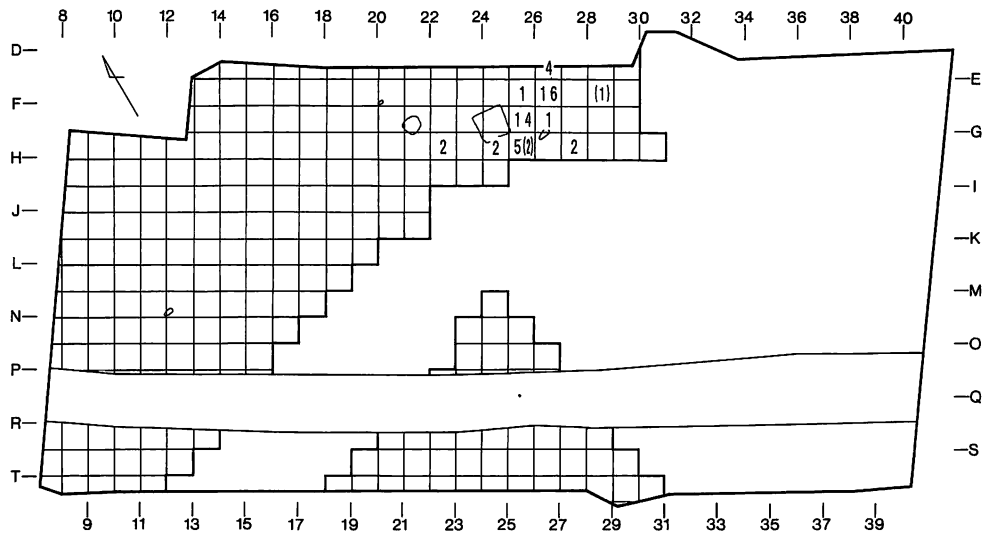
Ⅶ群 (168点)

※ () は、攪乱から出土したことを表す。



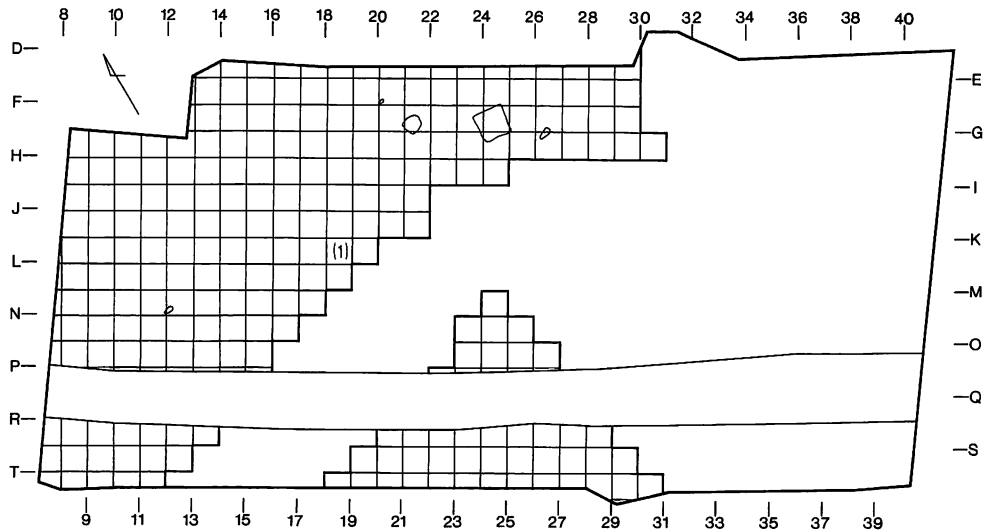
Ⅶ群 b類 (50点)

※ () は、攪乱から出土したことを表す。



Ⅶ群 c類 (1点)

※ () は、攪乱から出土したことを表す。



図Ⅲ-4 台地部の土器分布(2)

Ⅶ群 b 類 (図Ⅲ-1-12~15)

12は甕の口縁部、内外面ともにヨコナデ。端面の強いナデによって隅が肥厚する。13は甕の口縁部、内外面ともにヨコナデで、外面は強いヨコナデによって段状になる。外面と内面の強いナデによって端面が凹み、外側隅が肥厚する。14は甕の口縁部で端部は欠失している。外面は棒状工具による横走沈線。内面はヨコナデ。15は球胴甕の胴部、外面はヨコミガキ、内面はヨコハケ。

Ⅶ群 c 類 (図Ⅲ-1-16)

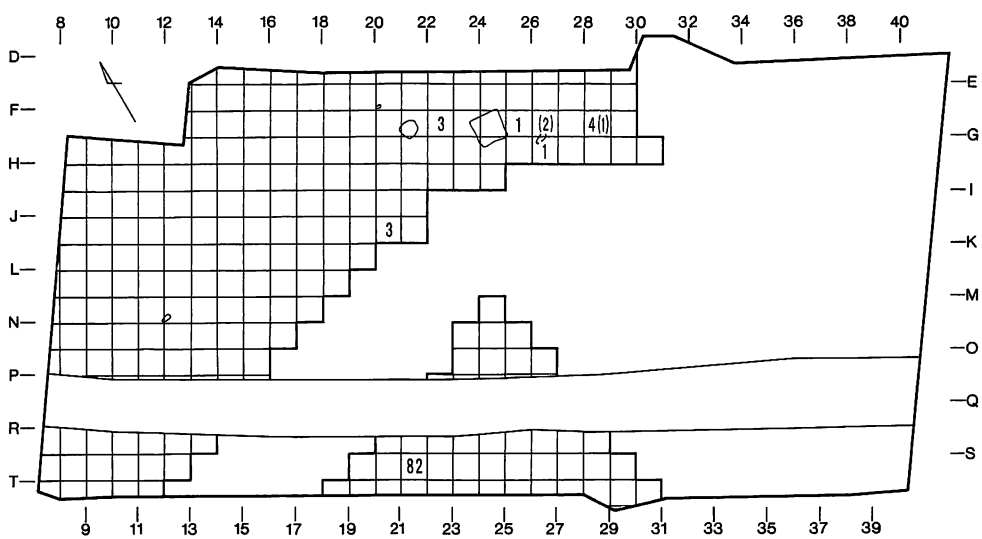
16は甕の口縁部、外面は柁目板状工具による刺突。内面はヨコナデ。

Ⅶ群 d 類 (図Ⅲ-1-17~20)

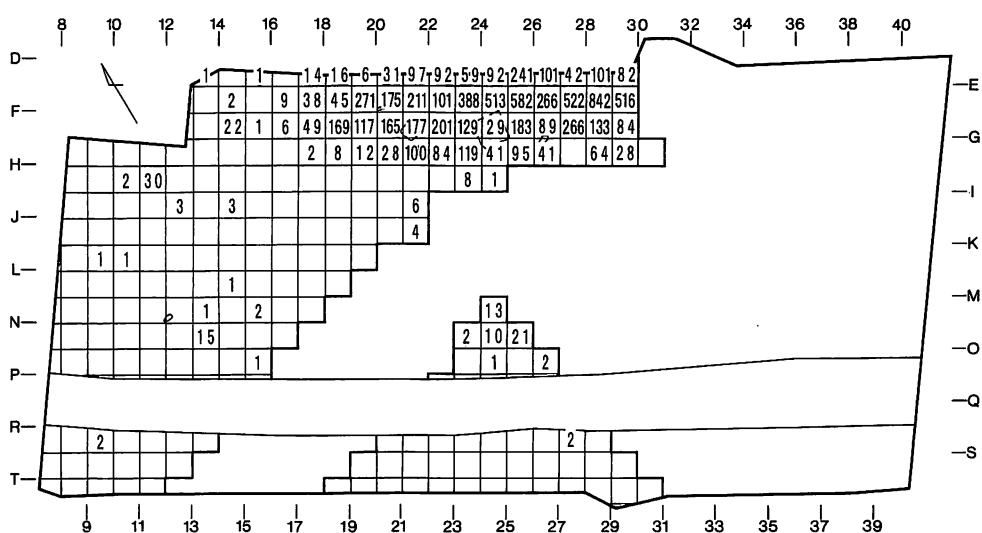
17は甕の頸部、外面は棒状工具による縦位沈線→篋状工具による刺突。内面はヨコミガキ。18は甕の頸部、頸部と胴部の境に貼付帯→馬蹄形圧痕文→頸部上側に横走沈線→短い縦位沈線→短い横位沈線。内面はタテミガキ。19は甕の口縁～頸部、外面は口縁部に篋状工具による刺突、頸部に縦位沈線を下地に斜線・横位沈線。内面はタテミガキ→ヨコミガキ。20は高坏の脚部、坏部側外面は強いナデ、高台側外面はヨコミガキ、外底面はミガキ。坏部内面は篋状工具による調整のあとナデ。(鈴木)

Ⅶ群 d 類 (97点)

※ () は、攪乱から出土したことを表す。



縄文 (8031点)



図Ⅲ-5 台地部の土器分布(3)

3 石器

3 石器 (図Ⅲ-6~10、表Ⅲ-3~6、図版Ⅲ-12~16)

石鏃

1は平基、基部調整が最後に施されている。先端は欠失。2は横長剥片素材、凹基、基部調整が最後に施されている。先端の欠失による剥離が槌状を呈して右側縁に及ぶ。3は平基、基部調整が最後に施されている。先端は欠失。4は平基、周縁調整(基部・左側縁刃部)はいずれも片面に施される。大きな剥片を石鏃の大きさに分割したときの打点が右側縁中央にみられる。この黒色片岩製石鏃の製作工程は、まず石鏃数個分の大きな剥片を母岩から剥離し、それを石鏃1個分の大きさに分割し、周縁調整を加えると推定される。

二次調整のある剥片

5は礫端片。亜円礫から両極打方によって剥離されたと思われる。背面の遠位端部側・近位端部側・左側縁側から調整が加わる。礫面は転磨が進行しており、爪形のクラックは見られない。6は剥離面に風化が見られる古い剥片に周縁調整を施す。

石核

7は角礫で、打面作出はなく、両主面に打面転移がみられる。

たたき石

8は円礫で、両長軸端をおもに使用する。被熱痕がある。9は円礫で、ほぼ全面を均等に使用している。10はやや偏平な棒状の亜円礫で、長軸端の一端を使用する。被熱による剥落がみられる。11は棒状の亜角礫で、長軸端の一端を使用する。

くぼみ石

12は偏平な亜円礫で、片主面の中央を使用する。

すり石

13は偏平な棒状の亜円礫で、長軸端の一端を使用する。

砥石

砥石の岩質は、14・15・17が凝灰岩で、16は凝灰質砂岩である。14は偏平な亜角礫で、両主面を使用しているが片面の使用が頻繁である。下側面に断面U字状の溝がつく。炭質物が付着している。15はやや偏平な円礫で、全面を敲打によって調整し、片主面を使用する。炭質物が付着している。使用面側からの打撃で破損する。16は極細粒凝灰質砂岩の偏平な楕円礫で、両主面を使用する。側縁には敲打痕がみられる。17は偏平な棒状の亜円礫で、両主面と一部側面を使用する。(鈴木)

表Ⅲ-3 台地部の掲載石器一覧

図番号	発掘区	層位	分類	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
Ⅲ-6-1	O13b	IB	石鏃	黒曜石	2.7	1.1	0.3	0.8	
Ⅲ-6-2	F29b	IB	石鏃	黒曜石	(2.8)	1.3	0.3	(1.1)	
Ⅲ-6-3	M10a	IB	石鏃	黒曜石	(2.0)	1.1	0.3	(0.6)	
Ⅲ-6-4	F26b	IB	石鏃	片岩	(2.4)	1.4	2.2	(0.9)	
Ⅲ-6-5	H27	IB	Rフレイク	黒曜石	4.6	4.6	1.2	31.6	
Ⅲ-6-6	F25a	IB	Rフレイク	黒曜石	3.5	3.5	1.3	16.8	
Ⅲ-6-7	I22a	(IB3)	石核	黒曜石	2.5	3.2	1.1	9.7	
Ⅲ-6-8	E20c	IB上面	たたき石	安山岩	7.1	6.5	5.9	389.8	
Ⅲ-6-9	E21c	IB上面	たたき石	安山岩	7.3	4.9	4.2	188.3	
Ⅲ-6-10	F22b	IB	たたき石	安山岩	14.9	4.9	3.3	390.7	
Ⅲ-6-11	D21b	IB	たたき石	安山岩	9.7	4.7	4.4	322.1	
Ⅲ-6-12	F17d	IB	くぼみ石	安山岩	8.4	6.2	3.5	206.0	
Ⅲ-6-13	N13d	IB	すり石	安山岩	9.9	6.2	3.6	380.4	
Ⅲ-6-14	M10b	IB	砥石	凝灰岩	10.2	6.4	3.6	327.8	
Ⅲ-6-15	F18a	IB	砥石	凝灰質砂岩	6.1	9.6	(5.4)	(359.3)	
Ⅲ-6-16	G24a	IB	砥石	凝灰質砂岩	(4.5)	10.3	4.0	(219.3)	
Ⅲ-6-17	G24d	IB上面	砥石	凝灰岩	4.4	20.9	7.2	1311.0	

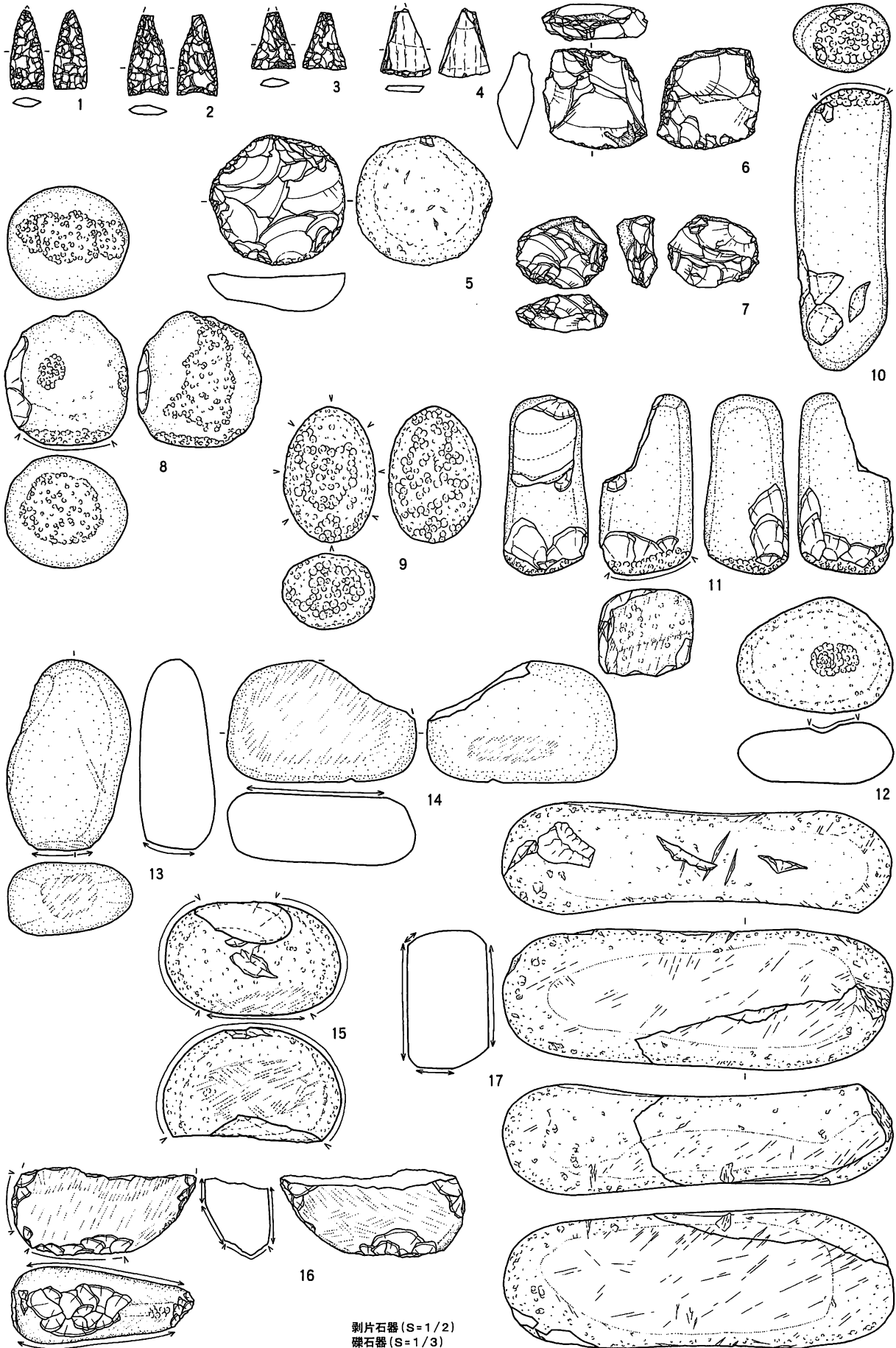


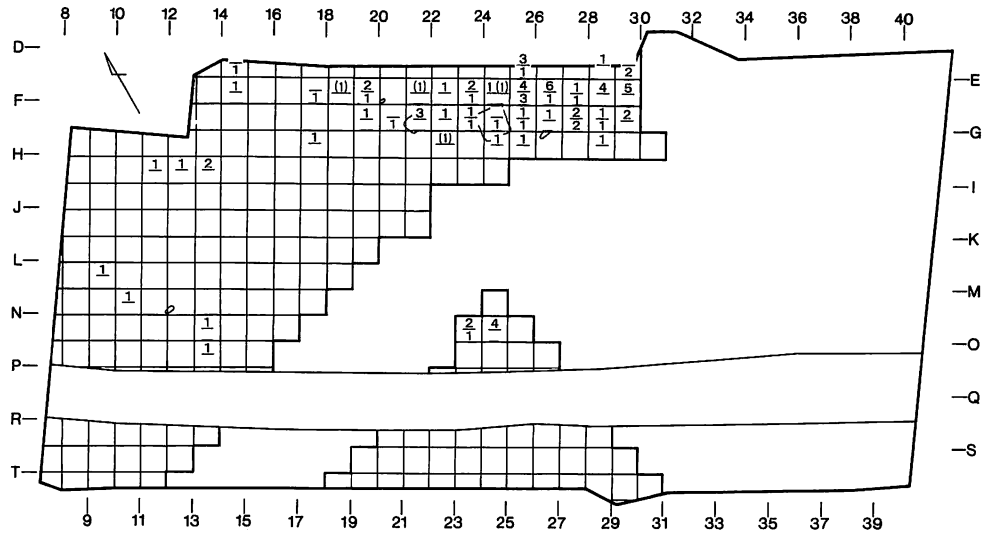
図 III - 6 台地部の石器等

3 石器

上：石 鏃
(66点)

下：石槍・ナイフ
(20点)

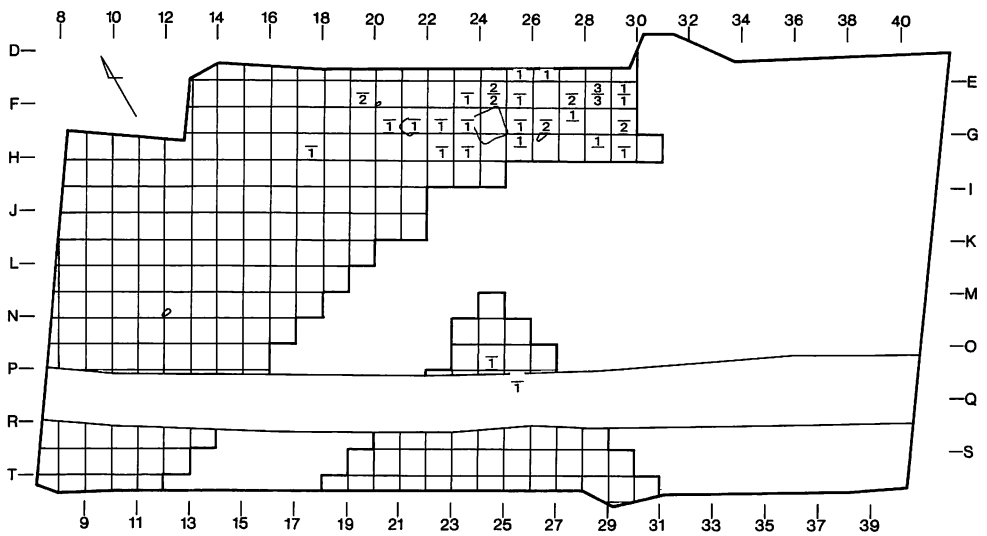
※ () は、攪乱から出土したことを表す。



※ 石鏃は、135グリッドより1点出土。

上：つまみ付きナイフ
(9点)

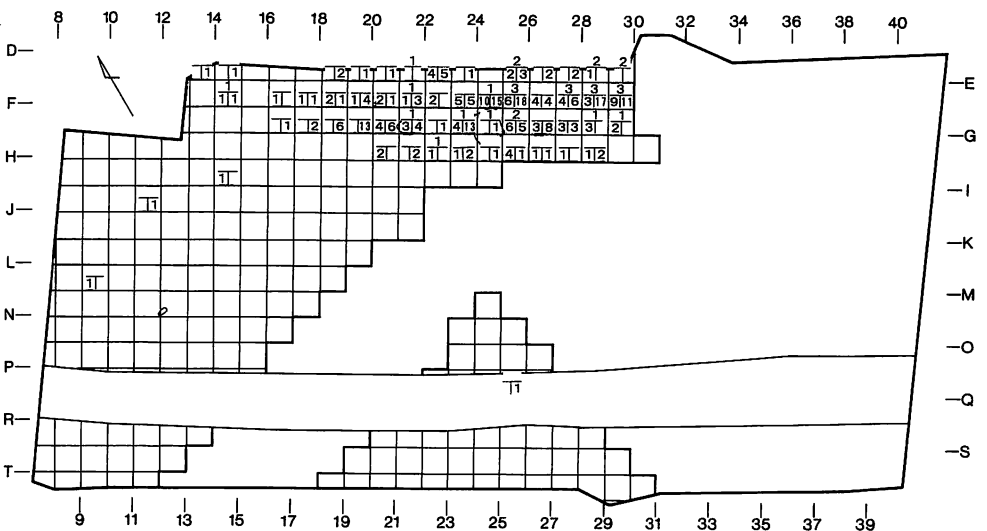
下：スクレイパー
(29点)



上：石核(30点)

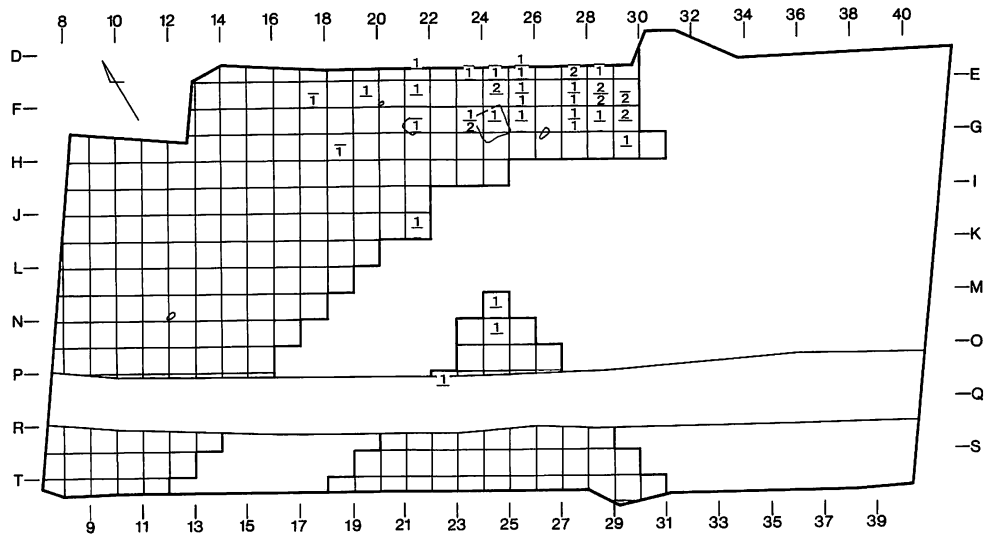
左下：Rフレイク
(100点)

右下：Uフレイク
(180点)

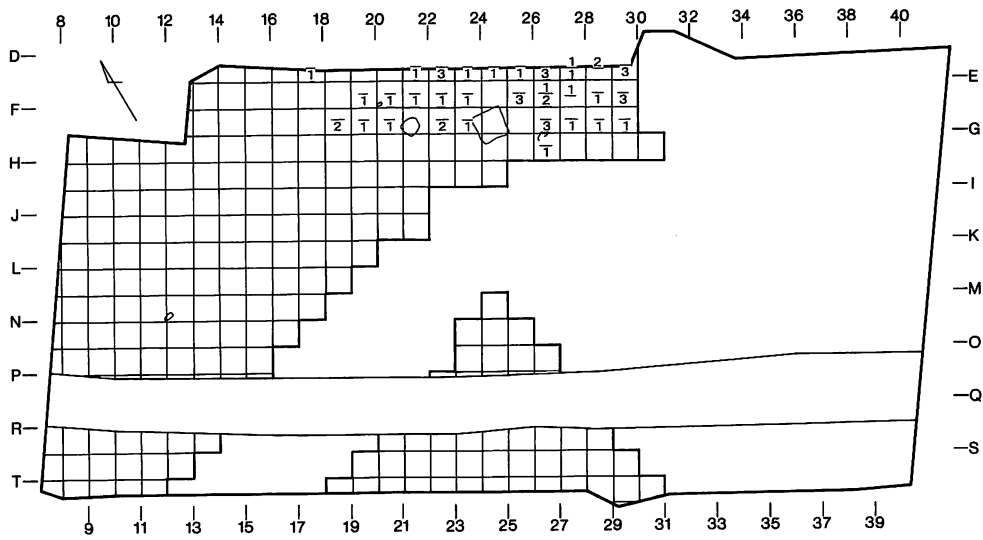


図Ⅲ-7 台地部の石器等分布(1)

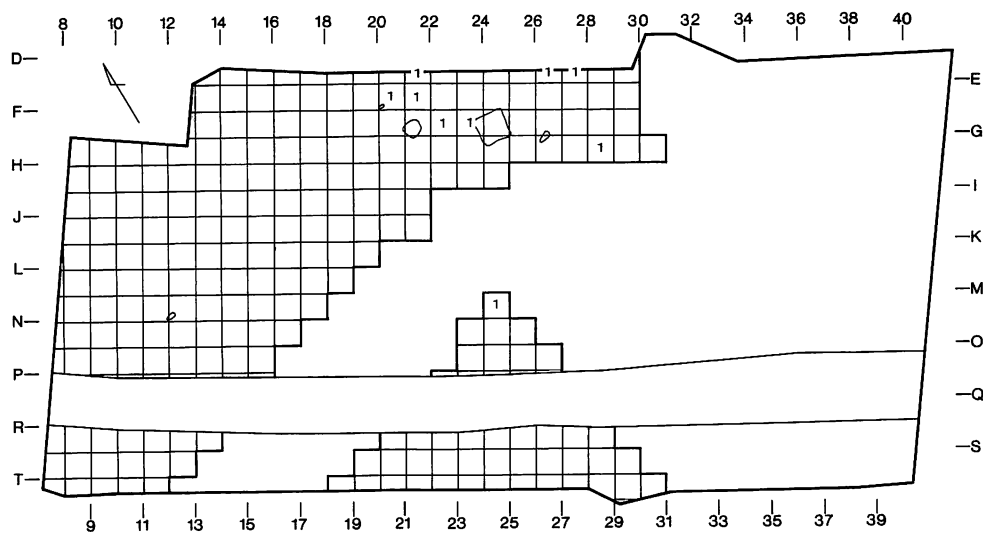
上：石斧
(22点)
下：石斧片
(18点)



上：石斧未製品
(5点)
下：石斧フレイク
(43点)



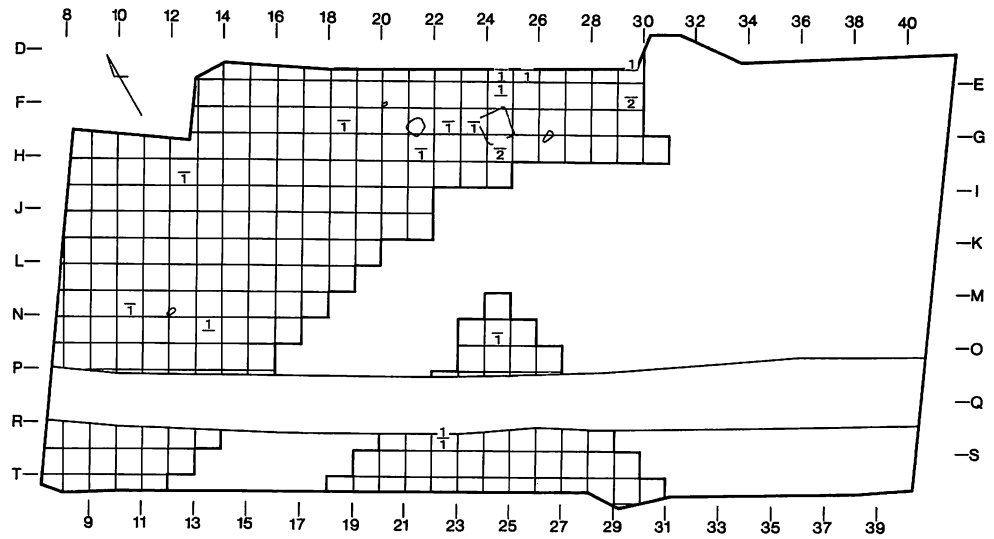
たたき石(9点)



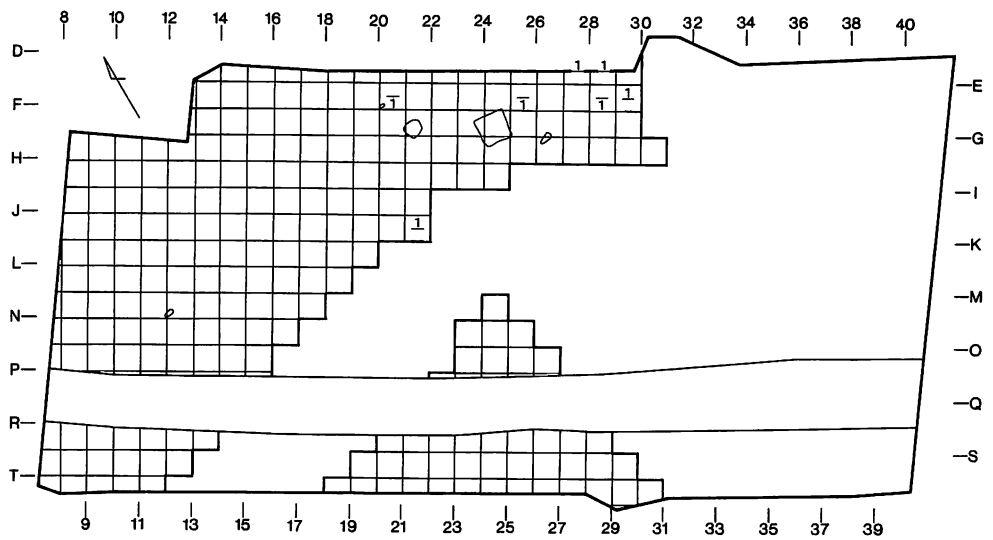
図III-8 台地部の石器等分布(2)

3 石器

上：すり石(4点)
下：砥石(14点)

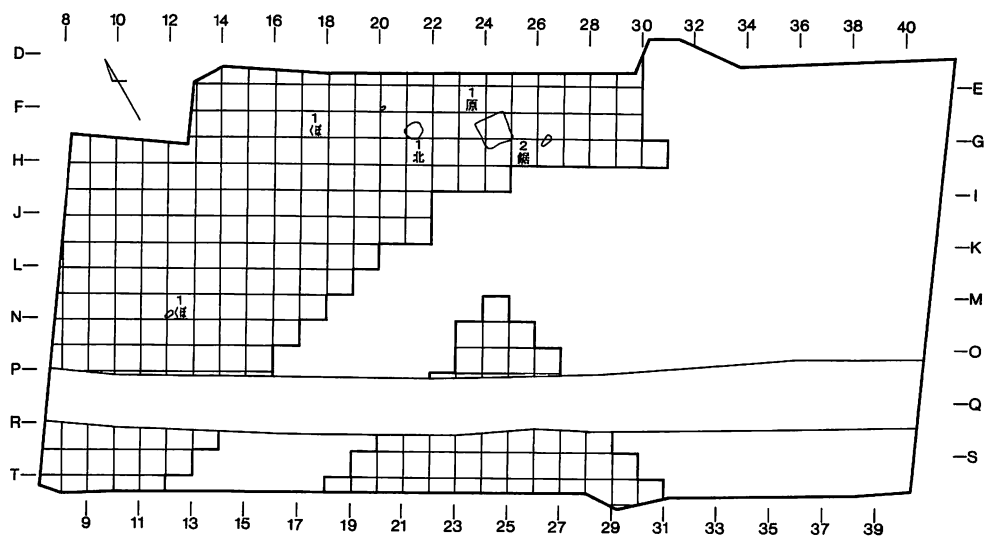


上：石皿(4点)
下：台石(3点)



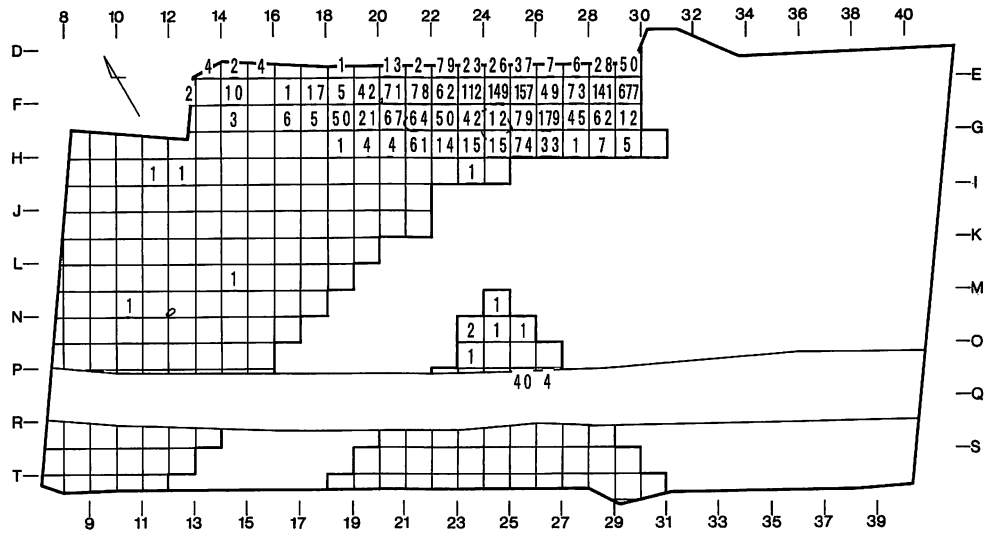
その他の石器(6点)

原=原石
ㄥ=くぼみ石
北=北海道式石冠
鋸=石鋸

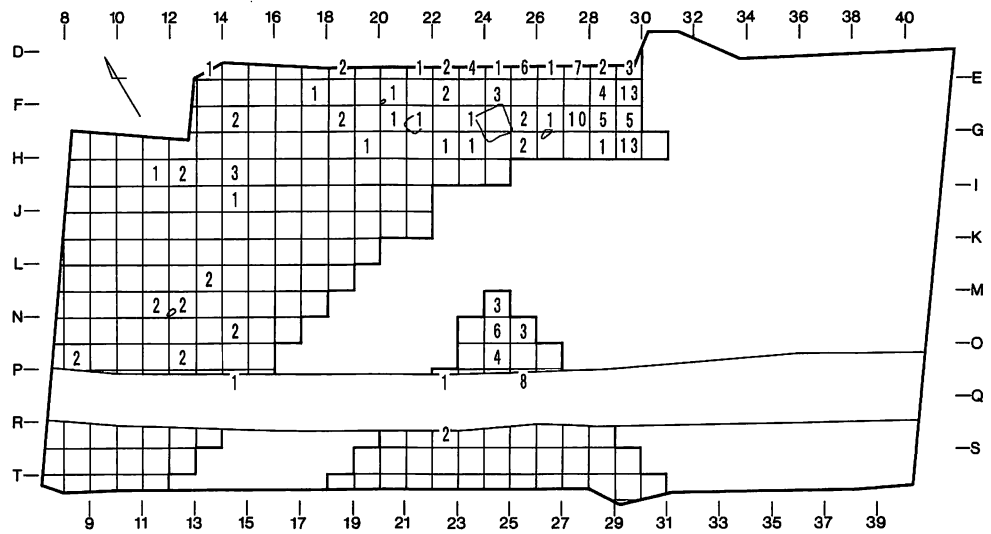


図Ⅲ-9 台地部の石器等分布(3)

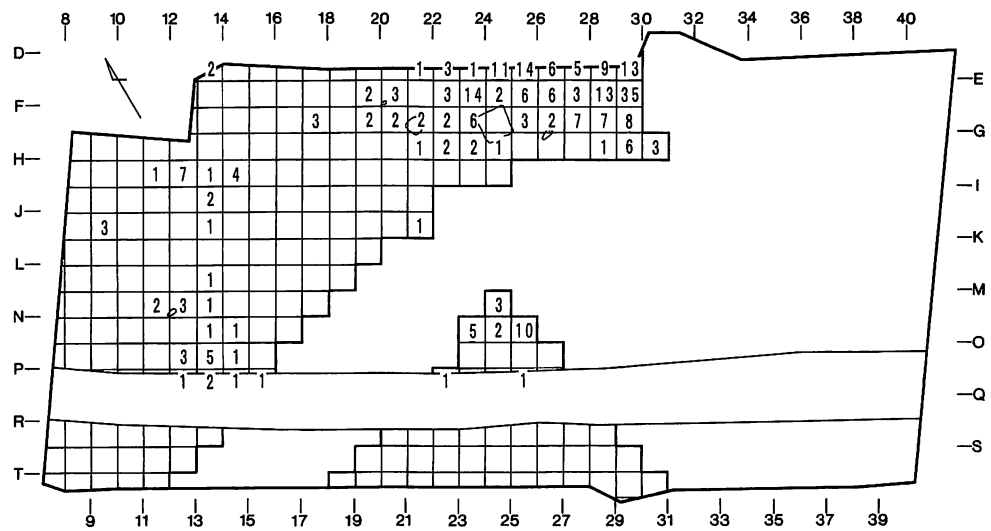
フレイクチップ
(2914点)



礫(150点)



礫片(277点)



図Ⅲ-10 台地部の石器等分布(4)

図Ⅲ-4 台地部の石質別礫集計表(1)

		安山岩	流紋岩	砂岩	泥岩	凝灰岩	チャート	片麻岩	片岩	頁岩	その他	軽石	不明	合計
D-13	礫				1									1
	礫片			1						1				2
-18	礫	1		1										2
	礫片													0
-21	礫	1												1
	礫片	1												1
-22	礫				1	1								2
	礫片	3												3
-23	礫			2	1		1							4
	礫片	1												1
-24	礫	1												1
	礫片	3	3	1	3	1								11
-25	礫		3	1	2									6
	礫片	4	7		2								1	14
-26	礫			1										1
	礫片	1	2	1		2								6
-27	礫	1	3	1	1	1								7
	礫片	2	1	1									1	5
-28	礫	2												2
	礫片	1	3		1	4								9
-29	礫		1		1	1								3
	礫片	3	2	2	1	2						1	2	13
E-17	礫	1												1
	礫片													0
-19	礫													0
	礫片			1	1									2
-20	礫	1												1
	礫片	3												3
-22	礫	1										1		2
	礫片	2		1										3
-23	礫													0
	礫片			1	4									14
-24	礫	1		1	1									3
	礫片	1		1										2
-25	礫													0
	礫片	3	1	1				1						6
-26	礫													0
	礫片	1		1	2						2 (石炭)			6
-27	礫													0
	礫片	2			1									3
-28	礫			1	1						1 (矽カ)	1		4
	礫片	4	3	4	1			1						13
-29	礫	3	6	3		1								13
	礫片	10	15	6	3	1								35
F-14	礫	1										1		2
	礫片													0
-17	礫													0
	礫片	3												3
-18	礫			1								1		2
	礫片													0
-19	礫													0
	礫片		1		1									2
-20	礫		1											1
	礫片	1											1	2
-21	礫										1 (矽カ)			1
	礫片	2												2
小計	礫	14	14	12	9	4	1	0	0	0	2	4	0	60
	① 礫片	51	38	35	16	10	0	2	0	1	2	1	5	161

図Ⅲ-5 台地部の石質別礫集計表(2)

		安山岩	流紋岩	砂岩	泥岩	凝灰岩	チャート	片麻岩	片岩	頁岩	その他	軽石	不明	合計
F-22	礫													0
	礫片	1	1											2
-23	礫	1												1
	礫片	3		3										6
-25	礫	2												2
	礫片	2		1										3
-26	礫			1										1
	礫片			1	1									2
-27	礫	4	2	4										10
	礫片	5		1	1									7
-28	礫	1			1							2	1	5
	礫片	4	2	1										7
-29	礫			4	1									5
	礫片	1	7											8
G-19	礫				1									1
	礫片													0
-21	礫													0
	礫片				1									1
-22	礫											1		1
	礫片			2										2
-23	礫			1										1
	礫片	1			1									2
-24	礫													0
	礫片	1												1
-25	礫	1				1								2
	礫片													0
-28	礫		1											1
	礫片	1												1
-29	礫	2	1	8	2									13
	礫片	1		4	1									6
-30	礫											3		0
	礫片													3
H-11	礫	1												1
	礫片	1												1
-12	礫			2										2
	礫片		1	1	5									7
-13	礫													0
	礫片	1												1
-14	礫	2	1											3
	礫片	1	1	2										4
I-13	礫													0
	礫片			1	1									2
-14	礫	1												1
	礫片													0
J-9	礫													0
	礫片		2			1								3
-13	礫													0
	礫片				1									1
-21	礫													0
	礫片		1											1
L-13	礫	1	1											2
	礫片			1										1
M-11	礫		1										1	2
	礫片	2												2
-12	礫	1					1							2
	礫片	1						2						3
小計	礫	17	7	20	5	1	1	0	0	0	0	3	2	56
②	礫片	26	15	18	12	1	0	2	0	0	0	3	0	77

図Ⅲ-6 台地部の石質別礫集計表(3)

		安山岩	流紋岩	砂岩	泥岩	凝灰岩	チャート	片麻岩	片岩	頁岩	その他	軽石	不明	合計
M-13	礫													0
	礫片	1												1
-24	礫	2	1											3
	礫片		1		1						1 (礫岩)			3
N-13	礫													0
	礫片	1												1
-14	礫	1		1										2
	礫片		1											1
-23	礫													0
	礫片	2		2							1 (蛇紋岩)			5
-24	礫	2		4										6
	礫片		1	1										2
-25	礫	2		1										3
	礫片	1		9										10
O-8	礫	1											1	2
	礫片													0
-12	礫	1		1										2
	礫片	3												3
-13	礫													0
	礫片	5												5
-14	礫													0
	礫片		1											1
-24	礫	2		2										4
	礫片													0
P-12	礫													0
	礫片										1 (珪岩)			1
-13	礫													0
	礫片		2											2
-14	礫		1											1
	礫片	1												1
-15	礫													0
	礫片		1											1
-22	礫		1											1
	礫片		1											1
-25	礫	4	1	2	1									8
	礫片		1											1
R-22	礫	2												2
	礫片													0
小計	礫	17	4	11	1	0	0	0	0	0	0	0	1	34
	③ 礫片	14	9	12	1	0	0	0	0	0	3	0	0	39
合計	礫	48	25	43	15	5	2	0	0	0	2	7	3	150
	①+②+④ 礫片	91	62	65	29	11	0	4	0	1	5	4	5	277

4 金属製品・ガラス製品 (図Ⅲ-11、表Ⅲ-7、図版Ⅲ-17~19)

台地上のⅠ黒層上層部とその攪乱層からは、鉄製品4点・銅製品2点・銭2点・鉄滓2点・ガラス玉1点が出土している。いずれも出土層からして、アイヌ文化期の遺物である。2の刀子や8のガラス玉は、低湿部に面した台地縁からの出土である。

1は鉄鍋の口縁部片と思われるが、口唇部が薄く、縁辺が波打っており、通常の鉄鍋とは異なっている。鉄鉢のようなものだろうか。2は刀子の茎部の端部破片か。細帯状で、端部が屈曲している。3は断面が六角形の針金状細棒を曲げた、金具様の鉄製品。針か釘先を曲げたものか、釣針かもしれない。図版Ⅲ-18-右下は、薄い造りの鎌。銹化が著しく小破片多数で、接合・実測できなかった。

4はキセルの雁首。胴部は断面六角形に折り曲げられ、側面につながれている。内部に羅字竹が残存している。別付けされた火皿は欠損している。5は銅板を整形加工した製品である。総数で約60点の大小破片からなり、攪乱で失われた部分も多く、全体形状や用途は不明。破片にはaのように縦横に折り曲げられて段をもち反り返る湾曲片、cやdのように緩い湾曲のもの、eやfのような断面U字L字形で緩いカーブを持つものがある。aには外から内にあけられた角孔、bにも孔の半欠が見られる。出土状態では、eやfのような破片が径20~30cmで環状に散在し、cやdはその内辺一カ所にかたまり、aは外辺に出ていた。各々の破片の内外にはほぼ全面に漆様物質が付着残存している。全体形状や用途を推定すれば、破片形状や出土状態、内面の漆様物質から、木芯に加工銅板を貼り付け固定した製品、例えば木芯銅板貼りの舌長鏡のようなものと捉えられようか(参考図参照)。

6は「熙寧元寶」と鋳出されている銅一文銭。熙寧元寶は北宋神宗の熙寧元(1068)年初鋳である。両面とも磨滅し文字がつぶれ気味、角孔も各辺が広がっている。首飾りなどの装飾品の部品として使われたものであろう。7は「寛永通寶」と鋳出されている銅一文銭。「寶」字の後ろ二画が「ハ」になる「ハ貝寶」で、寛文八(1668)年以降の新寛永通寶である。さらに、裏面には「佐」字が鋳出され、正徳四(1714)年以降、佐渡国相川で鋳造されたものと見られる。角孔の「寛」と「寶」の間の角が深く抉られていることから、6同様、首飾りなどの装飾品の部品として使われたものであろう。

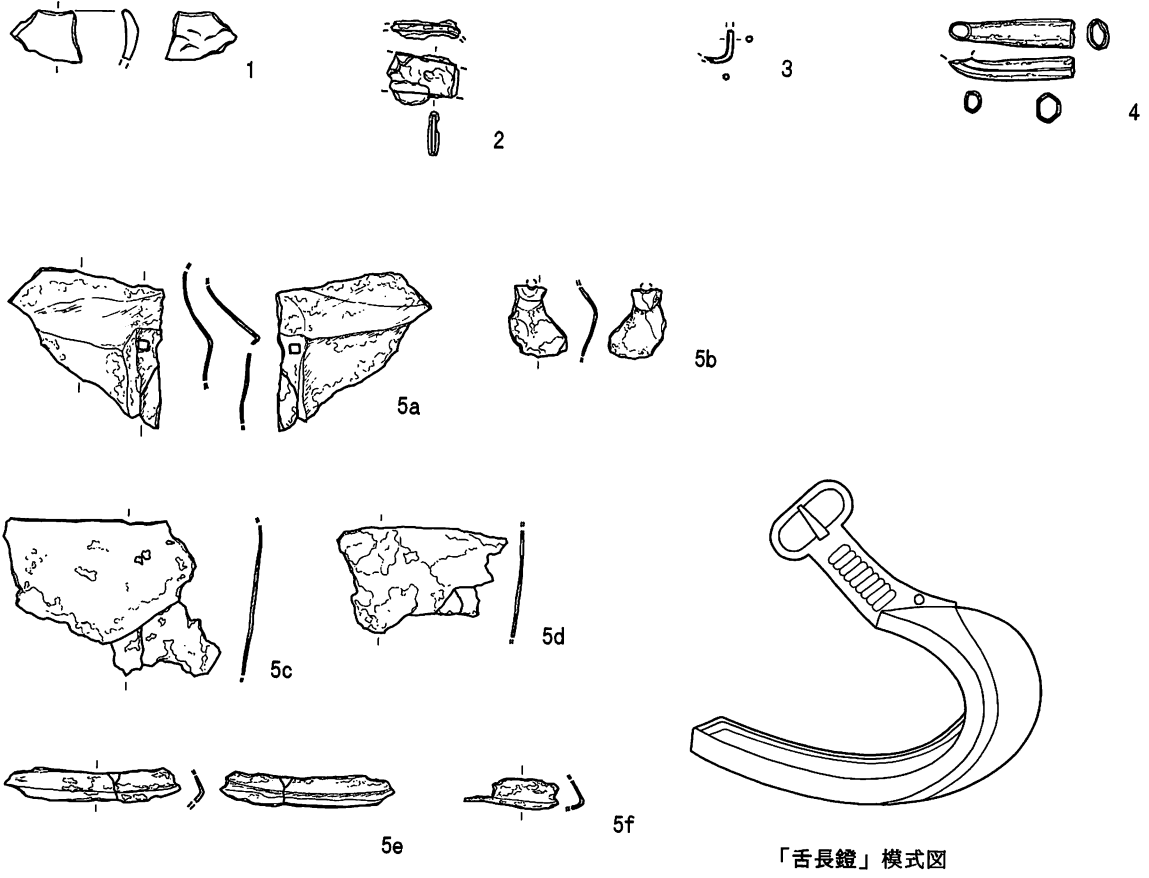
図版Ⅲ-19は、塊状で多孔質の製錬鉄滓と思われる。木炭をかみ込んでいるものもある。

8は金春色(くすんだ緑がかった青色)の非透明なガラス小玉。溶かしたガラスを三回巻いた製作時の螺旋筋が観察できる。装飾品の部品であろう。蛍光X線分析でNaとCaが高い数値を示しことから、アルカリ石灰ガラスであろうと思われる。(三浦)

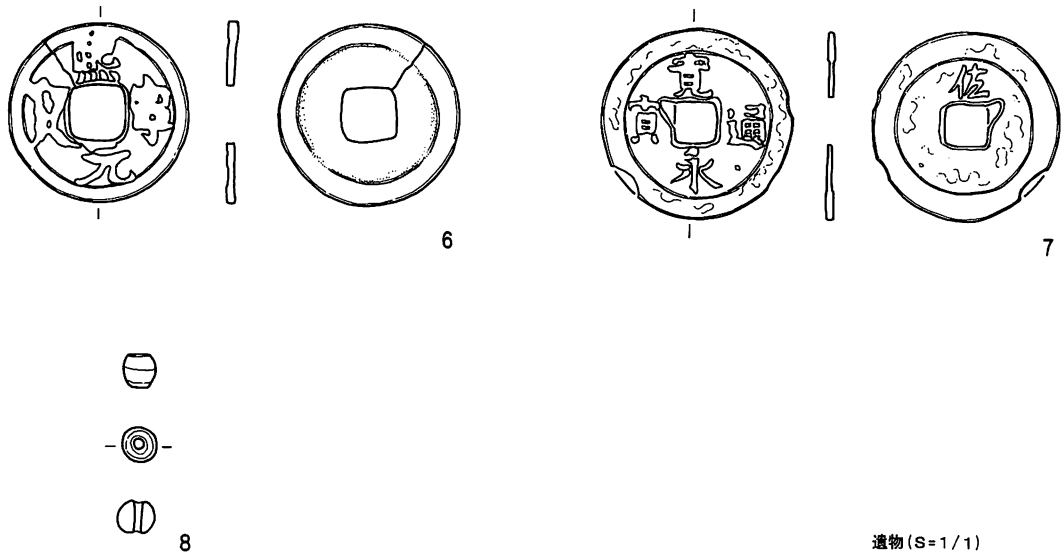
表Ⅲ-7 台地部の掲載金属製品等一覧表

図番号	発掘区	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
Ⅲ-12-1	E18c	攪乱	鉄鍋片	(2.0)	(2.8)	0.5	(4.5)	鉄鉢か
Ⅲ-12-2	I22a	I B	刀子	(2.6)	1.6	0.2	(2.5)	茎部片
Ⅲ-12-3	G10c	I B	鉄製小金具	(1.3)	0.3	0.3	0.6	
Ⅲ-12-4	H18	攪乱	キセル雁首	(4.9)	1.1	0.9	(6.0)	火皿欠損
Ⅲ-12-5	F20d	I B上面	銅板加工製品	—	—	0.1~0.2	(78.9)	舌長鏡か
Ⅲ-12-6	F13c	I B	熙寧元寶	2.4	2.4	0.1	1.9	北宋銭
Ⅲ-12-7	I10a	I B	寛永通寶	2.5	2.5	0.1	(2.1)	佐渡鋳造銭
Ⅲ-12-8	I21a	I B1?	ガラス玉	0.5	0.5	0.5	0.2	小玉
図版番号	発掘区	層位	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
Ⅲ-18	F13a	I B1	鎌	—	—	0.2	(5.8)	
Ⅲ-19	F20d	I B	鉄滓	—	—	—	14.2	塊状滓・木炭かみ込み 分析依頼中
Ⅲ-19	G25d	I B	鉄滓	—	—	—	18.3	塊状滓 分析依頼中

4 金属製品・ガラス製品



遺物 (S=1/3)



遺物 (S=1/1)

図Ⅲ-11 台地部の金属製品・ガラス製品

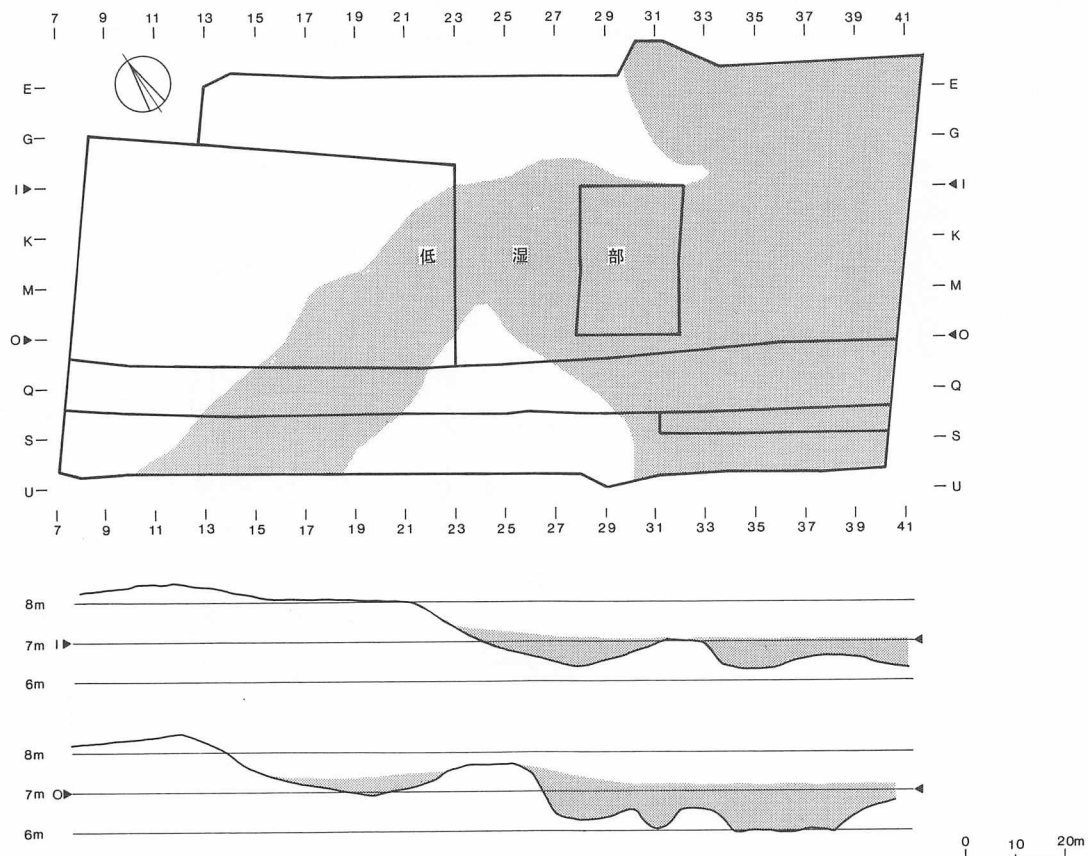
IV 低湿部の調査－ⅡB・ⅠB5・4層－

1 低湿部報告の概要

当遺跡の調査対象の低湿部は、東地区の東・西・南側と、西地区の約半分にあった。このうち東地区は、平成9年度発行の『千歳市ユカンボシC15遺跡(1)北埋調報128』で報告した。

この報告からは、三カ年(1996～98年)で調査した西地区低湿部を層を追って報告することとする。西地区低湿部は、ユカンボシ川の最下流部で、オサツ沼に注ぐ直前の滞水域化した部分の主として左岸に、縄文時代から近代にわたって形成された。この低湿部の層序の細分はI章4節「土層の区分」に掲載してあるので、これに従って今回は、ⅡB層(縄文時代)ⅠB5層(縄文時代晩期～続縄文時代)ⅠB4層(続縄文時代～擦文文化期前葉)の大別分を報告する。ただし、ⅡB層の遺構、土器、石器は平成10年度発行の『千歳市ユカンボシC15遺跡(2)北埋調報133』で報告した。

報告内容はまず、ⅠB5・4層で検出・出土した遺構、土器、石器を節立した。遺構はⅠB4層の杭列1群、土器・石器もわずかの数である。次に、木製品は大別した層ごとにⅡB層、ⅠB5層、ⅠB4層と節を立てた。木製品としたのは、舟材とその道具類・狩猟漁撈具・作業道具類・容器食器類・串類・祭祀具・板・杭や柱等の建材のほか、材料である板材・割材・枝材・丸木材とそれらの加工製品、切片・炭化材・樹皮などで、合計1,205点。西地区木製品総計の約11%である。ただしこの合計は地点計測をして取り上げたもの数であり、製品の混在などを分割していくと、製品数で約1,250点、破片数だと10,000点以上となる。このうち樹種同定に耐える製品数1,094点の同定を行った。木製品樹種同定はⅡB・ⅠB5・ⅠB4層をまとめて報告する。後尾に報告分全製品の一覧表を示してある。(三浦)



図IV-1 低湿部範囲図

2 遺構

2 遺構

当該層で検出できた遺構は、南側低平地から低湿部にかけての杭および杭跡の一群のみである。検出できた杭および杭跡が、柵列・杭列なのか単独の杭か、判別がつけにくい、ほかの層の杭および杭跡の群と同じく、杭列として報告する。遺構Naは杭列-10である。なお杭列-1~6・11は、来年度以降報告する西地区低湿部のIB3層より上の層から検出されている。また、杭列-7~9は東地区低湿部表土層の遺構で、平成9年度発行の『千歳市ユカンボシC15遺跡(1)北埋調報128』で報告済である。

杭列-10 (図IV-2・3, 表IV-14, 図版IV-6・7)

位置 O21, O22, P22区

立地 南側低平地から低湿部にかけての緩い傾斜地

層位 IB4層

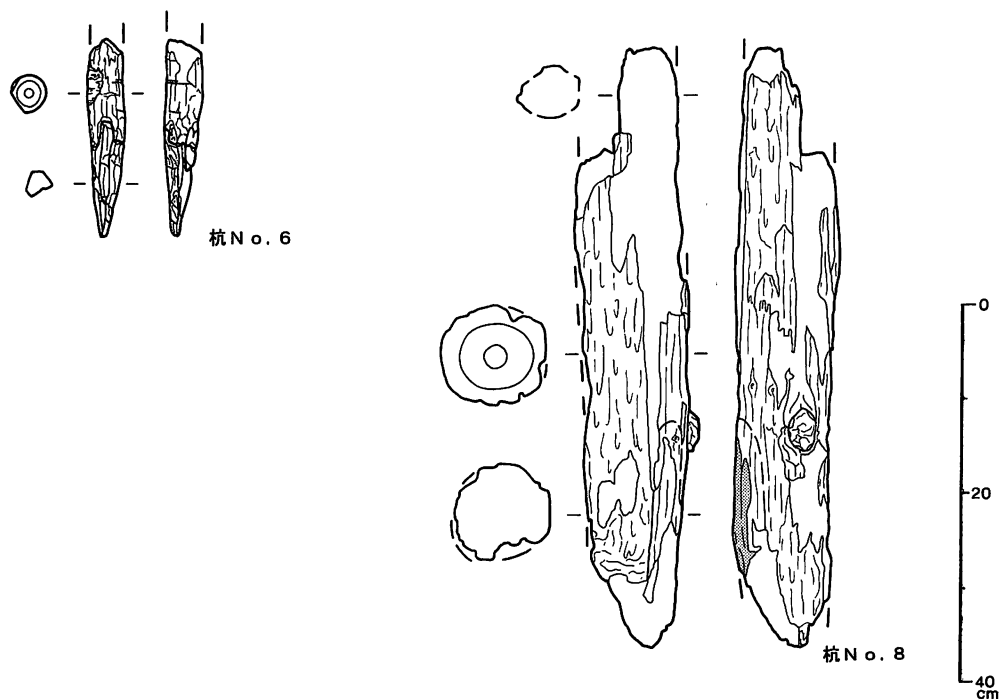
構成 3本の立杭と6本の杭跡が確認できた。低平地地上にNa.1からNa.5の杭跡5本、低湿部にNa.6~8の立杭3本とNa.9の杭跡1本がある。これでコンターラインにほぼ直交する、延長4mの列を構成する。Na.8は径約12cmの太い柱?である。3本以上が直線上に並ぶのは、Na.5-6-8、Na.3-4-8、Na.4-6-7と交錯する3通りがある。ここではコンターラインに直交するNa.5-6-8のエレベーションを図示した。

杭の特徴 立杭の形状や木取・加工はまちまちだが、樹種は3本ともにハンノキ属である。杭跡も深淺・太細そろってはいない。

遺物 1はNa.6の杭先。丸木で樹皮が残り、先端は5面削りである。2はNa.8は柱先。太い幹材で、炭化や枝払い痕が見られる。先端は腐食が著しいが、6面削りと思われる。

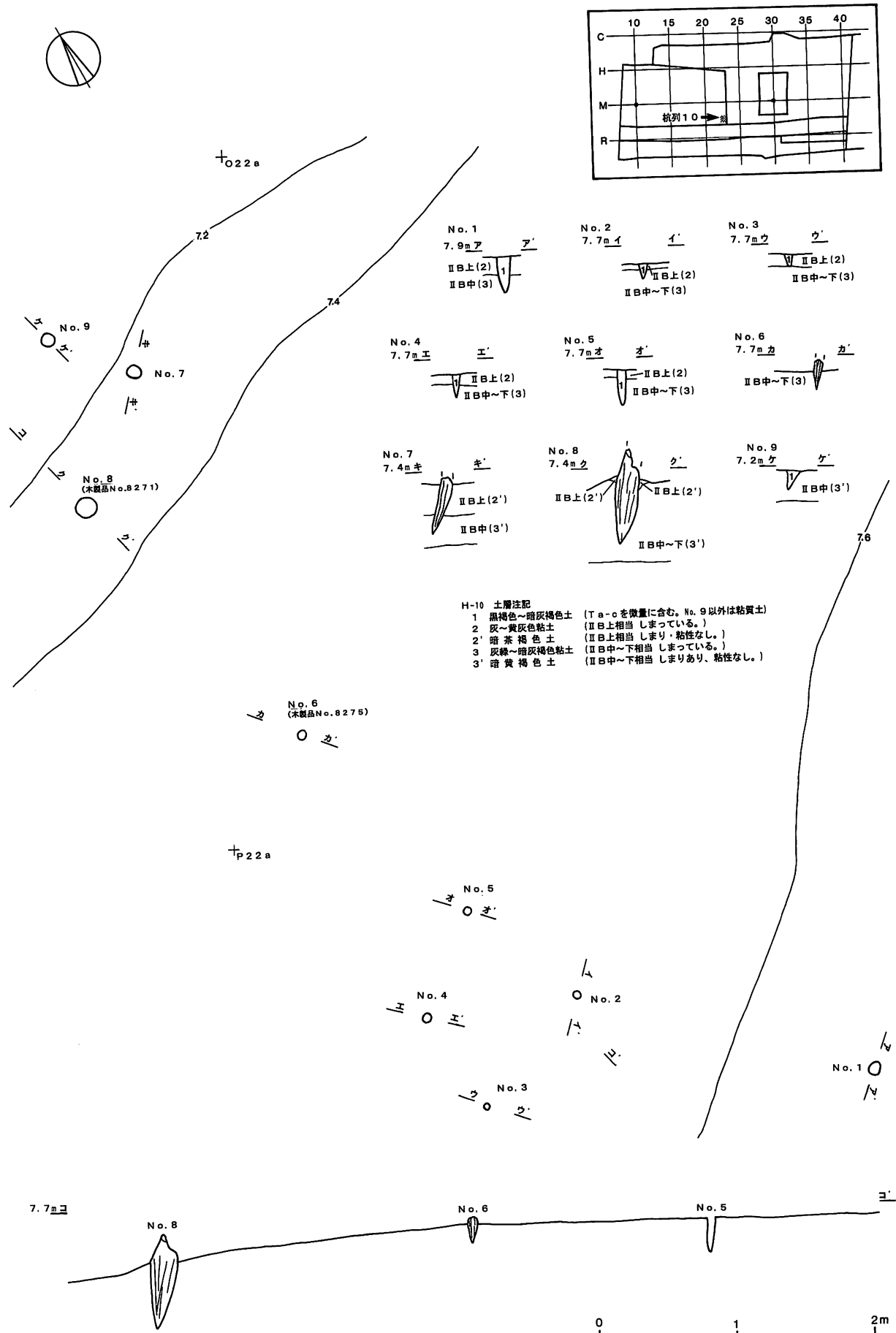
用途 斜面の上り下りのための階段や通路のような施設であろうか。

(三浦)



図IV-2 杭列-10の杭

IV 低湿部の調査



図IV-3 杭列-10

3 土器

3 土器 (図IV-4~8、表IV-1・2、図版IV-20・21)

VI群土器の総計は828点ですべて掲載土器である。掲載土器の取り上げ層位がII黒層であるものはI黒層最下層に包含されていたものである。VI群a類の復元個体は、図IV-4-2が低湿部の落ち際にあり、図IV-4-1が低湿部の中でも標高6.5mと比較的高い部分から出土している。VI群b類の復元個体(図IV-4-3)は低湿部の落ち際にある。VI群c類(図IV-4-4)も低湿部の中でも標高6.5mと比較的高い部分から出土している。VII群土器の総計は5点と極めて少ない。低湿部の落ち際にあり、本来はI B-3層に包含されていたものと考えられる。

縄文土器が台地部に沿って出土しており、この分布はII黒層に包含されている土器とほぼ一致する。I B 4・5層時期に比較的層厚さの薄い斜面部分において土壌の攪拌があったことになる。低湿部にはVI・VII群期・アイヌ文化期の遺構がない。台地部からの投棄であれば台地部I黒層に多数の縄文土器が包含されていることと矛盾する。以上より人為とは考えにくいので水の営力を考える必要がある。

表IV-1 低湿部の掲載土器観察表

IV-4-1

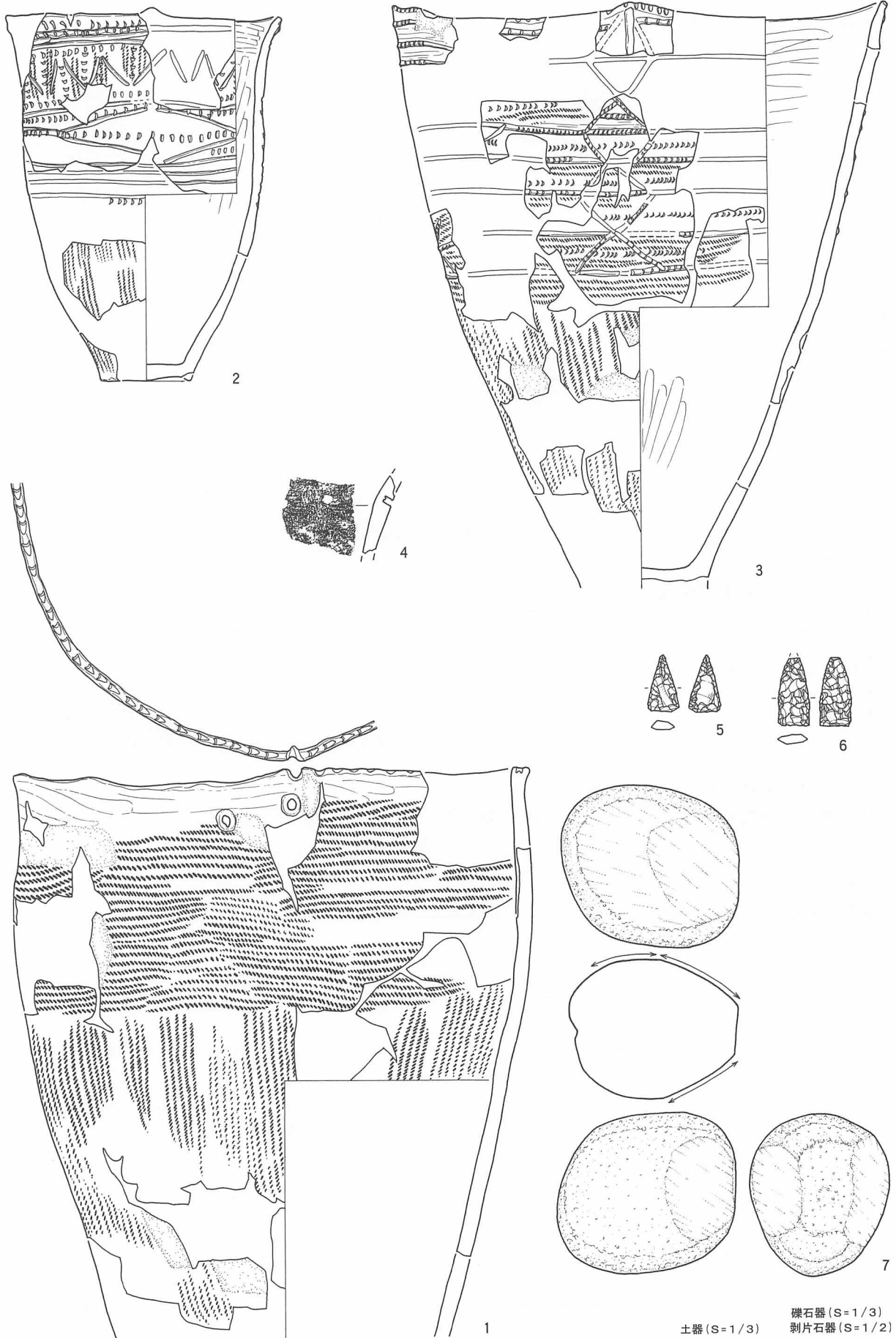
	口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部側面	備考
外 面	粘土紐巻上げ				(欠失)	・外面10YR6/6 (明黄橙色) ・内面10YR3/1 (黒褐色) ・外面磨減 ・補修孔
	突起貼付		?	RL縦走帯縄文		
	ヨコナデ		弱いヨコナデ?			
	突起頂棒状工具側面による押圧 端面半截管状工具による刺突					
内 面	粘土紐巻上げ				(欠失)	・VI群a類 ・上半残存
	?					
	ヨコケズリ ヨコナデ					

IV-4-2

	口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部	備考
外 面	粘土紐巻上げ				(欠失)	・外面10YR5/4 (にぶい黄褐色) ・内面10YR1.7/1 (黒色)
	突起貼付		?			
	横位隆起線			RL縦走帯縄文		
	隆起線の上下を強くヨコナデ		ヨコナデ	横走沈線(4本)		
	横位に刺突(1列)		横走沈線(1本)	菱形とそれを繋ぐ横走沈線		
			横位に刺突(5列,一部4列)			
内 面	粘土紐巻上げ				(欠失)	・VI群b類 後北A式 ・上半2/3残存
	?					
	タテケズリ タテナデ					
	ヨコナデ					

IV-4-3

	口唇部	口縁部	頸部	胴部	底部側面	備考
外 面	粘土紐巻上げ				・外面10YR6/4 (にぶい黄褐色) ・内面10YR3/1 (黒褐色) ・外面磨減	
	突起貼付					
	ナデ			RL縦走帯縄文		
	RL横走帯縄文 弱いヨコナデ					
内 面	突起に縦位隆起線		横位隆起線・刺突(8本) 突起下入・V形隆起線			
	刻み		横位隆起線間に刺突			
	粘土紐巻上げ					
内 面	?				・VI群b類 後北B式 ・1/4残存	
	?					
	タテナデ ヨコナデ					



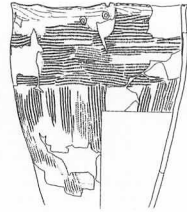
図IV-4 低湿部の土器・石器

3 土器

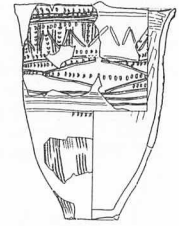
IV-4-1	口頸部	胴部	底部	合計
復元	26	89	0	115
復元残	7	242	0	249
合計	33	331	0	364

IV-4-2	口頸部	胴部	底部	合計
復元	14	7	9	30
復元残	1	4	0	5
合計	15	11	9	35

	3 1	3 2
N		
	3 3	3 3 1
O		



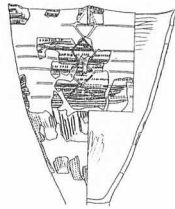
	2 5	2 6	2 7
I	1 1	2	
	3	3	
J	2 2	2 3	1
	3	1	1



IV-4-3	口頸部	胴部	底部	部位不明	合計
復元	23	112	14	—	149
復元残	0	47	1	231	279
合計	23	159	15	231	428

※ 部位不明の231点はすべてF31dから出土

	3 1	3 2
F		
	2 3 1 5	1 5 9
G		



図IV-5 低湿部の復元土器分布

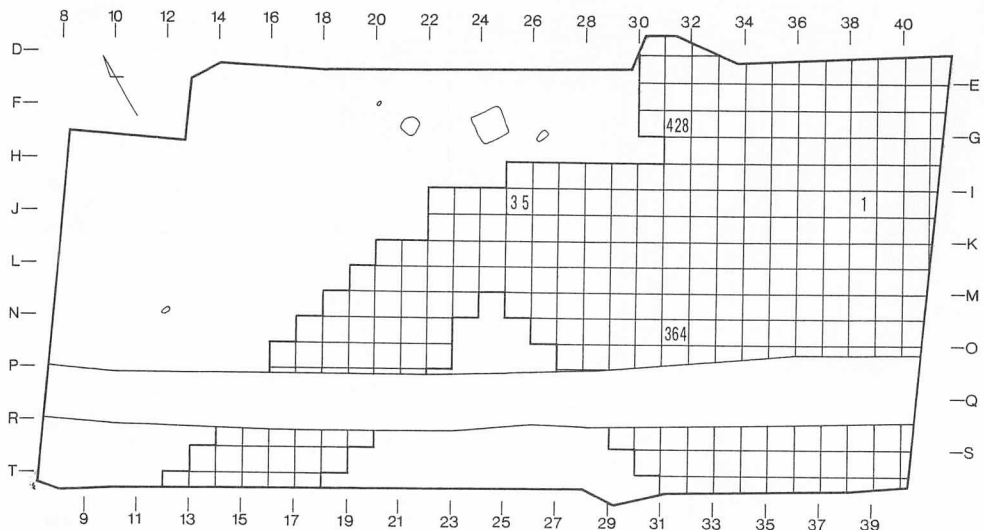
表IV-2 低湿部の掲載土器一覧

図番号	発掘区	層位	分類			
IV-4-1	N31d	IB4	VIa 深鉢	I 25 c	IB4	
IV-4-2	I 25 a	IB3	VIb 後北A式 深鉢	I 25 d	II B	
				I 26 b	"	
				J 26 d	"	
IV-4-3	F31d	II B	VIb 後北B式 深鉢			
IV-4-4	E30b	II B	VIc 深鉢頸部			

表IV-3 低湿部の掲載石器一覧

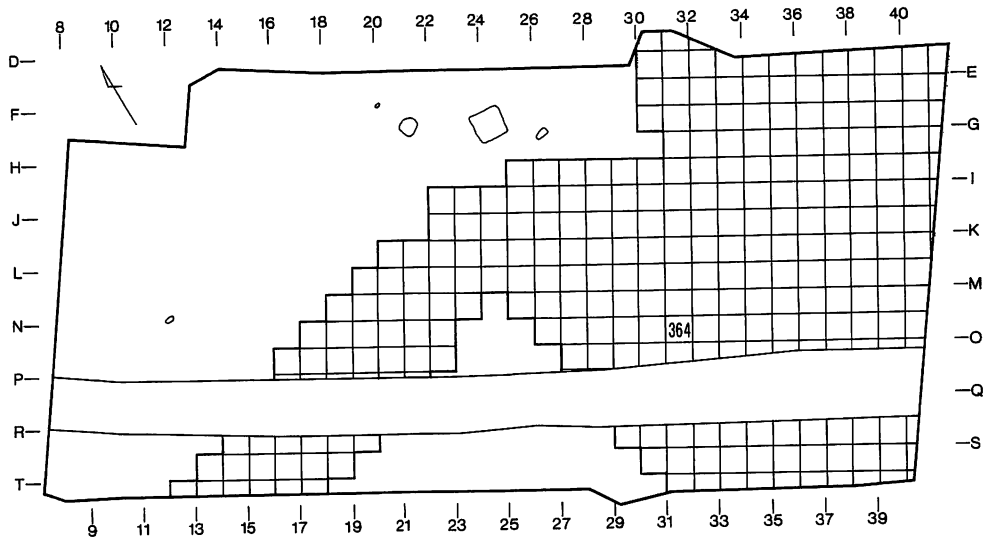
図番号	発掘区	層位	分類	材質	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	備考
IV-4-5	G38c	IB5	石 鍬	黒曜石	1.9	0.9	0.3	0.5	
IV-4-6	K23c	IB5	石 鍬	黒曜石	(2.3)	1.1	0.3	(0.9)	
IV-4-7	R22a	IB4	すり石	安山岩	8.7	9.7	7.3	876.0	

VI群 (828点)

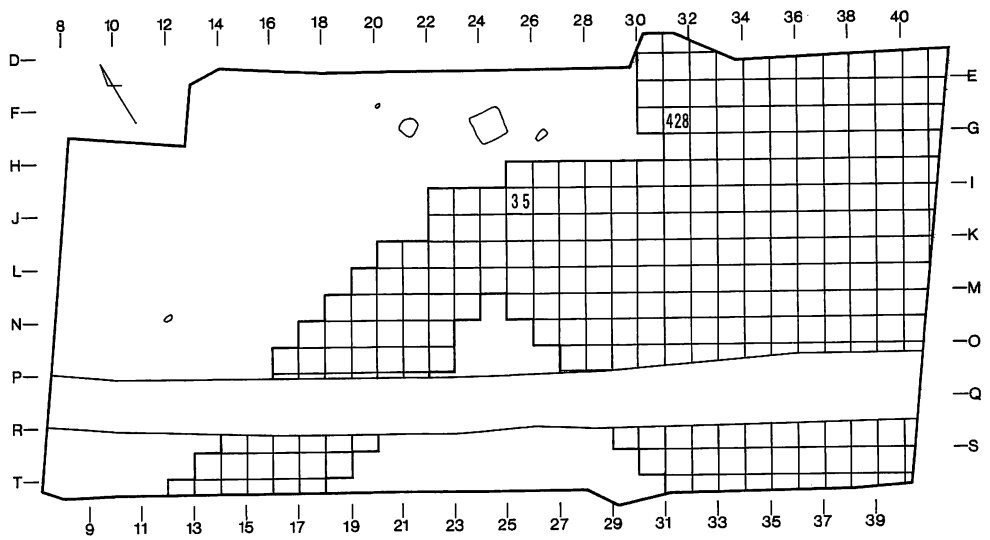


図IV-6 低湿部の土器分布(1)

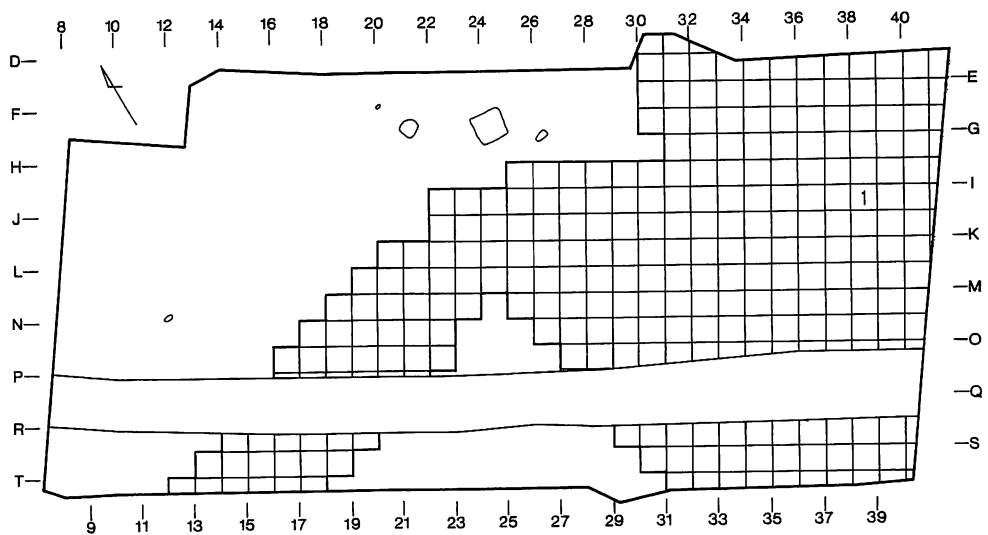
VI群 a (364点)



VI群 b類 (463点)



VI群 c類 (1点)

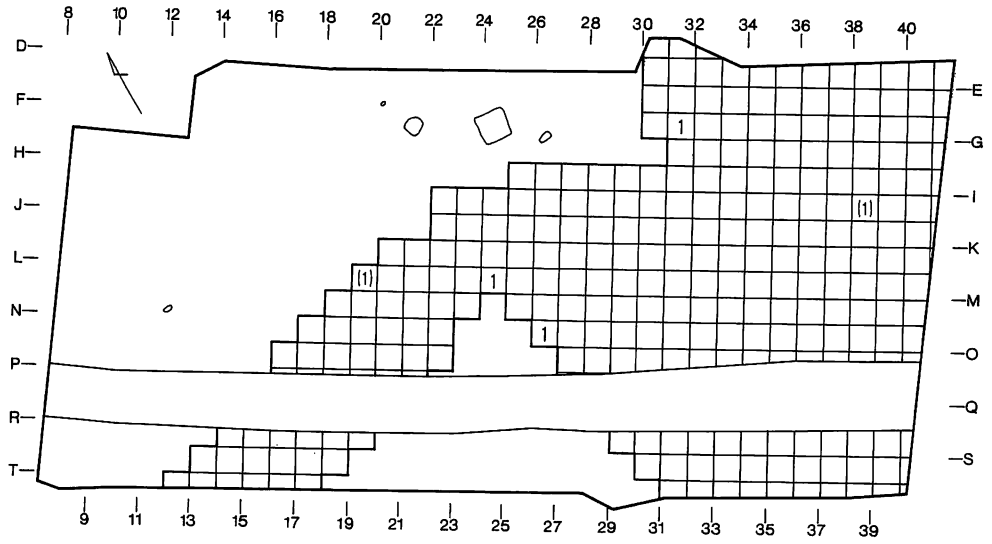


図IV-7 低湿部の土器分布(2)

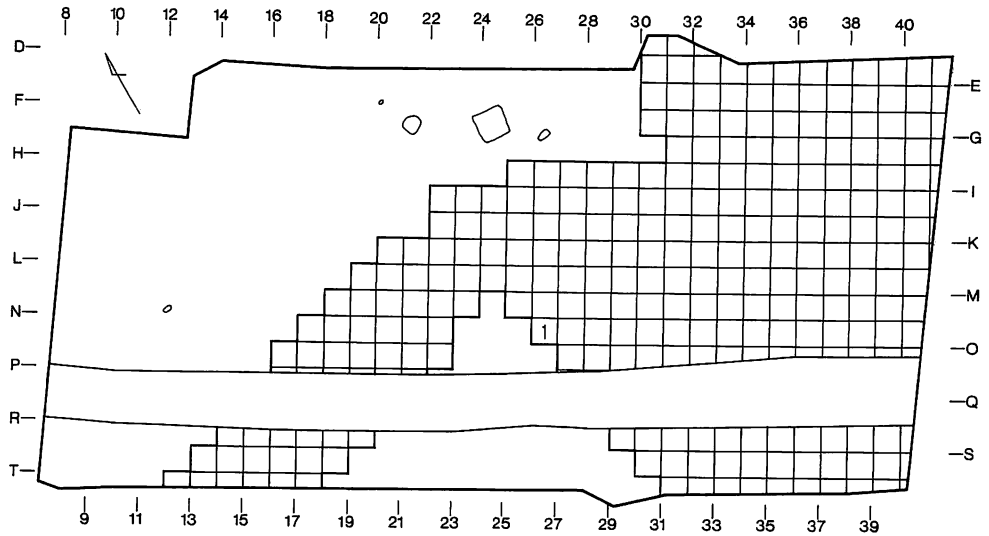
3 土器

Ⅶ群 (5点)

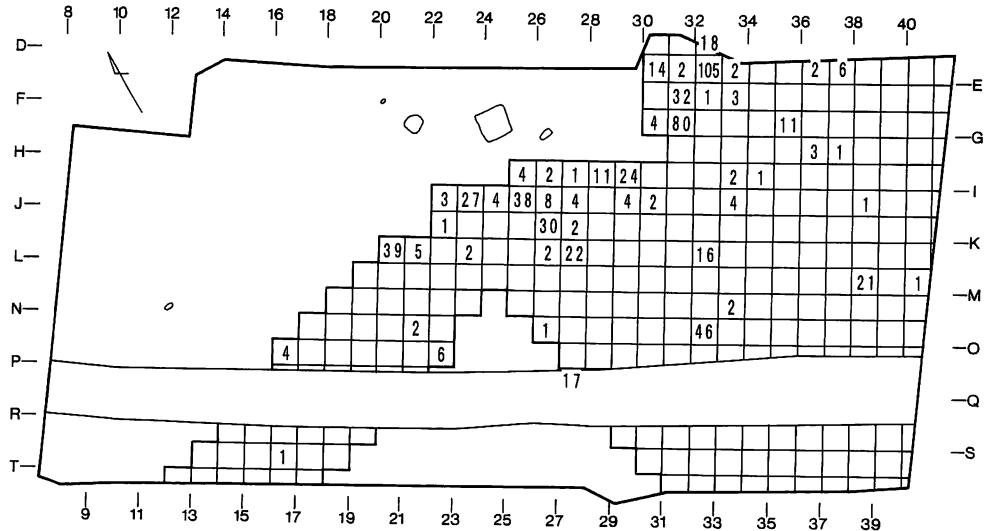
※ () は、攪乱から出土したことを表す。



Ⅶ群 d類 (1点)



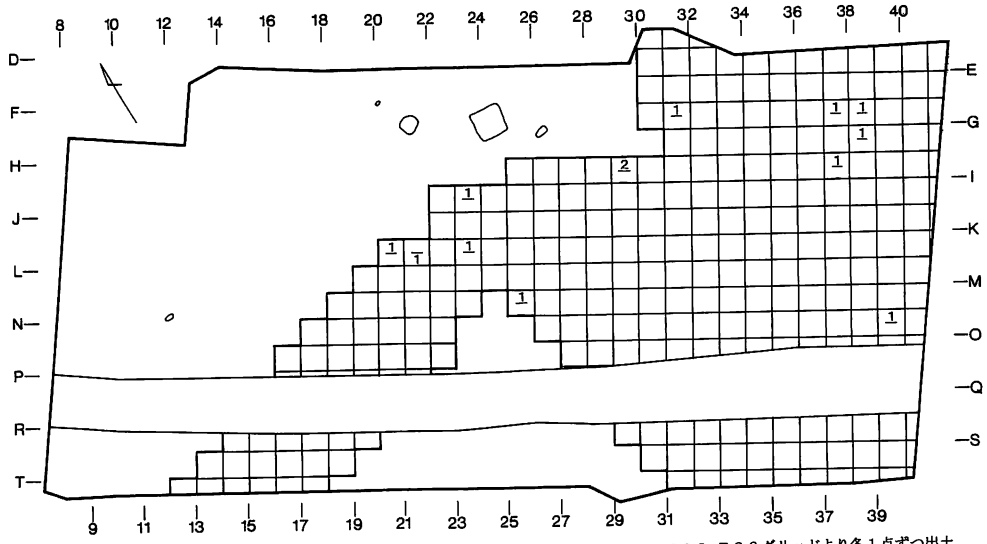
縄文 (6 4 4 4点)



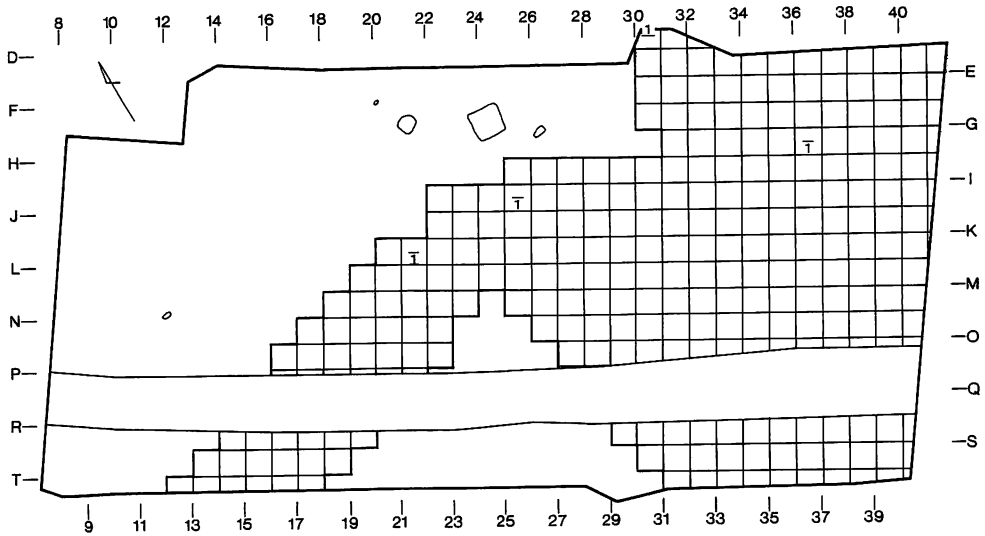
図Ⅳ-8 低湿部の土器分布(3)

IV 低湿部の調査

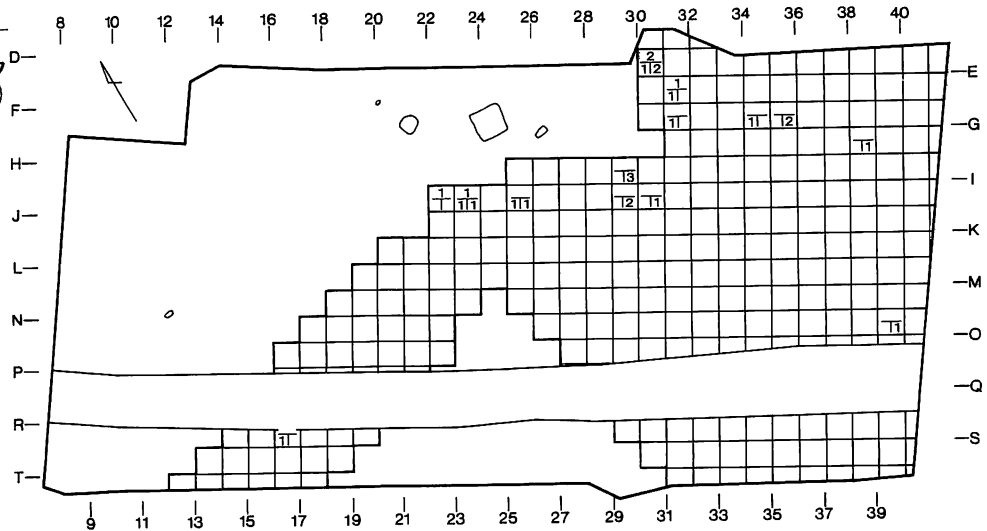
上：石 鏝
(12点)
下：石槍・ナイフ
(1点)



上：つまみ付きナイフ
(1点)
下：スクレイパー
(3点)

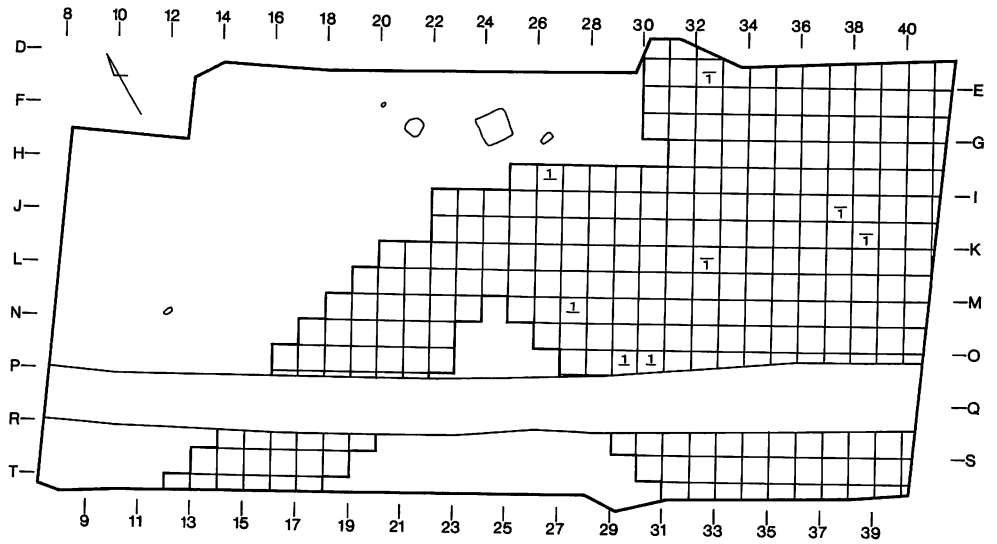


上：石核 (5点)
左下：Rフレイク (7点) | 右下：Uフレイク (14点)

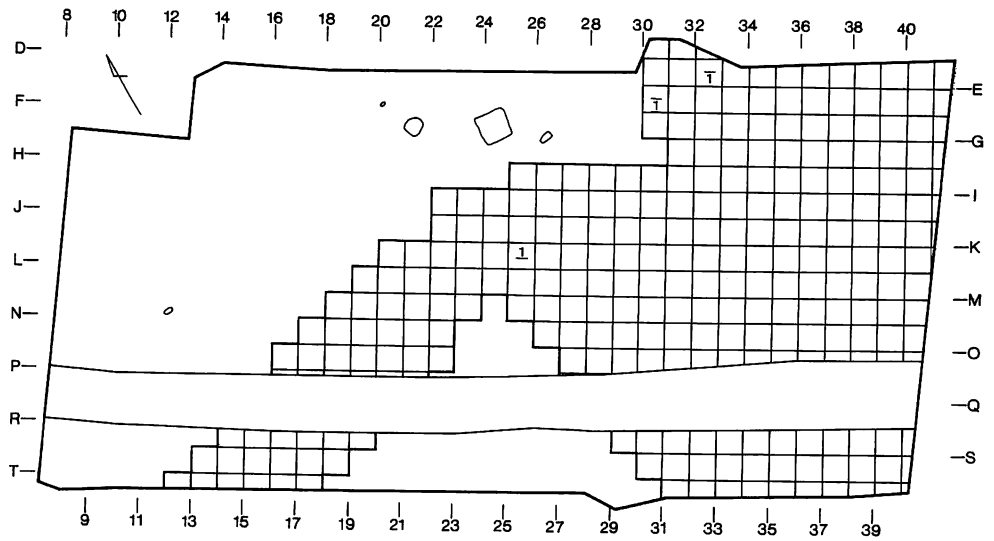


図IV-9 低湿部の石器分布(1)

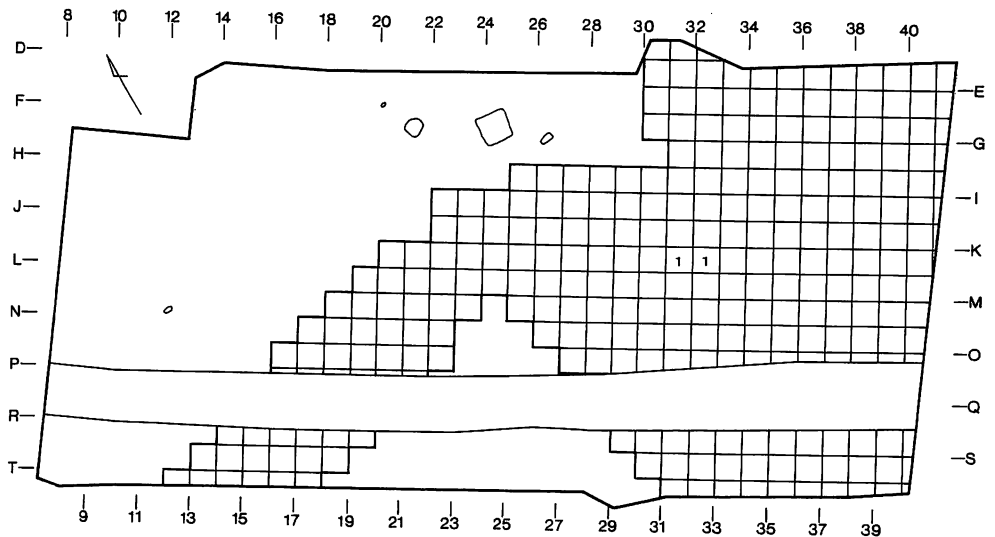
上：石斧
 (4点)
 下：石斧片
 (4点)



上：石斧未製品
 (1点)
 下：石斧フレイク
 (2点)



台石 (2点)



図IV-10 低湿部の石器等分布(2)

1はVI群a類深鉢、口縁端面に半截管状工具による刺突、突起に棒状工具の側面による押圧がある。頸部に横位RL帯縄文、胴部に縦位RL帯縄文。2はVI群b類(後北A式)深鉢、口縁部に横環する隆起線。頸部に沈線で山形・菱形を描く。a段階(鈴木 信 前出 1998年)。3はVI群b類(後北B式)深鉢、突起下に隆起線で菱形を描く。4はVI群c類深鉢の頸部、外面はヨコナデ→半截管状による浅い円形刺突文、内面はヨコケズリ→ナデ。(鈴木)

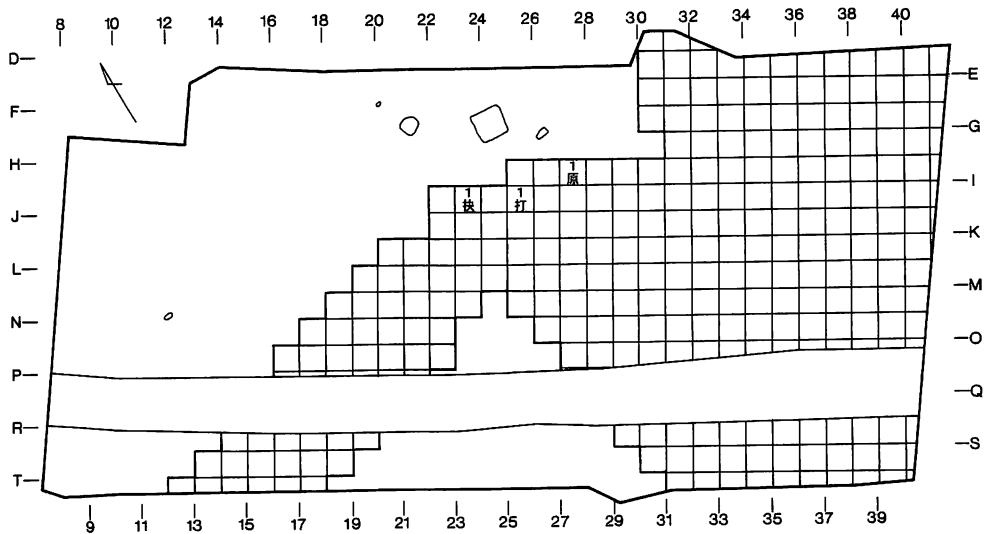
4 石器 (図IV-4・9~12、表IV-3~5、図版IV-21)

石器類は縄文土器と同様にI黒層堆積以降の土壌攪拌によって包含されたものである。礫・礫片はすべて搬入されたものであるが、K~N×32~39の範囲を除いて石器類と同じ原因である可能性が高い。K~N×32~39の分布については縄文土器の分布と重複しないことから、水の営力による土壌攪拌とは考えにくい。人為である可能性が高い。礫・礫片の岩質は安山岩・流紋岩・砂岩・泥岩に偏る。

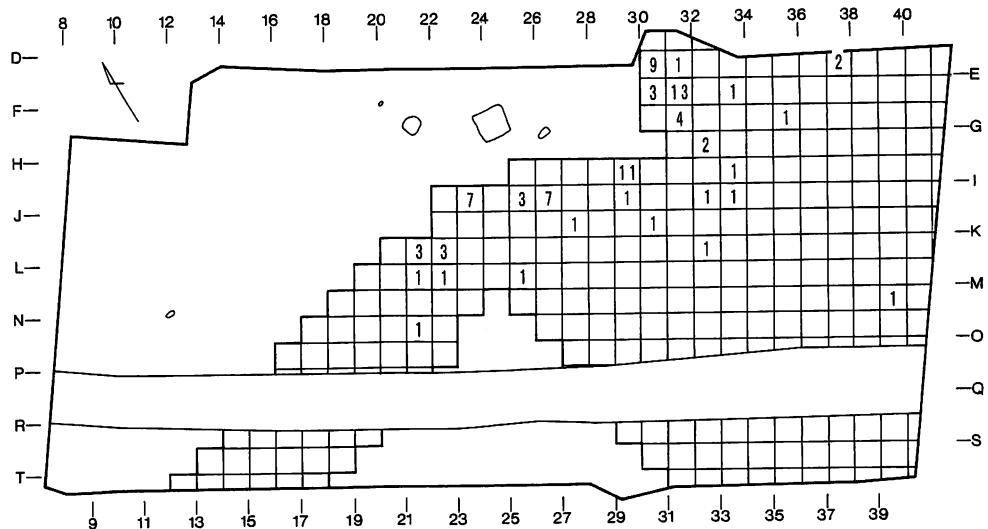
5は平基の石鏃、基部調整が最後に施されている。6は平基の石鏃、基部調整が最後に施されている。先端は欠失。7は垂角礫で、両主面の一部を使用するすり石。(鈴木)

その他の石器
(3点)

原=原石
袂=袂入り石器
打=打ちかきのある礫片



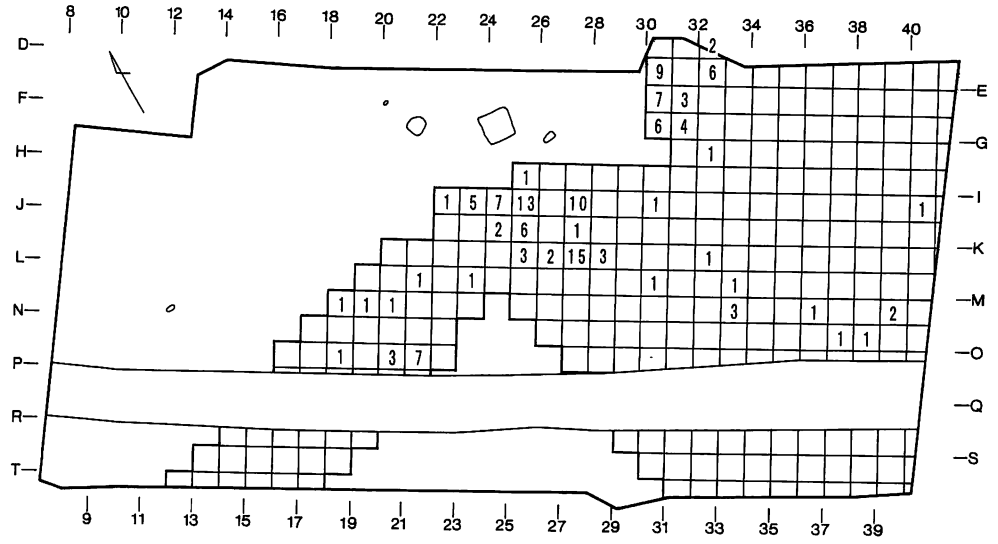
フレイクチップ
(82点)



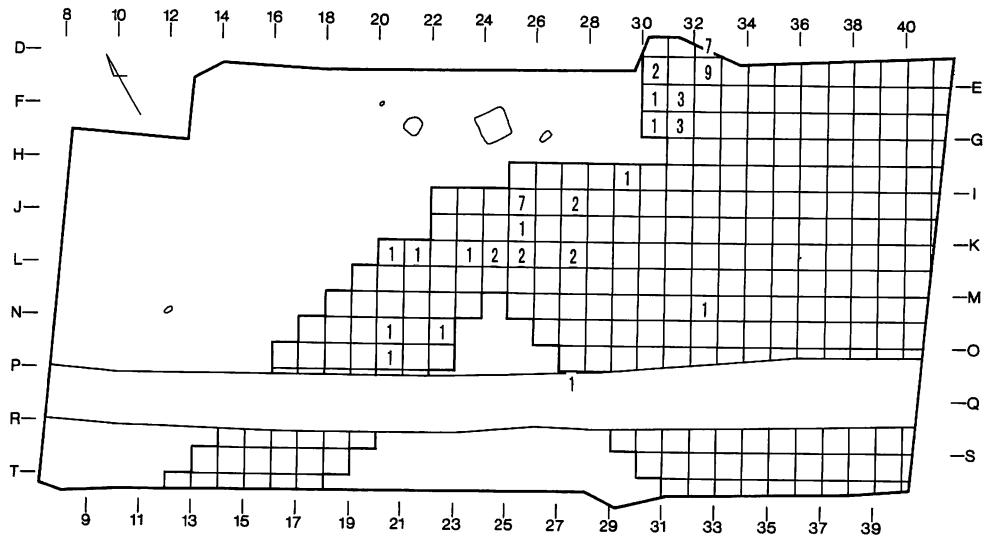
図IV-11 低湿部の石器等分布(3)

4 石器

磔 (136点)



磔片 (51点)



図IV-12 低湿度部の石器等分布(4)

表IV-4 低湿部の石質別礫集計表(1)

		安山岩	流紋岩	砂岩	泥岩	凝灰岩	チャート	片麻岩	片岩	頁岩	その他	軽石	不明	合計
C-32	礫	1	1											2
	礫片	4	3											7
D-30	礫	5	2	1								1		9
	礫片					2								2
-32	礫	2	2									2		6
	礫片	3	3	3										9
E-30	礫	6			1									7
	礫片	1												1
-31	礫		2				1							3
	礫片	2				1								3
F-30	礫	1		1							4 (石炭)			6
	礫片	1												1
-31	礫	2	2											4
	礫片	2	1											3
G-32	礫	1												1
	礫片													0
H-25	礫				1									1
	礫片													0
-29	礫													0
	礫片			1										1
I-22	礫		1											1
	礫片													0
-23	礫	5												5
	礫片													0
-24	礫	2	3	1	1									7
	礫片													0
-25	礫	6	1	3	1		2							13
	礫片	2	3		1							1		7
-27	礫	1	2	3	1	2					1 (石炭)			10
	礫片		2											2
-30	礫											1		1
	礫片													0
-40	礫	1												1
	礫片													0
J-24	礫	1			1									2
	礫片													0
-25	礫	2		1	2				1					6
	礫片				1									1
-27	礫								1					1
	礫片													0
K-20	礫													0
	礫片		1											1
-21	礫													0
	礫片			1										1
-23	礫													0
	礫片	1												1
-24	礫													0
	礫片	2												2
-25	礫	1			2									3
	礫片		2											2
-26	礫	1			1									2
	礫片													0
-27	礫	7		4	3	1								15
	礫片			2										2
-28	礫						3							3
	礫片													0
小計	礫	45	16	14	14	3	6	0	2	0	5	3	1	109
	① 礫片	18	15	7	2	3	0	0	0	0	0	0	1	46

4 石器

表IV-5 低湿部の石質別礫集計表(2)

		安山岩	流紋岩	砂岩	泥岩	凝灰岩	チャート	片麻岩	片岩	頁岩	その他	軽石	不明	合計
K-32	礫				1									1
	礫片													0
L-21	礫						1							1
	礫片													0
-23	礫		1											1
	礫片													0
-30	礫			1										1
	礫片													0
-33	礫	1												1
	礫片													0
M-18	礫				1									1
	礫片													0
-19	礫	1												1
	礫片													0
-20	礫				1									1
	礫片													0
-32	礫													0
	礫片			1										1
-33	礫		1	2										3
	礫片													0
-36	礫			1										1
	礫片													0
-39	礫	2												2
	礫片													0
N-20	礫				1									0
	礫片													1
-22	礫			1										0
	礫片													1
-37	礫	1												1
	礫片													0
-38	礫	1												1
	礫片													0
O-18	礫	1												1
	礫片													0
-20	礫	2		1										3
	礫片	1												1
-21	礫	6	1											7
	礫片													0
P-27	礫													0
	礫片		1											1
小計	礫	15	3	5	3	0	1	0	0	0	0	0	0	27
②	礫片	1	1	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	5
合計	礫	60	19	19	17	3	7	0	2	0	5	3	1	136
①+②	礫片	19	16	9	3	3	0	0	0	0	0	0	1	51

5 木製品の出土状況と表説明

(1) 木製品の出土状況概要

西地区の低湿部全層における木製品の出土状況は、台地縁辺となる西側が濃く、東寄りになるにつれ淡くなっていく傾向にある。西地区で地点計測をして取り上げた木製品の総計は11,050点。製品の混在などを分割していくと、製品数で約12,000点、破片数だと120,000点以上となる。

層ごとの出土傾向は、低湿部の堆積環境と連動するようである。低湿部の形成の大略を珪藻分析の結果（パリノ・サーベイ(株)に依頼、未掲載の中間報告による）で見ると、ⅡB層での環境は流水の影響のある沼沢のような水域であったが、河川の活発化による氾濫性堆積物により、低湿部内に高低差を生じた。Ta-c降下後ⅠB4（部分的にはⅠB3の中位）層までは、流水の影響を多少受ける沼沢地となり、泥炭が発達し湿原が拡大した。ⅠB3層になると池塘のような安定した止水水域となり、ⅠB2層以降では、再び流水の影響を多少受ける湿原状態となる区域もあったようである。木製品はこの低湿部の安定度や流水の影響により、各層ごとに出土状態や出土数に異同をみせる。

全域で安定したⅠB3層の時期には総計の約46%の木製品が、区域的に安定を続けるⅠB2層以降でも総計の約42%が、台地縁辺を中心に出土している。ところが当報告で扱うⅡB・ⅠB5・ⅠB4層では、流水の影響を受けていた沼沢～湿原であったためか、合計でも約11%の出土にとどまっている。図IV-13はⅠB4層以前の木製品の出土位置を執りまとめたものである。なおⅡB・ⅠB5・ⅠB4層各層ごとの概況説明や出土位置図は、後段各節にある。

当報告分の各層の時期は、ⅡB層：縄文時代、ⅠB5層：縄文時代晩期～続縄文時代、ⅠB4層：続縄文時代～擦文文化期前葉と考えられる。特にⅠB4層は、上のⅠB3層が10世紀前葉の降下である白頭山-苦小牧火山灰(B-Tm)を中間に挟む層なので、確実に10世紀以前の擦文文化期の資料を含む点で注目される。

(2) 木製品一覧表の説明

図と写真を掲載し報告する木製品が、ⅠB5・4層で、152点あり（ⅡB層にはない）、これを表IV-10・15～18にまとめてある。また、図・写真未掲載の1,058点の製品等は表IV-6～9・11～13・19～38に各層ごとに一覧表にしてある。以下に、表項目の説明を記しておく。

〔製品番号〕：図と写真の掲載木製品に付した個体番号。層ごとに1からつけた。

〔遺物名称〕：用途がほぼ断定できるものにはその名称を与えた。用途未確定だが似た形状から名をつけたものもある。用途不明の製品は、加工前の材料の形態や材料名をつけ〇〇加工製品とした。

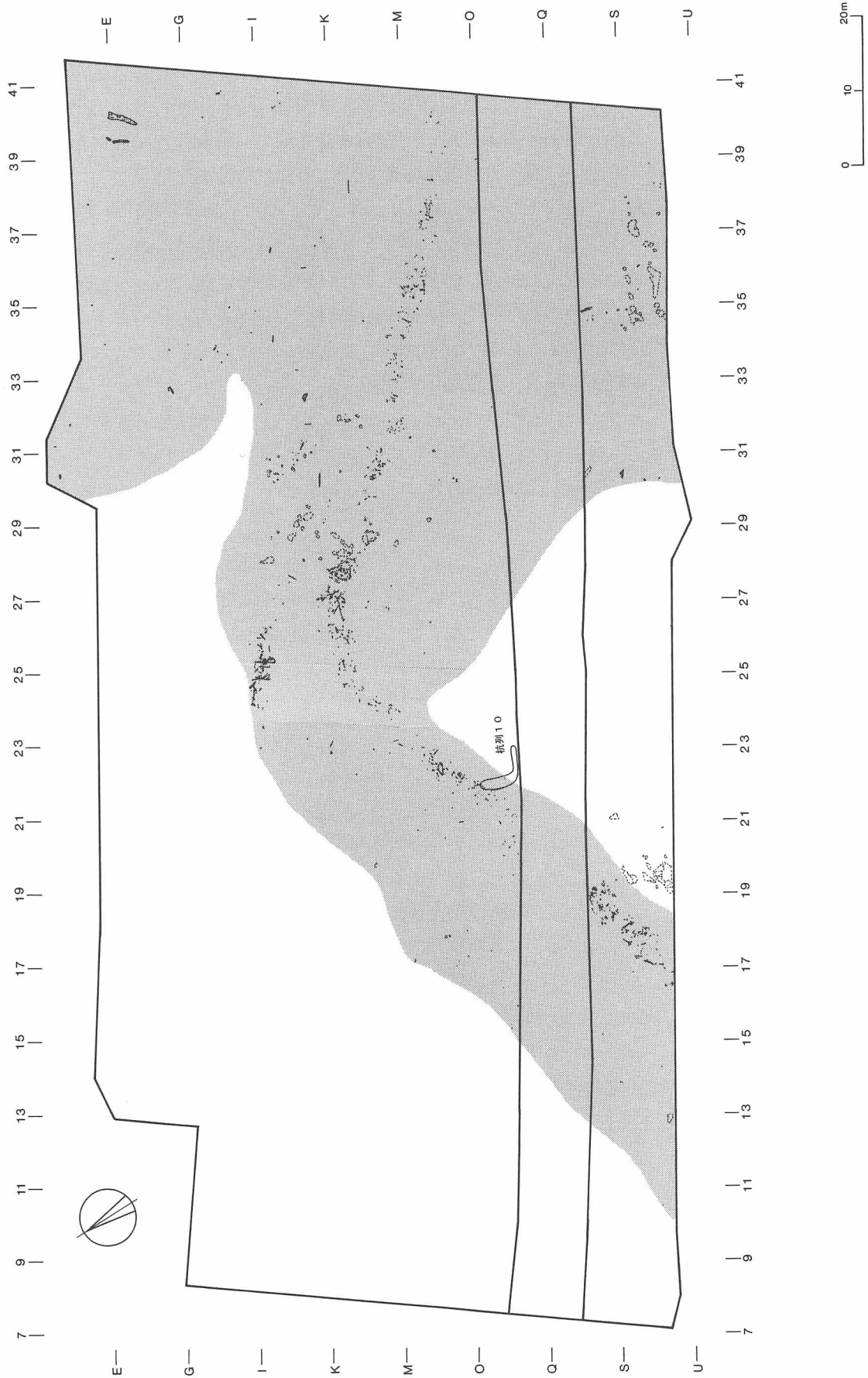
材料品は主に木取りから半割材・割材・偏割材・心持材・板材などの名をつけた。割材・偏割材はさらに細分してある。枝材や幹はその最大径で細枝材（2.0cm未満）・枝材（2.0～4.0cm）・丸木材（4.0cm以上）に分類した。枝分かれ材は、それが利用されそうであれば、股木材と表現した。

建材のうち柱以外は、端部の加工などから組合せ物と判断し、建物の大枠を組むものを建材、細部の組合せ材を建築部材としたものである。ただ、使用部位の特定が難しいため、名称を細分せず、形態上の特徴と推定名を備考欄に記すにとどめた。杭類は、建物や柵など恒久的構築物に関わりそうな太さや長さのあるものを杭（股木杭）。その杭よりも細く仮構築物に関わりそうなものを細杭。利用時に刺し込むような、長さも短く単独か少数組での使用と思われるものを刺し杭とした。

切片は製品製作時の割削片、木端は製品や材料の割折片と考えている。樹皮・炭化材は樹皮・焼痕の項を参照。今回、部分品・破片にも〇〇片とはつけていない。これは埋蔵中や収蔵中に、加工と割れ・折れ・摩耗の区別がつきにくくなっていることによる。あきらかな鉋状工具での打撃的切断痕があるものは、〇〇切断品としてある。

- [発掘区] : グリッド名は全調査区の区画。調査の都合で、②区と南側の狭長な④区に分かれていたため、頭に②と④を付けた。
- [遺物番号] : 取上げや整理作業での番号。②区と④区でそれぞれ1から始まるため、発掘区区分の②と④をつけて読む。
- [木取り] : 板材やそれを利用した製品では、柁目・板目・追柁に分けている。割材やそれを利用した製品で樹心を通して割っているものは、半割・1/4割・1/6割・1/8割・1/12割・1/16割、樹心をはずして割っているものは、偏〇割・心持と分類してある。舟や容器など割り物・巻き物には横木取り・縦木取りがある。椀では横木巻きでも、荒型の取り方や部分で年輪の見えかたに違いがでる。杭や枝材など棒状の材で割りのないものは、丸木と表現している。枝分かれの股木も割りがなければ丸木である。樹種同定で樹皮組織のみの残存と確認されれば樹皮とした。切片などもその落され方により、柁目・板目・偏〇割などの判断をした。
- [樹皮] : 肉眼観察でごく一部にでも樹皮(外皮)が残存していれば、〇印を付す。また、樹種同定で樹皮としたもののほとんどには、外皮組織が必ず残っている。これにも〇印を付した。
- [焼痕] : 一部に焼け焦げのあるものから、焼けていない部分が少しでもあるものまでに〇印を付す。全面炭化しているものは炭化材としており、焼痕とはしていない。
- [樹種] : 基本的には顕微鏡観察で、属までの同定であるが、種まで識別できたものもある。樹種同定については、IV章2節の遺構(杭列-10)分も含めて後節で詳述する。II B・I B 5・I B 4層を合わせて樹種だけでいえば、同定1,072点中トネリコ属が478点約45%と、圧倒的多数を占める。他では、ハンノキ属101点約9%・ヤナギ属89点約8%・アスナロ85点約8%が目立ち、あとの27属9種は各40点以下である。また、スギ・アスナロ・ブナ・トチノキ・タケと近辺で自生せず、持込みと思われる樹種も見られる。層位や製品と樹種の関係で特徴的なものについては、その節や製品項目の説明で触れる。
- [大きさ] : 掲載遺物は水漬き状態で、破片を接合した上での、最大長・最大幅・最大厚・重量である。そのうち特殊な計測位置であれば、計測部位を枠内に記載した。() 付きは、その部分や製品に欠損があることを示す。重量の項に「乾重量」とあるのは、保存処理後の計測値で、長さほかにも反映する。未掲載遺物は、破損や欠損が多いので、その遺物における最も重要な計測値を記すにとどめた。
- [縮尺] : 基本的には舟関係1/6、一般製品や板材1/3、そのやや大型のもの1/6、建材関係1/8とした。ただ、図に入りやすくするために縮率を変えたものもある。
- [備考] : 切痕や種々の加工、集中出土など、製品名などに表現できない情報や特記事項・推定名などを記す。

(三浦)



図IV-13 II B・I B 5・I B 4 層木製品分布図

6 II B層の木製品

6 II B層の木製品 (図IV-14・15、表IV-6~9)

珪藻分析の結果(パリノ・サーベイ㈱に依頼、未掲載の中間報告による)で見ると、II B層での環境は当初、流水の影響のある池沼~沼沢のような水域であったが、河川の活発化による氾濫性堆積物により、低湿部内に高低差を生じたと考えられる。II B層の木製品(主に炭化材)の出土状況も、図IV-14・15に示した如く、これと連動するように、台地縁よりも沖の池沼~沼沢の底あたりに、分布を見ることができる。また、台地から離れがちな低湿部東側中央部での分布は薄い。

II B層で扱う木製品の点数は、表IV-6~9に示した137点である。このうち炭化材が約8割109点を占める。出土層はII B中~下(II B 3以下)層が主体で、II B上(II B 1)層のものは少ない。材としてほとんど形状をなさず、炭化材破片の集中状態で確認されたものが85点もある。一覧表では、この破片集中で確認された85点は、備考に集中範囲の規模を記録した。②258や④393のように集中範囲が4mを超える巨大なものを含めて、2m超が7カ所あり、これらが重なりあう地点もある。大木の倒壊痕・根痕であろうか。集中範囲が50cm~2mの中型が38カ所、10~50cmの小型が33カ所とそのほとんどを占めるが、最小で5cm、10×10cm以下のものも7カ所ある。炭化材全体で土器・石器等や他の木製品が伴出したものはなく、時期や性格は不明である。自然の材が多いかもしれない。取上げ後の土砂除去などによる崩壊を差し引くと、樹種が認定できたもの9点で、そのうち木取りが判明したものは4点でしかない。

炭化材と樹皮4点を除く23点は、出土層がII B上(II B 1)層で、形状や加工痕から見てI B 5・4層からの混入の可能性が高く、特に柁目板・切片などは上位層の同種遺物となんら変わるところがない。しかしながら上位層からの混入遺物の特定もできないため、層としての記録で、ここで取り扱う。

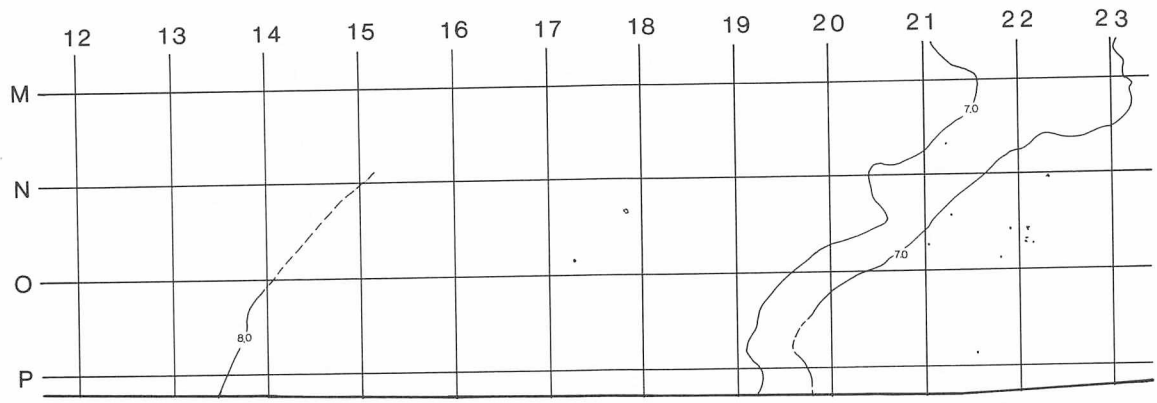
以上の事象から、当遺跡のII B層の時期、縄文時代においては、低湿部の利用度はきわめて低かったと考えられる。

(三浦)

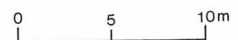
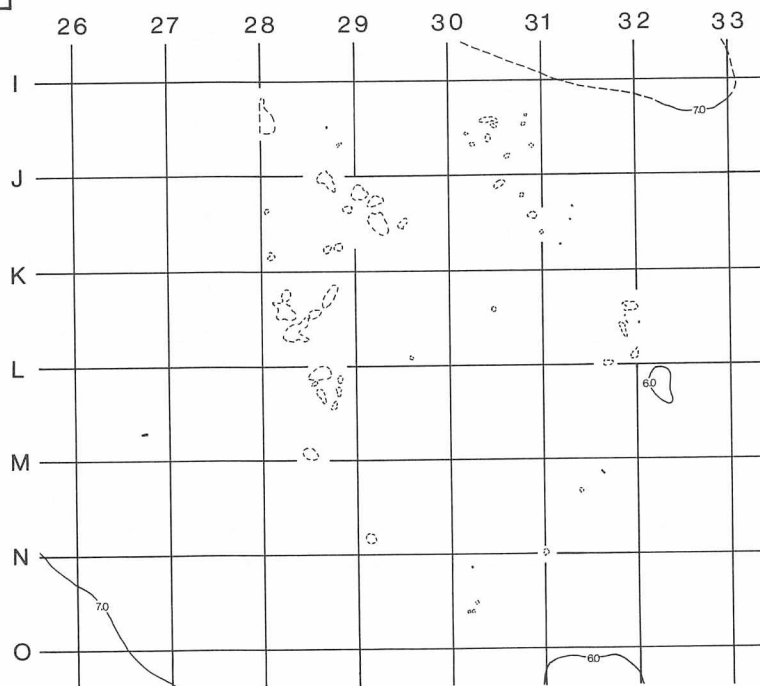
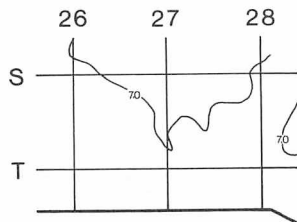
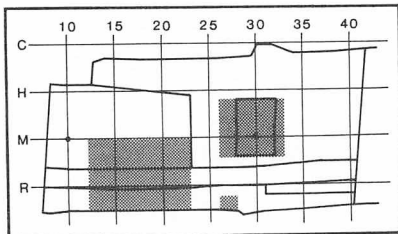
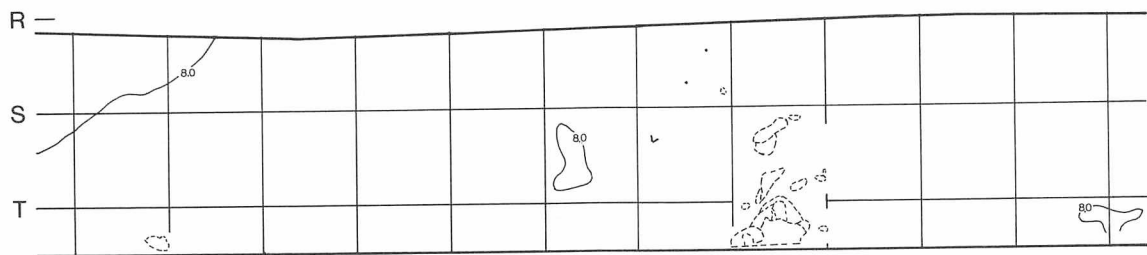
7 I B 5層の木製品 (図IV-16~18、表IV-10~13、図版IV-22~25)

流水の影響のある沼沢のような水域に若干の高低差を生じたII B層の上に、Ta-cが降下しその後、I B 5層の低湿部を形成した。珪藻分析の結果で見ると、多少の流水の影響を受ける沼沢~湿地域となり、泥炭の発達が目立って行くと考えられる。II B層の高低差やTa-c降下の影響か、低湿部東側では形成されないところもある。この層は黒褐色腐植土層で、部分的には腐植未発達の泥炭層で、Ta-cと混合する部分もある。昨年度報告『ユカンボシC15遺跡(2)北埋調報133』掲載のEラインなど、ごく一部で下部にシルト質や砂質が多く混合し、上部の方が腐植が発達しているなど、色や未腐植分の違いで上下に分層できることがある。層厚5~15cmで、少量の木製品や土器が出土する。縄文時代晩期~続縄文時代に相当する層である。I B 5層の木製品の出土状況は、図IV-16に示した如く、K 26・27、L 32・33、M 36・37区と断続的な帯状で、低湿部のより低い部分に分布を見ることができる。また、出土状況図では、1996年度調査区での分布が途切れている。これは、当時の調査でI B 5層を認識できていなかったことによるもので、至らなかった調査を反省している。

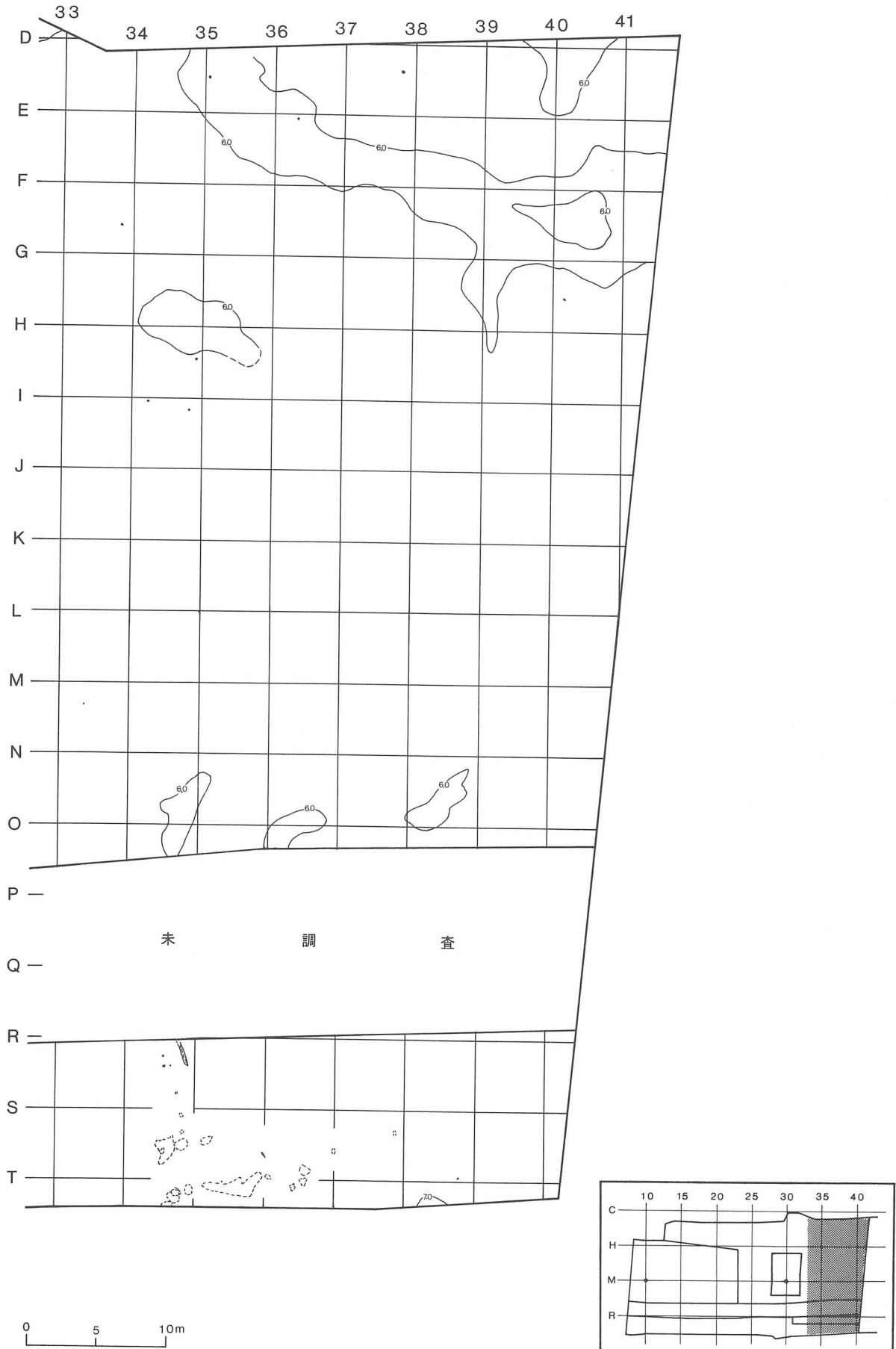
I B 5層で扱う木製品の点数は、117点である。そのうち21点を図示し、図IV-17・18、表IV-10、図版IV-22~25に掲載した。他の96点は表IV-11~13にデータのみを示した。ただ、上記の如く1996年度分はI B 4層に集約されている可能性がある。また、I B 4層の遺物の分布からみてI B 5層への少量の混入は否定できないが、当該層の記録として報告する。層の状況や出土品からすると、当遺跡のI B 5層の時期、縄文時代晩期~続縄文時代においては、低湿部の利用度が徐々に高まってきたものと考えられる。



Q— 未 調 査



図IV-14 II B層木製品分布図(1)



图IV-15 II B層木製品分布图(2)

表IV-6 II B層未掲載木製品一覧(1)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備考
柱目板	② H26c	6637	柱目			アスナロ	幅 2.0	
板材	② N22b	8347	柱目			カエデ属	幅 4.2 厚さ 1.2	
割材	② E36a	1365	1/4割		○	コナラ属	幅 3.5	
割材	② F33c	1378	1/8割		○	コナラ属	幅 4.9	
偏半割材	② I34a	1441	偏半割		○	樹皮	幅 4.8	
半割材	② G34c	6636	半割		○	コナラ属	幅 5.4	
半割材	② N22b	8349	半割			トネリコ属	幅 4.0	
心持材	② M21b	8281	心持			コナラ属	幅 5.9	
細枝材	② K22	9836	丸木			トネリコ属	径 1.6	切痕
細枝材	④ T26a	380	丸木			イヌエングジュ	径 1.8	
枝材	② K30ad	1161	丸木			トネリコ属	径 3.3	切痕
枝材	② M31a	1224	丸木			トネリコ属	径 3.6	
枝材	② G40b	1372	丸木		○	クワ属	径 3.2	切痕
枝材	④ S35c, S36b	247	丸木			クワ属	径 2.4	
枝材	④ S18a	371	丸木			トネリコ属	径 3.8	切痕
枝材	④ R34d	1130	丸木		○	トネリコ属	径 2.0	切痕
丸木材	④ S18a	370	丸木			トネリコ属	径 4.7	
切片	② L31b	1263	板目			トネリコ属	幅 3.9	
切片	② N22a	8340	偏割			トネリコ属	幅 3.6	
切片	② N22b	8346	板目			コナラ属	幅 5.0	
切片	② N22b	8348	偏割			トネリコ属	幅 2.9	
切片	② N17b	8524	板目			トネリコ属	幅 8.3	
切片	② N21c	8351	偏割			トネリコ属	幅 2.7	
木端	④ S38c	246	板目			キハダ属	計測不能	
炭化材	② K28a	1138	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 150×100cm
炭化材	② K28b	1139	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 160×120cm
炭化材	② K28ad	1140	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 140×40cm
炭化材	② K28d	1141	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 68×40cm
炭化材	② K28d	1142	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 137×50cm
炭化材	② K30ad	1143	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 100×30cm
炭化材	② K30b	1144	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 45×12cm
炭化材	② K30b	1145	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 30×22cm
炭化材	② K30b	1146	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 17×10cm
炭化材	② K30d	1147	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 10×10cm
炭化材	② K30d	1148	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 20×15cm
炭化材	② K30c	1149	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 30×20cm

表IV-7 II B層未揭載木製品一覽(2)

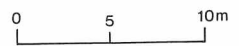
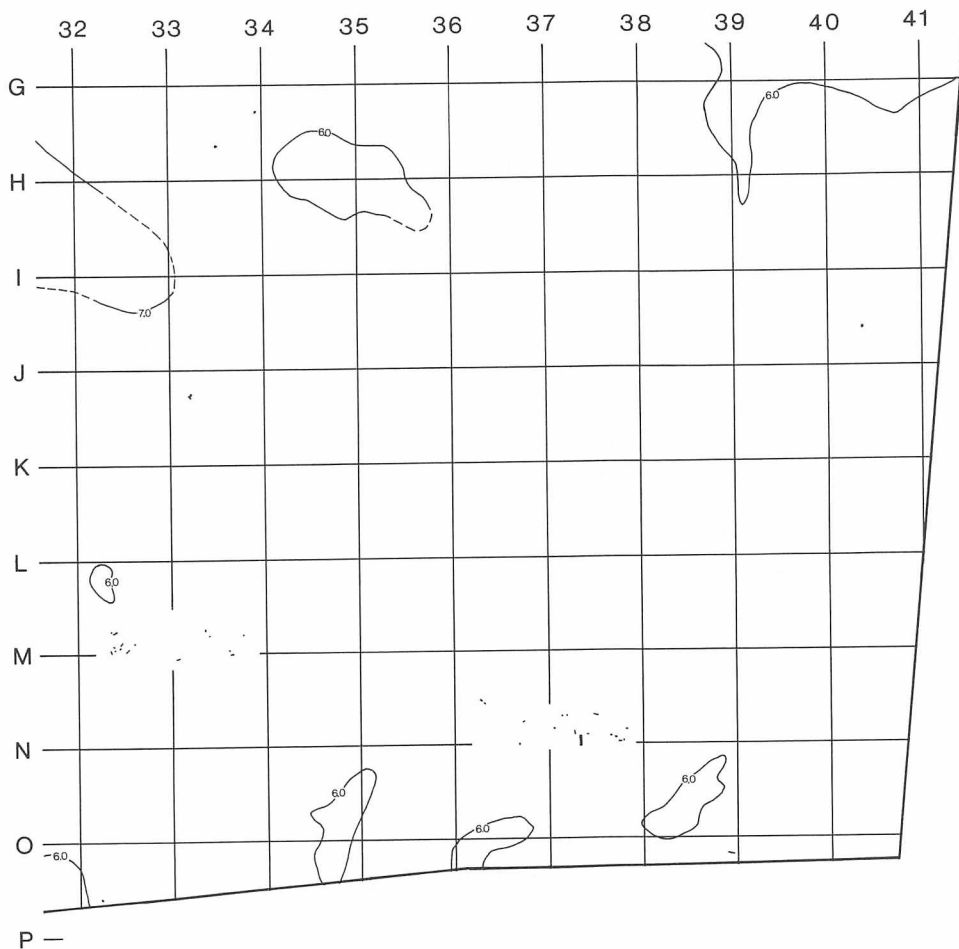
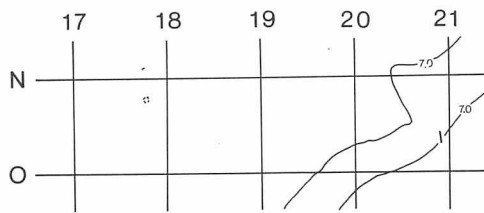
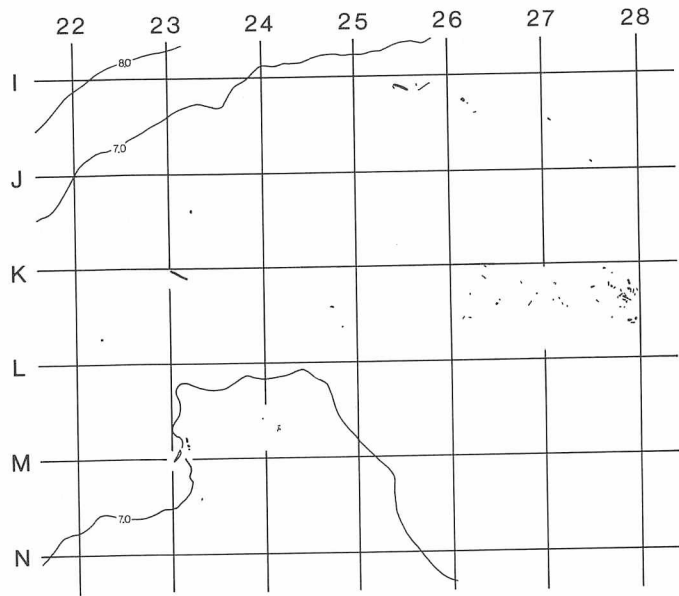
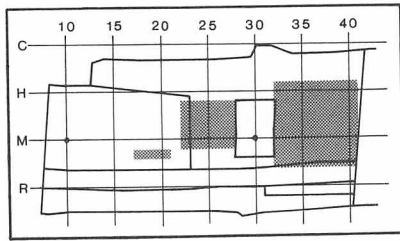
遺物名稱	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備考
炭化材	② K 30 c	1 150	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 20×15cm
炭化材	② L 30 d	1 151	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 60×30cm
炭化材	② L 30 d	1 152	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 23×20cm
炭化材	② K 30 a b	1 153	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 37×25cm
炭化材	② L 30 d	1 154	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 40×30cm
炭化材	② L 30 c	1 155	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 13×10cm
炭化材	② L 29 a b c d	1 156	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 55×28cm
炭化材	② K 31 d	1 162	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 50×25cm
炭化材	② K 31 c	1 163	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 80×35cm
炭化材	② K 31 d	1 164	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 10×10cm
炭化材	② K 31 d	1 165	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 90×45cm
炭化材	② K 31 d	1 166	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	② K 31 c	1 167	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	② J 30 a	1 173	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	② L 28 a d	1 176	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 118×70cm
炭化材	② L 28 d	1 177	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 27×18cm
炭化材	② L 28 d	1 178	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 90×30cm
炭化材	② L 28 d	1 179	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 33×22cm
炭化材	② L 28 d	1 180	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 50×27cm
炭化材	② L 28 d	1 181	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 40×20cm
炭化材	② L 29 a b	1 182	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 70×30cm
炭化材	② L 29 a	1 183	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 40×22cm
炭化材	② K 29 b, L 29 a	1 184	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 235×100cm
炭化材	② L 28 b c	1 185	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 80×50cm
炭化材	② K 30 b	1 186	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 70×22cm
炭化材	② K 30 a	1 187	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 25×20cm
炭化材	② I 28 a	1 189	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 170×80cm
炭化材	② J 28 a	1 191	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 25×12cm
炭化材	② J 28 b	1 192	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 40×30cm
炭化材	② J 28 c	1 193	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 45×35cm
炭化材	② J 28 c	1 194	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 40×33cm
炭化材	② I 28 c, J 28 d	1 195	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 113×70cm
炭化材	② J 28 d	1 196	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 50×33cm
炭化材	② J 28 d, J 29 a	1 197	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 80×80cm
炭化材	② J 29 a	1 198	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 88×55cm
炭化材	② J 29 a b	1 199	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 145×85cm

表IV-8 II B層未掲載木製品一覽(3)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備考
炭化材	② I 28 d	1 201	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	② I 28 c	1 202	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 10×10cm
炭化材	② M 31 a	1 213	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 40×27cm
炭化材	② N 30 a	1 214	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 5×5cm
炭化材	② M 29 b	1 215	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 28×23cm
炭化材	② N 30 a	1 216	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 7×7cm
炭化材	② N 30 a	1 217	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 7×5cm
炭化材	② N 30 a	1 218	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 5×5cm
炭化材	② K 29 c	1 236	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 23×22cm
炭化材	② M 31 c, M 32 b, N 31 d, N 32 a	1 252	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 72×20cm
炭化材	② I 28 c	1 253	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	② I 28 c	1 255	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	② D 35 b	1 288	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	② D 37 d	1 289	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	② I 34 d	1 439	心持			トネリコ属	幅 5.0	
炭化材	② L 26 c	3 787	木取不明			ツルアジサイ	計測不能	
炭化材	② H 33 c	6 219	樹皮	○		樹皮	幅 2.9	
炭化材	② G 35 c	6 635	木取不明			カツラ	幅 3.7	
炭化材	② O 21 c	8 274	1/4割			トネリコ属	幅 3.6	
炭化材	② N 22 a	8 341	偏半割			トネリコ属	幅 3.5	
炭化材	② N 21 c	8 356	木取不明			トネリコ属	計測不能	
炭化材	② N 21 a	8 362	木取不明			トネリコ属	計測不能	
炭化材	② N 17 d	8 499	木取不明			ニレ属	計測不能	
炭化材	④ S 37 a	1 71	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 30×18cm
炭化材	④ S 20 c	2 17	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 75×70cm
炭化材	④ S 20 c	2 18	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 98×47cm
炭化材	④ T 20 d	2 19	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 57×37cm
炭化材	④ S 36 b	2 48	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 47×17cm
炭化材	④ T 36 a	2 49	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 43×40cm
炭化材	④ S 36 c, T 36 a	2 50	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 65×45cm
炭化材	④ S 36 c	2 51	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 67×57cm
炭化材	④ S 36 c, S 37 b	2 52	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 35×13cm
炭化材	④ S 35 a	2 53	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 87×60cm
炭化材	④ S 34 d	2 55	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 25×22cm
炭化材	④ S 34 c d	2 56	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 95×75cm
炭化材	④ S 34 c	2 57	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 40×27cm

表IV-9 II B層未掲載木製品一覽(4)

遺物名稱	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備考
炭化材	④ S 35 c, T 35 c d	258	木取不明			同定不能	計測不能	集中範圍 440×160cm
炭化材	④ T 34 d	259	木取不明			同定不能	計測不能	集中範圍 55×40cm
炭化材	④ T 34 d	260	木取不明			同定不能	計測不能	集中範圍 102×95cm
炭化材	④ S 34 d	299	木取不明			同定不能	計測不能	集中範圍 23×15cm
炭化材	④ S 34 a b c d	300	木取不明			同定不能	計測不能	集中範圍 222×150cm
炭化材	④ T 34 d	303	木取不明			同定不能	計測不能	集中範圍 70×35cm
炭化材	④ T 34 d	304	木取不明			同定不能	計測不能	集中範圍 75×52cm
炭化材	④ S 19 a d	387	木取不明			同定不能	計測不能	集中範圍 215×90cm 3880上
炭化材	④ S 19 a	388	木取不明			同定不能	計測不能	集中範圍 150×100cm 3870下
炭化材	④ S 19 b c	389	木取不明			同定不能	計測不能	集中範圍 235×85cm 3900下
炭化材	④ S 19 b	390	木取不明			同定不能	計測不能	集中範圍 90×28cm 3890上
炭化材	④ T 19 a	391	木取不明			同定不能	計測不能	集中範圍 45×30cm
炭化材	④ T 19 a d	392	木取不明			同定不能	計測不能	集中範圍 345×(230)cm 3930上
炭化材	④ T 19 a d	393	木取不明			同定不能	計測不能	集中範圍 430×(270)cm 3920下
炭化材	④ T 12 d	646	木取不明			同定不能	計測不能	集中範圍 137×83cm
炭化材	④ S 17 b	783	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	④ S 16 a	908	木取不明			同定不能	計測不能	集中範圍 70×55cm
炭化材	④ S 16 d	909	木取不明			同定不能	計測不能	集中範圍 32×28cm
炭化材	④ R 18 c	1018	木取不明			同定不能	計測不能	集中範圍 28×18cm
炭化材	④ R 18 b	1055	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	④ R 18 d	1056	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	④ R 34 d	1107	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	④ R 34 c	1108	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	④ R 34 d	1117	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	④ R 34 a d	1118	1/4割			コナラ属	幅 5.6	
樹皮	② J 31 b	1171	樹皮	○		樹皮	幅 1.8	
樹皮	② J 31 a	1172	樹皮	○		樹皮	幅 1.7	
樹皮	② N 22 a	9948	樹皮	○		樹皮	幅 2.1	
樹皮	④ T 35 a	254	樹皮	○		樹皮	幅 6.5	



図IV-16 I B 5層木製品分布図

7 IB5層の木製品

IB5層の木製品には、軸状製品・キテ中柄・箸・串・ピン状製品・柂目板・板・イクパスイ・板材と加工製品・割材類と加工製品・丸木材類と加工製品・建材・切片・炭化材などがある。図示した木製品を中心に種別・製品別に記述する。

漁撈具

キテ中柄(2)：2本組式の回転式離頭銚の中柄。基部は棹部と接合するための平坦面が斜めに削られ、結合のための挟りが一周している。尖端部には銚先装着の削りがみられる。

食用具

箸(3)：板目面・柂目面の両面がみえる正方形断面の小割材を材料とし、表面を調整したもの。先端はやや細くなり、断面は隅丸になる。片半部を欠損する。

串(4~8)：断面形・木取や先端の加工で細分できる。4~6はノリウツギの1/4~1/8割材を粗削りしたもので、4は断面形から三角串、5は先端加工から両先串、6は断面形から平串とした。7・8は細枝材の表面を削り調整し、先端部を削り出した太串。

祭祀・儀礼具

イクパスイ(13)：削りかけやイトップ・文様などは確認できないが、断面形や端部付近であろう部位の舌状削りから、捧酒篋(イクパスイ)かその原形品と考えた。針葉樹モミ属の板が材料である。

各種用具の部品や素材等

軸状製品(1)：ノリウツギの1/4割材を割り削って、断面四角の頭部と軸本体を作っている。軸のほとんどを欠損する。車權受台部の軸(タカマチ)に似るが、この時期での存在は未確認。

ピン状製品(9)：断面は三角形で、片側の端部を細く削って尖端部としている。

柂目板(10~12等)：すべて針葉樹材で、アスナロ14点・モミ属2点の計16点を確認した。幅1.0~2.75cm、厚さ0.25~0.5cmの細長い薄板で、曲物や箱物の材料となったものであろう。

板・板材(図未掲載)：ほぼ均一な厚さを持つものを板、厚さにまだ偏りがあるものを板材としている。モミ属・アスナロの針葉樹材2点は上記の柂目板の前段階かもしれない。他の4点は広葉樹材で、板目取りである。

板材加工製品(14等)：2点とも広葉樹材で、14は胴部の幅が緩やかな膨らみを持つ製品。

割材・半割材・偏割材(図未掲載)：1/4~1/8割材13点、1/2(半)割材5点、樹心を外した偏割材が4点出土している。すべて広葉樹材である。比較的大割のものに焼痕のみられるものがある。

心持材加工製品・割材加工製品(15・16)：15は丸木の2面を平行に割り落した心材に削り加工を施した部材。16は1/4割材から丁寧に削り出した完形品。片端がやや幅広く、狭い方の端部脇に材幅の半分の深さのある深目の挟りが削り込まれている。

細枝材・枝材・丸木材(図未掲載)：細枝材9点・枝材14点・丸木材7点、すべて広葉樹材である。明瞭な切痕をもつ材と折れ材とがある。焼痕のあるものは7点あるが、樹皮を残すものは少ない。現生ではこの地方にはないブナ属の焼痕のある細枝材が興味深い。

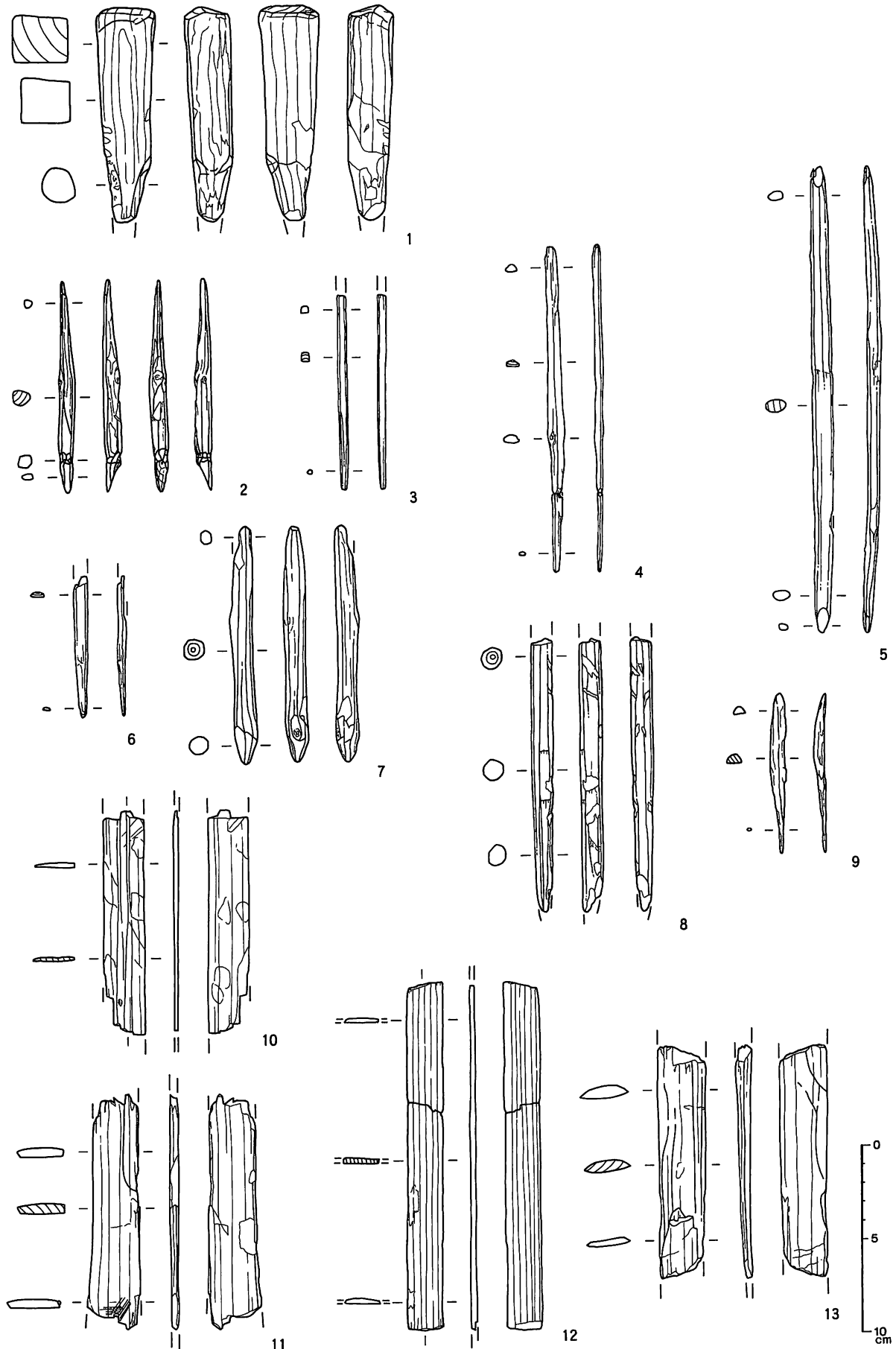
丸木材加工製品(17)：丸木の2/3面を割落して、さらに先を尖がらせた製品。上端も円頭状に削り整形されている。頭部を強く叩かれた痕跡は不明確だが、楔のように打ち込まれたものだろうか。

建材・建築部材・杭等

建築部材(18・19)：18は表面と端部が丁寧に削り調整されている。19は他の建材と組み合わさる端部に挟りが付いている。ともに小幅の横架材と思われる。

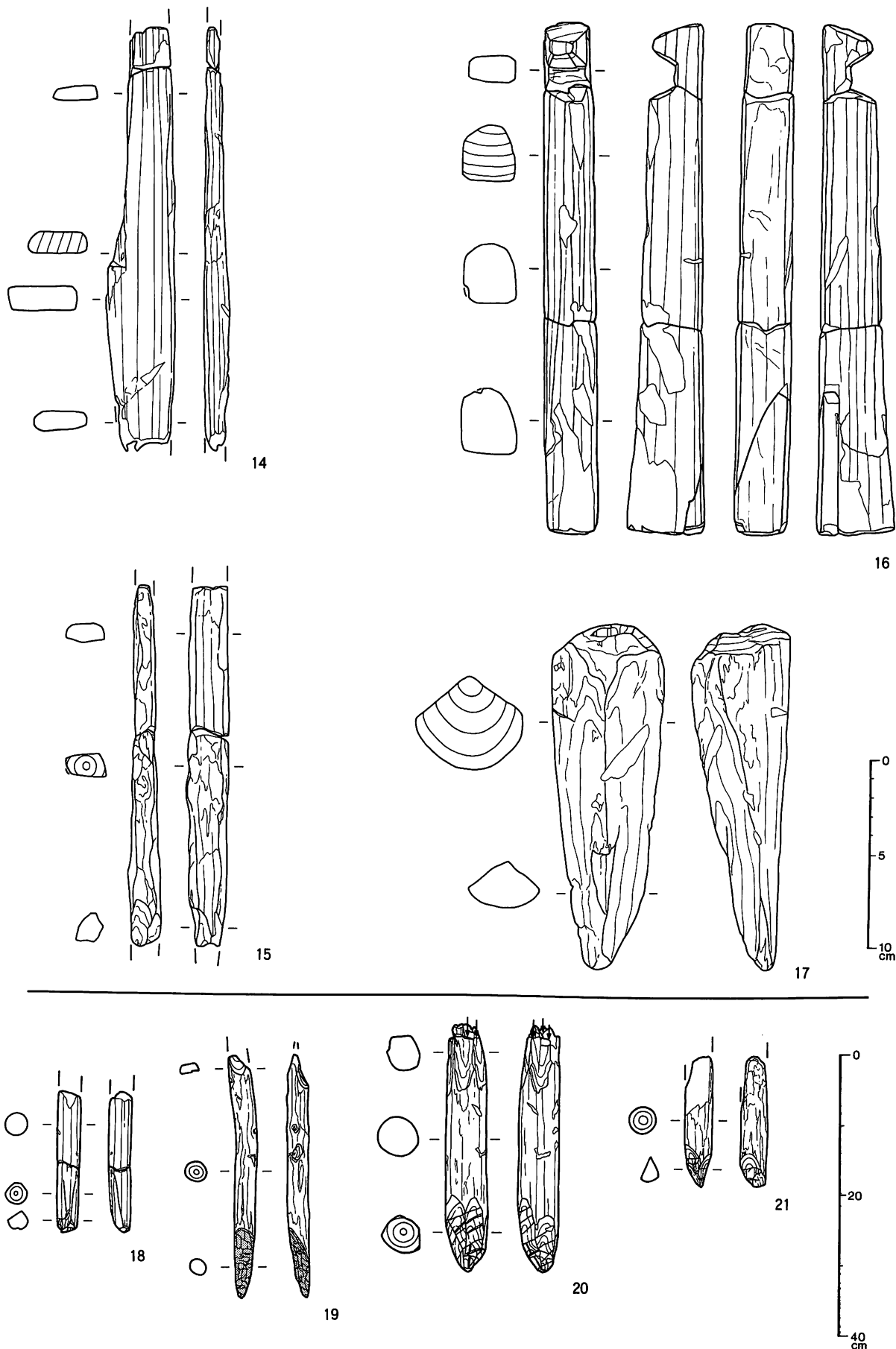
柱・杭(20・21)：20は柱の切断品、21は大略2面削りの杭先。ともにトネリコ属の丸木材である。

(三浦)



図IV-17 I B 5層の木製品(1)

7 IB5層の木製品



図IV-18 IB5層の木製品(2)

表IV-10 IB5層掲載木製品一覧

製品番号	遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	樹種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	縮尺	備考
1	軸状製品	② L32b	1898	1/4割		ノリウツギ	(11.35)	3.2	2.6	(59.4)	1/3	車權受台部軸か?
2	キヲ中柄	② K27d	4285	1/6割		ノリウツギ	11.15	0.9	0.9	(4.4)	1/3	回転式離頭鉋2本式
3	箸	② K27d	3463	板目・榫目(小割)		アスナロ	(10.2)	0.5	0.45	(1.4)	1/3	
4	串(三角串)	② K27d	3981	1/4割		ノリウツギ	17.1	0.9	0.5	2.7	1/3	
5	串(両先串)	② L32b	1896	1/6~1/8割		ノリウツギ	24.5	1.1	0.7	(12.2)	1/3	
6	串(平串)	② K27d	4267	1/4割		ノリウツギ	(7.45)	0.8	0.4	(1.1)	1/3	
7	串(太串)	② K22b	8221	丸木		ハシドイ属	12.4	1.2	1.2	(10.6)	1/3	
8	串(太串)	② K27d	4259	丸木		ブナ属	(14.4)	1.1	1.15	(13.2)	1/3	
9	ピン状製品	② I27c	2854	1/4割		クロ属	8.42	0.8	0.6	1.7	1/3	
10	榫目板	② M36c	2139	榫目		アスナロ	(11.8)	2.2	0.3	(6.0)	1/3	
11	榫目板	② K26b	3295	榫目		モミ属	(12.55)	2.75	0.5	(13.0)	1/3	
12	榫目板	② L32c	1902	榫目		アスナロ	(18.4)	1.95	0.3	(7.8)	1/3	
13	イクバスイ	② K27a	3956	追榫		モミ属	(12.35)	2.6	0.8	(16.3)	1/3	樽酒筥
14	板材加工製品	② K27a	3955	榫目		ハリギリ	(22.5)	3.65	1.35	(63.2)	1/3	
15	心持材加工製品	② K27d	4261	心持		トネリコ属	(19.0)	2.3	1.7	(43.1)	1/3	
16	扶付割材加工製品	② K26d	4225	1/4割		モクレン属	28.0	2.9	4.1	(186.7)	1/3	
17	丸木材加工製品	② K26d	3924	丸木		トネリコ属	18.2	6.0	5.2	240.4	1/3	楔状
18	建材	② K24d	4536	丸木		ヤナギ属	(20.3)	3.2	3.3	(147.7)	1/8	丸木材加工
19	建材	② M33a	6854	丸木	○	トネリコ属	(34.4)	3.2	3.3	(209.1)	1/8	丸木材切痕
20	柱切断品	② K27a	4306	丸木		トネリコ属	35.5	5.9	5.7	750.0	1/8	
21	杭	② O38d	6577	丸木		トネリコ属	(18.5)	4.9	3.9	(158.0)	1/8	

表IV-11 IB5層未掲載木製品一覧(1)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	樹種	計測値cm	備考
板材加工製品	② M37c	2419	板目		トネリコ属	幅 3.2 厚さ 0.6	
榫目板	② L33b	1839	榫目		モミ属	幅 1.6	
榫目板	② L32b	1900	榫目		アスナロ	幅 2.1	
榫目板	② L32c	1923	榫目		アスナロ	幅 1.5	
榫目板	② M36b	2135	榫目		アスナロ	幅 1.4	
榫目板	② K27d	3469	榫目		アスナロ	幅 1.7	
榫目板	② K27a	3989	榫目		アスナロ	幅 1.5	
榫目板	② K27a	3990	榫目		アスナロ	幅 1.9	
榫目板	② K27a	3991	榫目		アスナロ	幅 1.5	
榫目板	② K27a	3992	榫目		アスナロ	幅 1.0	
榫目板	② K27d	3999	榫目		アスナロ	幅 2.1	
榫目板	② K27d	4000	榫目		アスナロ	幅 1.7	

表IV-12 IB5層未掲載木製品一覧(2)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	種	計測値 cm	備	考
柱目板	② L24b	4053	柱目			アスナロ		幅 2.3		
柱目板	② K24c	4530	柱目			アスナロ		幅 2.4		
細板	② K26d	4219	1/12割			モミ属		幅 1.4		
板	② K27d	4262	板目			トネリコ属		幅 2.9	厚さ 0.5	
板材	② M37b	2392	板目			トネリコ属		幅 5.5	厚さ 1.9	
板材	② M37c	2411	板目			ニレ属		幅 4.0	厚さ 0.2	
板材	② K27d	3976	板目			ニレ属		幅 5.8	厚さ 1.8	
板材	② L23c	6462	板目			アスナロ		幅 2.6		
割材	② L33b	1837	1/4割			ヤナギ属		幅 1.5		
割材	② L32c	1921	1/4割		○	トネリコ属		幅 5.0		
割材	② M37c	2412	1/8割			トネリコ属		幅 4.3		
割材	② M37c	2413	1/4割			トネリコ属		幅 4.2		
割材	② M37c	2414	1/12割			トネリコ属		幅 3.8		
割材	② I27a	3132	1/4割		○	トネリコ属		幅 4.3		
割材	② I25d	3506	1/16割			トネリコ属		幅 5.8		
割材	② I26a	3516	1/6割		○	コナラ属		幅 2.3		
割材	② K26a	3923	1/4割			トネリコ属		幅 4.4		切痕
割材	② L24b	4055	1/6割			ニレ属		幅 2.0		
割材	② L24b	4057	1/6割			トネリコ属		幅 2.6		
割材	② L24b	4264	1/6割			トネリコ属		幅 2.4		
割材	② K27d	4264	1/6割			トネリコ属		幅 10.0		
割材	② L23b, M23a	6455	1/4割		○	トネリコ属		幅 2.2		
偏割材	② K26b	3296	偏割			ヤナギ属		幅 1.5		
偏割材	② I25a	3499	偏半割			ハシドイ属		幅 5.0		
偏割材	② L23b	5169	偏割		○	トネリコ属		幅 7.6		
偏割材	② L23b	5169	偏半割		○	トネリコ属		幅 5.2		
偏割材	② D32b	6465	偏割			ニレ属		幅 1.2		
半割材	② L33b	1925	半割			ツルアジサイ		幅 5.2		
半割材	② I26a	3515	半割			ハンノキ属		幅 3.5		
半割材	② K27d	4268	半割			トネリコ属		幅 4.7		
半割材	② K27d	4272	半割	○		ツルアジサイ		幅 8.6		切痕
半割材	② K27c	4282	半割			ヤナギ属		径 1.5		切痕
細枝材	② L32b	1894	丸木			ハンノキ属		径 1.3		切痕
細枝材	② M37b	2418	丸木			トネリコ属		径 1.9		切痕
細枝材	② K26a	3922	丸木		○	フナ属		径 1.5		切痕
細枝材	② K27d	3974	丸木		○	ハギ属		径 1.1		切痕
細枝材	② K27d	4260	丸木		○	トネリコ属		径 1.7		切痕
細枝材	② K27c	4283	丸木		○	ハンノキ属		径 1.3		切痕
細枝材	② K27d	4286	丸木			トネリコ属		径 1.5		切痕
細枝材	② J23a	6221	丸木			ニレ属		径 1.5		切痕
細枝材	② M23a	6458	丸木			カツラ		径 3.5		切痕
枝材	② G33d	1379	丸木		○	ヤナギ属		径 2.2		切痕
枝材	② L32b	1901	丸木			ヤナギ属		径 2.2		切痕

表IV-13 IB5層未掲載木製品一覧(3)

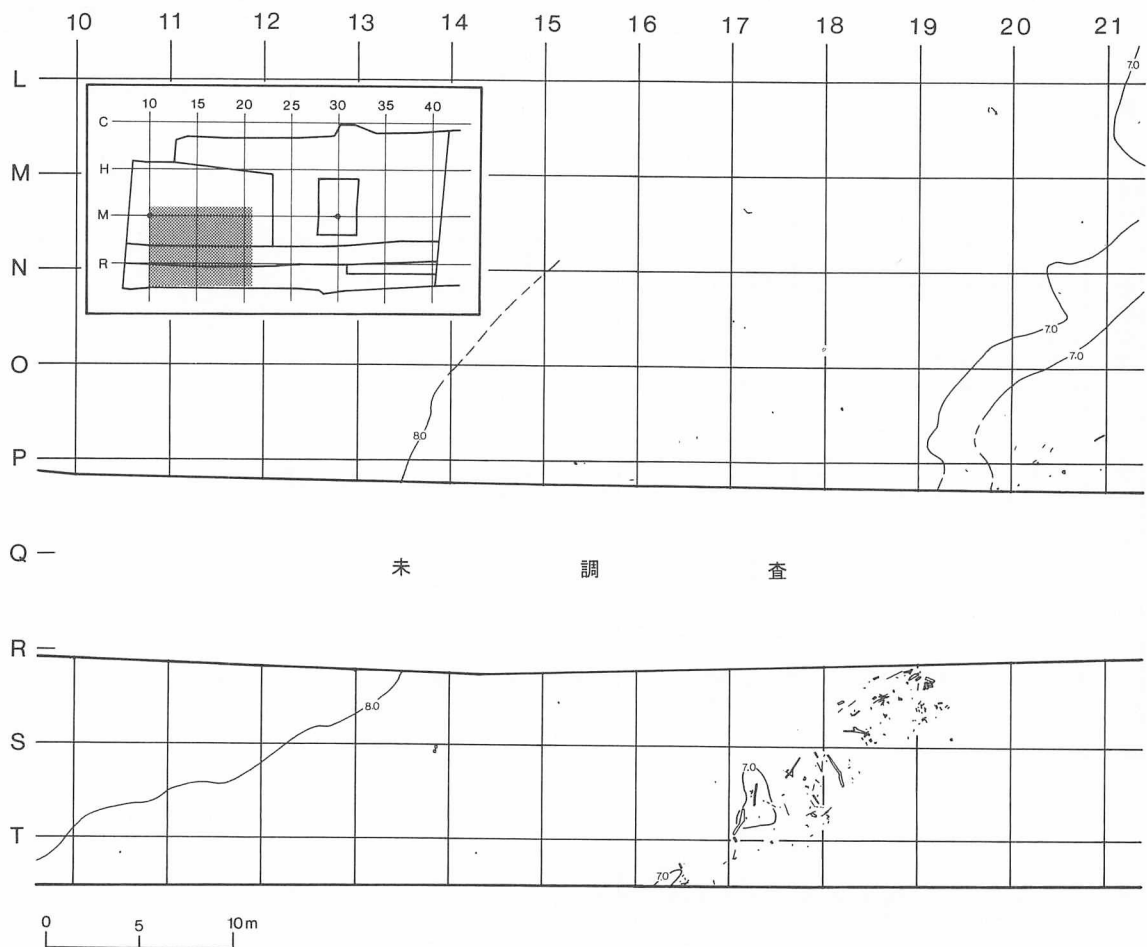
遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備考
枝材	② L32c	1904	丸木			ヤナギ属	径 2.9	
枝材	② L32c	1909	丸木			トネリコ属	径 3.2	切痕
枝材	② M36b	240	丸木			トネリコ属	径 3.0	
枝材	② M37b	2389	丸木			ハンノキ属	径 2.8	切痕
枝材	② M37bc	2410	丸木			トネリコ属	径 2.5	切痕
枝材	② I25d	3507	丸木	○	○	トネリコ属	径 2.1	切痕
枝材	② K27ad	3959	丸木			トネリコ属	径 3.2	
枝材	② K26d	4229	丸木			オニグルミ	径 2.5	切痕
枝材	② K27d	4258	丸木	○	○	コナラ属	径 2.5	切痕
枝材	② K27d	4266	丸木			トネリコ属	径 2.2	
枝材	② K27c	4300	丸木			トネリコ属	径 2.2	切痕
枝材	② K23a	5226	丸木			トネリコ属	径 3.5	切痕
丸木材	② L33c	1930	丸木			トネリコ属	径 4.4	
丸木材	② I25ad	3500	丸木			トネリコ属	径 4.2	
丸木材	② K27d	3970	丸木			トネリコ属	径 4.3	切痕
丸木材	② K27d	4257	丸木	○	○	コナラ属	径 5.1	
丸木材	② K27c	4284	丸木			トネリコ属	径 6.0	
丸木材	② M37b, N37a	6841	丸木			ハンノキ属	径 6.4	切痕
丸木材	② N20c	8975	丸木			トネリコ属	径 7.4	
切片	② L33c	1823	偏割			トネリコ属	幅 3.8	
切片	② L32b	1893	偏割			モミ属	幅 1.6	
切片	② L32b	1899	板目			トネリコ属	幅 4.5	
切片	② M36b	2134	板目			トネリコ属	幅 4.0	
切片	② M36c	2140	板目			ハンノキ属	幅 5.1	
切片	② M36b	2145	板目			ハンノキ属	幅 7.5	
切片	② M37b	2390	板目	○		樹皮	幅 2.9	
切片	② M37b	2391	偏割 板目			ハンノキ属 トネリコ属 ヤナギ属	幅 5.2 計測不能 幅 2.5	集中代表3点(樹種で分類)
切片			板目			クワ属	計測不能	
切片	② K27d	3470	偏割					
切片	② K27d	3472	板目			トネリコ属	幅 4.3	
切片	② K26a	3918	板目			トネリコ属	幅 4.7	
切片	② L24b	4056	偏割		○	トネリコ属	幅 2.1	
切片	② K27d	4269	板目			トネリコ属	幅 6.3	
切片	② L23b	5167	板目		○	トネリコ属	幅 2.7	
切片	② L21	9828	偏割			トネリコ属	幅 5.3	
木端	② L33c	1929	木取不明			ヤナギ属	幅 0.8	
炭化材	② G33c	1374	1/8割			オニグルミ	幅 4.5	
炭化材	② I40b	1407	木取不明			トネリコ属	計測不能	
炭化材	② K33a	1609	木取不明	○		樹皮	幅 4.5	
炭化材	② K33a	1610	心持材			ハンノキ属	幅 5.3	
炭化材	② N17d	8498	木取不明			ニレ属	計測不能	

8 IB4層の木製品 (図IV-19~47、表IV-15~38、図版IV-26~61)

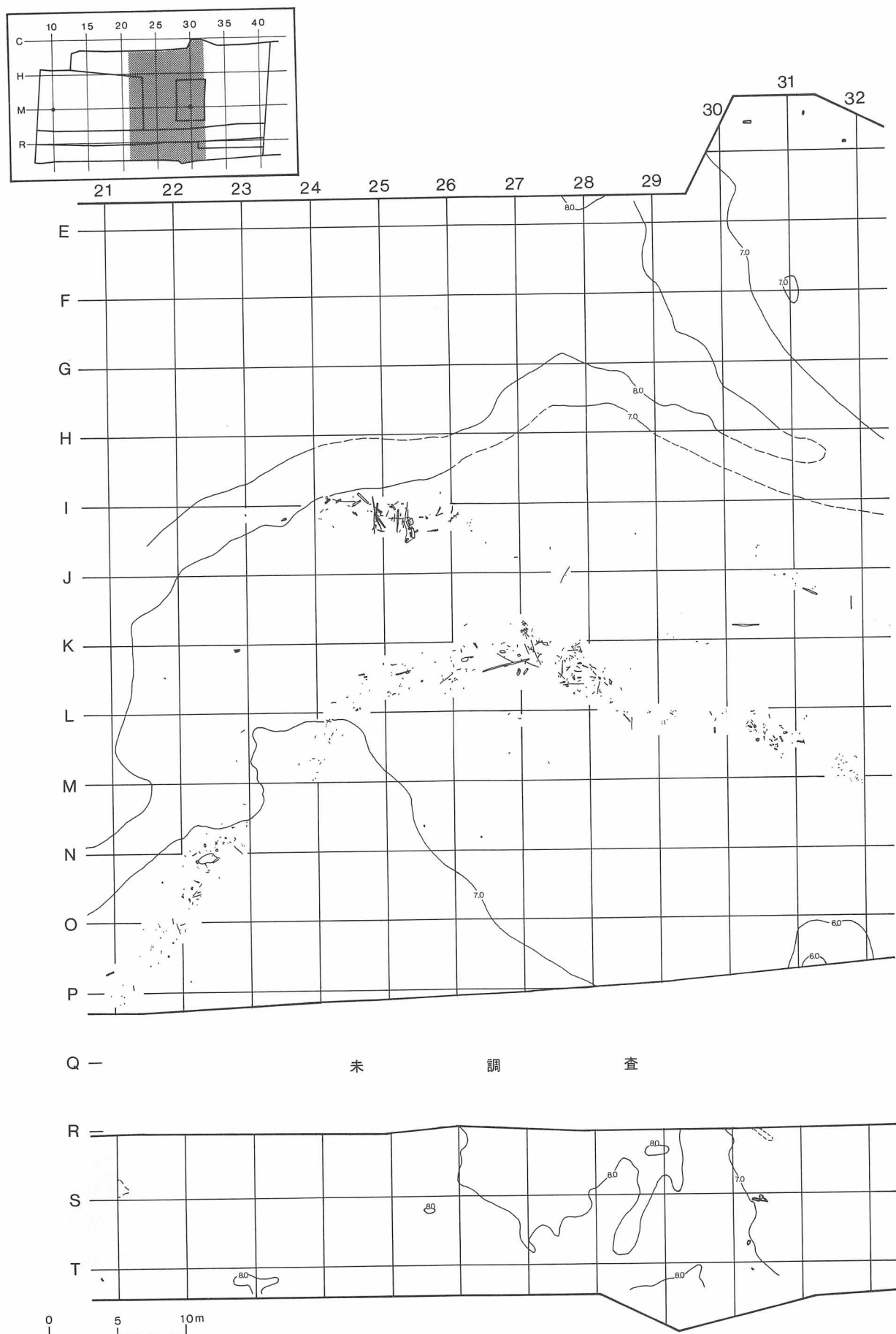
Ta-cが降下した後、沼沢~湿地域となり、IB5層が形成された。IB4層の時期ではさらに泥炭の発達が目立って行き厚い層が形成された。この層は濁暗褐~濁黒褐色泥炭層で、部分的には腐植の発達した土層となる。色や未腐植分の違いで、上下に分層できることが多い。層厚10~35cmで、大きな木根や自然木が多く、木製品も出土する。続縄文時代~擦文文化期初頭から前半にかけての層である。ただ木製品の出土状況においては、刺さり込みや重複などで上下層の分層は難しかった。

IB4層の木製品の出土状況を、図IV-19~21に示した。分布のひとつのありかたは、T16区から南側低平台地縁に沿って台地突端のL24区に達し、そこから低湿部のほぼ中央を通りMN40区に至る、当時の水流に沿うような帯状の出土域である。もうひとつはHI24~26区に集中しつつ、北側台地に沿ってやや薄めに遺物が点在する出土域である。特に後者では図IV-22に示した如く、建材が集中し舟や代表的な製品類も多く検出された。後述するように台地縁にあった建物等の遺構の可能性はあるが、台地縁が近年の道路側溝によって掘り取られていて、想像にとどまるのみである。

IB4層で扱う木製品の点数は、杭列10の3点を除き、956点である。そのうち130点を図示し、図IV-23~47、表IV-15~18、図版IV-26~61に掲載した。他の825点は表IV-19~38にデータのみを示した。層の状況、出土品とその分布状況や数製品の樹種からすると、当遺跡のIB4層の時期、続縄文時代~擦文文化期初頭においては、低湿部の利用度が急激に高まり、低湿部は生活と密接なつながりを持ちはじめたものと考えられる。また、スギ・アスナロの柾目板等や漆碗・竹材・ブナ属枝材など、製品や樹種で、地場物ではなかったであろうものも確認できた。交易関係を検討する上での重要な資料となる。



図IV-19 IB4層木製品分布図(1)



図IV-20 IB層木製品分布図(2)

8 IB4層の木製品



図IV-21 IB4層木製品分布図(3)

I B 4層の木製品には、舟の舷側板・舟材・櫂・浮子・矢・矢中柄・キテ中柄・杵・斧柄・槌・把手・柄・漆椀・籠状製品・台板・楔・箸・串・軸状製品・柁目板と加工品・板・イクパスイ・板材と加工製品・割材類と加工製品・丸木材類と加工製品・竹材加工製品・建材・切片・木端・炭化材・樹皮などがある。図示した木製品を中心に種別・製品別に記述する。なお、個別分類の判断基準や数値は、5節(2)の一覧表の説明を参照のこと。

舟部材・舟用具

舟敷(1)：板綴舟の舟敷の、立上りの側面部分である。a・bは同一地点から出土しており、一艘の舟敷である。樹種はシナノキ属で、巨木から横木取りされ、厚さ2.5cm前後に削り込まれ、上辺には板綴用の角孔が確認できる。腐朽・摩耗が著しく接合できない。舟廃用後の板材利用のため、部分的にもたらされたものであろうか。

シナノキ属(推定でシナノキかオオバボダイジュ)の舟は、出土品では千歳市美々8遺跡のI B 3層(擦文文化期)の有孔板材(舷側板、『美沢川流域の遺跡群XVII』北埋調報102)と、0 B層(1667～1739年)の舷側板(『美沢川流域の遺跡群XX』北埋調報114)がある。当遺跡でも来年度以降の報告分でシナノキ属の舟材がある。また、聞き取りによって八雲(犬飼ほか 1953)と長万部(知里 1953)でシナノキの舟が知られている。特に長万部では、メカジキの吻骨に突き刺されても割れないように、舟底は必ずシナノキで作ったという。

舟材(2・3)：2は五角形の厚板で、内彎する片面の中央に山形の頂点から垂直に隆帯が入っている。舳等の飾り板であろうか。3は推定の大きさや木取から、舳(艫)と思われる。

櫂(4)：ヤナギ属の心持材を使った、早櫂の長い水掻き部分である。柄と先端部を欠損する。柄から水掻き部の移行部はナデ肩である。

漁撈具

浮子(5)：外樹皮を残したハンノキ属の1/8割材を、紡錘形に削り整形した網の浮子。端部付近に固定の摩耗痕がみられる。

魚叩き棒(6)：ヤナギ属の枝材を加工した、捕獲後の魚の頭を叩く棒。握り部は太さ2.5cmほどに全体の半分以上の長さで削り込み、叩き部との境は明瞭である。

キテ中柄(10)：長めの一本式の回転式離頭銚の中柄。棹との接合部は、全体の下半分を緩く斜めに削って形成されている。結合のための抉りが2段半周している。先端部は8cmほどが薄く削り込まれ、銚先装着部となっている。ノリウツギの半割材を使用している。

狩猟具

矢(7)：ノリウツギの1/4割材を削った、長茎の木鏃。鏃部は、対する2面から削り込んで作り出しており、かえしの加工もみられる。

矢中柄(8・9)：8は整形の粗いピン状だが、基部の斜め削りや上端の平坦面削り込みを、それぞれ矢柄と鏃の装着部と判断し、矢の中柄とした。9はノリウツギの1/4割材を削った矢の中柄。半分に刻みが入っている。矢柄・鏃の装着部が上下どちらか、判別がついていない。

弓状製品(11)：当初は形状から弓と考えていた。樹種同定でサルナシ属と認定されたため、蔓状の材では弓は無理かと思ひ、弓状製品とした。中央部がやや太く、両方向に細く削られている。

農・工具

縦杵(12)：トネリコ属の丸木から握り部と搗き部を削り出した縦杵。半分を欠損する。搗き部はつぶれてはいないが、摩耗は認められる。長い頭部・欠損部・使用痕の不明確さから、縦杵を疑問視するむきもあるが、当遺跡の来年度以降の報告分に同形の完形品も存在するので、杵と報告する。な

お、搗き部の形状は、使用方法および対象物により、“搗く”と“擦り潰す”では違って来るという。

掛矢 (13) : トネリコ属の股木部分の大型半割材を粗く整形した製品。股木部の頭部は幅広く、柄部に向けて徐々に幅を減じる。頭部の叩きつぶれた痕から、杭などを打ち込む掛矢と判断した。

斧柄 (14) : コナラ属の枝別れ材を丁寧な割りとし、削りで加工した石斧の柄。枝部を柄に幹部を斧台部にしている。樹心部にあたる斧台面は平坦に整形されている。続縄文時代の遺物であろう。

縦槌 (15) : トネリコ属の枝別れ材を加工した縦槌。枝部を鹿角状に削って柄とし、幹部を枝別れの幅に短く切断して半割し頭部としている。両打面とも使用痕がある。柄と頭部の角度や、短寸の頭部と反りのある柄からすると、特殊な用途の縦槌と思われる。

把手 (17) : アスナロ材の柁目板を緩い山形に削り、両端部の下面以外に3/4周する抉りを付けた製品。桶など交易で持ち込まれたものの把手であろうか。

柄 (18~22等) : 18・19はともにトネリコ属の枝材を加工した類似品。柄部を細く削り頭部を作出している。18はほぼ完形品で、半割した装着部がみられる。20・22はともにモミ属の1/4割材を加工している。20は断面六角形に丁寧に削られた体部だが、両端は欠損している。22は頭部を作出した平たい柄で、切断された品。21はサクラ属の1/4割材を粗削りしたもの。全体形状や端部の削りや抉りが千歳市美々8遺跡の報告(北埋調報114)の魚突鉤鈎の棹に似ているが、当遺跡では魚突鉤鈎やその受台の出土を確認していないので柄の一種として掲載する。

容器類

漆椀 (23~25等) : 4点出土している。小片の未掲載1075は、内面に褐色がかかった赤色の漆(黒漆に朱やベンガラを混ぜた漆:‘うるみ’か?)塗り、外黒色漆塗りで、内面と同じ色で草文のようなものが描かれている椀の胴部片。器厚0.5cmと薄い木地である。木地の樹種はカツラである。

他の3点23~25は、損傷は著しく、漆の剥落も激しいが、いずれも、口径約15cm、高台径約7cm、器高約5cmと大きさのそろった平椀である。23はほんの一部に口縁部が残存し、全体形状が復元できる。高台は0.3~0.35cmと低く、底の器厚は0.8~0.9cmと厚い。尻部の張りがなく、口縁部は0.3cmと薄くなる。横木巻き(挽き)した木地の轆轤の巻き目が、内外とも幾筋も観察できる。内外両面とも黒色漆で、内の底見込から胴部にかけて、朱漆(未分析)で草文か、近世浄法寺漆器(岩手県)にみられる‘美保松原文’(山田昌久ほか 1999「浄法寺町漆文化収蔵庫収蔵品調査」)の舟や波のような文様を描いている。椀の荒型は24と同じく年輪が寝た部分を使ったようで、木取り観察では年輪はほぼ水平に走っている。木地の樹種はトチノキである。

24は口縁部全体を欠くが、胴~底部はほぼ完全に残存する。埋蔵中の根による損傷が著しい。高台は0.3cmと低く、底の器厚は0.8~0.9cmと厚い。尻部の張りが23よりは大きい。内は赤色(橙色)の漆塗りで、外は黒色漆地に内と同じ赤色の漆を重ね塗りしている。高台内は黒色漆のままにしてある。文様は外に黒の線描が一部にみられるほか、墨書のような筆払いの文様?が内外全体に描かれている。椀の荒型は23と同じく年輪が寝た部分を使ったようで、木取り観察では年輪はほぼ水平に走っている。木地の樹種はハリギリである。

25は1/3に縦割れした破片。埋蔵中の根による損傷が内面で著しい。高台は低く0.3cmほどで、底の器厚は0.5cm、口縁部は0.25cmと器厚の薄い木地である。内面は茶色がかかった赤色の漆(‘うるみ’?)塗り、外面黒色漆塗りである。外面の一部の漆の残存していない部分で、赤褐色塗料?の付着がみられる。黒色漆塗り前に描かれた文様であろうか。この椀は荒型が前2者とは違い、年輪の立つ部分を使っている。丸木の1/4~1/8割材から取った荒型が使われているようだ。木地の樹種はカツラ。

漆椀については、VI章で問題点について触れる。

容器 (26) : 割り物で(挽き)、浅皿状の容器の破片であろう。

食用具

籠・籠状製品・大型籠 (27~34) : 27・28・31・33はアスナロ材の柾目板加工品で、27・28は端部加工から籠とする。28は56と同じく捧酒籠状製品とすべきかもしれない。31は端部欠損で、33は端部の削りのないことから籠状製品とした。29・30・34はスギ材の柾目板加工品である。29・30は端部を刃状に削っているが、尖っていることや幅広であることから、籠状製品とした。34は羽子板状の大型籠。籠先端を欠くが、中央部に緩い凹みがある。32はモミ属材の柾目板加工品で端部は薄く削っているが、全体的に厚みがあるので籠状製品とした。32以外は交易で持ち込まれたアスナロ柾目板材の製品部材の再加工の可能性はある。

台板 (35) : ヤナギ属の丸木をスライスしたような縦木取し、一面をほぼ平坦に調整している。一辺を直線で落とし、残りを楕円状に縁加工している。両面とも焼けているのは、加工か材強化のためと思われる。

箸 (39・40) : 39はモミ属の細1/4割を材料としたもので、断面隅丸方形となる。40は板目面・柾目面の両面がみえる正方形断面の小割材を材料とし、断面がほぼ円形になるぐらいに表面を調整したものの。両者とも先端はやや細くなり、片半部を欠損する。

串 (41~51等) : 断面形・木取や先端の加工で細分できる。46・51と未掲載9831を除きすべてノリウツギの半割・1/4・1/6割材を削り加工したもので、断面形から41・47は三角串、42は楕円串、46は細丸串とした。43~45・48~50・未掲載378は先端加工から両先串としたが、43は長串、45は細串でもある。また、48~50・未掲載378は先端加工が他のものよりも角度のついた特徴的な形態であり、カンジキの軸である可能性もある。51はノリウツギの細枝別れ材を、枝別れ部を上部まで残して、体部を平串状に削った製品。大型の縫い針であろうか。

祭祀具

イクパスイ (52~55等) : 未掲載7530も含めてすべてアスナロの板目材の加工品である。削りかけやイトツパ・文様などは確認できないが、とくに52に顕著な端部の舌状削りや、断面形から、捧酒籠(イクパスイ)かその原形品と考えた。56も含めて、交易で持ち込まれたアスナロ柾目板材の製品部材の再加工の可能性はある。イクパスイがすべて持ち込まれた材から作られているとすれば、この事実は、祭祀儀礼のありかたや祭祀具の発現出現の問題にに一石を投じるものである。

各種用具の部品や素材等

竹材加工製品 (16) : 端部をそれぞれ抉り込みと斜めに削り、表面は縦方向に長く削り調整を入れた竹材の加工品。節部で折れているが、節部は削り残してあるように見える。用途は不明だが、当地ではタケは自生せず、本州等から持ちこまれた材である。

楔・楔状製品 (36~38) : 36・37は片面が平坦な楔、木割り等に使われたものであろう。38は面の平坦さがなく先端も尖っているので楔状製品とした。

捧酒籠状製品 (56) : アスナロ材の柾目板加工品で、片端部を幅狭く斜めに削っている。28同様、籠とすべきか。

曲物底再利用有孔製品 (57) : 材質・木取・形状から、もとは曲物の底板と判断した。穿孔や縁加工・緩い抉りを付けるなどの手を加えて、別製品化している。

柾目板・柾目板加工製品 (58~68等) : 表面が滑らかで、柾目が明瞭に現れている板を柾目とした。厚さ0.2~0.5cm未満の薄柾目板と、58・67・68のような厚さ1.0cm前後の板がある。取上げ地点全60点のうち85%51点をアスナロ材が占め、以下モミ属10%6点(68等)、トネリコ属2点(67等)、スギ1

点(62)である。67は端部を両面から斜めに削ぎ落とし、両刃状の稜線をもつ加工品。61は幅広長尺の薄板目板である。薄板目板には毛引き線は見られないが、曲物・箱物の材料となるか、それらの解体されたものであろう。この樹種のほとんどであるアスナロやスギは、当時の自生は考えにくく、交易で持ち込まれたものなのであろう。

板材加工製品(85・86等)：樹種・木取ともさまざまで11点出土している。85は平面長楕円形で、片面は平坦、浮子のような形状である。86は片側がやや幅狭くなるよう加工されている。

細板・板・板材(84等)：ほぼ均一な厚さを持つものを板(84等5点)、なかでも幅3cm以下の均等な幅のものを細板(7点)、厚さにまだ偏りがあるものを板材(24点)とした。厚さ0.1cmの薄板も1点ある。モミ属・アスナロの針葉樹材は上記の板目板の前段階かもしれし、シナノキ属やハリギリは舟材の部分の可能性もある。樹種・木取ともさまざまである。

角材加工製品・角材(74・図未掲載)：74はハリギリの1/4割材から割り出した角材を素材とする。両端を斜め45°に切り落としてあるが、その面どうしは向きを90°違えてある。部材か切断品であろう。未掲載8302はニレ属の半割材から割り出した角材。両者とも約4cm角の材である。当時、何らかの単位か規準があり、それに準じたものであろうか。

割材加工製品(75~82等)：23点出土しており、うちトネリコ属が13点を占める。木取割りは、大1/4から小1/16までである。75・76はハリギリの1/8割を細角材状に加工した製品。同じグリッドからの出土でもあり、同一個体か同一製品の部材の可能性もある。77には孔や抉りが付けられている。矢筒の翼板のような装飾材か。78は断面三角形で、端部に向かって幅・厚さとも減じる形状である。79も断面三角形で、幅・厚さは均一である。80・82は細い端部と山形の胴部という類似した形状を持つが、大きさは80が82のやく1/5というスケールである。81は大型の1/4割材を断面台形に加工したもので、表面は滑らかである。

割材(図未掲載)：丸木をみかん割していくもので、取上げ地点で149点出土しており、スギ1点・モミ属3点を除く145点がトネリコ属を主体とする広葉樹材である。割りは半数以上の79点が1/4割で、これに連なる1/8割(22点)→1/16割(10点)→1/32割(1点)である。もう一系列は1/6割(20点)→1/12割(17点)である。各割の中には当然、次段階の元になるものが含まれている。

半割材加工製品(83等)：2点出土している。83は両端をやや細く削り整形したもの。材を組む製品の部材であろう。

半割材(図未掲載)：22点出土している。1/4割や1/6割という次段階の元材が含まれている。

偏割材加工製品・偏割材・剥材(図未掲載)：樹心を外して割った材で、製品が2点、材として46点出土している。剥材は、さらに薄く樹皮近くを剥ぐように割った材で、7点出土している。

心持材加工製品・心持材(図未掲載・87等)：樹心を残して割った材で、製品が2点、材として5点が出土している。87は加工途上の材である。

軸状製品(69~71等)：心持材の加工2点、枝材の加工3点の計5点出土している。69は断面四角形で、上端部は欠損、先端部は楔形である。70も断面四角形で、上端部は屋根形、先端部を欠損する。71の胴部断面は隅丸方形で、全体に削り込まれ、先端部は杭状となる。

細枝材加工製品・枝材加工製品(72・73等)：5点出土している。72は枝材を短寸に切り、両端を5面削りしている。全周に細かく浅い刻み(圧痕)が入っており、錘かと思われる。73は先端4面削り、これも全周に細かい刻みが入っている。建築部材の破片かもしれない。

細枝材・枝材・丸木材・股木材(図未掲載)：細枝材70点・枝材107点・丸木材31点・股木材1点、モミ属の枝材1点を除きすべて広葉樹材である。明瞭な切痕をもつ材と折れ材とがある。焼痕のある

ものは23点あり、そのうち丸木材が10点と高い割合を示す。樹皮を残すものは15点あり、これは丸木材が1点と少ない。丸木材と焼痕・樹皮のこの関係は、加工や貯木のありかたを示すものであろうか。また、IB5層と並んで、現生ではこの地方にはないブナ属の細枝材7点が興味深い。うち3点には樹皮が残っている。持ち込みかブナの植林を想起すべきあろうか。

樋状製品 (88) : 丸木の半割材の樹心周辺を削り削って樋状にしたもの。端部の段違いの薄い部分が結合部とすれば、当時、導水や排水のための樋が敷設されていたということか。

切片(図未掲載) : 製品製作や材料切断などの作業時に出る、割削片。細かく割れ計測不能のものも多い。作業場所であるのか、集中して出土する地点(図IV-22)もある。取上げ地点で139点ある。

木端(図未掲載) : 製品や材料の割折片。細かく割れ計測不能のものも多い。集中もあるが、取上げ地点で24点ある。

炭化材(図未掲載) : 取上げ地点で42点ある。うち材としてほとんど形状をなさず、炭化材破片の集中状態で確認されたものが15点ある。一覧表ではこの15点は、備考に集中範囲の規模を記録した。集中範囲が50cm~2mの中型が4カ所、10~50cmの小型が9カ所、10×10cm以下のものも2カ所ある。炭化や取上げ後の土砂除去などで崩壊したものを除いても、割材の方が丸木材よりも多い。樹種が認定できたものは18点で、ほとんどトネリコ属である。

建材・建築部材・杭等

柱 (91~99等) : 直径がおおよそ6cm以上で長さがおおよそ2m以上、桁・梁の受け部や柱根の削りのあるもの、あるいはこれらの条件を満たすと推定できるものを柱とした。12本出土している。うち6本が後述する集中地点にあった。樹種はとくに選定してはいないようで、樹皮の付いたものも4本ある。いずれも元側端部に削り加工がある。削りは一部に樹表面を残すものが多く、削り面数は1面が94・96、2面が97・99、3面が98・未掲載3503、4面が95・未掲載④696、5面が91・92、6面が93と多彩である。96は径10cmを超える太さ、99は長尺材で受け部(股木部)を持つ。97・98は末側に切断痕がある。なお、樹種未同定・未計測の1点未掲載4463は、屋外プール収納分で、プールは整理中の現在雪の下になっている。次回以降の報告でデータを追加する。

建材 (89・90・100~108等) : 桁・梁や垂木など建物の大枠を組むと推定できる材。21本出土している。樹種はとくに選定してはいないようである。89・90は3mを超える長材。加工は粗い枝落としと元側端部の削りのみである。屋根の垂木であろうか。100~102は2m級、103~107は1.5m級の桁材・梁材であろう。彎曲した材も多く、枝落としや端部の削り加工だけのものがほとんどであるが、101の端部には組む際の挟り込み、106の端部細化加工、104・106の枝元残しは特徴的である。108は受け材の必要な部分への継ぎ足し材であろう。未掲載分は折損が多く長さの推定が難しい。なお、樹種未同定・未計測の4点は、屋外プール収納分である。柱の1点と同様、次回以降の報告でデータを追加する。

建築部材 (109~115等) : 建物の大枠に組み込む細部の材。10本と1組が出土している。建材同様、樹種はとくに選定してはいないようである。109は割材を加工した部材。中央寄りの大きな挟りと、太さの変化を特徴とする。110~113・未掲載689・3987・4235は太さ5cm以下、1m以下級で粗い端部加工がある。屋根や壁の横架材であろう。114は心持材で1面がほぼ平坦である。窓枠材であろうか。115は長さ約1m、中間部は太く両端部は細く削られている。丸みを持たせる部分の横架材だろう。未掲載4450は細枝材の集合で、屋根材と思われる。後述する柱等の集中地点からの出土である。

股木杭 (116~119等) : 5本出土している。柱同様、樹種はとくに選定してはいないようで、樹皮の付いたものも2本ある。股木端部に切断痕、元側端部に削り加工があり、削り面数は2~多数ある。

116・117は長尺杭、118は二股あり、119は刺し杭としての股木杭である。

杭 (120～123等) : 16本出土している。樹種はとくに選定してはいない。太さ5 cm前後のもので、端部加工や枝落としは柱・股木杭と変わらない。未掲載④958は木末側を杭先に行っているが、他は木元側を杭先に行っている(先のみで判別できないものもある)。未掲載に割材加工の杭が2本ある。

細杭 (124～126等) : 11本出土している。樹種はとくに選定してはいないようだが、細材の採りやすさからか、ハシドイ属・ヤナギ属の材が目立つ。太さ3～4 cmぐらいのもので、端部加工や枝落としは杭と変わらない。

刺し杭 (127～130等) : 手刺しして使う短めの細杭で、建材類に含めるべき物ではないかもしれない。9本(119を含めると10本)出土している。樹種はとくに選定してはいない。端部加工や枝落としは杭と変わらないほか、頭部も削りで調整している。127や未掲載683は両先か。129は木末側を杭先に行っているが、両先とみることもできる。

樹皮加工品?

樹皮 (図未掲載) : 取上げ地点で13点ある。樹皮を剥がした場所であるのか、集中地点も2ヵ所ある。形態は、小片・切片・細片などさなぎまでである。炭化したものや焼痕のあるものは、灯火用であった可能性がある。

H I 24～26区の集中地点について (図IV-22)

この木製品集中地点は、北側の台地縁に沿った低湿部と台地斜面にかけて、I B 4層からI B 2層の間に存在する。I B 4層では、台地斜面から幅3 m×延長10 mほどの範囲に建材、特に柱が集中し、舟や代表的な製品類が多く検出された。

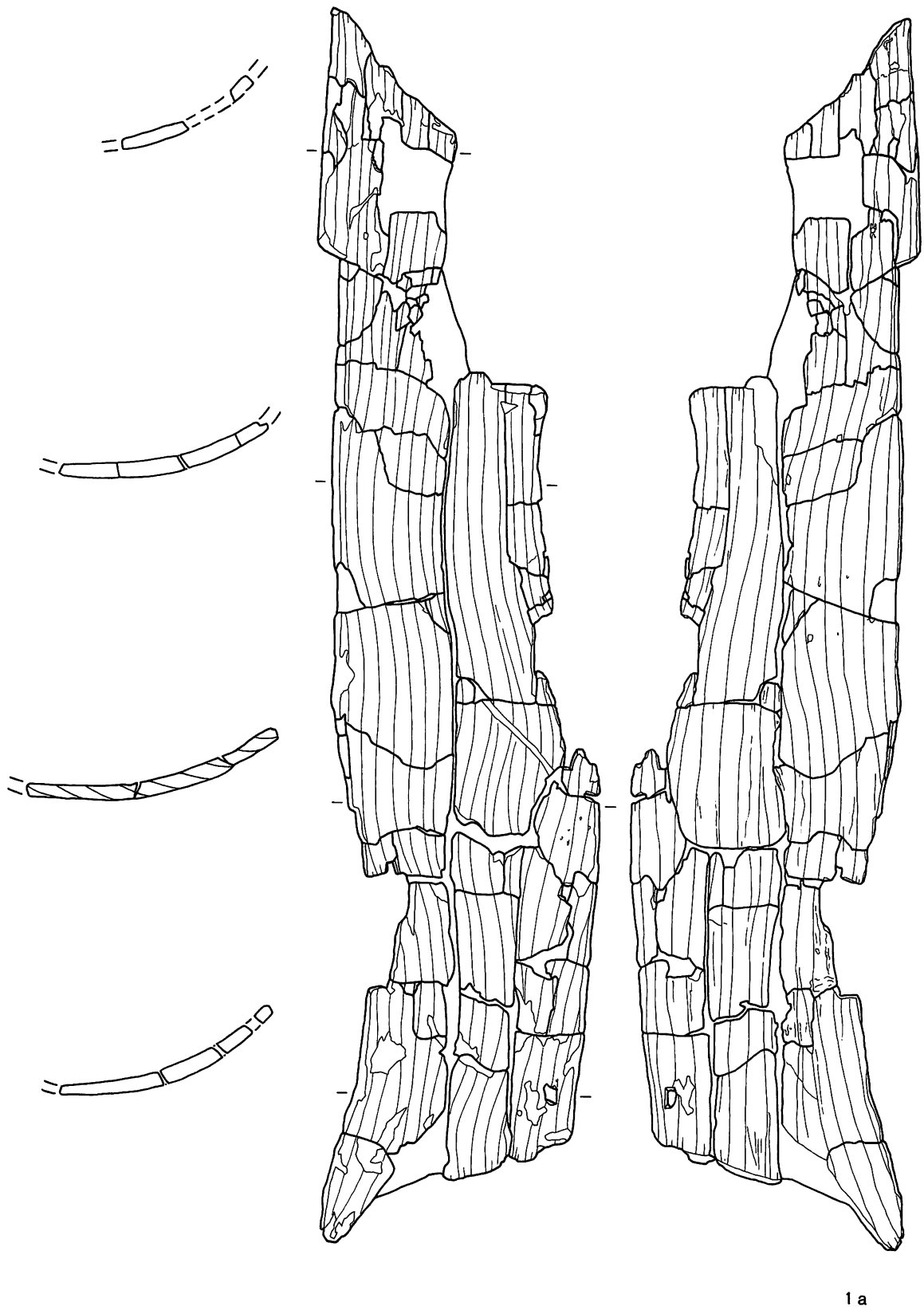
内容は、建材類が柱6本・建材3本・建築部材1本・屋根材1組・杭類4本あり、他に建築部材・杭類になりそうな枝材・股木材や板材も多い。重なりあいや、台地との直交・平行という位置関係、柱等の向きなど、建物の存在を想定させる状況にある。舟関係では舟敷(1)・櫂(4)、製品類にはキテ中柄(10)・漆椀(23)・大型篋(34)・竹材加工製品(16)・曲物底再利用品(57)のほか、柁目板の出土も多い。漆椀・竹材加工製品・曲物関係など地場物ではなさそうな製品の出土が興味深い。

掘り込みや柱穴などがあれば遺構として考えられたが、低湿部は層を越えた遺物の重なりで、台地は道路側溝や水田造成の攪乱で、遺構認定はできずにいた。次年度以降の報告になるI B 3層より上では、さらに台地縁下に断続的に範囲が拡大する。送り場的な様相をみせる地点も出てくる。

(三浦)

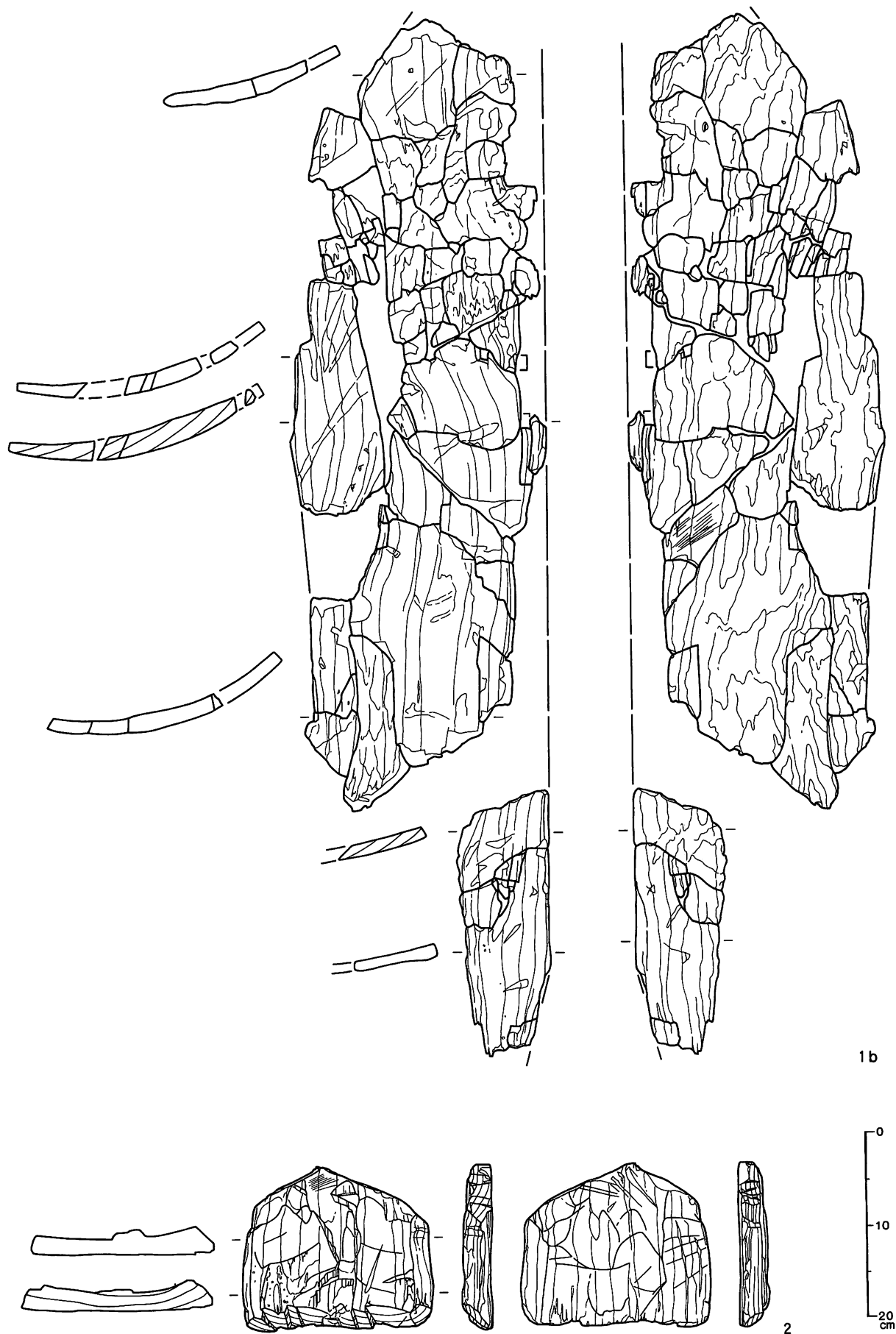
引用参考文献

- 勸北海道埋蔵文化財センター 1993 『美沢川流域の遺跡群Ⅷ』北埋調報83
- 勸北海道埋蔵文化財センター 1996 『美沢川流域の遺跡群Ⅸ』北埋調報102
- 勸北海道埋蔵文化財センター 1996 『千歳市オサツ2遺跡(2)』北埋調報103
- 勸北海道埋蔵文化財センター 1997 『美沢川流域の遺跡群Ⅹ』北埋調報114
- 勸北海道埋蔵文化財センター 1998 『千歳市ユカンボシC15遺跡(1)』北埋調報128
- 犬飼哲夫・武笠耕三 1953 「アイヌの丸木舟の作製」『北方文化研究報告 第8輯』
- 知里真志保 1953 『分類アイヌ語辞典 植物編』(1976『知里真志保著作集 別巻I』平凡社)
- 萱野茂 1978 『アイヌの民具』アイヌの民具刊行運動委員会編
- 山田昌久ほか 1999 「浄法寺町漆文化収蔵庫収蔵品調査」『人類誌集報1999』東京都立大学人類誌調査グループ
- 東京都立大学人類誌調査グループ 1997 『人類誌集報1997』
- 東京都立大学人類誌調査グループ 1999 『人類誌集報1999』
- 日本観光文化研究所 1975 『あるくみるきく103 特集 日本のうつわ』



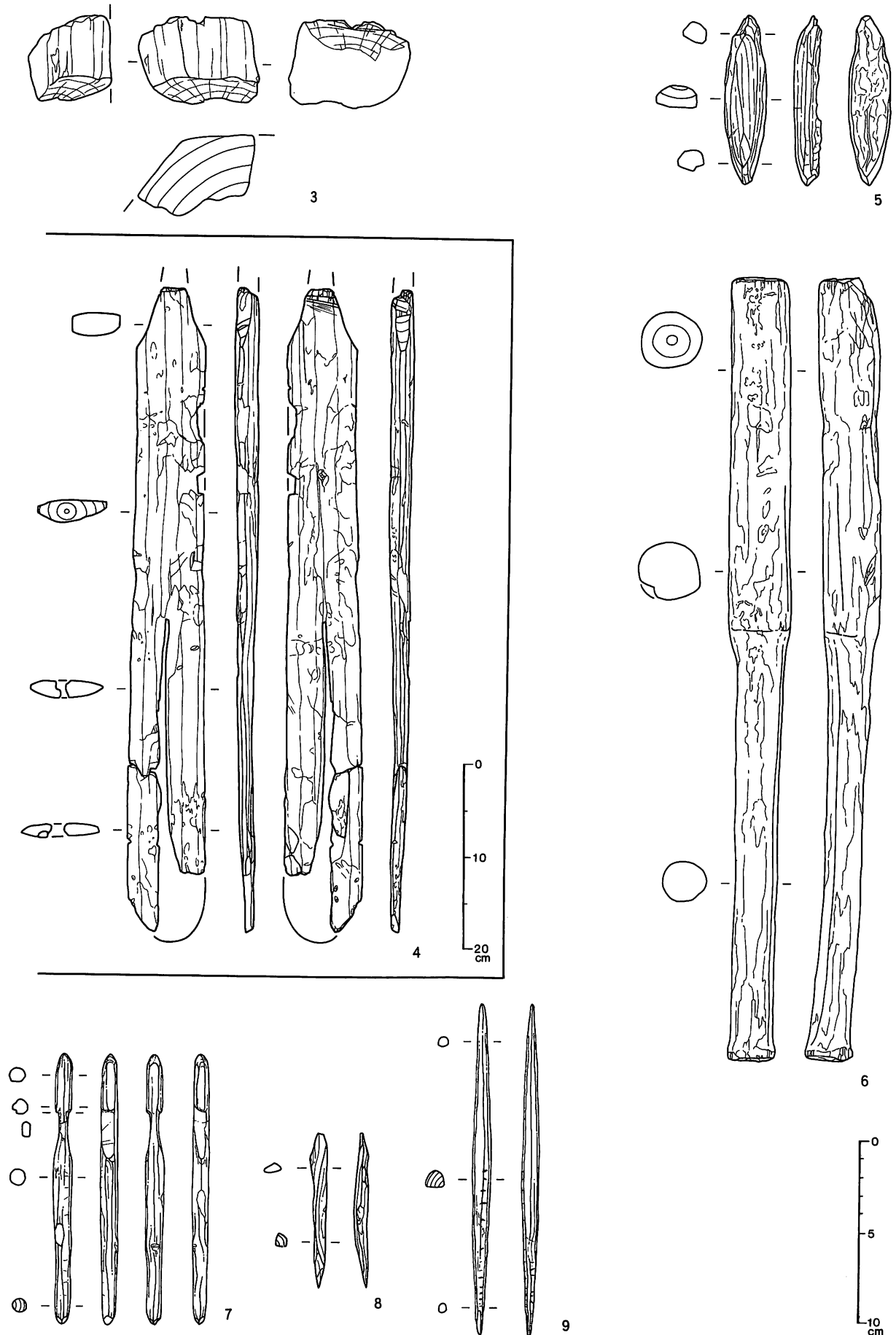
0 10 20cm

図IV-23 IB4層の木製品(1)

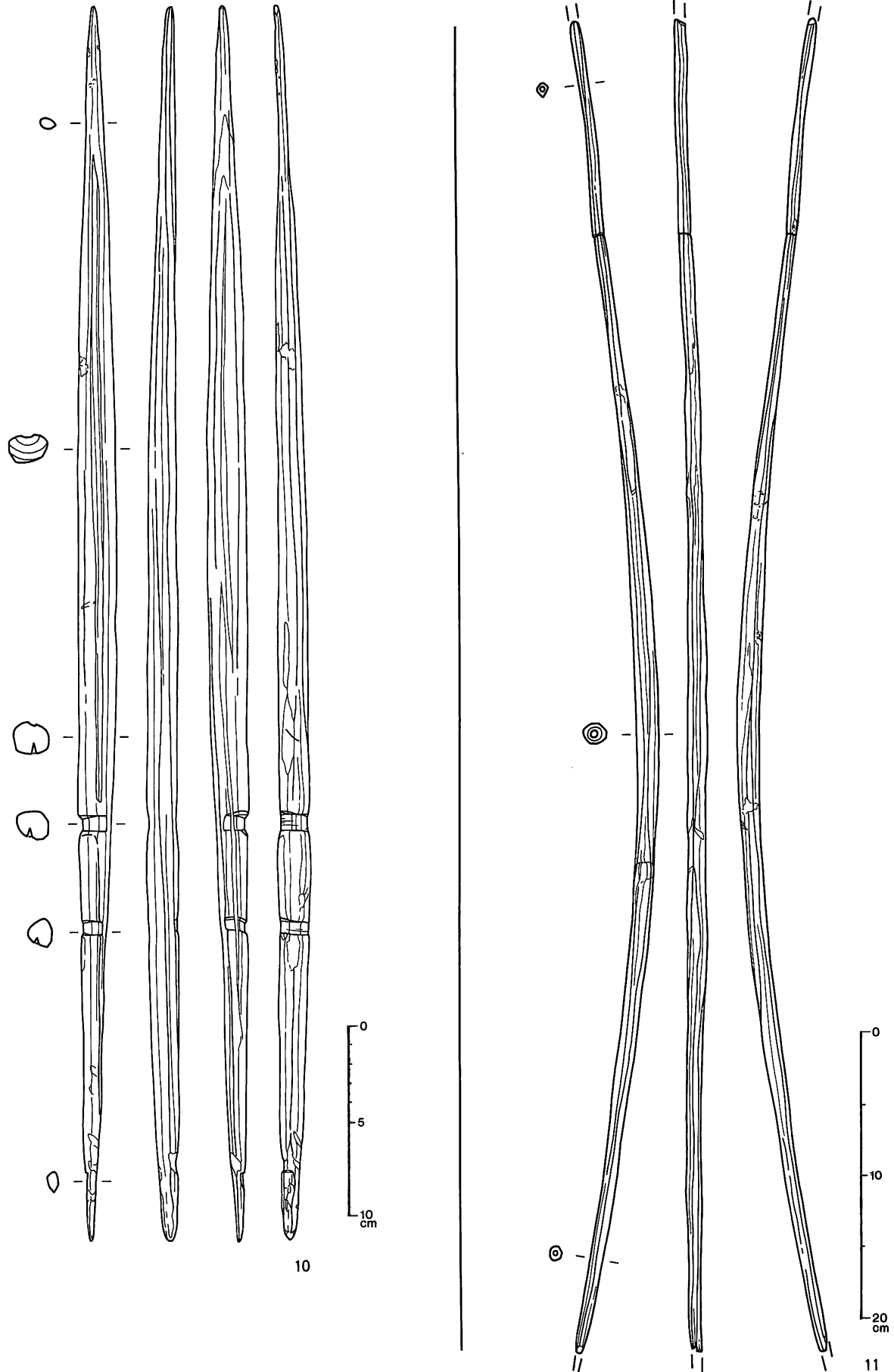


図IV-24 I B 4層の木製品(2)

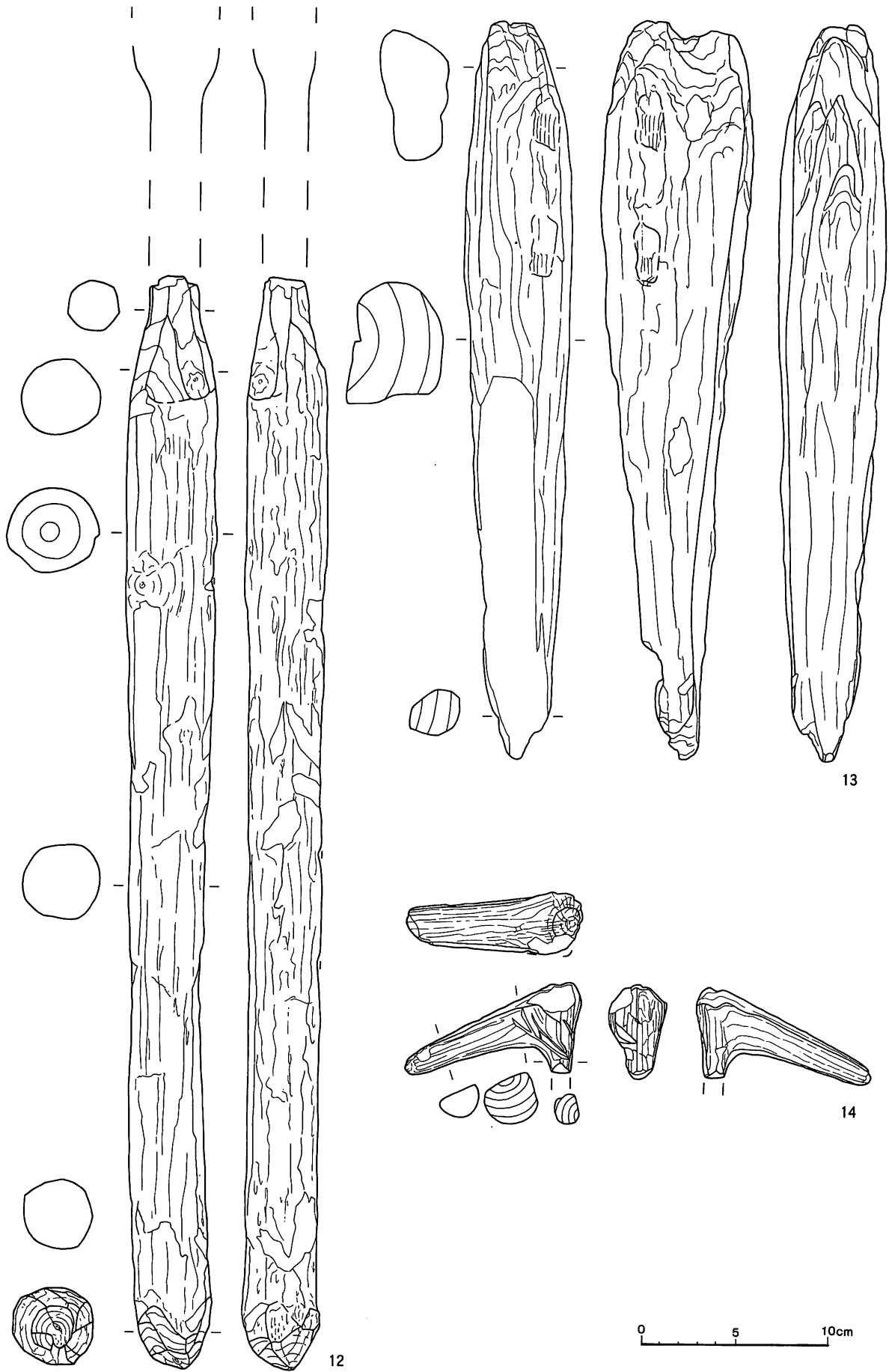
8 IB4層の木製品



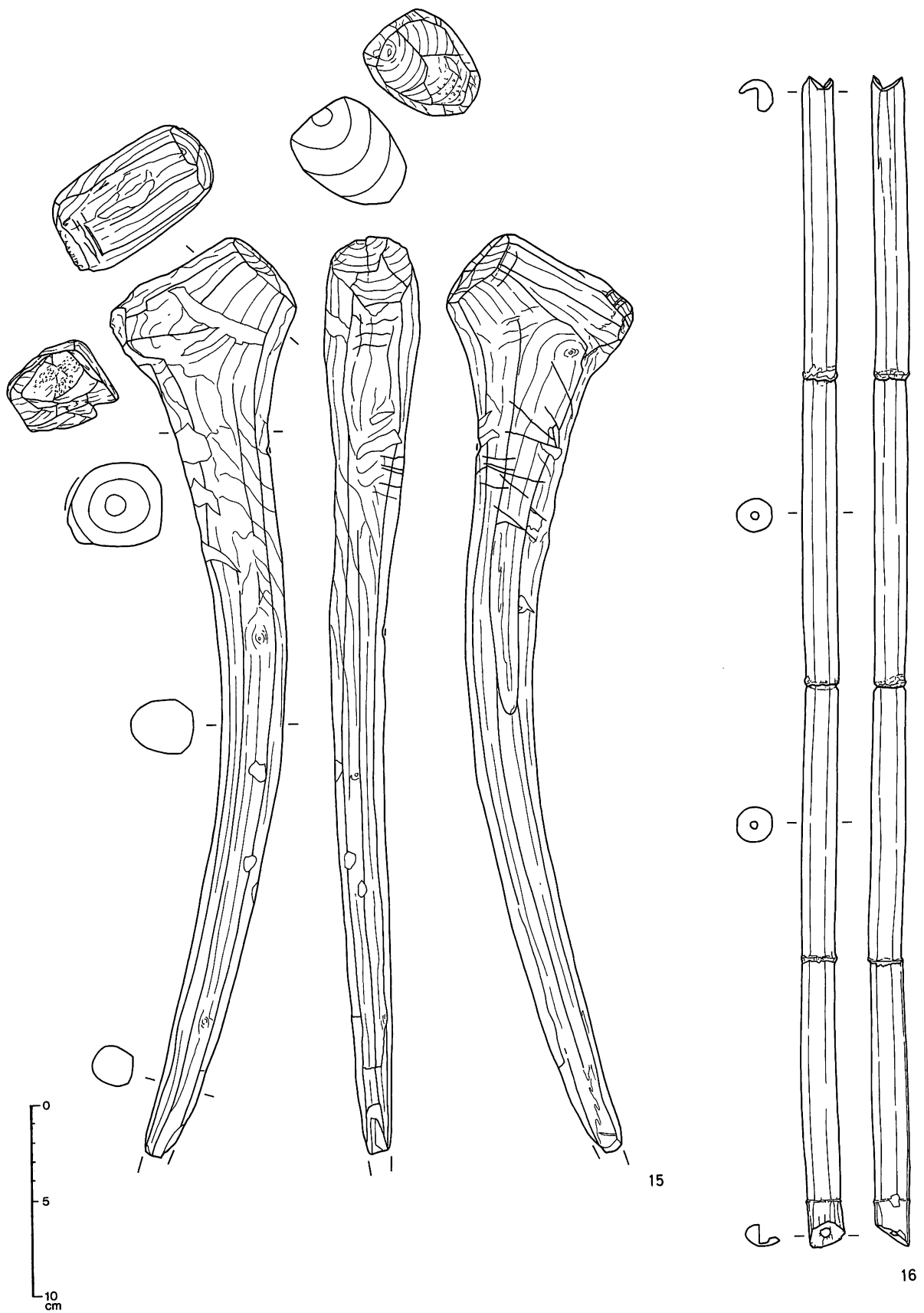
図IV-25 IB4層の木製品(3)



図IV-26 I B 4層の木製品(4)

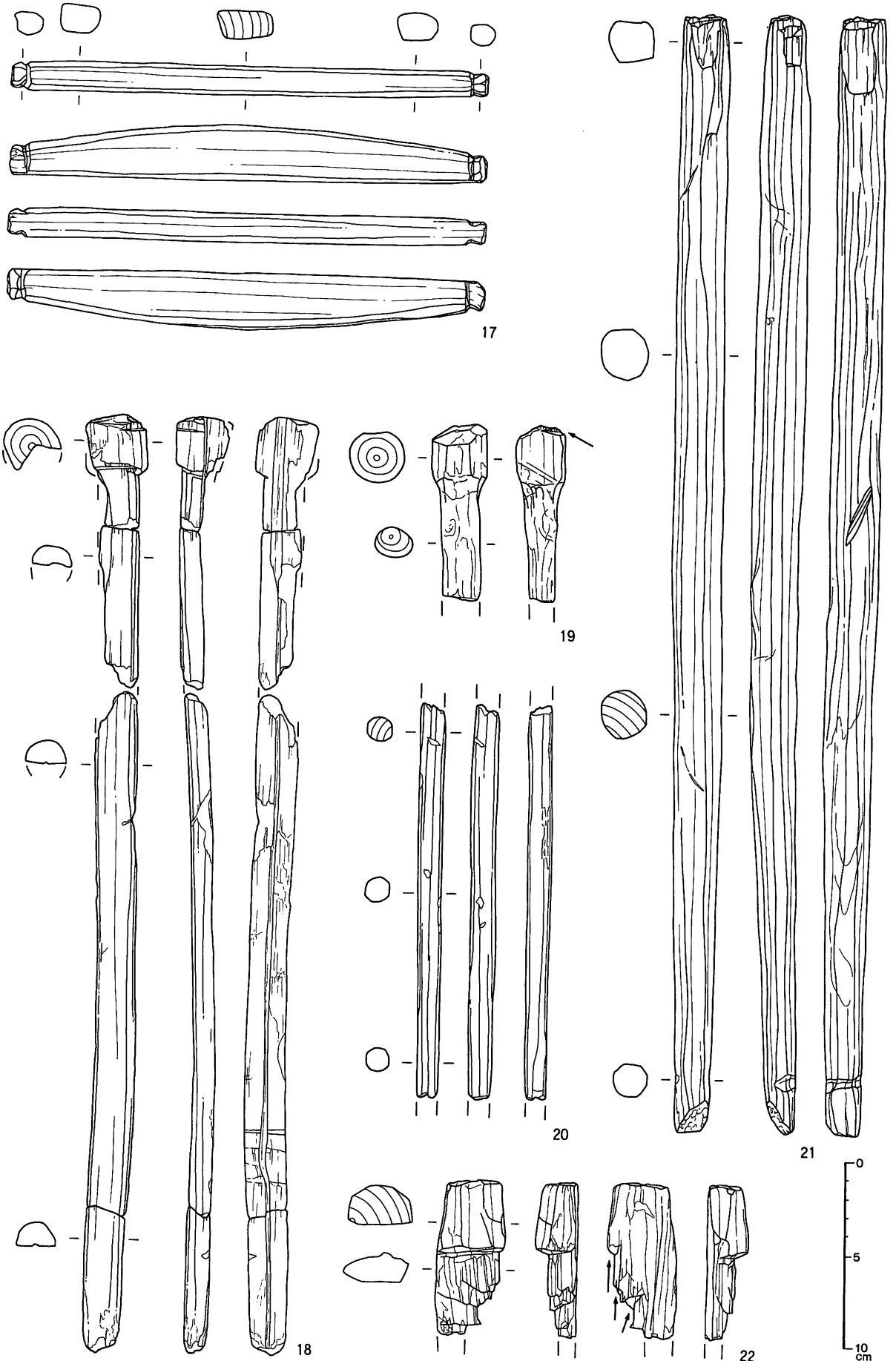


図IV-27 IB4層の木製品(5)

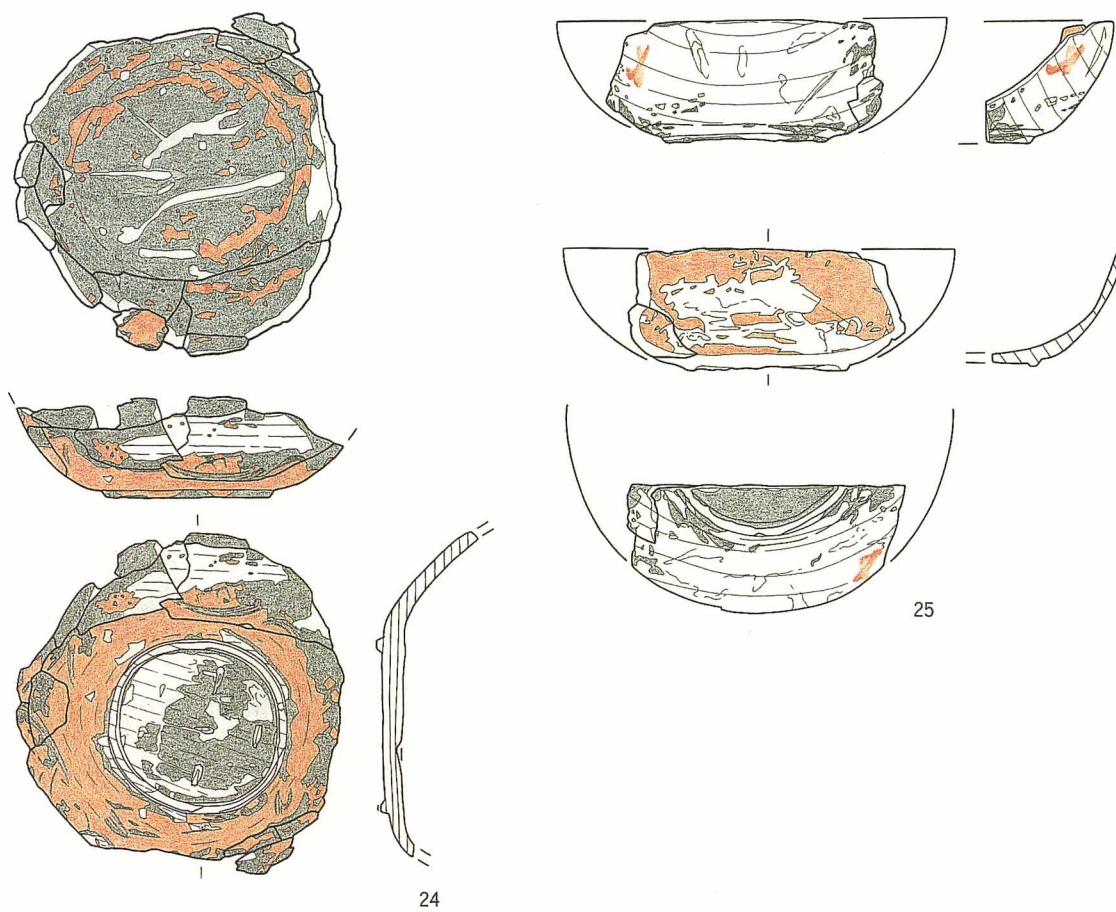
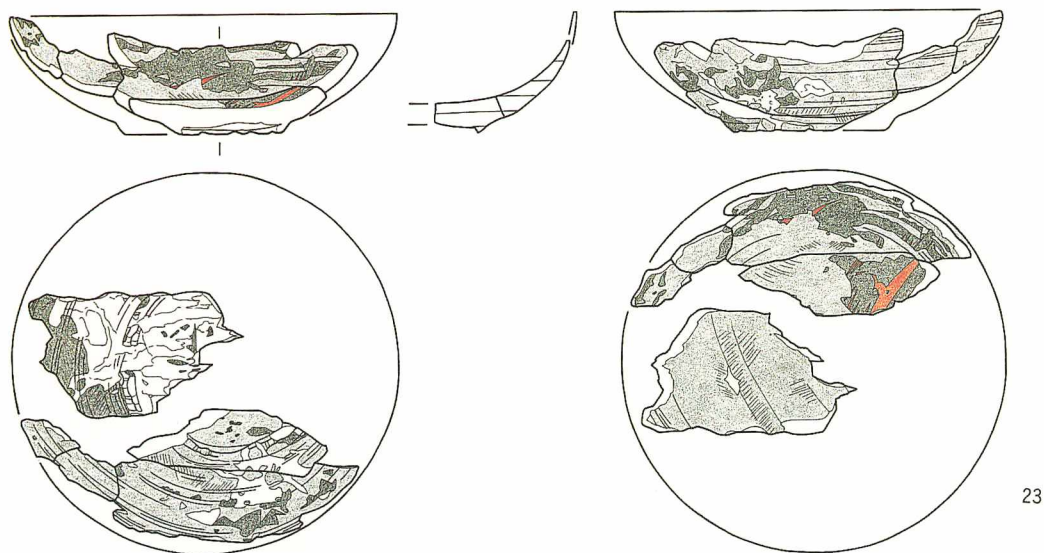


図IV-28 I B 4層の木製品(6)

8 IB4層の木製品

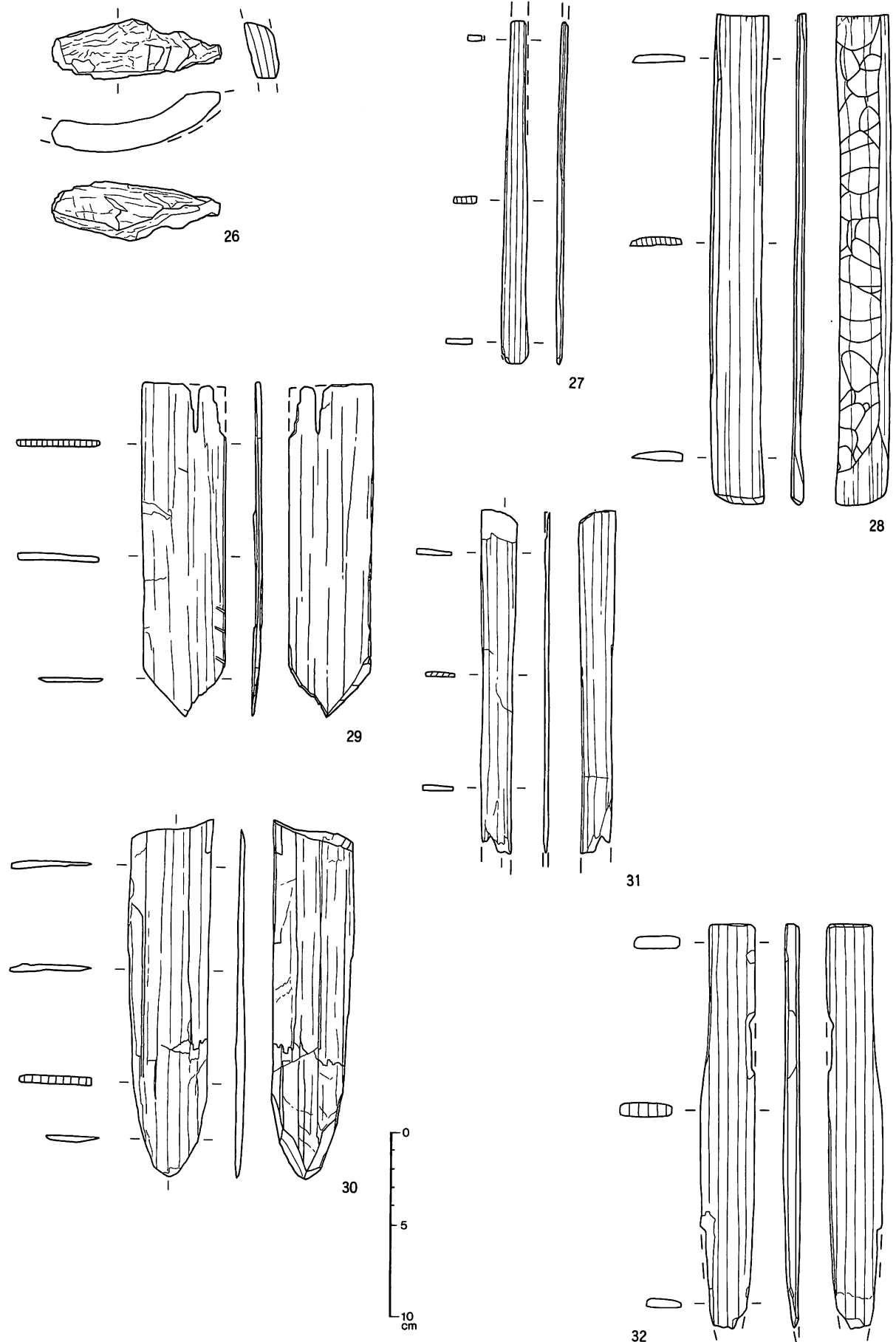


図IV-29 IB4層の木製品(7)

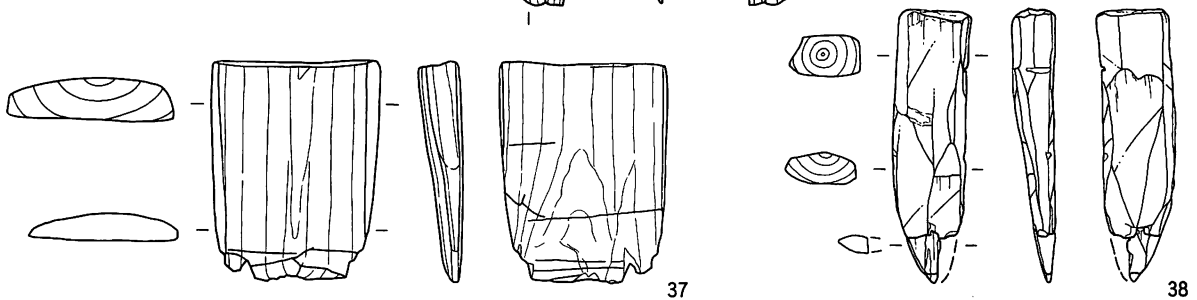
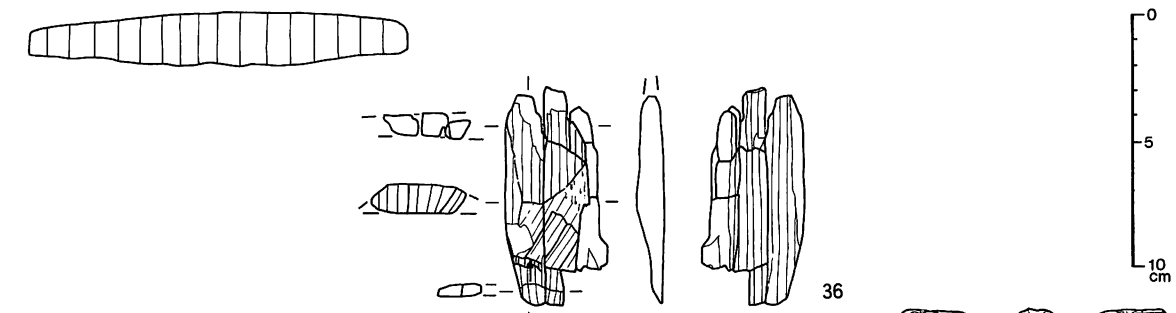
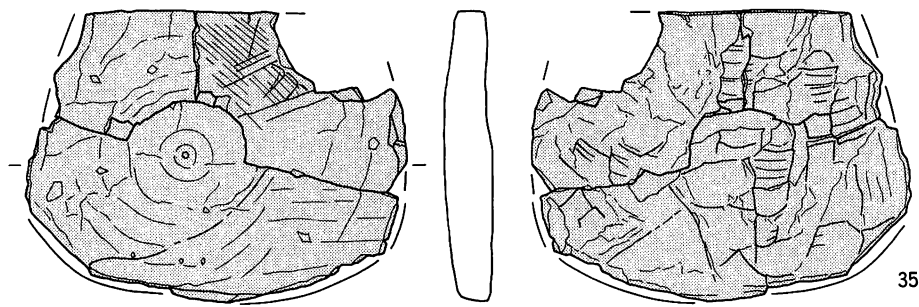
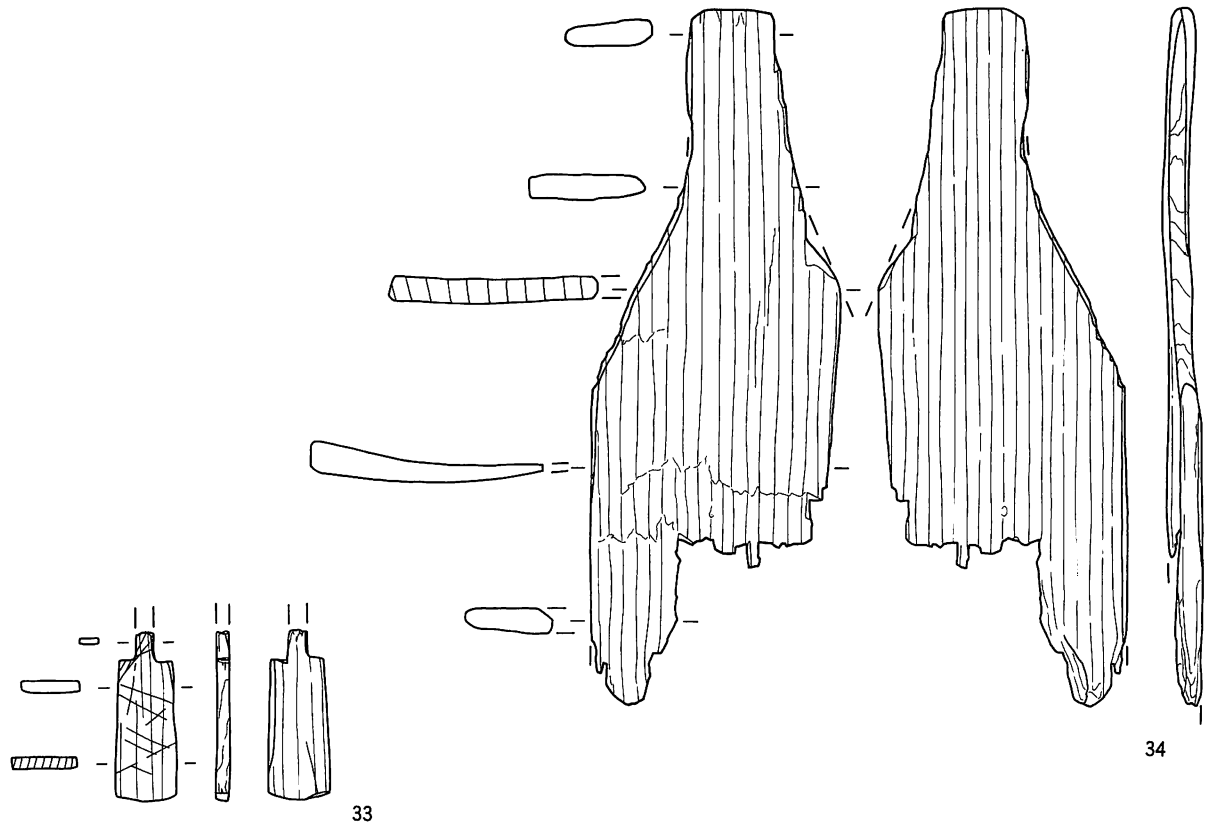


図IV-30 I B 4層の木製品(8)

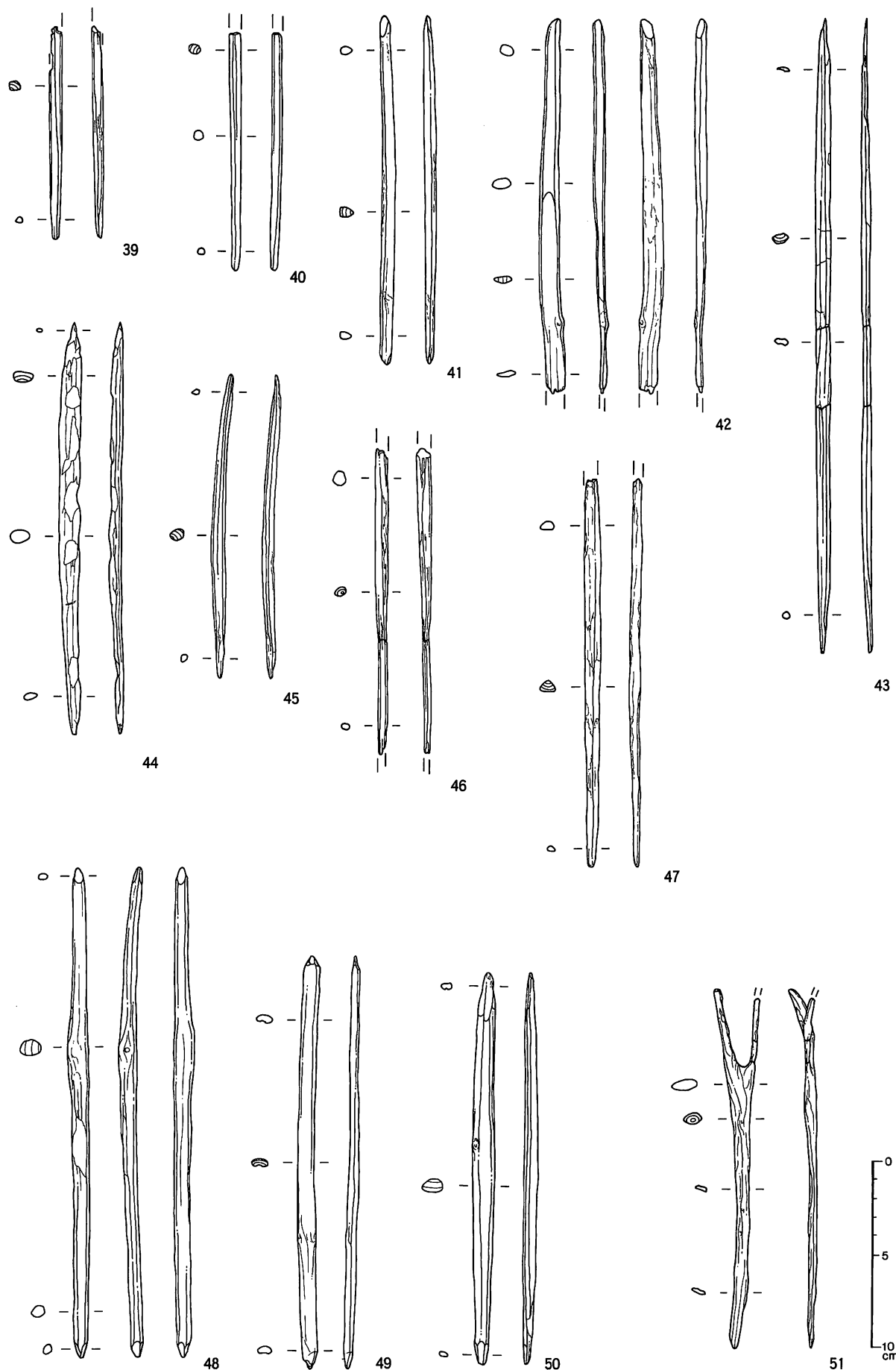
8 IB4層の木製品



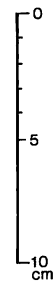
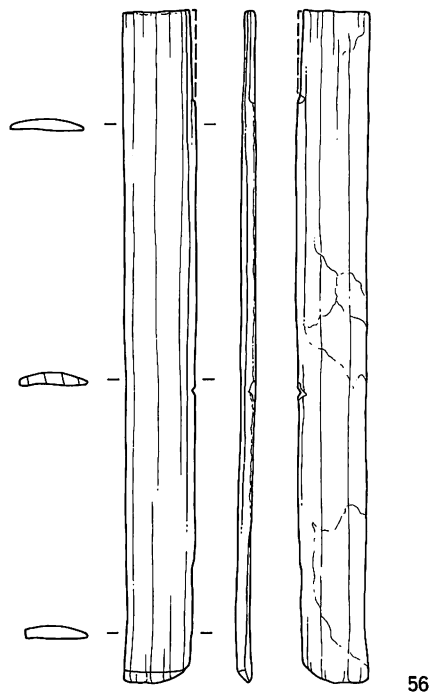
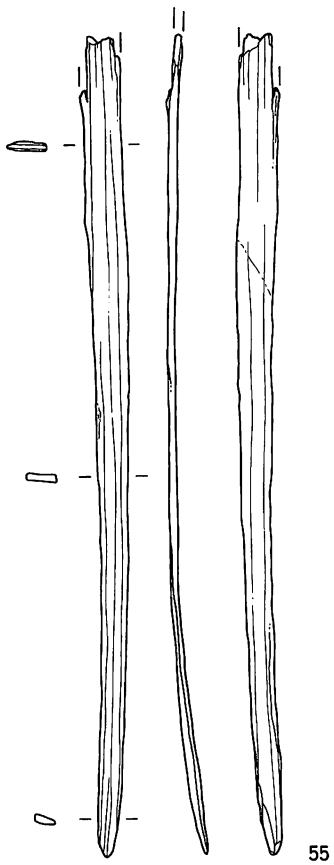
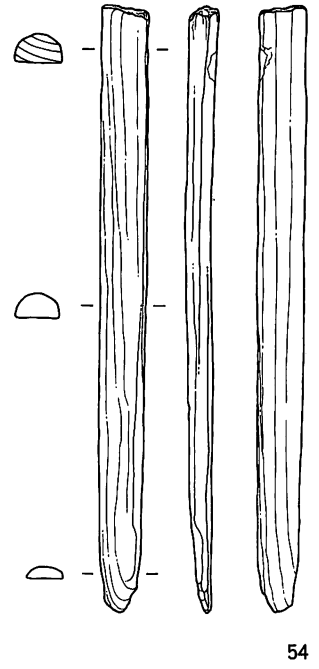
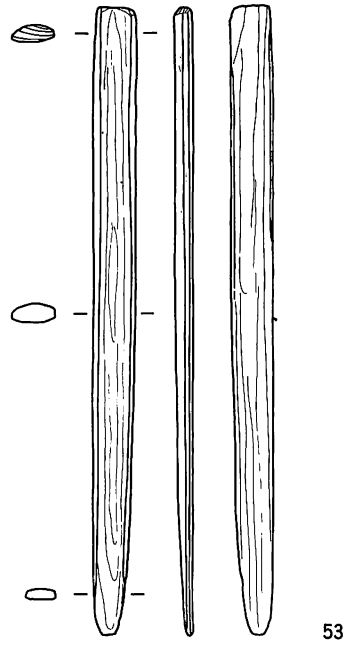
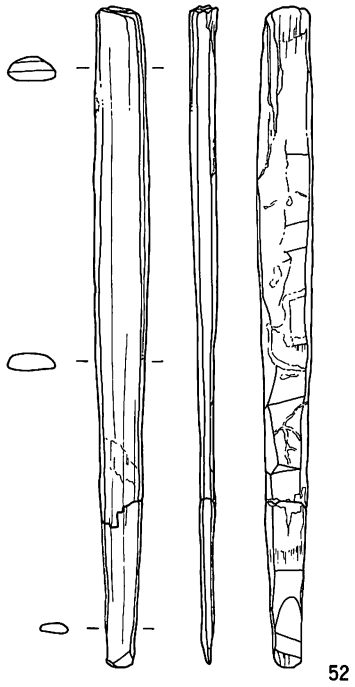
図IV-31 IB4層の木製品(9)



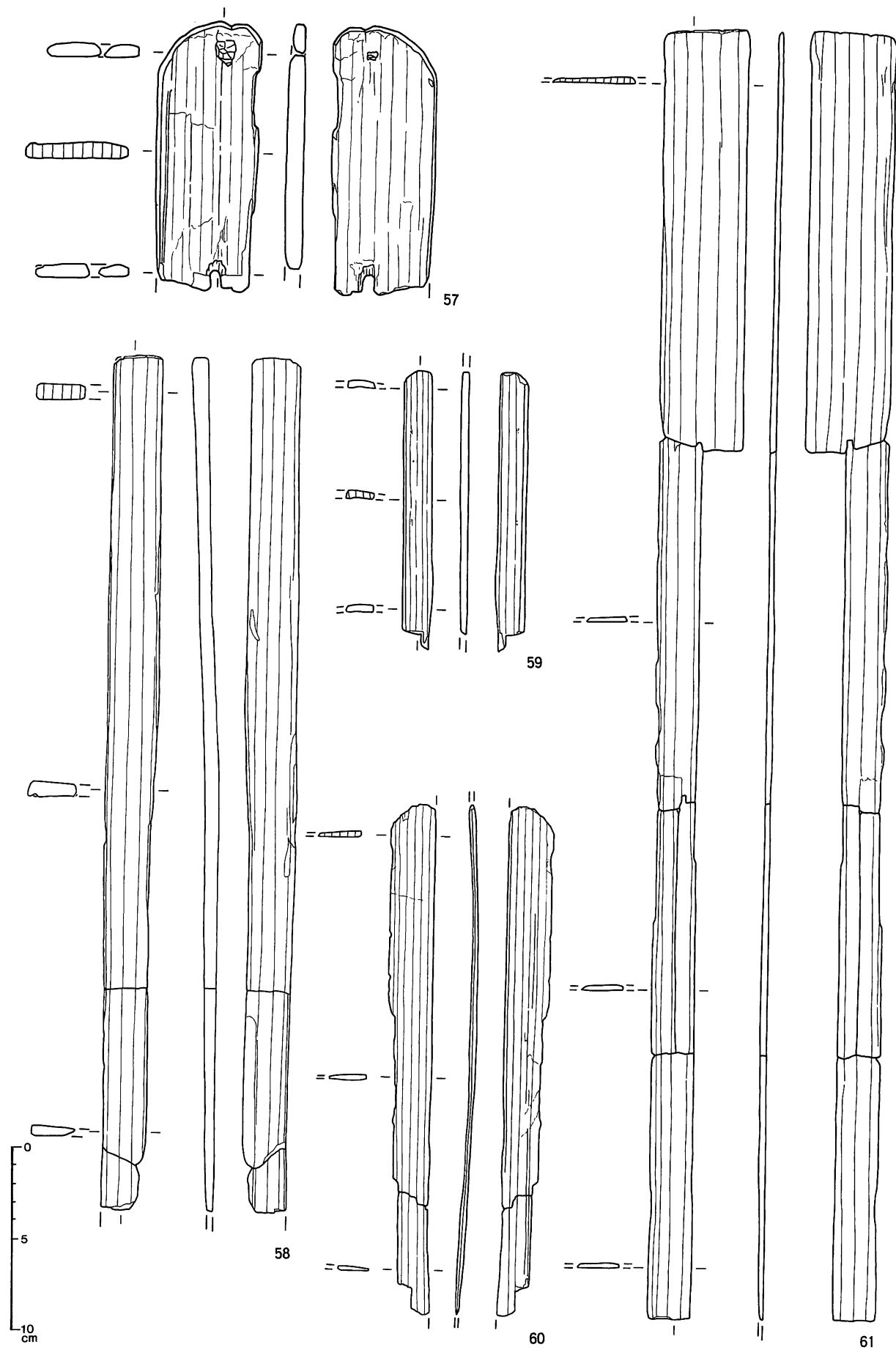
図IV-32 I B 4 層の木製品(10)



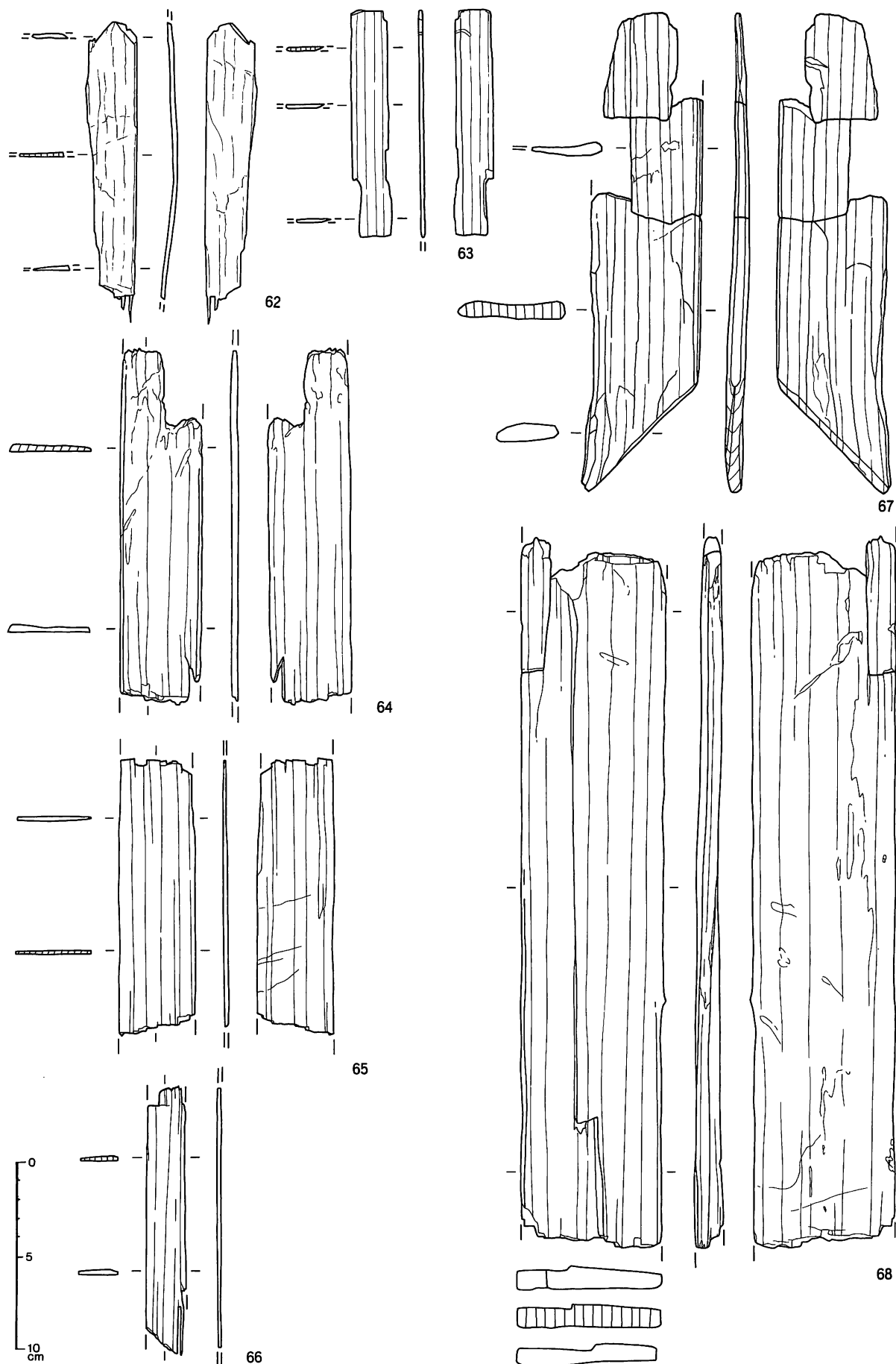
図IV-33 IB4層の木製品(11)



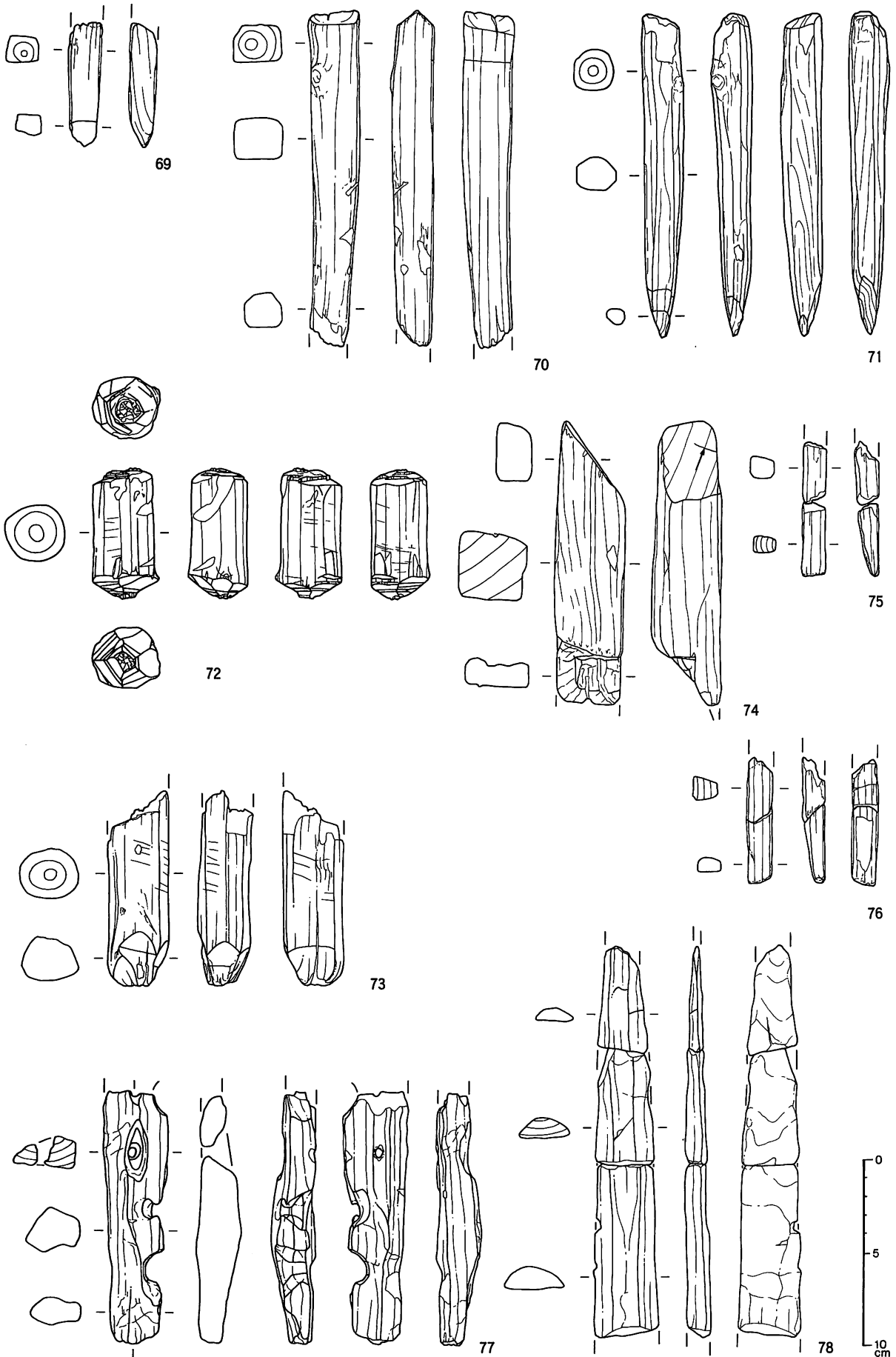
図IV-34 I B 4層の木製品(12)



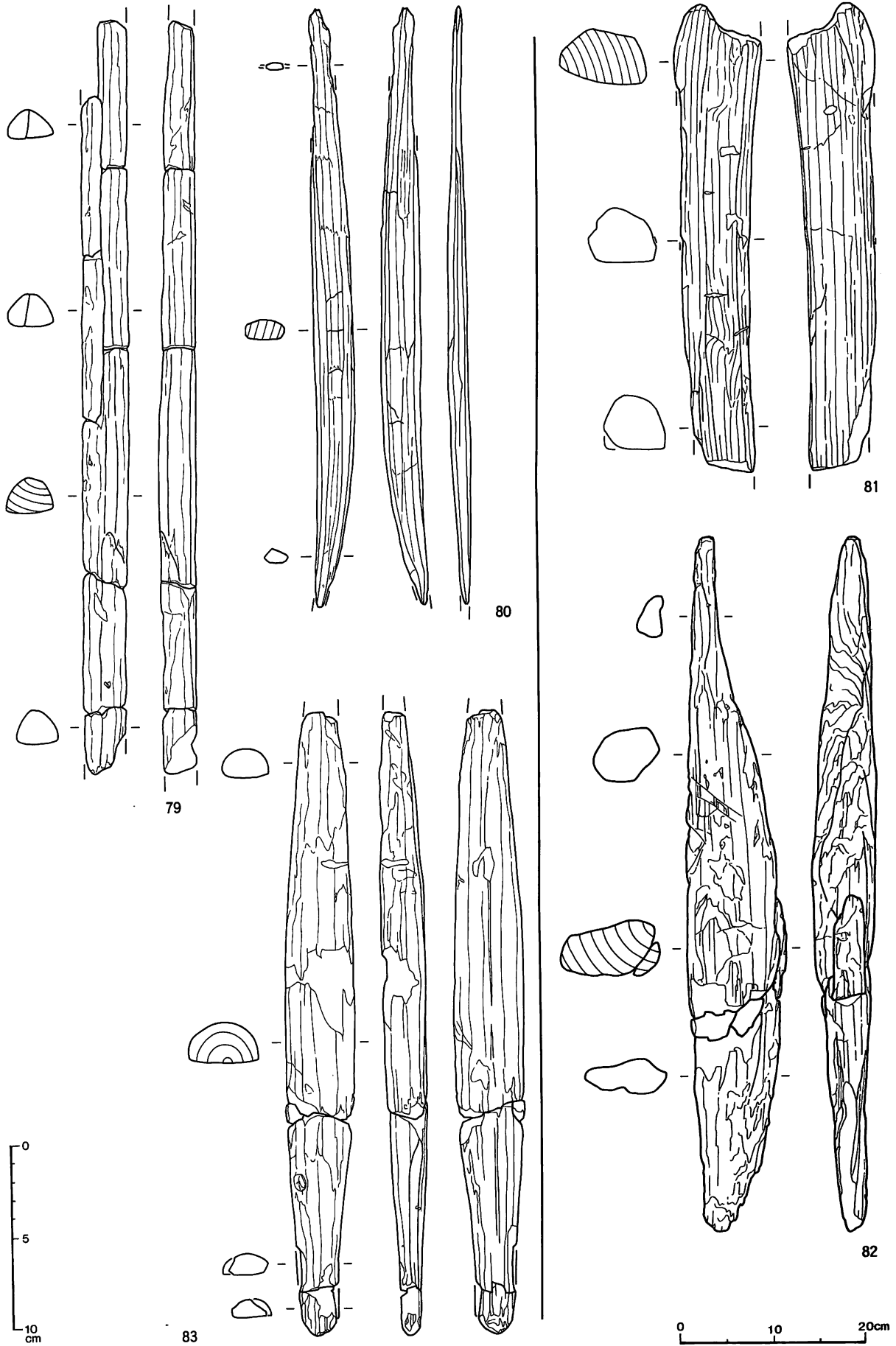
図IV-35 I B 4 層の木製品(13)



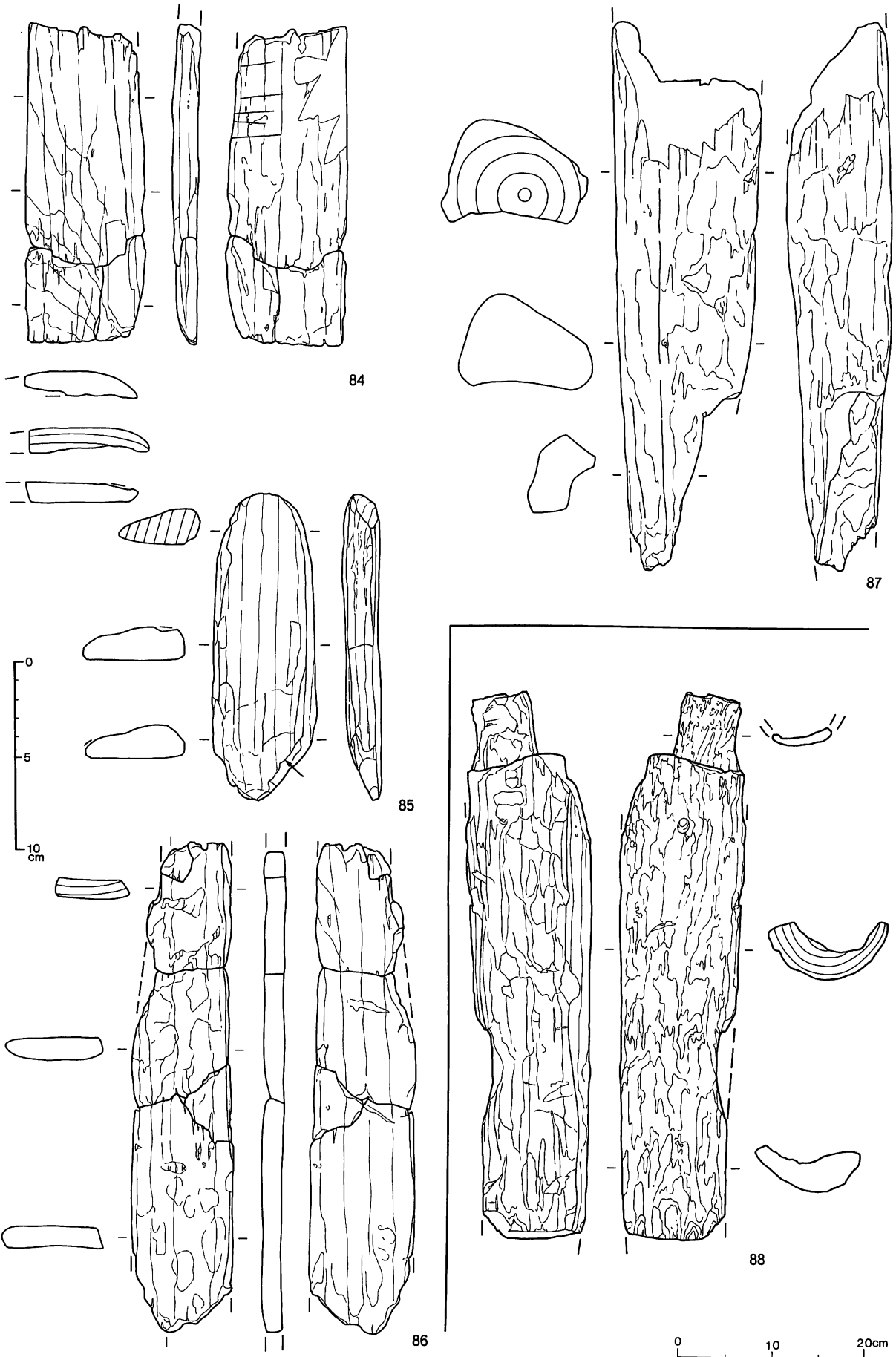
図IV-36 I B 4層の木製品(14)



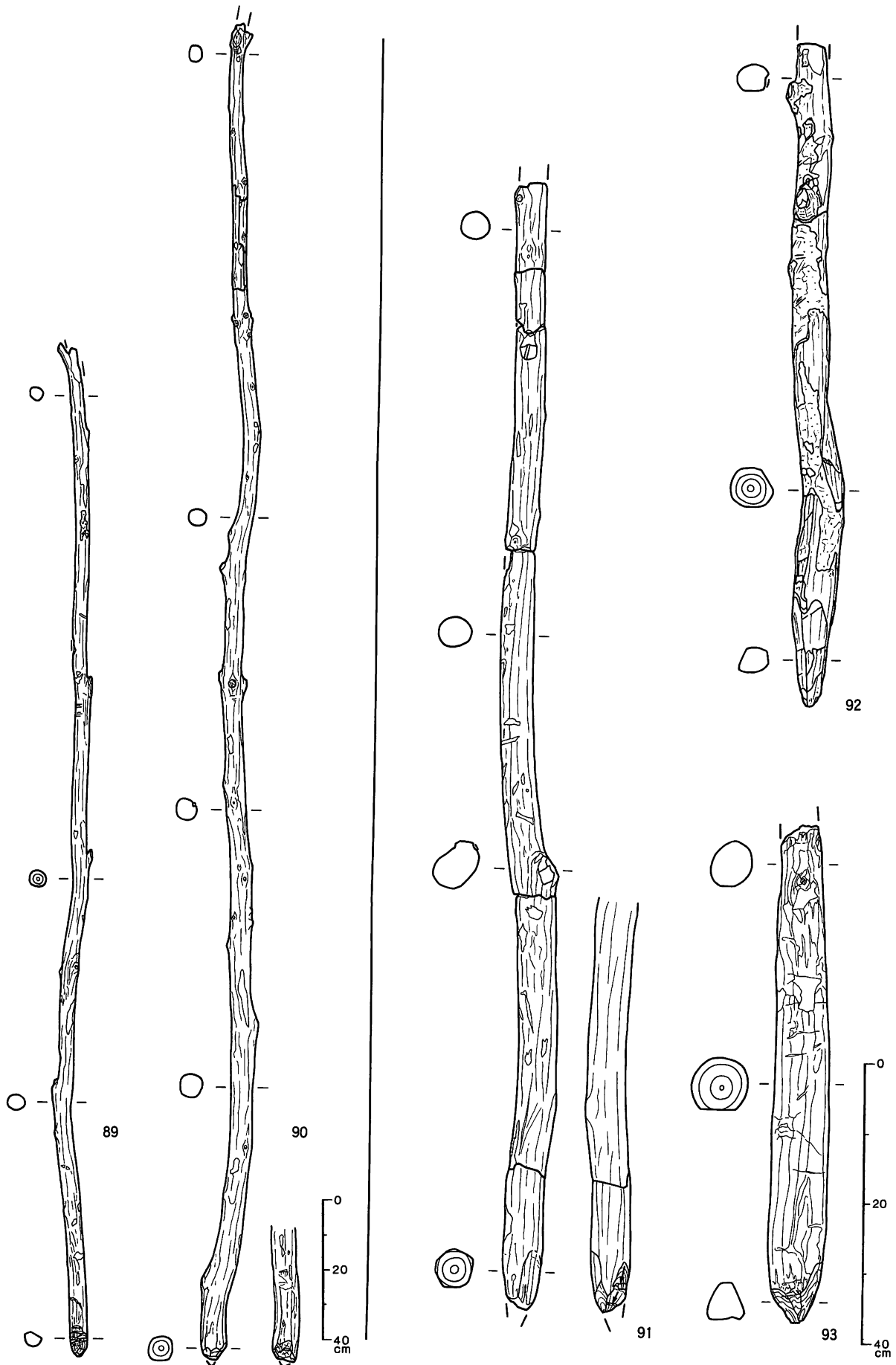
図IV-37 IB4層の木製品(15)



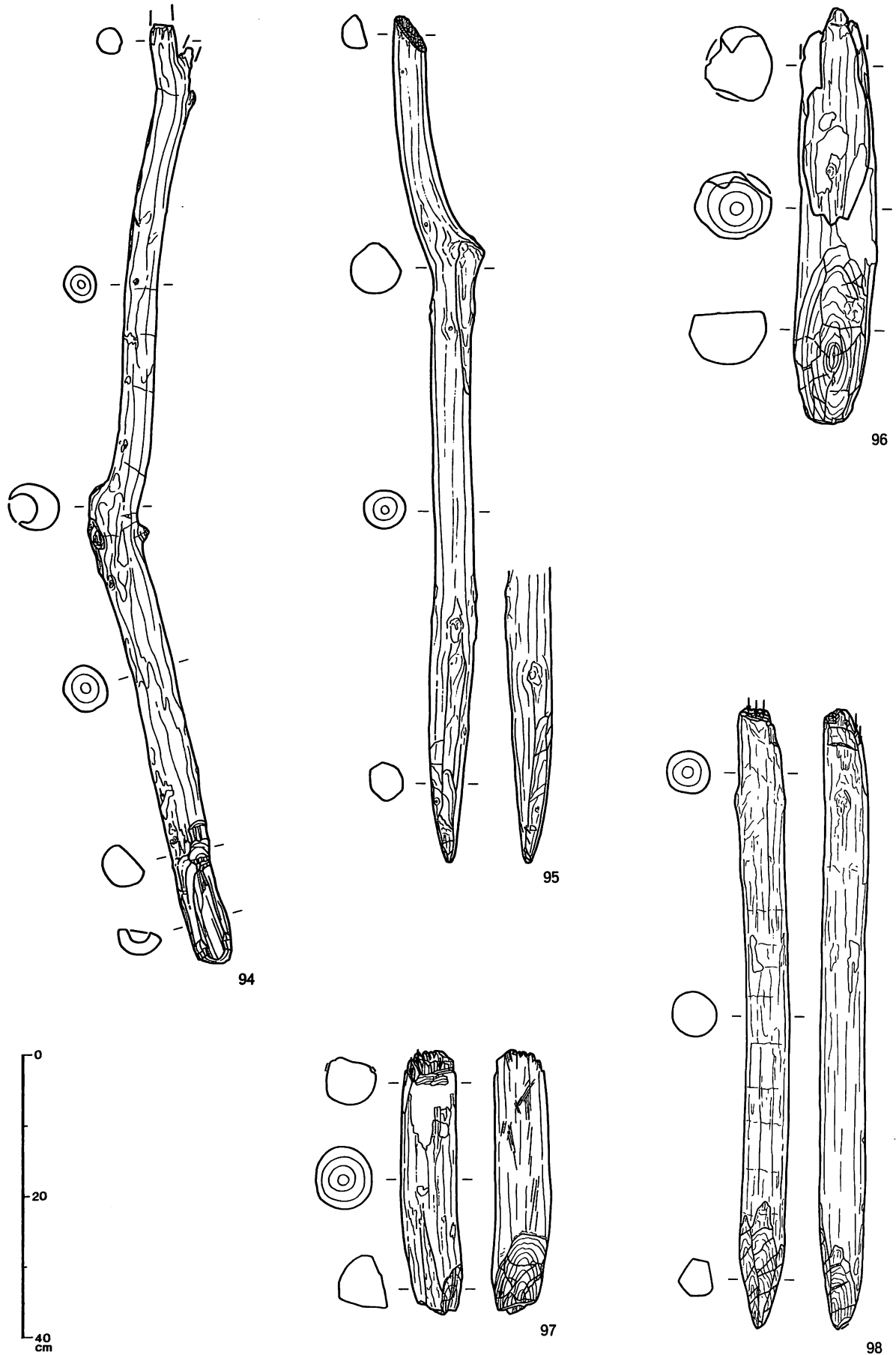
図IV-38 I B 4層の木製品(16)



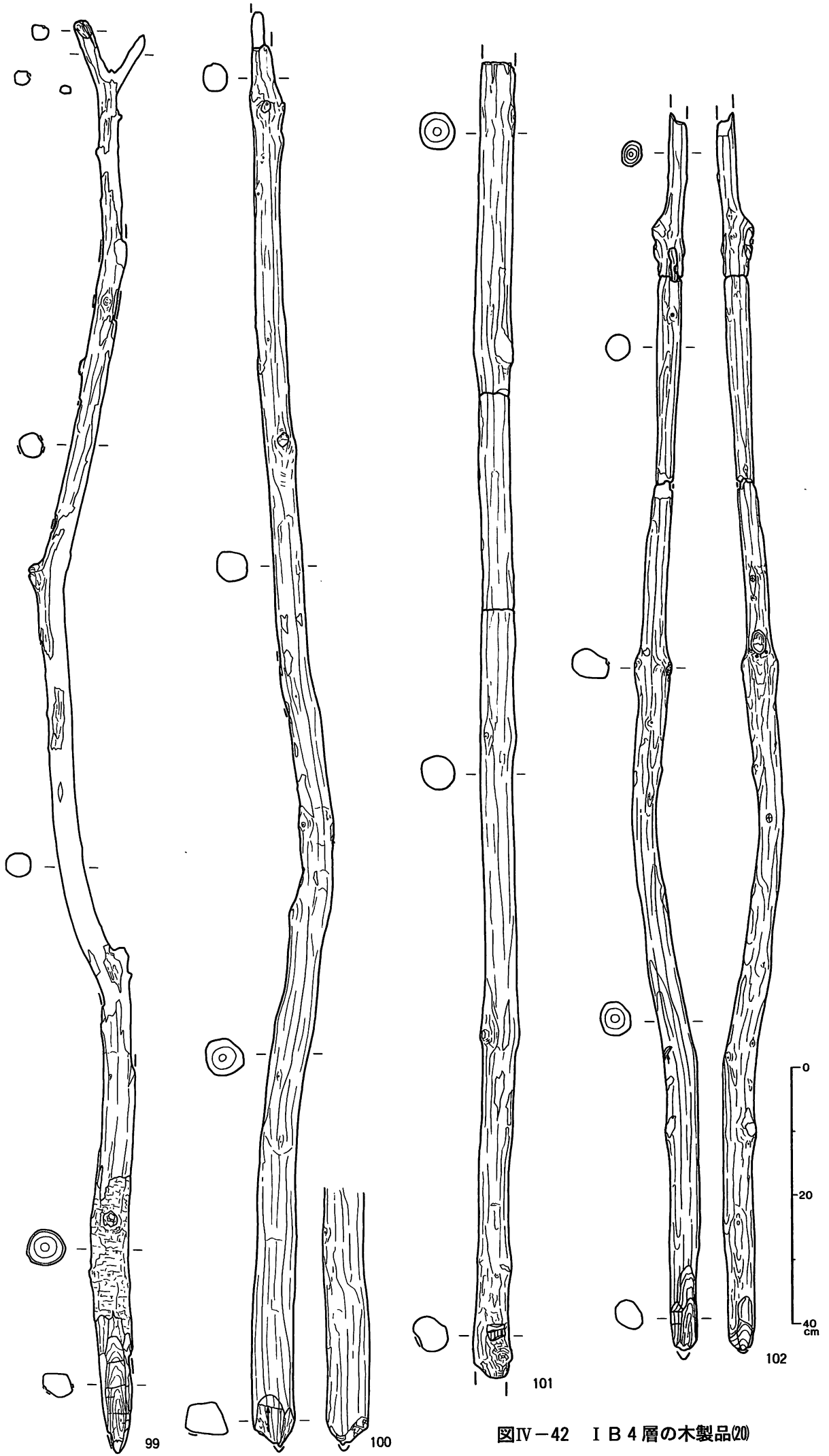
図IV-39 IB4層の木製品(17)



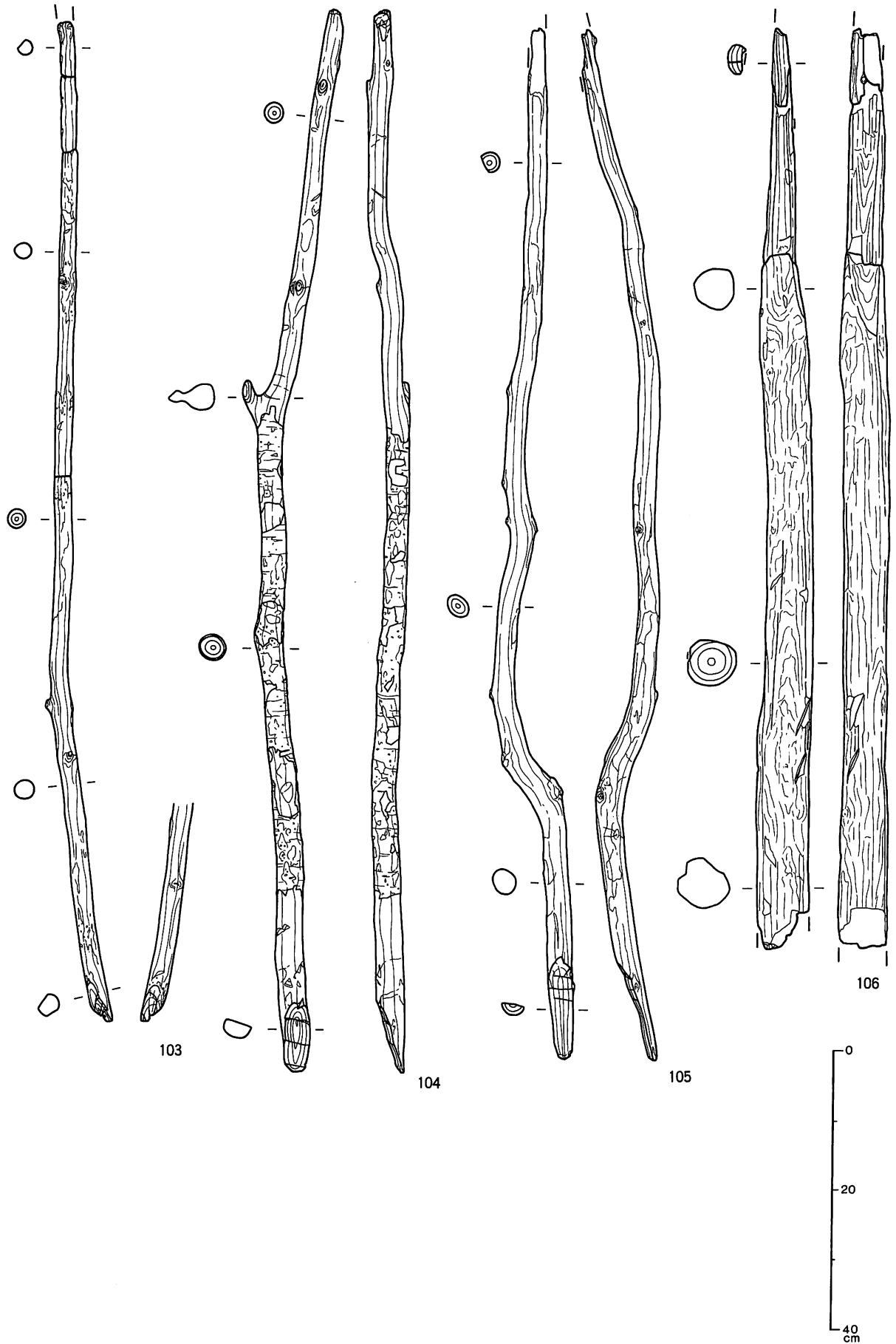
図IV-40 I B 4層の木製品(18)



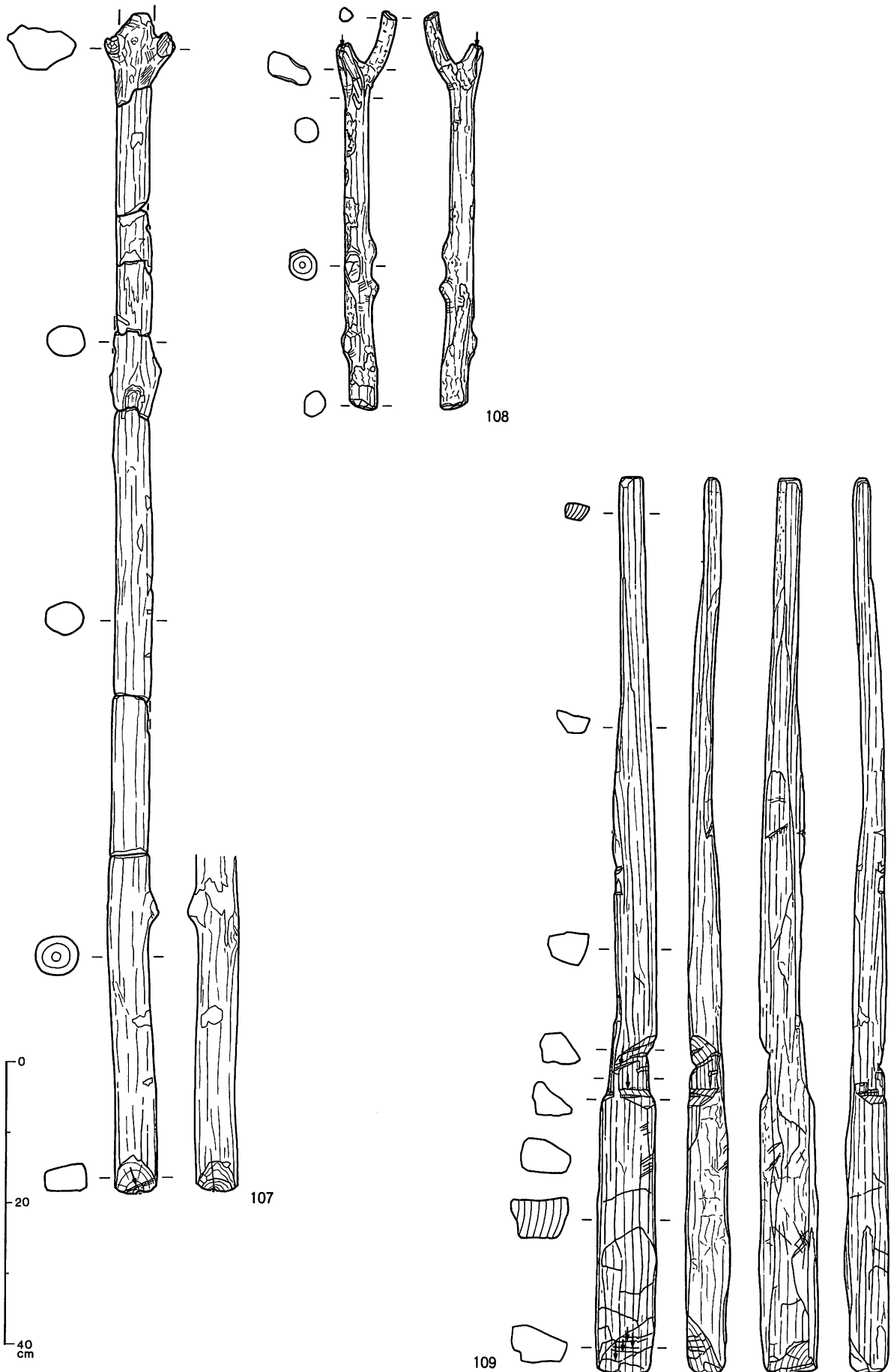
図IV-41 IB4層の木製品(19)



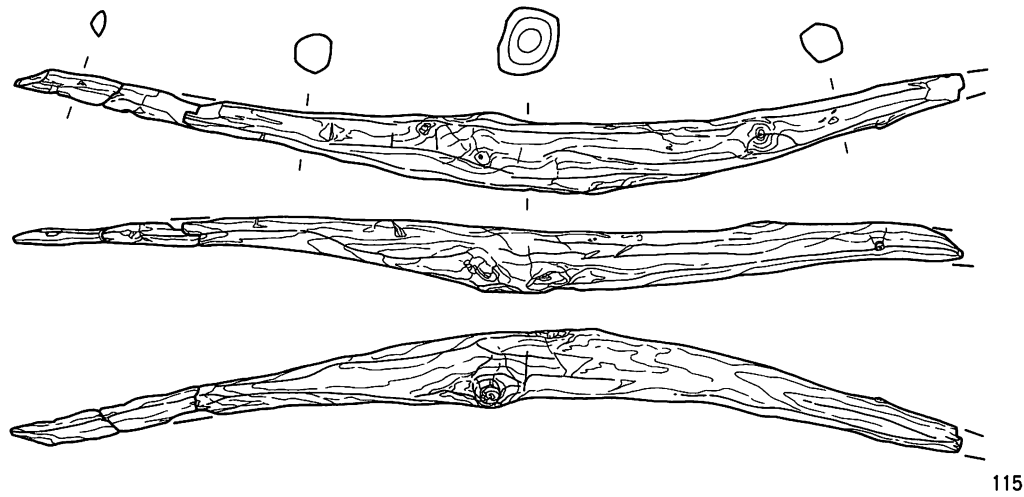
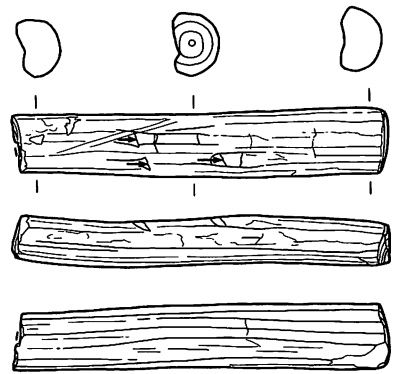
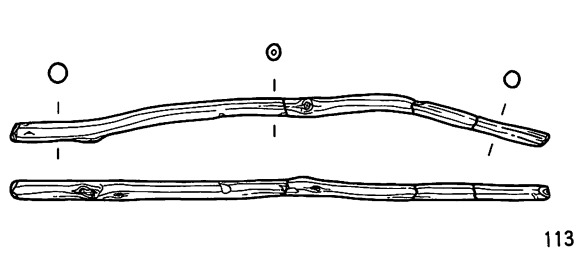
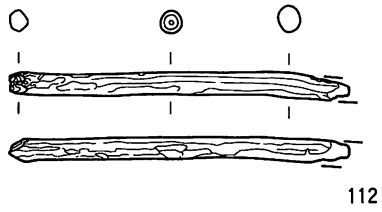
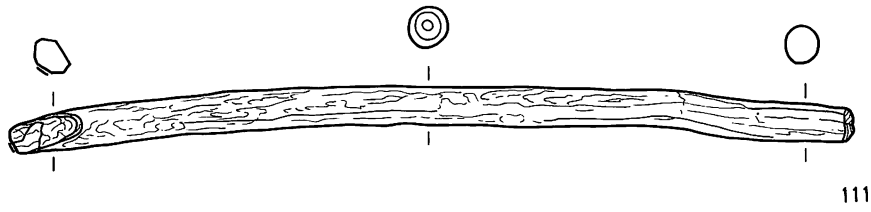
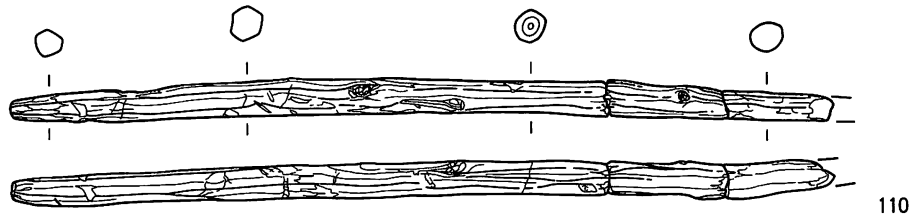
図IV-42 I B 4層の木製品(20)



図IV-43 IB4層の木製品(2)



図IV-44 I B 4 層の木製品(2)

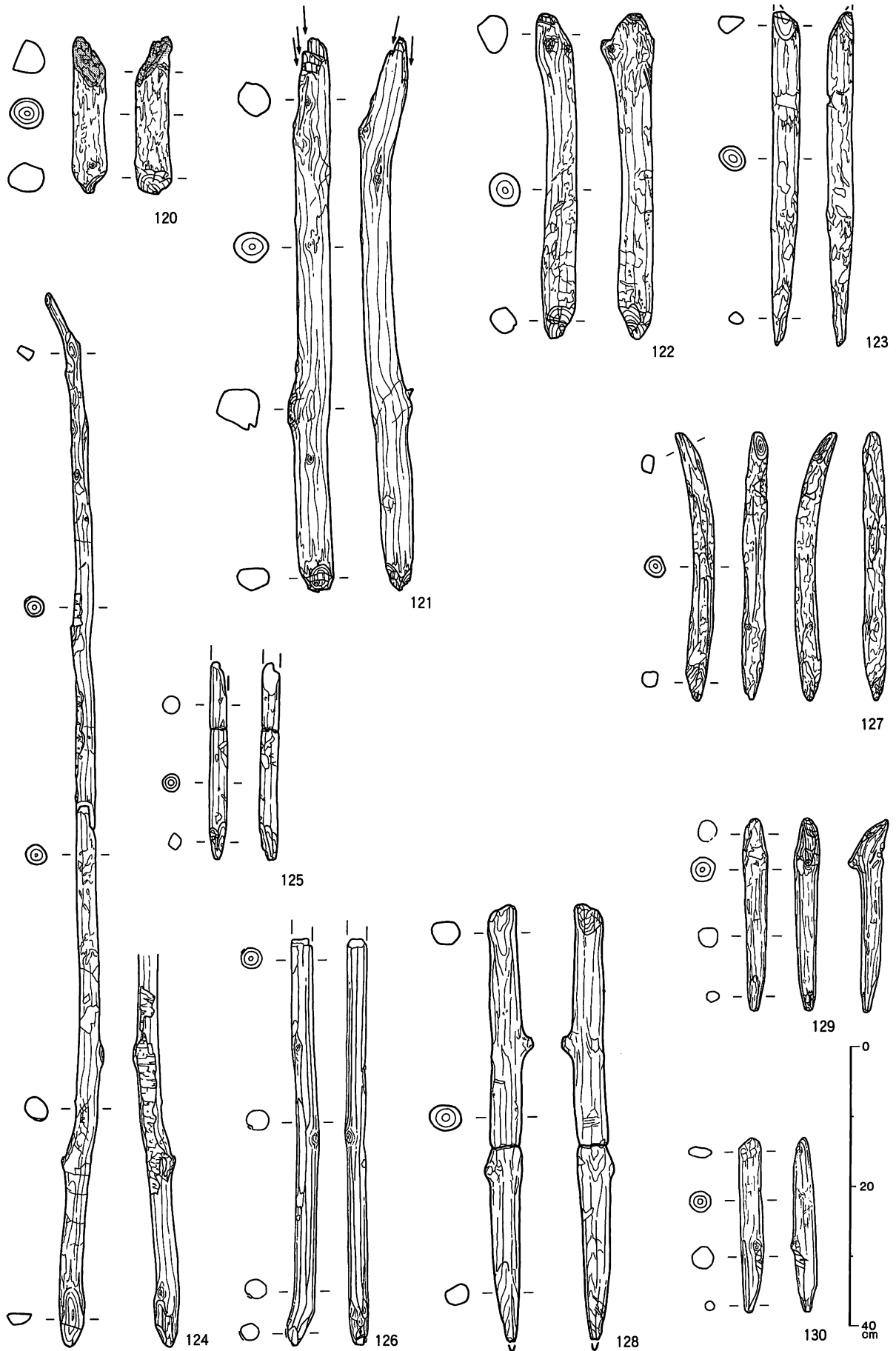


0 20 40cm

図IV-45 IB4層の木製品(23)



図IV-46 I B 4層の木製品(24)



図IV-47 IB4層の木製品(25)

表IV-14 杭列10の杭一覽

杭列No. - 杭No.	遺物名称	遺物番号	木取り	先端形状等	元末	樹皮痕	種	長さcm	径cm	重量g	縮尺	備考
杭列10-1	—	—	—	—	—	—	—	—	10.0	—	—	痕跡
杭列10-2	—	—	—	—	—	—	—	—	6.0	—	—	痕跡
杭列10-3	—	—	—	—	—	—	—	—	6.0	—	—	痕跡
杭列10-4	—	—	—	—	—	—	—	—	5.0	—	—	痕跡
杭列10-5	—	—	—	—	—	—	—	—	7.0	—	—	痕跡
杭列10-6	杭	8275	丸木	尖先5面削	元先	○	ハンノキ属	(20.7)	3.9	(154.5)	1/8	
杭列10-7	杭(半割材)	8272	半割材	稜状削りあり	—	—	ハンノキ属		11.6			
杭列10-8	杭	8271	丸木	尖先6面削	元先	○	ハンノキ属	(63.0)	(12.2)	(3460.0)	1/8	
杭列10-9	—	—	—	—	—	—	—	—	8.0	—	—	痕跡

表IV-15 IB4層掲載木製品一覽(1)

製品番号	遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮痕	種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	縮尺	備考
1a	舟敷	② I25ab	3501-0	横木		シナノキ属	(123.2)	(25.2)	1.6	(1460.0)	縮尺1/6	保存処理後実測
1b			3501-0,0	横木		シナノキ属	(122.3)	27.9	2.5	(1375.0)	縮尺1/6	
2	舟材	② M38b	2228	板目		ハリギリ	17.8	20.5	3.3	600.0	1/6	
3	舟材	② N39d	6596	横木		ハンノキ属	(6.55)	(4.7)	(4.45)	(58.8)	1/3	軸or鱗
4	糺水掻き部	② H24c, I24d	4461	心持		ヤナギ属	(68.8)	8.5	2.6	(675.0)	1/6	
5	浮子	② N20d	8977	1/8割	○	ハンノキ属	9.1	2.2	1.4	15.8	1/3	
6	魚叩き棒	④ R18c	962	丸木		ヤナギ属	42.6	3.4	3.2	262.2	1/3	
7	矢	④ R18d	995	1/4割		ノリウツギ	14.6	1.0	0.9	8.4	1/3	
8	矢中柄	② L30c	1123	1/4割		サクラ属	8.3	0.9	0.8	2.8	1/3	
9	矢中柄	② K27d, K28a	1010	1/4割		ノリウツギ	18.0	1.0	0.95	8.9	1/3	
10	キテ中柄	② I26a	3022	半割		ノリウツギ	64.2	2.0	1.7	105.0	1/3	
11	弓状木製品	② M22c, N22d	7525	丸木		サルナシ属	(92.4)	1.6	1.4	(80.4)	1/4	
12	縦杵	② K26a	3327	丸木		トネリコ属	(57.5)	4.8	4.4	(750.0)	1/3	
13	掛矢	② K28b	987	半割		トネリコ属	39.1	8.0	5.7	770.0	1/3	
14	斧柄	② L30d	676	股木(丸木)		コナラ属	(4.6)	9.4	3.15	(43.0)	1/3	
15	縦槌	② K25a	4612	股木(丸木)		トネリコ属	47.0	9.4	5.0	520.0	1/3	
16	竹材加工製品	② I25a	4442	丸木		ササノ木属	60.6	1.9	1.9	103.8	1/3	
17	把手	② M35a	2041	柱目		アスナロ	25.6	2.95	1.55	89.0	1/3	
18	柄	② M36b	2137	丸木		トネリコ属	(9.4)	3.2	2.8	(95.4)	1/3	
19	柄(軸)	② L23c	5131	丸木		トネリコ属	(9.3)	2.95	2.65	(32.3)	1/3	
20	柄	② L19d	9601	1/4割		モミ属	(20.85)	1.3	1.3	(26.4)	1/3	
21	柄	② I24d	4646	1/4割		サクラ属	58.95	2.65	2.7	284.6	1/3	魚突鉤鉅棒?
22	柄切断品	② K26b	3333	1/4割		モミ属	(8.3)	3.7	2.25	(35.5)	1/3	

表IV-16 IB4層掲載木製品一覧(2)

製品番号	遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	樹種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	縮尺	備考
23	漆碗	② H24c	4466	横木		トチノキ	口径(15.0)	器高4.7	器厚1.3	(49.8)	1/3	年輪変る 口絵-2
24	漆碗	② M35a	2055	横木		ハリギリ	口径(15.0)	器高(4.0)	器厚0.8	(90.1)	1/3	年輪変る 口絵-2
25	漆碗	② M34d	6479	横木		カツラ	口径(15.0)	器高4.8	器厚0.7	(31.8)	1/3	年輪立つ 口絵-2
26	容器片	② L32c	1922	横木		トネリコ属	(9.0)	(3.1)	1.4	(22.6)	1/3	
27	筥	② M22c	7536	柱目		アスナロ	(18.1)	1.4	0.4	(5.5)	1/3	
28	筥状製品	② K27d	3985	柱目		アスナロ	26.5	2.9	0.65	32.8	1/3	
29	筥状製品	② K27c	3966	柱目		スギ	17.75	4.6	0.4	(13.4)	1/3	
30	筥状製品	② K27a	3957	柱目		スギ	19.2	4.4	0.5	(17.8)	1/3	
31	筥状製品	② L24a	4047	追柱		アスナロ	(18.25)	2.0	0.3	(8.0)	1/3	板材加工
32	筥状製品	② K25b	4634	柱目		モミ属	(21.85)	2.9	0.9	(34.5)	1/3	
33	筥状製品	② K25b	3934	柱目		アスナロ	(6.7)	2.6	0.6	(8.0)	1/3	
34	大型筥	② H24b	4644	柱目		スギ	(27.3)	(9.7)	1.5	(111.0)	1/3	
35	台板	② M35bc	2084	縦木	○	ヤナギ属	11.3	(14.9)	1.9	(178.2)	1/3	
36	楔	② P19d	7802	柱目		ハンノキ属	(8.55)	(3.8)	1.1	(20.6)	1/3	
37	楔	② L24a	4045	半割		モミ属	(8.7)	6.65	1.7	(61.3)	1/3	
38	楔状製品	② L33b	1927	心持		ヤナギ属	10.8	2.9	1.75	(29.4)	1/3	
39	箸	② L29a	809	1/4割		モミ属	(11.0)	0.7	0.6	(2.4)	1/3	
40	箸	② K27d	4302	縦・横目(小割)		アスナロ	(12.4)	0.6	0.55	(2.7)	1/3	
41	串(三角串)	② K28a	1085	1/6割		ノリウツギ	18.5	0.85	0.65	5.9	1/3	
42	串(楕円串)	② F32c	5631	1/4割		ノリウツギ	(19.6)	1.15	0.6	(7.0)	1/3	
43	串(両先長串)	② K27d	4252	半割		ノリウツギ	33.65	0.8	0.55	9.2	1/3	
44	串(両先口)	② L30d	1105	1/4割		ノリウツギ	21.8	1.2	0.7	(10.0)	1/3	
45	串(両先細串)	② L30d	1112	1/4割		ノリウツギ	15.9	0.75	0.65	4.0	1/3	
46	串(細丸串)	④ T30a	11	丸木		トネリコ属	(16.0)	0.7	0.75	(4.2)	1/3	
47	串(三角串)	② L30a	681	1/4割		ノリウツギ	(20.4)	0.8	0.6	(5.6)	1/3	
48	串(両先串)	② K26a	3298	1/6割		ノリウツギ	25.9	1.1	1.0	12.8	1/3	カンジギ軸?
49	串(両先串)	② K26d	2689	半割		ノリウツギ	21.8	0.95	0.6	7.1	1/3	カンジギ軸?
50	串(両先串)	② K27d	3980	板目		ノリウツギ	20.7	1.2	0.75	10.3	1/3	カンジギ軸?
51	串(股串)	④ R32a	1104	丸木		ノリウツギ	19.0	2.45	1.5	(4.8)	1/3	縫い針?
52	イクパスイ	② M35a	2042	板目(小割)		アスナロ	25.9	2.2	1.1	30.2	1/3	棒酒筥
53	イクパスイ	② L23c	4062	板目(小割)		アスナロ	24.6	1.7	0.7	21.4	1/3	棒酒筥
54	イクパスイ	② K26a	2628	板目(小割)		アスナロ	23.7	1.9	1.15	30.1	1/3	棒酒筥
55	イクパスイ	② K25c, K26b	3335	板目		アスナロ	(32.3)	1.1	0.45	(10.0)	1/3	棒酒筥
56	棒酒筥状製品	② K27d	4253	柱目		アスナロ	26.4	2.9	0.6	(22.9)	1/3	
57	曲物底再利用有孔製品	② I24d	4449	柱目		アスナロ	(13.1)	5.65	1.0	(51.8)	1/3	
58	柱目板	② L24a	4039	柱目		アスナロ	(46.25)	(2.8)	0.9	(67.1)	1/3	

表IV-17 IB4層掲載木製品一覧(3)

製品番号	遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮痕	樹種	種	長さcm	幅cm	厚さcm	重量g	縮尺	備考
59	柱目板	② K24b	4515	柱目		アスナロ		(15.2)	1.6	0.45	(6.5)	1/3	
60	柱目板	④ S17c	743	柱目		アスナロ		(27.7)	(2.5)	0.35	(12.8)	1/3	
61	柱目板	② K25c	3871	柱目		アスナロ		(69.85)	4.55	0.35	(43.6)	1/3	
62	柱目板	② L31a	673	柱目		スギ		(15.9)	(2.8)	(0.25)	(5.5)	1/3	
63	柱目板	② L30cd	674	柱目		アスナロ		(11.9)	(2.05)	0.2	(4.2)	1/3	
64	柱目板	② M22c	7543	柱目		アスナロ		(18.75)	4.45	0.4	(24.8)	1/3	
65	柱目板	② K26b	2652	柱目		アスナロ		(14.6)	4.1	0.3	(13.4)	1/3	
66	柱目板	② K25a	4636	柱目		アスナロ		(13.4)	2.15	0.3	(5.4)	1/3	
67	柱目板加工製品	② M22c	7566	柱目		トネリコ属		(25.1)	5.85	1.05	(62.6)	1/3	
68	柱目板	② K26d	4220	柱目		モミ属		(37.4)	7.7	1.5	(88.8)	1/3	
69	軸状製品	② K27d	4256	心持		ミツバウツギ		(6.5)	1.8	1.45	(10.5)	1/3	
70	軸状製品	② K27a	4295	心持		イヌエンジュ		(17.7)	2.7	2.3	(80.6)	1/3	
71	軸状製品	② O21d	8262	丸木		トネリコ属		17.1	2.2	2.15	(45.6)	1/3	
72	枝材両端加工製品	② K28a	1001	丸木		ノリウツギ		6.9	3.6	3.2	(52.7)	1/3	
73	枝材加工製品	② J27b	3937	丸木		コナラ属		(10.3)	3.3	2.8	(59.6)	1/3	刻目入
74	角材加工製品	② N39d, N40a	6595	1/4割		ハリギリ		(15.1)	3.8	3.7	(130.0)	1/3	
75	割材加工製品	② M35a	2053	1/8割		ハリギリ		(7.1)	1.3	1.3	(6.7)	1/3	76と同一か
76	割材加工製品	② M35a	2044	1/8割		ハリギリ		(6.6)	1.4	1.2	(6.6)	1/3	75と同一か
77	割材加工製品	④ T17a	625	1/4割		ハンノキ属		(13.45)	3.45	2.35	(49.7)	1/3	有孔・挟り付き
78	割材加工製品	② K27c, K28b	994	1/4割		モクレン属		(20.9)	3.45	1.3	(45.7)	1/3	
79	割材加工製品	② K27d	3986	1/4割		カエデ属		(40.5)	2.5	2.0	(11.6)	1/3	
80	割材加工製品	② O20b	7743	1/4割		クロ属		(31.7)	2.2	1.1	(36.6)	1/3	
81	割材加工製品	② M37c	2384	1/4割		トネリコ属		(49.8)	9.4	5.7	(1420.0)	1/6	
82	割材加工製品	④ S17c, S18d	737	1/4割		トネリコ属		75.6	10.7	6.75	1800.0	1/6	
83	半割材加工製品	② K26d, K27a	4232	半割		ヤナギ属		(33.25)	3.75	2.4	(155.8)	1/3	
84	板	② N39d	6597	板目		ハンノキ属		(16.9)	6.4	1.45	(89.8)	1/3	
85	板材加工製品	② M22c	7526	板目		キハダ属		15.2	5.55	2.0	(101.4)	1/3	
86	板材加工製品	② I25a	4431	板目		シナノキ属		(26.0)	5.6	1.2	(120.5)	1/3	
87	心持材	④ R18d, R19a	992	心持		ニレ属		(29.0)	(8.0)	5.65	(550.0)	1/3	
88	樋状製品	② M35b	2022	半割・横木		トネリコ属		(57.7)	13.3	6.0	(1600.0)	1/6	
89	建材	② H24c, I24d	4453	丸木	○	ハシドイ属		(294.2)	5.6	4.5	(400.0)	1/16	垂木
90	建材	② K26ad, K27a	4218	丸木		コナラ属		(374.9)	8.7	7.0	(9000.0)	1/16	垂木
91	柱	② H25b, I25a	4430	丸木		ハンノキ属		(159.0)	6.0	6.5	(2700.0)	1/8	
92	柱	② I25d	3505	丸木	○	ハンノキ属		(93.6)	6.3	5.5	(1675.0)	1/8	
93	柱	② J35cd, J36ab	1425	丸木		トネリコ属		(70.0)	8.4	7.3	(2880.0)	1/8	
94	柱	② M35b	2011	丸木(股木)	○	ヤナギ属		(131.3)	股本幅 (5.8)	7.3	(2940.0)	1/8	

表IV-18 IB4層掲載木製品一覧(4)

製品番号	遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮痕	樹種	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	縮尺	備考
95	柱	② K25cd	4554	丸木		トネリコ属	118.0	8.2	6.9	2680.0	1/8	
96	柱	② C30b	6177	丸木		トネリコ属	(58.0)	10.5	9.9	(3900.0)	1/8	
97	柱切断品	② K27d	4263	丸木		モクレン属	37.0	7.9	8.6	1610.0	1/8	
98	柱切断品	② I25d	3508	丸木		トネリコ属	86.8	7.2	6.6	(2525.0)	1/8	
99	柱	② H24c, I24d	4643	丸木(股木)		ハシドイ属	(220.6)	股太幅(10.3)	5.4	(3100.0)	1/8	
100	建材	② J27b, K27a	4237	丸木		コナラ属	(221.0)	6.5	5.6	(3400.0)	1/8	桁?
101	建材	② K38b	1642	丸木		トネリコ属	(203.6)	6.2	5.6	(3960.0)	1/8	桁?
102	建材	② J30b	910	丸木		トネリコ属	(191.0)	5.7	5.0	(1375.0) 榫	1/8	桁? 保存処理後実測
103	建材	② K27a	4299	丸木		トネリコ属	(140.7)	3.8	3.3	(730.0)	1/8	桁? 梁?
104	建材	② K27cd	3969	丸木(股木)	○	イヌエンジュ	157.0	股太幅 6.9	4.1	1500.0	1/8	梁? 保存処理後実測
105	建材	② M34d	2008	丸木		ハシドイ属	(146.0)	6.2	4.6	(640.0) 榫	1/8	梁?
106	建材	② J31a	1129	丸木		トネリコ属	(130.6)	7.6	7.2	(3700.0)	1/8	梁?
107	建材	② I25a	4432	丸木		オニグルミ	(165.3)	9.8	5.7	(3100.0)	1/8	桁?
108	建材	② K26a	4855	丸木(股木)	○	カエデ属	55.5	股太幅 7.3	4.5	540.0	1/8	補助材
109	建築部材	② K25a	3850	1/4割		トネリコ属	125.6	8.3	6.1	(2460.0)	1/8	割材加工 挟り付き
110	建築部材	② O21d	8268	丸木		ハンノキ属	(87.1)	3.9	3.9	(780.0)	1/3	横架材 面取り削り
111	建築部材	② J27b, K27a	4241	丸木		クワ属	89.6	4.2	4.0	1080.0	1/8	横架材 両端削り
112	建築部材	② I25a	4783	丸木		ナナカマド属	(35.9)	2.6	2.5	(159.2)	1/8	横架材 両端削り
113	建築部材	② K24b	4513	丸木		イヌエンジュ	57.2	2.4	2.15	149.2	1/8	横架材 両端削り
114	建築部材	② K26d	4224	丸木		トネリコ属	40.6	6.9	4.9	(940.0)	1/8	窓枠材? 心持材加工
115	建築部材	④ T16abcd	906	丸木		トネリコ属	(99.5)	8.9	6.8	(1800.0)	1/8	横架材 彎曲
116	股木杭	② I24d	4649	丸木(股木)		ニレ属	185.7	股太幅(7.1)	4.7	(1980.0) 榫	1/8	保存処理後実測
117	股木杭	② K27c	3963	丸木(股木)	○	イヌエンジュ	159.9	股太幅 14.8	4.3	(1160.0) 榫	1/8	保存処理後実測
118	股木杭	② K27cd	3968	丸木(股木)	○	ハシドイ属	104.6	股太幅 6.8	4.3	(1250.0)	1/8	
119	股木杭	② L30d	1111	丸木(股木)		ハシドイ属	47.1	股太幅 14.85	2.8	300.1	1/8	刺し杭
120	杭	② L29d	669	丸木	○	トネリコ属	(22.5)	5.5	5.1	350.8	1/8	
121	杭切断品	② L28ad	698	丸木		コナラ属	78.7	5.0	6.3	145.2	1/8	
122	杭切断品	② N22a	7088	丸木		ハシドイ属	46.0	5.4	7.6	845.0	1/8	
123	杭	② K27d	4301	丸木		ハシドイ属	(48.95)	4.05	3.7	(404.4)	1/8	立杭
124	細杭	② I25a	4443	丸木		ヤナギ属	149.6	4.2	3.4	(1000.0)	1/8	
125	細杭	② K27a	4304	丸木		ヤナギ属	(28.05)	2.5	2.6	(124.2)	1/8	
126	細杭	② L31ab	1159	丸木		ヤナギ属	(57.8)	3.3	2.9	(375.0)	1/8	
127	刺し杭	② K25d, K26a	3917	丸木		トネリコ属	38.0	3.3	3.3	260.4	1/8	両先
128	刺し杭	② I25d	3509	丸木		トネリコ属	62.0	5.8	3.5	725.0	1/8	
129	刺し杭	② J27b, K27a	4238	丸木		ハシドイ属	27.1	3.5	5.0	170.0	1/8	両先か
130	刺し杭	② I24d	5708	丸木		トネリコ属	24.8	3.3	3.5	140.7	1/8	

表IV-19 IB4層未掲載木製品一覧(1)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備考
軸状製品	② K27d	3263	丸木			ハシドイ属	径 3.4 長さ 35.9	
軸状製品	④ T16d	900	丸木			ハシドイ属	径 1.9 長さ 24.5	
柄	② K26d	4227	心持			クワ属	径 3.1	
串(平串)	② L20d	9831	偏1/4割			アスナロ	幅 1.1	
串(両先串)	④ S18a	378	1/4割			ノリウツギ	径 0.8	カンジキ軸?
漆椀	② K28b	1075	横木			カツラ	幅(2.15) 長さ 0.5	
イクパスイ	② M22c	7530	板目			アスナロ	幅 1.4 長さ 0.7	樽酒筥
桎目板加工製品	② J27d	3954	桎目			アスナロ	幅 1.7 長さ 0.3	
板材加工製品	② K28b	996	桎目			トネリコ属	幅 2.7 長さ 0.6	
板材加工製品	② M35d	2085	縦木			ヤナギ属	— 長さ 0.7	
板材加工製品	② M37c	2396	1/8割			シナノキ属	幅 3.6 長さ 1.9	
板材加工製品	② K26d	2687	桎目			モミ属	幅 3.9 長さ 1.9	
板材加工製品	② K26d	2688	桎目			トネリコ属	幅 2.9 長さ 0.6	
板材加工製品	② K26d	2694	板目			ハリギリ	幅 3.8 長さ 1.2	
板材加工製品	② K25b	3935	板目			ハンノキ属	幅 3.2 長さ 0.5	
板材加工製品	② K24c	4522	桎目			ハリギリ	幅 1.6 長さ 0.5	
板材加工製品	② K25d	4588	板目			モミ属	幅 1.8 長さ 0.4	
割材加工製品	② L30a	688	1/4割			ハンノキ属	幅 2.5	
割材加工製品	② K28a	1005	1/12割			カエデ属	幅 2.4	
割材加工製品	② L30d	1109	1/8割			トネリコ属	幅 4.4	
割材加工製品	② L33b	1926	1/8割			トネリコ属	幅 2.7	
割材加工製品	② M35c, M36b	2211	1/4割			トネリコ属	幅 3.5 長さ 45.2	
割材加工製品	② K26a	3330	1/6割			トネリコ属	幅 2.1	
割材加工製品	② K25c, K26b	3334	1/8割			モミ属	幅 1.4	
割材加工製品	② K27c	3961	1/8割			トネリコ属	幅 4.6	
割材加工製品	② J27b, K27a	4240	1/8割			モミ属	幅 1.7	
割材加工製品	② M22b	7556	1/4割			トネリコ属	幅 1.9	
割材加工製品	② M22d	7564	1/8割			トネリコ属	幅 1.7	
割材加工製品	② P20a	7748	1/16割			トネリコ属	幅 2.6	
割材加工製品	④ R19b	915	1/6割			トネリコ属	幅 2.1	
割材加工製品	④ R18bc	968	1/4割			トネリコ属	幅 4.5	
割材加工製品	④ R18b	969	1/12割			トネリコ属	幅 2.5	
偏割材加工製品	② K27c	3960	偏割			アスナロ	幅 1.8	
偏割材加工製品	② K25c	4556	偏半割			ヤナギ属	幅 2.4	
半割材加工製品	② K28b	1012	半割			アスナロ	幅 1.5	
心持材加工製品	② K26a	3921	心持			カエデ属	幅 2.6	
心持材加工製品	④ R18b	977	心持			トネリコ属	幅 3.6	
細枝材加工製品	④ K29d	1092	丸木			ノリウツギ	径 1.6	
枝材加工製品	② L29a	811	丸木			トネリコ属	径 3.8	
枝材加工製品	② K25b	4635	丸木			サクラ属	径 2.2	
桎目板	② L30d	679	桎目			アスナロ	幅 1.8	
桎目板	② L30d	691	桎目			アスナロ	幅 1.3	

表IV-20 IB4層未掲載木製品一覧(2)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備	考
榎目板	② K27d, K28a	1009	榎目			アスナロ	幅 1.3		
榎目板	② L30a	1100	榎目			アスナロ	幅 1.2		
榎目板	② L30c	1117	榎目			アスナロ	幅 1.8		
榎目板	② L31c	1160	榎目			アスナロ	幅 1.0		
榎目板	② N31d	1240	榎目			アスナロ	幅 1.7		
榎目板	② M31d	1243	榎目			アスナロ	幅 1.9		
榎目板	② L33c	1829	榎目			アスナロ	幅 3.9		
榎目板	② L32b	1895	榎目			アスナロ	幅 1.5		
榎目板	② L32c	1906	榎目			アスナロ	幅 1.6		
榎目板	② L32c	1911	榎目			アスナロ	幅 2.6		
榎目板	② M34a	1972	榎目			アスナロ	幅 1.5		
榎目板	② K26d	2693	榎目			アスナロ	幅 2.4		
榎目板	② M25c	2874	榎目			アスナロ	幅 2.2		
榎目板	② K26b	3332	榎目			アスナロ	幅 1.5		
榎目板	② K27d	3467	榎目			アスナロ	幅 1.9		
榎目板	② K27d	3471	榎目			アスナロ	幅 1.3		
榎目板	② K26a	3919	榎目			アスナロ	幅 2.5~0.9	集中	
榎目板	② K25a	3931	榎目			モミ属	幅 1.8		
榎目板	② K27a	3988	榎目			アスナロ	幅 2.4		
榎目板	② K27a	3993	榎目			アスナロ	幅 1.9		
榎目板	② K27c	3995	榎目			アスナロ	幅 2.2		
榎目板	② K27c	3998	榎目			アスナロ	幅 2.5		
榎目板	② L24a	4041	榎目			アスナロ	幅 1.2		
榎目板	② L24a	4043	榎目			アスナロ	幅 2.1		
榎目板	② I24d	4113	榎目			アスナロ	幅 1.6		
榎目板	② I24a	4166	榎目			アスナロ	幅 1.5		
榎目板	② K26d	4231	榎目			アスナロ	幅 1.8~1.0		
榎目板	② K27c	4288	榎目			アスナロ	幅 1.3		
榎目板	② K24c	4521	榎目			アスナロ	幅 2.5		
榎目板	② K24c	4529	榎目			モミ属	幅 2.4		
榎目板	② K24c	4537	榎目			モミ属	幅 2.7		
榎目板	② K25c	4545	榎目			アスナロ	幅 0.4		
榎目板	② K25c	4553	榎目			アスナロ	幅 2.2		
榎目板	② K25d	4555	榎目			アスナロ	幅 1.6		
榎目板	② K25b	4578	榎目			アスナロ	幅 1.6		
榎目板	② K25ab	4581	榎目			モミ属	幅 2.9		
榎目板	② I24a	4650	榎目			アスナロ	幅 4.9~1.9		
榎目板	② K25a	4613	榎目			モミ属	幅 2.1		
榎目板	② N22b	7076	榎目			アスナロ	幅 2.2		
榎目板	② N22b	7077	榎目			アスナロ	幅 1.9		
榎目板	② N22b	7078	榎目			アスナロ	幅 2.3		
榎目板	② M22b	7554	榎目			トネリコ属	幅 3.0	集中	

表IV-21 IB4層未掲載木製品一覧(3)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備考
柱目板	② P20d	7749	柱目			アスナロ	幅 1.8	
柱目板	② K25c	9859	柱目			アスナロ	幅 1.3	
柱目板	② L30d	9949	柱目			アスナロ	幅 2.5	
柱目板	④ S18b	351	柱目			アスナロ	幅 2.0	
細板	② M34d	1996	柱目			トネリコ属	幅 2.7 厚さ 1.2	
細板	② M37b	2382	柱目			トネリコ属	幅 1.3 厚さ 0.7	
細板	② K26d	2691	柱目			ハコヤナギ属	— 厚さ 0.6	
細板	② K25b	4565	板目			オニグルミ	幅 2.0 厚さ 0.5	
細板	② N39d	6576	板目			ハリギリ	幅 1.7 厚さ 0.8	
細板	② P21a	7792	柱目			トネリコ属	幅 2.9 厚さ 0.8	
細板	② N22b	7806	柱目			トネリコ属	幅 3.0 厚さ 1.4	
細板	② K27d	9947	板目			サルナシ属	幅 1.0 厚さ 0.1	
薄板	② K27d	1204	樹皮	○		樹皮	幅 3.1 厚さ 0.5	
板	② K27d	3977	板目			ハンノキ属	— 厚さ 0.6	
板	② K24c	4525	板目			シナノキ属	幅 5.5 厚さ 1.8	
板	② K24c	4533	板目			モミ属	幅 2.9 厚さ 0.6	
板	② L28d	935	板目			ニレ属	— 厚さ 2.2	
板材	② L30d	1110	1/4割			トネリコ属	幅 6.0 厚さ 2.4	
板材	② L30c	1122	柱目			トネリコ属	幅 2.8 厚さ 0.5	
板材	② M35a	2060	板目			トネリコ属	幅 11.5 厚さ 2.6	
板材	② M35ad	2063	柱目 柱目 板目			モミ属 トネリコ属 ハンノキ属	幅 2.3 厚さ 0.9 幅 3.5 厚さ 0.8 計測不能	集中代表3点(樹種で分類)
板材	② M34d	2073	柱目			トネリコ属	幅 2.7 厚さ 0.5	
板材	② M38b	2226	板目			トネリコ属	幅 9.8 厚さ 1.6	
板材	② K27c	3473	板目			トネリコ属	幅 12.8 厚さ 2.2	
板材	② K25d	3885	1/16割			アスナロ	幅 2.6 厚さ 0.4	
板材	② K27c	3996	板目			シナノキ属	幅 2.9 厚さ 1.0	
板材	② L24a	4040	板目			トネリコ属	幅 4.1 厚さ 0.5	
板材	② I24a	4161	板目			モクレン属	幅 6.2 厚さ 1.5	
板材	② K27cd	4273	板目			トネリコ属	幅 9.9 厚さ 1.7	
板材	② I24d	4458	板目			ハコヤナギ属	幅 10.3 厚さ 2.9	
板材	② I23d	5414	板目			シナノキ属	— 厚さ 1.9	
板材	② N39a	6598	柱目			ハンノキ属	幅 3.4 厚さ 0.7	
板材	② M22c	7535	板目			トネリコ属	幅 4.3 厚さ 1.2	切痕
板材	② M22c	7538	板目			トネリコ属	幅 2.7 厚さ 1.2	
板材	② O21c	7782	追証			イヌエンジュ	幅 3.1 厚さ 0.8	
板材	② O16c	9498	柱目			トネリコ属	幅 2.2 厚さ 0.8	
板材	② L31c	9874	追証			ハリギリ	幅 5.5 厚さ 0.5	
板材	④ S17d	479	板目			トネリコ属	幅 8.2 厚さ 1.0	
角材	② K21d	8302	半割			ニレ属	幅 4.3 厚さ 3.8	
割材	② L30d	675	1/4割			トネリコ属	幅 3.0	

表IV-22 I B 4 層未掲載木製品一覧(4)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備考
割材	② L 3 0 a	6 8 2	1/4割			ニレ属	幅 2.5	
割材	② L 2 9 a	8 1 2	1/8割		○	トネリコ属	幅 3.4	
割材	② K 2 8 b	9 6 8	1/16割			ハシドイ属	幅 2.5	
割材	② K 2 8 b	9 8 8	1/8割			トネリコ属	幅 2.9	
割材	② K 2 8 b	9 9 3	1/4割			トネリコ属	幅 6.1	
割材	② K 2 8 a	9 9 9	1/4割			ニレ属	幅 1.8	
割材	② K 2 8 a	1 0 0 2	1/4割			トネリコ属	幅 1.3	
割材	② K 2 8 a	1 0 0 3	1/4割			トネリコ属	幅 0.9	
割材	② K 2 8 a	1 0 0 4	1/4割			トネリコ属	幅 1.5	
割材	② K 2 7 d, K 2 8 a	1 0 0 8	1/4割			ハンノキ属	幅 6.0	
割材	② K 2 8 b	1 0 1 3	1/16割			ハンノキ属	幅 1.7	
割材	② L 3 1 c	1 0 1 7	1/12割			ハンノキ属	幅 3.2	
割材	② L 3 1 c	1 0 2 0	1/4割			トネリコ属	幅 2.0	
割材	② L 3 1 c	1 0 2 1	1/4割			トネリコ属	幅 2.6	
割材	② L 3 1 c	1 0 2 3	1/4割			ニレ属	幅 3.0	
割材	② L 3 1 c	1 0 2 4	1/12割			トネリコ属	幅 3.4	
割材	② L 3 1 c	1 0 5 4	1/6割			トネリコ属	幅 6.7	
割材	② L 3 1 c	1 0 5 5	1/8割			ナナカマド属	幅 1.6	
割材	② L 3 1 c	1 0 5 7	1/8割			トネリコ属	幅 2.0	
割材	② K 2 8 b	1 0 7 7	1/16割			スギ	幅 1.5	
割材	② J 3 0 d	1 0 9 4	1/8割			カツラ	幅 2.0	
割材	② L 3 0 a	1 1 0 1	1/4割			モクレン属	幅 1.4	
割材	② L 3 0 a	1 1 0 2	1/8割			トネリコ属	幅 2.5	
割材	② L 3 0 d	1 1 0 3	1/4割			トネリコ属	幅 3.3	
割材	② L 3 0 d	1 1 0 7	1/4割			トネリコ属	幅 1.5	
割材	② L 3 0 a	1 1 0 8	1/6割			ハンノキ属	幅 2.1	
割材	② L 3 0 c	1 1 1 4	1/6割			トネリコ属	幅 3.5	
割材	② L 3 0 c	1 1 1 8	1/4割			トネリコ属	幅 1.8	
割材	② L 3 0 c	1 1 1 9	1/12割			トネリコ属	幅 4.4	
割材	② L 3 0 c	1 1 2 0	1/6割			トネリコ属	幅 3.7	
割材	② J 3 1 a	1 1 3 0	1/6割			ハンノキ属	幅 5.1	
割材	② I 3 0 c	1 1 3 3	1/4割			カツラ	幅 1.8	
割材	② I 3 0 c	1 1 3 4	1/4割			カツラ	幅 1.9	
割材	② I 3 0 c	1 1 3 5	1/4割			カツラ	幅 0.9	
割材	② J 2 9 b	1 2 3 4	1/12割			トネリコ属	幅 3.6	
割材	② J 2 9 b	1 2 3 5	1/4割			トネリコ属	幅 3.4	
割材	② M 3 1 d	1 2 4 7	1/4割			トネリコ属	幅 3.6	
割材	② M 3 1 d	1 2 4 8	1/4割			トネリコ属	幅 1.8	
割材	② M 3 1 d	1 2 5 1	1/4割			トネリコ属	幅 5.9	
割材	② I 4 0 b	1 4 0 3	1/4割		○	トネリコ属	幅 3.1	
割材	② I 4 0 b	1 4 0 4	1/6割		○	トネリコ属	幅 5.1	
割材	② L 3 4 b	1 7 5 6	1/4割			コナラ属	幅 1.8	

表IV-23 IB4層未掲載木製品一覧(5)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備考
割材	② L34b	1757	1/12割			トネリコ属	幅 4.1	
割材	② L32b	1897	1/16割			トネリコ属	幅 3.1	
割材	② L32c	1903	1/4割			ハンノキ属	幅 2.6	
割材	② M34a	1994	1/8割			トネリコ属	幅 3.5	
割材	② M34d	1997	1/4割			コナラ属	幅 1.3	
割材	② M35d	2067	1/12割			ハリギリ	幅 2.0	
割材	② M35a	2086	1/8割			トネリコ属	幅 1.7	
割材	② M35c	2094	1/6割			トネリコ属	幅 3.5	
割材	② M38b	2227	1/4割			トネリコ属	幅 1.7	
割材	② M39b	2352	1/4割			トネリコ属	幅 7.4	
割材	② M37c	2367	1/12割			トネリコ属	幅 2.2	集中
割材	② M37b	2383	1/4割			トネリコ属	幅 6.5	
割材	② M37c	2385	1/4割		○	トネリコ属	幅 5.2	
割材	② M37b	2387	1/4割			ハンノキ属	幅 3.3	
割材	② M37b	2393	1/4割			ハンノキ属	幅 1.3	
割材	② M37bc	2395	1/4割			トネリコ属	幅 2.3	
割材	② L26c	2570	1/4割			トネリコ属	幅 4.8	
割材	② I27b	2727	1/6割			トネリコ属	幅 2.3	
割材	② I26a	3038	1/4割			ヤナギ属	幅 1.0	
割材	② J27b	3155	1/6割		○	トネリコ属	幅 3.7	
割材	② J27b	3157	1/12割			トネリコ属	幅 3.3	
割材	② I26b	3236	1/4割		○	トネリコ属	幅 7.3	
割材	② I26a	3239	1/12割			トネリコ属	幅 1.8	
割材	② K27d	3468	1/8割			トネリコ属	幅 2.0	
割材	② K27d	3474	1/8割		○	ハンノキ属	幅 2.1	
割材	② I25d	3504	1/4割		○	トネリコ属	幅 6.7	
割材	② I26a	3513	1/4割			ヤナギ属	幅 2.3	
割材	② L26d	3786	1/4割			トネリコ属	幅 5.6	
割材	② K25a	3932	1/16割			モミ属	幅 2.6	
割材	② J27b	3940	1/4割			トネリコ属	幅 2.4	
割材	② J27b	3946	1/4割			トネリコ属	幅 5.0	
割材	② J27b	3947	1/8割			トネリコ属	幅 3.0	
割材	② K27d	3975	1/4割			トネリコ属	幅 3.4	
割材	② L23d	4034	1/6割			ニレ属	幅 6.4	
割材	② L24a	4042	1/8割			トネリコ属	幅 3.4	
割材	② L24a	4046	1/16割			トネリコ属	幅 3.5	
割材	② I24a	4165	1/4割			ヤナギ属	幅 1.8	
割材	② K26d	4222	1/8割		○	トネリコ属	幅 5.0	切痕
割材	② K27ad	4271	1/4割		○	トネリコ属	幅 6.7	切痕
割材	② K27d	4275	1/4割			トネリコ属	幅 4.2	
割材	② K27c	4287	1/4割			トネリコ属	幅 1.8	
割材	② K24b	4514	1/4割			ハリギリ	幅 2.5	

表IV-24 I B 4 層未掲載木製品一覧(6)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備考
割材	② K 2 4 c	4 5 2 8	1/4割			シナノキ属	幅 3.2	
割材	② K 2 5 b	4 5 6 4	1/8割			トネリコ属	幅 5.5	
割材	② K 2 5 b	4 5 7 9	1/8割			コナラ属	幅 2.2	
割材	② K 2 5 a	4 6 1 4	1/4割			ヤナギ属	幅 2.3	
割材	② I 2 4 d	4 6 4 7	1/4割			モミ属	幅 1.7	
割材	② H 2 4 b	4 6 5 3	1/6割			イヌエンジュ	幅 3.4	
割材	② L 2 3 c, L 2 4 b	5 1 2 9	1/12割			モクレン属	幅 4.2	
割材	② I 2 5 a	5 7 1 6	1/4割			トネリコ属	幅 6.9	
割材	② I 2 5 a d	5 7 2 6	1/4割	○		トネリコ属	幅 7.9	
割材	② H 2 5 c	5 7 3 5	1/8割			トネリコ属	幅 3.0	
割材	② N 2 2 b	7 0 8 1	1/8割			トネリコ属	幅 7.8	
割材	② N 2 2 a	7 5 1 6	1/16割			コナラ属	幅 4.8	
割材	② M 2 2 c	7 5 2 7	1/6割			コナラ属	幅 2.8	
割材	② N 2 2 a, M 2 2 b	7 5 5 3	1/6割			トネリコ属	幅 5.0	
割材	② P 2 1 a	7 7 7 1	1/4割			トネリコ属	幅 3.6	
割材	② P 2 1 a	7 7 7 2	1/8割			トネリコ属	幅 1.9	
割材	② O 2 1 b	7 7 9 0	1/4割			トネリコ属	幅 3.1	
割材	② N 2 2 a	7 8 1 3	1/4割			ニレ属	幅 5.9	
割材	② N 2 2 a	7 8 1 6	1/6割			ハンノキ属	幅 3.7	
割材	② N 2 2 a	7 8 1 8	1/4割			トネリコ属	幅 3.4	
割材	② M 2 2 b c	7 8 2 0	1/4割			トネリコ属	幅 5.6	
割材	② L 2 2 c	7 9 4 4	1/12割			トネリコ属	幅 3.5	
割材	② N 2 2 a	8 0 4 0	1/4割			トネリコ属	幅 6.9	
割材	② O 2 1 d	8 2 5 6	1/12割			ハンノキ属	幅 2.7	
割材	② O 2 1 b	8 2 5 7	1/16割			キハダ属	幅 2.0	
割材	② O 2 1 d	8 2 6 1	1/12割			トネリコ属	幅 3.1	
割材	② K 2 8 b	9 8 8 3	1/4割			ニレ属	幅 2.0	
割材	② L 3 0 a	9 8 9 5	1/4割			コナラ属	幅 2.2	
割材	② K 2 4 c	9 9 2 7	1/4割			トネリコ属	幅 4.0	
割材	② K 2 4 c	9 9 2 8	1/6割			モミ属	幅 9.9	
割材	④ T 3 8 a	1 4 3	1/8割			ヤナギ属	幅 2.5	
割材	④ S 1 8 a	3 7 3	1/4割			ハンノキ属	幅 1.3	
割材	④ S 1 7 b	6 1 0	1/6割			トネリコ属	幅 3.7	
割材	④ S 1 7 c, S 1 8 d	7 3 6	1/6割			トネリコ属	幅 5.5	
割材	④ S 1 7 d, S 1 8 a	7 4 0	1/4割			トネリコ属	幅 1.7	
割材	④ S 1 7 c	7 4 1	1/12割			トネリコ属	幅 3.1	
割材	④ S 1 7 c	7 4 2	1/4割			トネリコ属	幅 4.5	
割材	④ S 1 7 c	7 7 2	1/4割			トネリコ属	幅 2.4	
割材	④ S 1 7 d	7 7 7	1/16割			トネリコ属	幅 2.8	
割材	④ S 1 7 d	7 7 8	1/4割			トネリコ属	幅 5.0	
割材	④ S 1 7 d	7 8 0	1/4割			トネリコ属	幅 3.6	7 8 1 と同一個体
割材	④ S 1 7 d	7 8 1	1/4割			トネリコ属	幅 3.2	7 8 0 と同一個体

表IV-25 IB4層未掲載木製品一覧(7)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備考
割材	④ T16d	902	1/12割			トネリコ属	幅 1.8	
割材	④ S16d	910	1/16割			トネリコ属	幅 2.8	
割材	④ R19b	913	1/6割			トネリコ属	幅 2.2	
割材	④ R19b	916	1/6割			トネリコ属	幅 2.4	
割材	④ R19b	918	1/4割			ハンノキ属	計測不能	
割材	④ R19b	922	1/12割			イヌエンジュ	幅 4.2	
割材	④ R19b	923	1/4割			トネリコ属	幅 1.5	
割材	④ R19b	924	1/4割			トネリコ属	幅 1.5	
割材	④ R19b	926	1/8割			イヌエンジュ	幅 6.0	
割材	④ R19b	949	1/6割			トネリコ属	幅 3.8	
割材	④ R19b	952	1/4割			カエデ属	幅 4.5	
割材	④ R18d	960	1/4割			ハンノキ属	幅 2.8	
割材	④ R18c	964	1/4割			トネリコ属	幅 1.4	
割材	④ R18b	967	1/8割?			トネリコ属	計測不能	
割材	④ R18b	970	1/32割			トネリコ属	幅 3.2	
割材	④ R18b	974	1/4割			トネリコ属	幅 7.9	
割材	④ R19a	986	1/4割			トネリコ属	幅 6.4	
割材	④ R19a	988	1/8割			トネリコ属	幅 4.4	
割材	④ R18d, R19a	989	1/4割			トネリコ属	幅 4.8	
割材	④ R18d	994	1/4割			トネリコ属	幅 4.9	
割材	④ R18b	999	1/12割			トネリコ属	幅 7.5	
割材	④ R15a	1012	1/4割			オニグルミ	幅 9.1	
偏割材	② L31a	1054	1/8割			クワ属	幅 1.3	
偏割材	② L30a	672	偏割			トネリコ属	幅 3.0	
偏割材	② L29a	686	偏半割			トネリコ属	幅 6.2	
偏割材	② K28b	810	偏半割			トネリコ属	幅 3.8	
偏割材	② L30d	992	偏半割			トネリコ属	幅 2.0	
偏割材	② J31a	1106	偏割			トネリコ属	幅 5.2	
偏割材	② M31d	1127	偏半割			ハンノキ属	幅 1.9	
偏割材	② L34b	1250	偏割			トネリコ属	幅 5.4	
偏割材	② L32c	1914	偏1/4割			トネリコ属	幅 5.5	
偏割材	② M35b	1924	偏割		○	オニグルミ	幅 4.9	
偏割材	② M35ad	2025	偏1/4割			ハンノキ属	幅 8.5	
偏割材	② M34d	2039	偏割			ハンノキ属	幅 6.8	
偏割材	② K26d	2072	偏1/4割			トネリコ属	幅 3.1	
偏割材	② I26a	2150	偏割			トネリコ属	幅 7.0	
偏割材	② I26a	2692	偏割			ニレ属	幅 2.1	
偏割材	② K26a	3036	偏割			トネリコ属	幅 3.7	
偏割材	② K26a	3037	偏割			トネリコ属	幅 1.9	
偏割材	② J27b	3920	偏半割		○	トネリコ属	幅 7.0	
偏割材	② K27c	3939	偏1/4割		○	イヌエンジュ	幅 4.5	
偏割材	② K27c	3962	偏割			トネリコ属	幅 2.8	

表IV-26 IB4層未掲載木製品一覧(8)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備考
偏割材	② K27c	3967	偏割		○	ハンノキ属	幅 3.8	
偏割材	② K27d	3972	偏割			コナラ属	幅 7.5	
偏割材	② N22b	7803	偏割			カエデ属	幅 4.3	
偏割材	② N22a, M22b	7814	偏割			トネリコ属	幅 6.0	
偏割材	② N22a	7815	偏1/4割			トネリコ属	幅 3.5	
偏割材	② O21c	8266	偏割			トネリコ属	幅 2.3	
偏割材	② L22d	8273	偏半割			トネリコ属	幅 5.4	
偏割材	② L22d	8278	偏半割			ハシドイ属	幅 3.3	
偏割材	② L30a	9899	偏割			トネリコ属	幅 3.0	
偏割材	② K24c	9926	偏割			オニグルミ	幅 3.6	
偏割材	④ T38a	145	偏割			トネリコ属	幅 3.6	
偏割材	④ S17d	472	偏半割			トネリコ属	幅10.6	
偏割材	④ T17a	620	偏割			トネリコ属	幅 2.8	
偏割材	④ S17d	782	偏1/4割			トネリコ属	幅 1.9	
偏割材	④ T16d	901	偏半割		○	トネリコ属	幅 6.4	
偏割材	④ T16a	903	偏割			トネリコ属	幅 8.4	
偏割材	④ T16d	904	偏半割			トネリコ属	幅 8.7	
偏割材	④ R19b	917	偏割			トネリコ属	幅 2.8	
偏割材	④ R19a	928	偏割			トネリコ属	幅 3.2	
偏割材	④ R18c, R19b	950	偏1/4割			トネリコ属	幅 6.8	
偏割材	④ R18d	954	偏半割			トネリコ属	幅 5.5	
偏割材	④ R18c	961	偏半割		○	ハンノキ属	幅10.0	
偏割材	④ R18c	985	偏割			トネリコ属	幅 3.5	
偏割材	④ R18d	996	偏半割			トネリコ属	幅 3.8	
偏割材	④ R19a	1004	偏割			カエデ属	幅 3.3	
偏割材	④ R18d	1005	偏割			トネリコ属	幅 6.1	
偏割材	④ R18c	1007	偏割			ハンノキ属	幅 6.7	
剥材	② J30d	1095	板目			カツラ	幅 2.7	
剥材	② K22d	9772	板目			ニレ属	幅14.3	
剥材	④ R19b	914	板目			トネリコ属	幅 4.9	
剥材	④ R19b	921	板目			イヌエンジュ	幅 7.0	
剥材	④ R19a	987	板目			トネリコ属	幅 5.1	
剥材	④ R18d	993	板目			トネリコ属	幅 7.2	
剥材	④ R18c	1009	板目			トネリコ属	幅 7.5	
半割材	② L30c	1116	半割			トネリコ属	幅 3.3	
半割材	② I36a b c d	1380	半割		○	トネリコ属	幅14.0	
半割材	② H33d	1391	半割		○	トネリコ属	幅 7.1	
半割材	② I40c	1408	半割			トネリコ属	幅 5.5	
半割材	② L33b	1832	半割			トネリコ属	幅 2.5	
半割材	② L33c	1928	半割			ヤナギ属	幅 2.4	
半割材	② M35a	2206	半割			ヤナギ属	幅 6.3	
半割材	② M37c	2375	半割			ヤナギ属	幅 2.1	

表IV-27 IB4層未掲載木製品一覽(9)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備考
半割材	② J27b	3152	半割			トネリコ属	幅 1.8	
半割材	② J27b	3156	半割			ヤナギ属	幅 3.0	
半割材	② K27d	3284	半割			トネリコ属	幅 6.1	
半割材	② J27b	3938	半割			ノリウツギ	幅 2.7	切痕
半割材	② L23c	4032	半割			ハリギリ	幅 2.3	
半割材	② K27a	4239	半割			トネリコ属	幅 3.6	
半割材	② K24c	4531	半割			トネリコ属	幅 2.7	
半割材	② N22b	7079	半割			ハンノキ属	幅 5.5	
半割材	② N21c, O21d	9666	半割			トネリコ属	幅 5.7	
半割材	② O20b	9671	半割			トネリコ属	幅 3.5	
半割材	④ R19b	925	半割			トネリコ属	幅 1.9	
半割材	④ R19a	929	半割			ニレ属	幅 7.8	
半割材	④ R18c	933	半割			ヤナギ属	幅 2.2	
半割材	④ R18d	953	半割			トネリコ属	幅 3.0	
心持材	② L30d	1113	心持			カエデ属	幅 5.8	
心持材	② J27b	3945	心持		○	トネリコ属	幅 8.9	
心持材	② K27c	3965	心持			モクレン属	幅 8.6	切痕
心持材	④ T17a	626	心持			ハシドイ属	幅 4.0	
心持材	④ S17c	718	心持			ハンノキ属	幅 8.0	
細枝材	② L28d	697	丸木			ハシドイ属	径 1.0	切痕
細枝材	② L28a	699	丸木			ハンノキ属	径 1.5	切痕
細枝材	② L29a	813	丸木			イヌエンジュ	径 1.6	
細枝材	② K28b	991	丸木			ハシドイ属	径 1.3	
細枝材	② K28b	997	丸木		○	ハンノキ属	径 1.5	
細枝材	② K28a	1007	丸木			ハギ属	径 1.1	
細枝材	② L31c	1016	丸木			ツルアジサイ	径 1.1	
細枝材	② L31c	1018	丸木			トネリコ属	径 1.3	
細枝材	② L31c	1053	丸木			ハシドイ属	径 1.3	切痕
細枝材	② L28d	1061	丸木			フナ属	径 1.5	
細枝材	② L28d	1080	丸木			トネリコ属	径 1.4	
細枝材	② K28b	1082	丸木			ツルアジサイ	径 1.0	
細枝材	② L30a	1081	丸木			ハシドイ属	径 1.3	切痕
細枝材	② L30d	1099	丸木			ノリウツギ	径 1.0	
細枝材	② L30d	1104	丸木			ノリウツギ	径 1.0	
細枝材	② L30c	1115	丸木			ナナカマド属	径 1.5	
細枝材	② L30c	1121	丸木			サカラ属	径 1.8	
細枝材	② L31a	1157	丸木			イヌエンジュ	径 1.8	
細枝材	② M31d	1246	丸木		○	フナ属	径 0.8	
細枝材	② L33c	1833	丸木			ヤナギ属	径 1.5	
細枝材	② L34b	1916	丸木			トネリコ属	径 1.4	
細枝材	② M35b	2017	丸木			フナ属	径 1.2	
細枝材	② M35a	2043	丸木			ヤナギ属	径 1.4	切痕

表IV-28 IB4層未掲載木製品一覧(10)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備考
細枝材	② M35a	2047	丸木			トネリコ属	径 1.5	切痕
細枝材	② M35a	2048	丸木	○		ブナ属	径 1.2	切痕
細枝材	② M36a	2100	丸木			ツルアジサイ	径 1.1	切痕
細枝材	② M37b	2361	丸木			トネリコ属	径 1.7	
細枝材	② M37b	2369	丸木			ブナ属	径 1.2	
細枝材	② M37b	2416	丸木			トネリコ属	径 1.9	
細枝材	② K27d	3466	丸木			トネリコ属	径 1.4	
細枝材	② L26d	3491	丸木			トネリコ属	径 1.8	切痕
細枝材	② J27b	3942	丸木			トネリコ属	径 1.5	切痕
細枝材	② J27b	3944	丸木			トネリコ属	径 1.8	切痕
細枝材	② J27b	3948	丸木		○	ハシドイ属	径 1.1	
細枝材	② L24b	4049	丸木			トネリコ属	径 1.2	
細枝材	② L24b	4052	丸木			トネリコ属	径 1.2	切痕
細枝材	② K27a	4233	丸木			ブナ属	径 1.4	
細枝材	② K27a	4234	丸木			ハリギリ	径 1.4	
細枝材	② K27d	4276	丸木			ヤナギ属	径 1.8	切痕
細枝材	② K27a	4296	丸木			トネリコ属	径 1.4	
細枝材	② I25a	4433	丸木			トネリコ属	径 1.7	
細枝材	② H25b, I25a	4435	丸木	○		ヤナギ属	径 1.9	切痕
細枝材	② I25a	4441	丸木	○		ヤナギ属	径 1.5	切痕
細枝材	② I25a	4469	丸木			ノリウツギ	径 1.9	切痕
細枝材	② K25c	4550	丸木			ニレ属	径 1.8	切痕
細枝材	② I24d, I25a	4654	丸木			ヤナギ属	径 1.0	切痕
細枝材	② K26d	4949	丸木			ヤナギ属	径 1.6	切痕
細枝材	② J26c	4952	丸木		○	ヤナギ属	径 1.0	切痕
細枝材	② I23d	5415	丸木			ハギ属	径 1.2	切痕
細枝材	② N37d	6850	丸木			トネリコ属	径 1.3	切痕
細枝材	② N22a	7087	丸木			トネリコ属	径 1.9	切痕
細枝材	② N22a	7508	丸木		○	ノリウツギ	径 1.7	切痕
細枝材	② M22b	7520	丸木			ブナ属	径 1.1	切痕
細枝材	② O20b	7555	丸木		○	キハダ属	径 1.3	切痕
細枝材	② P20a	7742	丸木			ミツバウツギ	径 1.7	
細枝材	② L22b	7747	丸木			トネリコ属	径 1.9	
細枝材	② L19d	7805	丸木			トネリコ属	径 1.3	切痕
細枝材	② L19d	9476	丸木		○	トネリコ属	径 1.3	切痕
細枝材	② M17b	9483	丸木			ノリウツギ	径 1.6	
細枝材	② L19d	9588	丸木			トネリコ属	径 1.4	切痕
細枝材	② L19d	9599	丸木			ミツバウツギ	径 1.6	切痕
細枝材	② O21d	9600	丸木			ヤナギ属	径 1.8	切痕
細枝材	④ S17c	9653	丸木			ヤナギ属	径 1.0	切痕
細枝材	④ S18a	327	丸木			ツルアジサイ	径 1.5	切痕
細枝材	④ S18a	374	丸木			イヌエンジュ	径 1.6	切痕
細枝材			丸木			トネリコ属	径 1.5	

表IV-29 IB4層未掲載木製品一覧(1)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備考
細枝材	④ S18a	376	丸木			トネリコ属	径 1.1	
細枝材	④ S18a	379	丸木			トネリコ属	径 1.2	
細枝材	④ S17a	697	丸木			トネリコ属	径 1.9	
細枝材	④ R18cd	1006	丸木			ハシドイ属	径 1.4	切痕
細枝材	④ R18b	1014	丸木			トネリコ属	径 1.7	
枝材	② K29d	670	丸木			イヌエンジュ	径 3.2	
枝材	② L30d	677	丸木			ヤナギ属	径 2.8	
枝材	② L30a	685	丸木	○		ハンノキ属	径 2.7	
枝材	② L29a	807	丸木			カエデ属	径 3.0	切痕
枝材	② K27c, K28b	998	丸木			ハンノキ属	径 2.0	切痕
枝材	② K27d, K28a	1006	丸木			モミ属	径 3.1	
枝材	② L31c	1014	丸木			トネリコ属	径 2.3	切痕
枝材	② L31c	1015	丸木			トネリコ属	径 3.5	
枝材	② L31c	1019	丸木			ハンノキ属	径 2.3	
枝材	② L31c	1022	丸木			トネリコ属	径 2.1	
枝材	② K28b	1076	丸木	○		イヌエンジュ	径 2.1	切痕
枝材	② K28b	1079	丸木			トネリコ属	径 2.1	切痕
枝材	② K28b	1082	丸木			ヤナギ属	径 2.7	切痕
枝材	② K28ab	1088	丸木			ハシドイ属	径 2.6	切痕
枝材	② L30a	1097	丸木			ヤナギ属	径 2.3	
枝材	② L29d	1238	丸木			トネリコ属	径 2.0	
枝材	② M31d	1245	丸木			ヤナギ属	径 2.5	切痕
枝材	② L33bc	1830	丸木			ハンノキ属	径 2.0	
枝材	② L33c	1835	丸木		○	ヤナギ属	径 3.0	切痕
枝材	② L34b	1919	丸木			イヌエンジュ	径 3.0	
枝材	② M34a	1976	丸木			ヤナギ属	径 2.9	切痕
枝材	② M34a	2002	丸木			トネリコ属	径 3.5	
枝材	② M35a	2056	丸木			ハシドイ属	径 2.1	切痕
枝材	② M35bc	2083	丸木			トネリコ属	径 3.7	切痕
枝材	② M35c	2095	丸木			ヤナギ属	径 2.5	切痕
枝材	② M35c	2210	丸木			トネリコ属	径 2.7	切痕
枝材	② M33a	2236	丸木			ハンノキ属	径 2.4	
枝材	② M33a	2237	丸木			カエデ属	径 3.5	
枝材	② M33a	2238	丸木		○	トネリコ属	径 2.0	切痕
枝材	② L27b	2444	丸木			トネリコ属	径 2.6	
枝材	② I27c, J27d	3133	丸木	○		トネリコ属	径 2.9	切痕
枝材	② J27b	3153	丸木			ヤナギ属	径 3.7	切痕
枝材	② J27b	3158	丸木			ハシドイ属	径 2.7	切痕
枝材	② K27d	3260	丸木			トネリコ属	径 3.8	切痕
枝材	② K26a	3302	丸木			トネリコ属	径 3.3	
枝材	② K27d	3464	丸木		○	サクラ属	径 2.0	
枝材	② K27d	3465	丸木			イヌエンジュ	径 2.7	

表IV-30 IB4 層未掲載木製品一覧(12)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備	考
枝材	② I 25 d, I 26 a	3 5 1 2	丸木			ヤナギ属	径 2.5		
枝材	② I 25 a	3 5 1 8	丸木			ヤナギ属	径 2.7	切痕	
枝材	② I 26 c	3 8 3 0	丸木			トネリコ属	径 2.3	切痕	
枝材	② K 25 c d	3 9 1 3	丸木			ヤナギ属	径 2.8	切痕	
枝材	② K 25 a	3 9 3 3	丸木			トネリコ属	径 2.9	切痕	
枝材	② J 27 b	3 9 4 1	丸木	○		ハシドイ属	径 2.2	切痕	
枝材	② K 27 d	3 9 7 1	丸木			ヤナギ属	径 3.1	切痕	
枝材	② K 27 d	3 9 7 3	丸木			ハシドイ属	径 3.6	切痕	
枝材	② K 27 d	3 9 8 2	丸木			トネリコ属	径 2.5	切痕	
枝材	② K 27 d	3 9 8 3	丸木			ヤナギ属	径 2.5	切痕	
枝材	② L 23 c	4 0 3 0	丸木			ハンノキ属	径 3.4	切痕	
枝材	② L 23 c	4 0 3 1	丸木		○	ハギ属	径 2.2		
枝材	② L 24 a	4 0 3 8	丸木			ヤナギ属	径 3.0		
枝材	② L 24 a	4 0 4 4	丸木			ハシドイ属	径 2.7		
枝材	② L 24 b	4 0 5 1	丸木			トネリコ属	径 2.8		
枝材	② K 26 d	4 2 2 3	丸木			トネリコ属	径 2.6	切痕	
枝材	② K 27 c	4 2 7 8	丸木			トネリコ属	径 3.7	切痕	
枝材	② K 27 c	4 2 5 4	丸木			サルナシ属	径 2.3	切痕	
枝材	② K 27 c	4 2 7 9	丸木			ヤナギ属	径 3.9		
枝材	② K 27 c	4 2 8 1	丸木			トネリコ属	径 2.3		
枝材	② J 27 b	4 2 9 2	丸木			ハンノキ属	径 2.1	切痕	
枝材	② K 27 a	4 2 9 4	丸木			トネリコ属	径 2.3	切痕	
枝材	② K 27 a	4 2 9 7	丸木			ヤナギ属	径 3.5		
枝材	② H 25 b, I 25 a	4 4 3 4	丸木			ハンノキ属	径 3.1	切痕	
枝材	② H 25 b, I 25 a	4 4 3 6	丸木			ハンノキ属	径 3.8	切痕	
枝材	② H 25 b, I 25 a	4 4 3 7	丸木			ヤナギ属	径 2.5	切痕	
枝材	② I 25 a	4 4 3 9	丸木			ヤナギ属	径 2.8	切痕	
枝材	② I 24 d, I 25 a	4 4 4 5	丸木			ヤナギ属	径 2.5	切痕	
枝材	② I 24 d	4 4 4 6	丸木	○		ヤナギ属	径 2.1	切痕	
枝材	② I 24 d	4 4 4 7	丸木			ヤナギ属	径 2.7	切痕	
枝材	② I 24 a d	4 4 5 9	丸木			ハンノキ属	径 2.1	切痕	
枝材	② H 24 c, 24 d	4 4 6 0	丸木			オニグルミ	径 2.8	切痕	
枝材	② K 24 d	4 5 3 5	丸木			トネリコ属	径 3.2	切痕	
枝材	② K 25 a	4 5 8 3	丸木			ハンノキ属	径 3.3	切痕	
枝材	② I 25 a	4 7 8 1	丸木			トネリコ属	径 2.7	切痕	
枝材	② L 23 c	5 1 3 0	丸木			トネリコ属	径 2.9	切痕	
枝材	② J 26 b	5 4 8 9	丸木			トネリコ属	径 3.9	切痕	
枝材	② M 34 d	6 4 8 1	丸木			トネリコ属	径 2.6	切痕	
枝材	② N 36 d	6 8 1 6	丸木			コナラ属	径 2.1	切痕	
枝材	② M 33 a	6 8 5 5	丸木		○	トネリコ属	径 2.4	切痕	
枝材	② O 20 b	7 7 4 1	丸木			コナラ属	径 2.3	切痕	
枝材	② O 20 c, O 21 b	7 7 7 0	丸木		○	ヤナギ属	径 3.6	切痕	

表IV-31 IB4層未掲載木製品一覧(13)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	種	計測値 cm	備考
枝材	② N22d	7809	丸木			カエデ属		径 2.4	
枝材	② N22b	7810	丸木		○	ハンノキ属		径 3.4	
枝材	② N22ad	7817	丸木			ツルアジサイ		径 3.7	切痕
枝材	② N22b	7824	丸木		○	ハシドイ属		径 2.5	
枝材	② O21d, O22a	9723	丸木			ツルアジサイ		径 3.2	
枝材	② K26d	9900	丸木			トネリコ属		径 2.6	切痕
枝材	④ T20d	215	丸木			トネリコ属		径 2.0	
枝材	④ S17c	326	丸木			トネリコ属		径 2.0	
枝材	④ S18b	350	丸木			トネリコ属		径 2.8	切痕
枝材	④ S18a	354	丸木			トネリコ属		径 3.1	切痕
枝材	④ S18a	377	丸木			ハンノキ属		径 3.2	
枝材	④ S17d	478	丸木			トネリコ属		径 3.6	
枝材	④ T14a	524	丸木	○		ハンノキ属		径 2.6	
枝材	④ S17d	602	丸木			トネリコ属		径 2.8	
枝材	④ S17b	611	丸木			トネリコ属		径 3.0	
枝材	④ S17a	698	丸木			トネリコ属		径 3.2	
枝材	④ S17ab	699	丸木			クワ属		径 2.4	
枝材	④ S17a	700	丸木			トネリコ属		径 2.2	
枝材	④ S17d, S18a	706	丸木			トネリコ属		径 3.9	
枝材	④ S17c	717	丸木			ハンノキ属		径 3.5	
枝材	④ T16a	905	丸木	○		イヌエンジュ		径 2.0	切痕
枝材	④ T16abcd	907	丸木			トネリコ属		径 3.1	
枝材	④ R19a	927	丸木			ハンノキ属		径 3.5	
枝材	④ R19ab	957	丸木	○		ハンノキ属		径 3.3	切痕
枝材	④ R18d	959	丸木			ヤナギ属		径 3.3	
枝材	④ R19a	990	丸木			ハシドイ属		径 2.2	切痕
枝材	④ R18d	1001	丸木			トネリコ属		径 2.9	切痕
枝材	④ R18b	1015	丸木			トネリコ属		径 3.9	
丸木材	② L30a	684	丸木			ナナカマド属		径 4.7	
丸木材	② K28b	1011	丸木			ニレ属		径 4.2	
丸木材	② L30d	1125	丸木			トネリコ属		径 7.6	
丸木材	② G33c, H33d	1389	丸木		○	オニグルミ		径 6.5	
丸木材	② H33d	1390	丸木		○	トネリコ属		径 8.4	
丸木材	② H33a	1392	丸木		○	トネリコ属		径 15.3	
丸木材	② I34b	1400	丸木			ハンノキ属		径 10.1	切痕
丸木材	② L33c	1825	丸木			オニグルミ		径 8.5	切痕
丸木材	② M34a	2004	丸木			ニレ属		径 4.0	切痕
丸木材	② M35a	2040	丸木			トネリコ属		径 5.8	切痕
丸木材	② M34c	2074	丸木			トネリコ属		径 4.6	切痕
丸木材	② M35c	2082	丸木			カエデ属		径 5.3	
丸木材	② J27b	3154	丸木		○	トネリコ属		径 4.6	切痕
丸木材	② K26a	3299	丸木			ハンノキ属		径 4.3	切痕

表IV-32 IB4層未掲載木製品一覧(14)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備考
丸木材	② J27b	3943	丸木	○	○	ハンノキ属	径 4.4	切痕
丸木材	② I24a	4162	丸木		○	トネリコ属	径 4.4	切痕
丸木材	② K27a	4228	丸木			トネリコ属	径 6.2	
丸木材	② K27d	4255	丸木			トネリコ属	径 4.0	切痕
丸木材	② H25b, I25a	4438	丸木		○	トネリコ属	径 6.9	切痕
丸木材	② I24d, I25a	4454	丸木		○	ハンノキ属	径 4.1	切痕
丸木材	② H24b	4465	丸木		○	ニレ属	径 12.0	
丸木材	② K24c	4534	丸木		○	トネリコ属	径 4.5	切痕
丸木材	② K25d	4600	丸木		○	ニレ属	径 4.4	切痕
丸木材	② O22a	9663	丸木		○	トネリコ属	径 5.4	切痕
丸木材	④ S30a	8	丸木			イヌエンジュ	径 4.5	切痕
丸木材	④ S34ab	229	丸木			トネリコ属	径 4.4	切痕
丸木材	④ S17d	601	丸木			トネリコ属	径 5.4	切痕
丸木材	④ S17d, S18a	707	丸木			トネリコ属	径 5.1	
丸木材	④ S17d	779	丸木			トネリコ属	径 4.2	
丸木材	④ R18d	956	丸木			ヤナギ属	径 4.4	
丸木材	④ R18bc	976	丸木			トネリコ属	径 6.1	
丸木材	② K27a	3958	丸木			トネリコ属	幅 24.5	切痕
丸木材	② K27c	3964	丸木			トネリコ属	径 4.1	
丸木材	② L29d	665	丸木			トネリコ属	径 6.1	
丸木材	② K28d	1096	丸木			ハンノキ属	計測不能	
丸木材	② L31a	1158	丸木			トネリコ属	径 3.5	
丸木材	② M34a	2003	丸木			トネリコ属	径 4.8	
丸木材	② K27d	3984	丸木			トネリコ属	径 4.9	
丸木材	② K27a	4245	丸木			トネリコ属	径 5.4	長さ 34.5
丸木材	② K27d	4270	丸木		○	サクラ属	径 4.1	
丸木材	② I22d	7655	丸木			カエデ属	径 4.2	
丸木材	② P15d	9535	丸木			トネリコ属	径 4.5	
丸木材	④ R18cd	958	丸木		○	トネリコ属	径 4.7	
丸木材	④ L28d	694	丸木		○	コナラ属	幅 5.2	
丸木材	④ R18d	997	丸木		○	トネリコ属	幅 5.0	長さ 3.6
丸木材	② K28b	990	丸木		○	ハシドイ属	径 3.2	
丸木材	② K28a	1086	丸木			ニレ属	径 3.5	
丸木材	② K27a	4305	丸木			ニレ属	径 2.3	
丸木材	② N22b	7082	丸木			ハシドイ属	径 2.5	長さ 119.5
丸木材	② N22b	7804	丸木			トネリコ属	径 3.8	
丸木材	② N17b	9597	丸木		○	ハンノキ属	径 3.9	
丸木材	④ S36b	174	丸木			トネリコ属	径 3.7	
丸木材	④ R18d	975	丸木			ハシドイ属	径 3.0	
丸木材	② L30a	683	丸木		○	イヌエンジュ	径 3.0	長さ 31.5
丸木材	② M35d	2087	丸木		○	ハンノキ属	径 2.5	両先
丸木材	② M37c	2371	丸木		○	ハンノキ属	径 4.1	

表IV-33 IB4層未掲載木製品一覧(15)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備考
刺し杭	② K27d	3978	丸木			ハシドイ属	径 3.4	
刺し杭	② O21d	8254	丸木			コナラ属	径 1.9	
柱切断品	② I25ab	3503	丸木	○		コナラ属	径 8.9	
柱	④ S17b, T17a	696	丸木			トネリコ属	径 10.6	
柱	② H24bc	4463	丸木			未同定	未計測	切痕 プール収納
建材	② L28a, K28b	693	丸木			トネリコ属	径 5.7	桁? 端部節削り込み
建材	② J31cd	857	丸木			トネリコ属	径 7.3	桁? 梁? 挟り付き
建材	② M35b	2018	丸木			オニグルミ	径 4.7	桁? 挟り付き
建材	② H24c	4467	丸木		○	未同定	未計測	切痕 プール収納
建材	② N39a	6599	丸木		○	ニレ属	径 5.5	桁? 梁? 端部削り
建材	④ S18a	368	丸木			未同定	未計測	プール収納
建材	④ S17ab	614	丸木			未同定	未計測	プール収納
建材	④ S17b	695	丸木			未同定	未計測	プール収納
建材	④ S17d	719	丸木			トネリコ属	径 5.4	桁? 梁? 全面調整
建材	④ R18cd	963	丸木			ハンノキ属	径 4.7	梁? 端部細化削り
建築部材	② L29d	689	丸木			ハシドイ属	径 1.5	横架材 端部頭削り出し
建築部材	② K27d	3987	丸木			ヤナギ属	径 2.8	横架材 端部細化削り
建築部材	② K27a	4235	丸木			ヤナギ属	径 3.0	横架材 挟り付き
建築部材	② I24d, I25a	4450	丸木	○		ヤナギ属 12本 クワ属 1本	径 1.9~1.0	切痕 集中 唇根材
切片	② L30d	594	板目			トネリコ属	幅 2.6	
切片	② L29a	808	板目			トネリコ属	幅 3.3	
切片	② L29a	814	板目			ハシドイ属	幅 1.5	
切片	② L29a	815	板目			ヤナギ属	幅 1.6	
切片	② K28b	989	板目			トネリコ属	幅 4.2	
切片	② K28b	995	板目			トネリコ属	幅 2.1	
切片	② K28b	1000	板目			ヤナギ属	幅 1.8	
切片	② L31c	1052	板目			トネリコ属	幅 3.0	
切片	② K28b	1078	偏割			トネリコ属	幅 4.9	
切片	② L28d	1090	偏割			トネリコ属	幅 3.6	
切片	② L30a	1098	偏割			オナカマド属	幅 3.2	
切片	② L30c	1124	板目			モミ属	幅 1.4	
切片	② J31a	1132	板目			カツラ	幅 4.5	
切片	② K31	1169	板目			トネリコ属	幅 5.7	
切片	② L31c, M31d	1249	板目			トネリコ属	幅 3.8	
切片	② L33b	1836	板目			カバノキ属	計測不能	
切片	② L32c	1907	板目			ヤナギ属	幅 2.5	
切片	② L34b	1917	板目			トネリコ属	幅 3.4	
切片	② M34a	1977	偏割			ハンノキ属	幅 4.8	
切片	② M34a	1978	偏割			ハンノキ属	幅 7.0	
切片	② M34d	2001	板目			トネリコ属	幅 5.0	
切片	② M35a	2045	板目			ハンノキ属	幅 5.3	

表IV-34 IB4層未掲載木製品一覧(16)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備考
切片	② M35a	2052	偏割			ハンノキ属	幅 5.5	
切片	② M35a	2054	偏割			トネリコ属	幅 4.1	
切片	② M35a	2059	板目			ニレ属	幅 2.0	
切片	② M35d	2061	板目			トネリコ属	幅 3.3	
切片	② M35a d	2062	偏割			ハンノキ属	幅 4.5	
切片	② M35d	2091	板目			トネリコ属	幅 4.4	
切片	② M35c	2128	板目			ニレ属	幅 4.1	
切片	② M35c d	2129	板目			ハンノキ属	幅 2.5	
切片	② M35c	2151	板目			ハンノキ属	幅 4.5	
切片	② M35c	2152	板目			ハンノキ属	幅 4.5	
切片	② M35c	2208	板目			ヤナギ属	幅 1.9	
切片	② M35a	2225	板目			ハンノキ属	幅 4.8	
切片	② M40b	2290	板目			ハシドイ属	幅 2.9	
切片	② M40b	2291	板目			モミ属	幅 1.6	
切片	② M37b	2368	偏割			ヤナギ属	幅 2.6	
切片	② M37c	2374	板目			トネリコ属	幅 2.2	
切片	② M37c	2376	偏割			トネリコ属	幅 5.5	
切片	② M37b	2381	板目			トネリコ属	幅 2.3	
切片	② M37b	2394	板目			トネリコ属	幅 2.4	
切片	② M37c	2399	板目			ヤナギ属	幅 2.8	
切片	② I26a	3039	板目			コナラ属	幅 2.2	
切片	② K26a	3297	偏割			トネリコ属	幅 3.5	
切片	② I25a	3498	偏割			トネリコ属	幅 4.0	
切片	② I25a	3502	板目			トネリコ属	幅 5.5	
切片	② I26a	3510	偏割			ヤナギ属	幅 5.5	集中
切片	② I26a	3511	偏割	○		ハンノキ属	幅 2.2	
切片	② I25a	3520	板目			オニグルミ	幅 3.2	
切片	② K25d	3884	板目			トネリコ属	幅 3.0	
切片	② K27d	3979	板目			トネリコ属	幅 5.5	
切片	② K27c	3997	板目			ハンノキ属	計測不能	
切片	② I25d	4001	板目			ヤナギ属	計測不能	
切片	② J27b	4236	偏割			トネリコ属	幅 4.2	集中
切片	② K27d	4274	偏割			トネリコ属	幅 5.3	
切片	② M26b	4277	偏割			ハシドイ属	幅 1.5	
切片	② K27a	4293	偏割			トネリコ属	幅 3.3	
切片	② K27a	4298	板目			ミツバウツギ	計測不能	
切片	② I24d	4451	偏割			トネリコ属	幅 2.6	
切片	② I24d	4457	偏割			トネリコ属	幅 3.2	
切片	② K25b	4580	板目			トネリコ属	幅 3.6	
切片	② K24d	4585	板目			トネリコ属	幅 3.6	
切片	② K25c	4610	板目			トネリコ属	幅 6.0	
切片	② I24d	4648	板目			トネリコ属	幅 1.5	

表IV-35 IB4層未掲載木製品一覧(17)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	種	計測値 cm	備考
切片	② I 32 a	6 5 7 9	桁目			トネリコ属		幅 3.7	
切片	② M 22 c	7 5 2 9	桁目			トネリコ属		幅 5.0	
切片	② M 22 c	7 5 3 3	偏割			トネリコ属		幅 4.6	
切片	② M 22 c	7 5 3 7	偏割			トネリコ属		幅 3.4	
切片	② M 22 b	7 5 4 9	板目			トネリコ属		幅 4.2	
切片	② N 22 a	7 5 5 0	板目			トネリコ属		幅 3.1	
切片	② N 22 a	7 5 5 2	板目			ハンノキ属		幅 3.1	
切片	② M 22 c	7 5 5 7	板目			トネリコ属		計測不能	
切片	② O 21 c	7 7 8 1	偏割			トネリコ属		幅 4.4	
切片	② P 21 a	7 7 9 1	偏割			トネリコ属		幅 4.4	
切片	② P 21 a	7 7 9 5	板目			トネリコ属		幅 9.0	
切片	② P 19 d	7 8 0 0	板目			コナラ属		幅 4.4	
切片	② N 22 b	7 8 0 7	偏割			トネリコ属		幅 5.8	
切片	② N 22 a	7 8 1 2	桁目			カエデ属		幅 3.1	
切片	② M 22 b	7 8 1 9	偏割			トネリコ属		幅 4.4	
切片	② M 22 c	7 8 2 1	板目			トネリコ属		幅 2.7	
切片	② M 22 c	7 8 2 2	板目			カエデ属		幅 4.3	
切片	② N 22 a	7 8 2 3	偏割			トネリコ属		幅 3.7	
切片	② N 22 b	7 8 2 5	偏割			イヌエンジュ		幅 4.0	
切片	② O 21 d	8 2 5 2	板目			モクレン属		計測不能	
切片	② O 21 d	8 2 5 5	板目			トネリコ属		幅 4.7	
切片	② O 21 d	8 2 5 8	偏割			モクレン属		幅 3.2	
切片	② O 21 d	8 2 5 9	偏割			ハンノキ属		幅 6.7	
切片	② O 21 d	8 2 6 0	偏割			トネリコ属		幅 5.0	
切片	② O 21 c	8 2 6 4	板目			トネリコ属		幅 6.6	
切片	② P 20 d	8 2 6 7	板目			トネリコ属		幅 4.3	
切片	② N 17 b	8 5 3 2	偏割			トネリコ属		幅 2.6	
切片	② M 20 d	9 1 0 3	偏割			ハンノキ属		幅 4.2	
切片	② O 16 b	9 5 1 7	偏割			トネリコ属		幅 4.5	
切片	② O 17 a	9 6 3 1	板目			トネリコ属		幅 6.0	
切片	② O 21 a	9 6 4 7	偏割			カエデ属		幅 2.8	
切片	② O 21 d	9 6 5 2	板目			ハンノキ属		幅 2.6	
切片	② P 20 a	9 6 7 2	偏割			トネリコ属		幅 4.5	
切片	② O 18 a	9 8 2 9	偏割			ハンノキ属		幅 4.2	
切片	② L 31 c	9 8 7 5	偏割			ハシドイ属		幅 2.8	
切片	② L 30 a	9 8 9 3	偏割			ニレ属		幅 2.6	
切片	② L 30 a	9 8 9 4	板目			トネリコ属		幅 2.5	
切片	② L 32 c	9 9 2 4	板目			トネリコ属		幅 4.5	
切片	④ S 17 b	4 4 6	板目			トネリコ属		幅 4.6	
切片	④ S 17 c	6 0 4	偏割			トネリコ属		幅 5.6	
切片	④ S 17 b	6 1 2	板目			カエデ属		幅 2.7	
切片	④ S 17 b	6 1 5	偏割			トネリコ属		幅 2.6	

表IV-36 IB4層未掲載木製品一覧(18)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備考
切片	④ S17b	616	偏割			トネリコ属	幅 5.3	
切片	④ S17b	617	偏割			トネリコ属	幅 5.7	
切片	④ S17b	618	偏割			トネリコ属	幅 5.9	
切片	④ T17d	619	板目			トネリコ属	幅 4.1	
切片	④ T17a	621	偏割			トネリコ属	幅 3.7	
切片	④ T17a	622	偏割			トネリコ属	幅 5.3	
切片	④ T17a	623	板目			トネリコ属	幅 3.3	
切片	④ T17a	624	板目			トネリコ属	幅 2.6	
切片	④ S17d	705	板目			トネリコ属	幅 3.0	
切片	④ T17d	738	偏割			ハンノキ属	幅 7.2	
切片	④ T10d	769	板目			トネリコ属	幅 5.2	
切片	④ S17c	773	板目			トネリコ属	幅 2.8	
切片	④ S17c, S18d	774	板目			ハンノキ属	幅 3.6	
切片	④ S17c	775	板目			トネリコ属	幅 9.9	
切片	④ S17d	776	板目			トネリコ属	幅 6.8	
切片	④ R19b	911	板目			トネリコ属	幅 4.9	
切片	④ R19b	912	板目			トネリコ属	幅 2.7	
切片	④ R19b	920	疋目			イヌエンシユ	幅 1.3	
切片	④ R18c	937	偏割			トネリコ属	幅 5.3	
切片	④ R18c	945	偏割			ハンノキ属	計測不能	
切片	④ R19b	946	偏割			トネリコ属	幅 3.0	
切片	④ R19b	947	偏割			トネリコ属	幅 3.2	
切片	④ R18c	948	板目			トネリコ属	計測不能	
切片	④ R19b	951	板目			トネリコ属	幅 3.4	
切片	④ R18d	955	偏割			トネリコ属	幅 3.2	
切片	④ R18b	965	偏割			トネリコ属	幅 4.3	
切片	④ R18c	966	板目			ハンノキ属	計測不能	
切片	④ R18bc	971	偏割			トネリコ属	幅 3.0	
切片	④ R18b	972	板目			ハンノキ属	幅 3.9	
切片	④ R19a	991	板目	○		樹皮	幅 2.4	
切片	④ R18a	1003	板目			ハンノキ属	幅 5.3	
切片	④ R18c	1008	偏割			ハンノキ属	幅 2.4	
切片	④ R18c	1010	板目			ハンノキ属	計測不能	
木端	② L30a	687	偏割			ナナカマド属	計測不能	
木端	② L31c	1056	板目	○		樹皮	幅 2.8 厚さ 0.6	
木端	② L30c	1136	板目			トネリコ属	幅 3.7 厚さ 0.6	
木端	② L29d	1237	木取不明			トネリコ属	計測不能	
木端	② M31d	1244	1/4割			ニレ属	幅 1.5 厚さ 1.0	
木端	② L32c	1920	木取不明			トネリコ属	計測不能	
木端	② M34a	1995	木取不明			ニレ属	計測不能	
木端	② M33d	2239	木取不明			トネリコ属	計測不能	
木端	② M37b	2379	木取不明			ヤナギ属	計測不能	

表IV-37 IB4層未掲載木製品一覧(19)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備考
木端	② M37b	2380	偏割			ヤナギ属	計測不能	
木端	② M37c	2388	木取不明			トネリコ属	計測不能	集中
木端	② I26a	3514	偏割			ヤナギ属	計測不能	
木端	② I25a	3519	板目			トネリコ属	幅 2.7	厚さ 0.4
木端	② I24d	4114	板目			ヤナギ属	幅 1.6	厚さ 0.8
木端	② K27a	4244	板目・紐目			トネリコ属	計測不能	
木端	② M22c	7540	1/4割			トネリコ属	幅 3.9	厚さ 1.2
木端	② M22b	7551	木取不明			トネリコ属	計測不能	
木端	② O21d	8270	木取不明			ヤナギ属	計測不能	
木端	② N21c	8361	木取不明			トネリコ属	計測不能	
木端	② O22a	9668	木取不明		○	トネリコ属	計測不能	
木端	② L20d	9835	木取不明			クワ属	計測不能	
木端	④ T38a	144	偏割			トネリコ属	計測不能	
木端	④ R18b	973	板目			トネリコ属	計測不能	
木端	④ R18b	1013	偏割			トネリコ属	計測不能	
炭化材	② K29d	1091	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	② J31a	1126	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	② J31c	1203	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	② H40d	1319	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	② H40d	1320	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	② H40c	1321	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	② D40b, E39c, E40ab	1358	丸木			トネリコ属	計測不能	
炭化材	② E41d	1363	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	② D33c	1371	幹・枝(丸木)			トネリコ属	計測不能	
炭化材	② I40c	1406	1/6割			トネリコ属	計測不能	
炭化材	② J32a b c d	1623	丸木			ハンノキ属	計測不能	
炭化材	② L34d	1745	偏半割			クワ属	幅 1.2	
炭化材	② C31a	6178	木取不明			ハンノキ属	幅 8.5	
炭化材	② M22b	7595	1/8割			トネリコ属	幅 1.7	
炭化材	② N22a	7811	1/6割			トネリコ属	幅 3.2	
炭化材	② O21d	8253	1/6割			トネリコ属	幅 2.3	
炭化材	② O21d	8263	1/8割			トネリコ属	幅 2.4	
炭化材	② O21c	8265	1/6割			トネリコ属	幅 2.4	
炭化材	② M21c	8285	1/6割			トネリコ属	幅 3.5	
炭化材	② M21c	8286	1/6割			トネリコ属	幅 3.5	
炭化材	② N17c	8531	木取不明			トネリコ属	計測不能	
炭化材	② P15a	9584	木取不明			クワ属	計測不能	
炭化材	② P15a	9630	木取不明			ツルアジサイ	幅 3.6	
炭化材	② O21d	9656	1/8割			トネリコ属	幅 1.9	
炭化材	② J32a b c d	9946	1/4割			トネリコ属	計測不能	
炭化材	④ S30a	9	木取不明			同定不能	計測不能	
炭化材	④ S30b	10	木取不明			同定不能	計測不能	

表IV-38 IB4層未掲載木製品一覧(20)

遺物名称	発掘区	遺物番号	木取り	樹皮	焼痕	樹種	計測値 cm	備	考
炭化材	④ S35d	166	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 75×25cm	
炭化材	④ S35d	167	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 27×25cm	
炭化材	④ S36cd, S37ab	168	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 97×60cm	
炭化材	④ S37a	169	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 20×17cm	
炭化材	④ S37d	170	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 7×5cm	
炭化材	④ T37a	172	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 27×15cm	
炭化材	④ S34c	239	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 33×32cm	
炭化材	④ S34c	240	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 45×35cm	
炭化材	④ S34c	241	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 40×40cm	
炭化材	④ S34a	243	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 32×25cm	
炭化材	④ S34a	244	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 25×20cm	
炭化材	④ S13d	943	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 45×18cm	
炭化材	④ R18a	1002	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 8×5cm	
炭化材	④ R21b	1023	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 127×(85)cm	
炭化材	④ R30ad	1070	木取不明			同定不能	計測不能	集中範囲 170×35cm	
樹皮	② L29a	816	樹皮	○		樹皮	計測不能		
樹皮	② J31a	1128	樹皮	○		樹皮	幅 5.3	切片	
樹皮	② K31	1168	樹皮	○		樹皮	計測不能	集中	
樹皮	② I40b	1405	樹皮	○	○	樹皮	計測不能		
樹皮	② M35c	2080	樹皮	○	○	樹皮	計測不能		
樹皮	② M35d	2089	樹皮	○	○	樹皮	幅 2.3		
樹皮	② I25a	4440	樹皮	○	○	樹皮	幅 2.2	切片	
樹皮	② H24c	4462	樹皮	○	○	樹皮	幅 1.9		
樹皮	② F32c	5633	樹皮	○	○	樹皮	計測不能		
樹皮	② M22c	7565	樹皮	○	○	樹皮	幅 4.1		
樹皮	② N22b	7808	樹皮	○	○	樹皮	幅 3.1	切片	
樹皮	② N22ad	7826	樹皮	○	○	樹皮	計測不能	集中	
樹皮	④ S35b	173	樹皮	○	○	樹皮	計測不能		

9 木製品の樹種同定

〈1〉 識別結果

試料及び識別の方法については、前々回の報告『千歳市 ユカンボンC15遺跡(1)』北埋調報128集に同じである。

樹種の識別は、平成8・9・10年度の②・④区から出土の木製品のうち、I B 4層以下の木質部をもつ1072点の遺物について行った。その中には軽微ではあるが、あて材をもつ遺物（あて材については〈3〉を参照）や、腐朽が進んで細胞組織のかなり劣化している遺物もあり、観察が困難な場合が多かった。識別の際に、広葉樹の放射組織の同性と異性の区別については、平伏細胞のみからなるものを同性、それ以外のものを異性とした。しかし、オニグルミのように大部分が平伏細胞からなり、方形細胞が時々混じるような場合には、同性に区別した。

識別の結果として24科30属を同定した。樹種構成は針葉樹3科3属、広葉樹21科27属であり、そのうち9属については種までの同定を行った。それらの同定の根拠となった組織構造的な特徴を、針葉樹、広葉樹の順で以下に記載する。なお、128集においてヒノキ属？アスナロ属？としたものを今回からアスナロ、アジサイ属としたものをノリウツギと記載する。また、ハギ属としたものはイヌエンジュの誤りであった。（どの遺物に該当するかは〈2〉を参照）

モミ属 *Abies* (まつ科 PINACEAE)

顕微鏡写真No. 1

仮道管と放射柔細胞からなり、分野壁孔はスギ型である。放射柔細胞の壁は厚く数珠状末端壁を有する。

トドマツと推定される。

スギ *Cryptomeria japonica* D. Don(スギ属 *Cryptomeria*) (すぎ科 TAXODIACEAE)

顕微鏡写真No. 2

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなり、樹脂道、放射仮道管は存在しない。仮道管に螺旋肥厚は存在しない。樹脂細胞は早・晩材部の移行部から晩材部にかけて散在する。年輪界は明瞭で、早材部から晩材部への移行は急又はやや急である。晩材部の幅は比較的広い。放射組織は単列のみで一般に10細胞高以下である。分野壁孔はスギ型である。仮道管の内壁の表面にはイボ状突起の存在が走査電子顕微鏡により確認できる。ネズコの可能性もあるが、分野壁孔の壁孔壁（膜）の部分の径が6 μm以上と大きいので、スギと同定した。

アスナロ *Thujaopsis dolabrata* Sieb. et Zucc. (ヒノキアスナロ)(アスナロ属 *Thujaopsis*) (ひのき科 CUPRESSACEAE)

顕微鏡写真No. 3・4

仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなり、樹脂道、放射仮道管は存在しない。仮道管に螺旋肥厚は存在しない。樹脂細胞は晩材部の接線状に散在する。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材部の幅が狭い。分野壁孔はヒノキ型が殆どであるが、スギ型とトウヒ型も認められ、1分野に2～5個存在する。ヒノキの可能性もあるが、分野壁孔にスギ型が多かったので、アスナロと同定した。

ヤナギ属 *Salix* (やなぎ科 SALICACEAE)

顕微鏡写真No. 5

木口面：散孔材である。道管は時折2～3個の複合管孔を形成する。

板目・柾目面：放射組織は単列で異性である。道管要素は単せん孔をもつ。螺旋肥厚は存在しない。また、道管相互壁孔は交互壁孔である。

エゾノカワヤナギ、オノエヤナギ、バッコヤナギ、エゾノバッコヤナギなどが推定される。

ハコヤナギ属 *Populus* (やなぎ科 SALICACEAE)

顕微鏡写真No. 6

木口面：散孔材である。多くの道管は2～4個の複合管孔を形成する。

板目・柾目面：放射組織は単列で同性である。道管要素は単せん孔をもつ。螺旋肥厚は存在しない。ドロノキ、ヤマナラシが推定される。

オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr.

(オニグルミ属 *Juglans*) (くるみ科 JUGLANDACEAE) 顕微鏡写真No. 7

木口面：散孔材である。大型の道管が単独もしくは2～3個複合して存在する。道管内には顕著にチロースが認められることが多い。柔細胞の接線方向への配列は本属の特徴である。

板目・柾目面：放射組織は1～3細胞幅で3～20細胞高であり同性であるが、方形細胞を含む場合がある。道管要素は単せん孔をもつ。螺旋肥厚は存在しない。

カバノキ属 *Betula* (かばのき科 BETULACEAE) 顕微鏡写真No. 8

木口面：散孔材であり、一般に道管は2～4個が放射方向に複合する。

板目・柾目面：放射組織は1～4細胞幅で40細胞高以上にもなり、同性である。道管要素は階段せん孔をもつ。螺旋肥厚は存在しない。

シラカンバやウダイカンバ等が推定される。

ハンノキ属 *Alnus* (かばのき科 BETULACEAE) 顕微鏡写真No. 9

木口面：散孔材である。多くの道管は2～4個が放射方向に複合する。

板目・柾目面：放射組織は単列で同性である。集合放射組織を形成する。道管要素は階段せん孔をもつ。螺旋肥厚は存在しない。

ハンノキ、ケヤマハンノキ等が推定される。

コナラ属 *Quercus* (ぶな科 FAGACEAE) 顕微鏡写真No. 10

木口面：環孔材である。孔圏部の大道管にはチロースが認められ、付近には周囲仮道管が存在する。孔圏外の道管は、やや放射状に配列することがある。

板目・柾目面：放射組織は単列と広放射組織からなり、同性である。道管要素は単せん孔をもつ。

ミズナラ、コナラ、カシワ等が推定される。

ブナ属 *Fagus* (ぶな科 FAGACEAE) 顕微鏡写真No. 11

木口面：散孔材である。道管はほぼ平均に分布し、年輪の前半部の道管の方が大きく、外側にいくにつれて大きさと数が減少する。

板目・柾目面：放射組織は単列のもの、2～数列のもの、広放射組織の3種類があり、ほとんど同性である。道管要素は、一般に年輪の前半部で単せん孔、外側では、階段せん孔と網状せん孔をもつ。螺旋肥厚は存在しない。

ブナ(北海道南部が北限)、イヌブナ(北海道外)が推定される。

ニレ属 *Ulmus* (にれ科 ULMACEAE) 顕微鏡写真No. 12 根材：No. 13

木口面：環孔材である。孔圏部の道管は2～3列になり、孔圏外では多数の小道管が接合して集団管孔を形成し、接線方向にかなり規則的に配列する。

板目・柾目面：放射組織は1～6細胞幅、3～70細胞高で、同性である。道管要素は単せん孔をもち、内壁には螺旋肥厚が存在する。本属では根材* (地際近くの木質と変わらない根の部分) と推定されるものが数点出土している。

※根材：孔圏道管の径が、大きかったり小さかったりし、数も多くなり散孔状を呈す。年輪境界もあまり明瞭ではなく、本属本来の道管配列と異なるが、その他の形質に相違は見られない。現生の根の試料に乏しく、可能性が高いと考えられるが断定はできない。

ハルニレまたはオヒョウが推定される。

クワ属 *Morus* (くわ科 MORUS)

顕微鏡写真No.14

木口面：環孔材である。孔圏部では単独あるいは2～3個の道管が複合する。孔圏外では小道管が複合して団塊状をなす。道管内にはチロースが認められる。

板目・柾目面：放射組織は1～6細胞幅、5～60細胞高で、異性である。道管要素は単せん孔をもつ。小道管の螺旋肥厚は、走向が不規則な場合がある。

ヤマグワが推定される。

カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc.(カツラ属 *Cercidiphyllum*) (かつら科 CERCIDIPHYLLACEAE) 顕微鏡写真No.15

木口面：散孔材である。殆どの道管は単独で数が極めて多く、年輪内全体を通じて平等に分布する。

板目・柾目面：放射組織は1～2細胞幅で、直立細胞の間に、方形細胞と平伏細胞が入り込む典型的な異性である。道管要素は階段せん孔をもち、バーの数も20本以上と非常に多い。螺旋肥厚は存在しない。

モクレン属 *Magnolia* (もくれん科 MAGNOLIACEAE)

顕微鏡写真No.16

木口面：散孔材である。単独または2～数個の放射方向に接続した道管が平等に分布する。

板目・柾目面：放射組織は1～2細胞幅で5～35細胞高と高い。上下縁辺の1～2列のみが直立細胞ないし方形細胞で、そのほかは平伏細胞の異性である。道管要素は単せん孔と階段せん孔をもつ。螺旋肥厚が存在する。道管には階段壁孔と対列壁孔が認められる。

ホオノキ、キタコブシ、コブシが推定される。

ツルアジサイ *Hydrangea petiolaris* Sieb. et Zucc.(アジサイ属 *Hydrangea*) (ゆきのした科 SAXIFRAGACEAE) 顕微鏡写真No.17

木口面：散孔材である。単独または2～数個の放射方向に接続した道管が平等に分布する。チロースが存在する。

板目・柾目面：放射組織は1～6細胞幅で殆どが30細胞高以上と高く、異性である。道管要素は階段せん孔をもち、バーの数も非常に多い。道管には階段壁孔が認められる。さや細胞が存在する。螺旋肥厚は認められない。

ノリウツギ *Hydrangea paniculata* Sieb. et Zucc.(アジサイ属 *Hydrangea*) (ゆきのした科 SAXIFRAGACEAE) 顕微鏡写真No.18

木口面：散孔材である。道管は単独または2～3個複合して年輪内に平等に分布する。軸方向柔細胞が放射方向へ連続して認められるのが特徴である。

板目・柾目面：放射組織は1～2細胞幅、3～5細胞高で、板目面では上下方向で軸方向柔細胞と接している。異性である。道管要素は階段せん孔をもつ。螺旋肥厚は認められない。

サクラ属 *Prunus* (ばら科 ROSACEAE)

顕微鏡写真No.19

木口面：散孔材である。道管は単独または2～3個が複合して年輪内に平等に分布する。

板目・柾目面：放射組織は1～4細胞幅で、20細胞高以上になる場合が多い。異性であるが、板目面では判別しにくい。道管要素は単せん孔をもつ。螺旋肥厚が存在する。

エゾヤマザクラ、ミヤマザクラ、シウリザクラ、ウワミズザクラ等が推定される。

ナナカマド属 *Sorbus* (ばら科 ROSACEAE)

顕微鏡写真No.20

木口面：散孔材である。道管は径が小さく単独または2～3個が複合する。

板目・柾目面：放射組織は2～3細胞幅、3～30細胞高で同性である。道管要素は単せん孔をもち、稀に網状せん孔が認められる。内壁には螺旋肥厚が存在するが、腐朽により形状が明瞭ではないため、

本属の2~3本が束になるSらせんとZらせんの特徴的な肥厚であるかは確認できない。しかし、網状せん孔が認められることから、ナナカマド属であると考えられる。

ナナカマド、アズキナシが推定される。

イヌエンジュ *Maackia amurensis* Rupr. et Maxim.

(イヌエンジュ属 *Maackia*) (まめ科 LEGUMINOSAE) 顕微鏡写真No.21

木口面：環孔材である。孔圏部から孔圏外への道管の径の移行は緩やかである。年輪界付近には小道管の集団管孔の不規則な配列がみられる。

板目・柾目面：放射組織は1~6細胞幅、6~50細胞高で、同性である。小道管が層階状配列をなし、顕著な螺旋肥厚が認められる。ベスチャード壁孔が走査電子顕微鏡により認められる。

ハギ属 *Lespedeza* (まめ科 LEGUMINOSAE)

顕微鏡写真No.22

木口面：道管は環孔状に配列することが多い。孔圏部から孔圏外への道管の径の移行は緩やかである。年輪界付近では小道管の集団管孔が不規則に配列する。

板目・柾目面：放射組織は1~4細胞幅で4~60細胞高と高く、顕著な異性である。小道管が層階状配列をなし、螺旋肥厚は存在しない。

エゾヤマハギ等などが推定される。

キハダ属 *Phellodendron* (みかん科 RUTACEAE)

顕微鏡写真No.23

木口面：環孔材である。孔圏部では大道管が2~3列複合する。孔圏外では小道管が3~6列で線状あるいは紋様状に配列する。

板目・柾目面：放射組織は1~4細胞幅、5~35細胞高で、同性である。道管要素は単せん孔をもつ。小道管には顕著な螺旋肥厚が認められる。

キハダ、ヒロハノキハダ等が推定される。

ツルウメモドキ属 *Celastrus* (にしきぎ科 CELASTRACEAE)

顕微鏡写真No.24

木口面：環孔状を呈し、極めて径の大きい道管と複合する小道管が混在する配列をなす。

板目・柾目面：放射組織は1~6細胞幅で、多列部が20~60細胞高、時々100細胞高以上に達する。異性である。道管要素は単せん孔をもち、螺旋肥厚が存在する。大道管の付近には周囲仮道管が存在する。

ツル性植物の同定には資料が乏しいが、ツルウメモドキ属であると考えられる。

ミツバウツギ *Staphylea Bumalda* (Thunb.) DC

顕微鏡写真No.25

(ミツバウツギ属 *Staphylea*) (みつばうつき科 STAPHYLEACEAE)

木口面：散孔材である。道管は殆ど単独であるが、稀に2~3個の複合も見られる。

板目・柾目面：放射組織は直立細胞からなる単列放射組織と、多列放射組織とからなる。多列放射組織の多列部は1~6細胞幅で平伏細胞からなり、上下辺縁に直立細胞の単列翼部をもつ。異性である。道管要素は階段せん孔をもつ。螺旋肥厚は認められない。

カエデ属 *Acer* (かえで科 ACERACEAE)

顕微鏡写真No.26

木口面：散孔材である。道管は、単独または数個が複合して均等に分布するが数は少ない。

板目・柾目面：放射組織は1~8細胞幅、5~30細胞高で、同性である。道管要素は単せん孔をもち、螺旋肥厚が存在する。

イタヤカエデ、ヤマモミジ、ハウチワカエデ等が推定される。

トチノキ *Aesculus turbinata* Blume.

(トチノキ属 *Aesculus*) (とちのき科 HIPPOCASTANACEAE) 顕微鏡写真No.27

木口面：散孔材である。道管は単独または2～4個の複合管孔を形成する。

板目・柾目面：放射組織は単列のみ、2～10細胞高で高さが揃っており、層階状に規則正しく配列するのが特徴である。道管要素は単せん孔をもち、螺旋肥厚が存在する。

シナノキ属 *Tilia* (しなのき科 TILIACEAE)

顕微鏡写真No.28

木口面：散孔材である。道管は2～5個の複合管孔を形成し、柔細胞は短接線状に並ぶことが多い。

板目・柾目面：放射組織は1～4細胞幅、5～50細胞高で同性である。特に3～4細胞幅の放射組織の場合は紡錘形というよりも角ばった矢じり形に見えることが多い。道管要素は単せん孔をもち、顕著な螺旋肥厚が存在する。

シナノキ、オオバボダイジュが推定される。

サルナシ属 *Actinidia* (またたび科 ACTINACEAE)

顕微鏡写真No.29

木口面：環孔状を呈し、極めて径の大きい大道管と小道管が混在する配列をなす。

板目・柾目面：放射組織は単列放射組織と多列放射組織とからなる。単列放射組織は直立細胞からなる。多列放射組織の多列部は1～4細胞幅で平伏細胞もしくは方形細胞からなり、上下辺縁に直立細胞の単列翼部をもつ。異性である。道管要素は単せん孔をもち、階段せん孔も存在する。階段せん孔のバーの数は多い。螺旋肥厚は存在しない。

階段せん孔をもつことから、本属の中でも、コクワではなくミヤマタタビもしくはマタタビと推定される。

ハリギリ *Kalopanax pictus* (Thunb.) Nakai

(ハリギリ属 *Kalopanax*) (うごぎ科 ARALIACEAE)

顕微鏡写真No.30

木口面：環孔材である。孔圏外では小道管が多数接合して複合管孔を形成し、斜線状や波状に配列する。

板目・柾目面：放射組織は1～6細胞幅で上下の縁辺の1列のみに方形細胞が並ぶ異性である。道管要素は単せん孔をもち、螺旋肥厚は存在しない。

トネリコ属 *Fraxinus* (もくせい科 OLEACEAE)

顕微鏡写真No.31 根材：No.32・33

木口面：環孔材である。道管は孔圏部で大きく、孔圏外では急激に小さくなり、単独のもの2～3個が放射方向に複合するものがある。道管の周りには周囲柔組織が存在する。

板目・柾目面：放射組織は1～4細胞幅、10細胞高ほどで比較的均一であり、同性である。道管要素は単せん孔をもち、螺旋肥厚は存在しない。本属では根材* (地際近くの木質と変わらない根の部分) と推定されるものが数点出土している。

※根材：ひねた材であり、道管の数もかなり少なく配列も特異である。放射組織は1～2細胞幅となる。現生の根の試料と酷似するが断定はできない。

ヤチダモ、アオダモ等が推定される。

ハシドイ属 *Syringa* (もくせい科 OLEACEAE)

顕微鏡写真No.34

木口面：散孔材である。道管は、単独または数個が複合して均等に分布する。

板目・柾目面：放射組織は1～2細胞幅で、異性であるが、大部分は平伏細胞である。道管要素は単せん孔をもち、2本の対をなす特徴的な螺旋肥厚が存在する。

木口面において道管が年輪に沿って一列に並ぶこともあり、道管の配列は個体間で違いが見られた。

ハシドイと推定される。

ササ属/タケ属 (*Sasa/Take*) (いね科 GRAMINEAE)

顕微鏡写真No.35

ササとタケの解剖学的性質の知識に乏しく識別は困難であった。北海道に自生するササ属で、ネマ

ガリダケ、チシマザサ等と、本州以南のマダケやモウソウチクの両方の可能性が考えられる。

〈2〉『千歳市ユカンボシC15遺跡(1)』北埋調報128集の変更と訂正

1) ヒノキ属? アスナロ属? の変更

ヒノキ属? アスナロ属? をアスナロと変更する。(分野壁孔にスギ型が多かったことによる。)

遺物取上げNo.221 (表Ⅳ-2)、遺物番号340・385 (表Ⅶ-6)、遺物番号377 (表Ⅶ-8)、遺物番号120 (表Ⅶ-11)

2) アジサイ属の変更

アジサイ属をノリウツギと変更する。

遺物番号16・27・52・133・117・180・243・348 (表Ⅶ-6)、遺物番号99 (表Ⅶ-7)

3) ハギ属の訂正

ハギ属をイヌエンジュと訂正する。

遺物番号283 (表Ⅶ-6)

〈3〉『千歳市 ユカンボシC15遺跡(2)』北埋調報133集に記述のあて材についての補足

一般に、傾斜地に生育した樹木、一方向からの風圧を受けて育つなどの影響によって傾斜した樹木の幹あるいは枝の上側と下側とで、肥大成長に差が生じ、どちらかに片寄った偏心成長をする。このような偏心成長した部分の材は、あて材と呼ばれる。

あて材は、針葉樹、広葉樹の何れにも生ずる。針葉樹のあて材は、傾斜した幹や枝の下側である圧縮(応力が生じる)側にできる為、圧縮あて材と呼ばれ、広葉樹のあて材は、傾斜した幹や枝の上側である引張(応力が生じる)側にできる為、引張あて材と呼ばれ、共に正常材とはかなり異なった性質を示す。その中でも、組織構造的にみると特に、圧縮あて材においては以下のような性質から、樹種を識別する上での影響がある。

a, 仮道管の断面は丸味をもち細胞間げきが多い。(133集掲載顕微鏡写真15を参照)

b, 仮道管にしばしばらせん状の細胞壁の裂目が認められる。

c, 仮道管の有縁壁孔および分野壁孔の孔口は、早材、晩材を通じてレンズ状ないしスリット状になり、しばしば孔口は壁孔縁の外側へはみ出した幅の狭い輪出口となる。(菊池)

参考文献

- 岡本省吾・北村四郎(1981)『原色日本樹木図鑑』, 保育社
大谷 諄・石田茂雄(1978)『走査型電子顕微鏡による本邦産双子葉木本植物のせん孔板の観察』, 北海道大学農学部演習林研究報告, 35-1, p.65~98
大谷 諄・石田茂雄(1978)『走査型電子顕微鏡による本邦産双子葉木本植物の道管要素のらせん肥厚の観察』, 北海道大学 同上, 35-2, p.433~464
島地 謙・伊藤隆夫(1982)『図説木材組織』, 地球社
島地 謙・伊藤隆夫(1988)『日本の遺跡出土木製品総覧』, 雄山閣
島地 謙・須藤彰司・原田 浩(1976)『木材の組織』, 森北出版
宮本忠輔(1996)『つる性木本植物の二次木部の解剖学的性質』, 北海道大学卒業論文
(財)北海道埋蔵文化財センター(1990)『美沢川流域の遺跡群Ⅻ』北埋調報69
(財)北海道埋蔵文化財センター(1991)『美沢川流域の遺跡群ⅩⅤ』北埋調報77
(財)北海道埋蔵文化財センター(1992)『美沢川流域の遺跡群ⅩⅦ』北埋調報83
(財)北海道埋蔵文化財センター(1996)『美沢川流域の遺跡群ⅩⅢ』北埋調報102
(財)北海道埋蔵文化財センター(1997)『美沢川流域の遺跡群ⅩⅣ』北埋調報114
(財)北海道埋蔵文化財センター(1996)『千歳市 オサツ2遺跡(2)』北埋調報103
(財)北海道埋蔵文化財センター(1998)『千歳市 ユカンボシC15遺跡(1)』北埋調報128
(財)北海道埋蔵文化財センター(1999)『千歳市 ユカンボシC15遺跡(2)』北埋調報133

表IV-39 層別樹種同定結果

針葉樹 複合材や集中の場合はそれぞれの樹種にカウントする

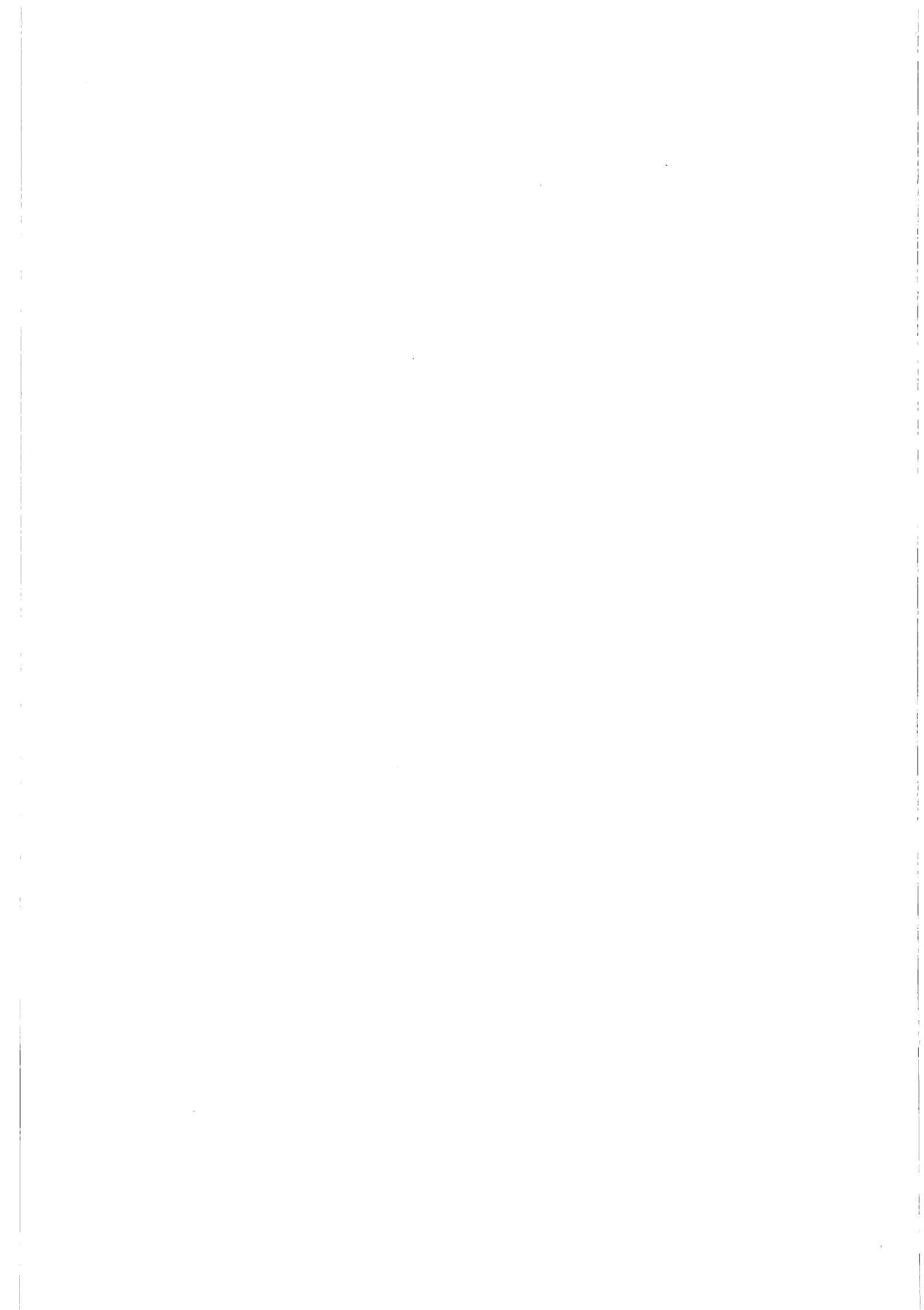
樹 種 名			層 位			合 計
科 名	属 名	種 名	II B	IB5	IB4	
まつ	モミ			5	23	28
すぎ	スギ	スギ			5	5
ひのき	アスナロ	アスナロ	1	16	68	85
3 科 3 属			1	21	96	118

広葉樹

樹 種 名			層 位			合 計
科 名	属 名	種 名	II B	IB5	IB4	
やなぎ	ヤナギ			8	81	89
	ハコヤナギ				2	2
くるみ	オニグルミ	オニグルミ		2	10	12
かばのき	カバノキ				1	1
	ハンノキ			10	91	101
ぶな	コナラ		6	3	19	28
	ブナ			2	7	9
にれ	ニレ		1	6	26	33
くわ	クワ		2	3	9	14
かつら	カツラ	カツラ	1	1	8	10
もくれん	モクレン			1	8	9
ゆきのした	アジサイ	ノリウツギ		4	22	26
		ツルアジサイ	1	2	7	10
ばら	サクラ				6	6
	ナナカマド				6	6
まめ	イヌエンジュ	イヌエンジュ	1		22	23
	ハギ			1	3	4
みかん	キハダ		1		4	5
にしきぎ	ツルウメモドキ				1	1
みつばうつぎ	ミツバウツギ	ミツバウツギ			4	4
かえで	カエデ		1		17	18
とちのき	トチノキ	トチノキ			1	1
しなのき	シナノキ				7	7
またたび	サルナシ				3	3
うこぎ	ハリギリ	ハリギリ		1	13	14
もくせい	トネリコ		17	48	413	478
	ハシドイ			2	37	39
いね	ササ/タケ				1	1
21 科 27 属			31	94	829	954

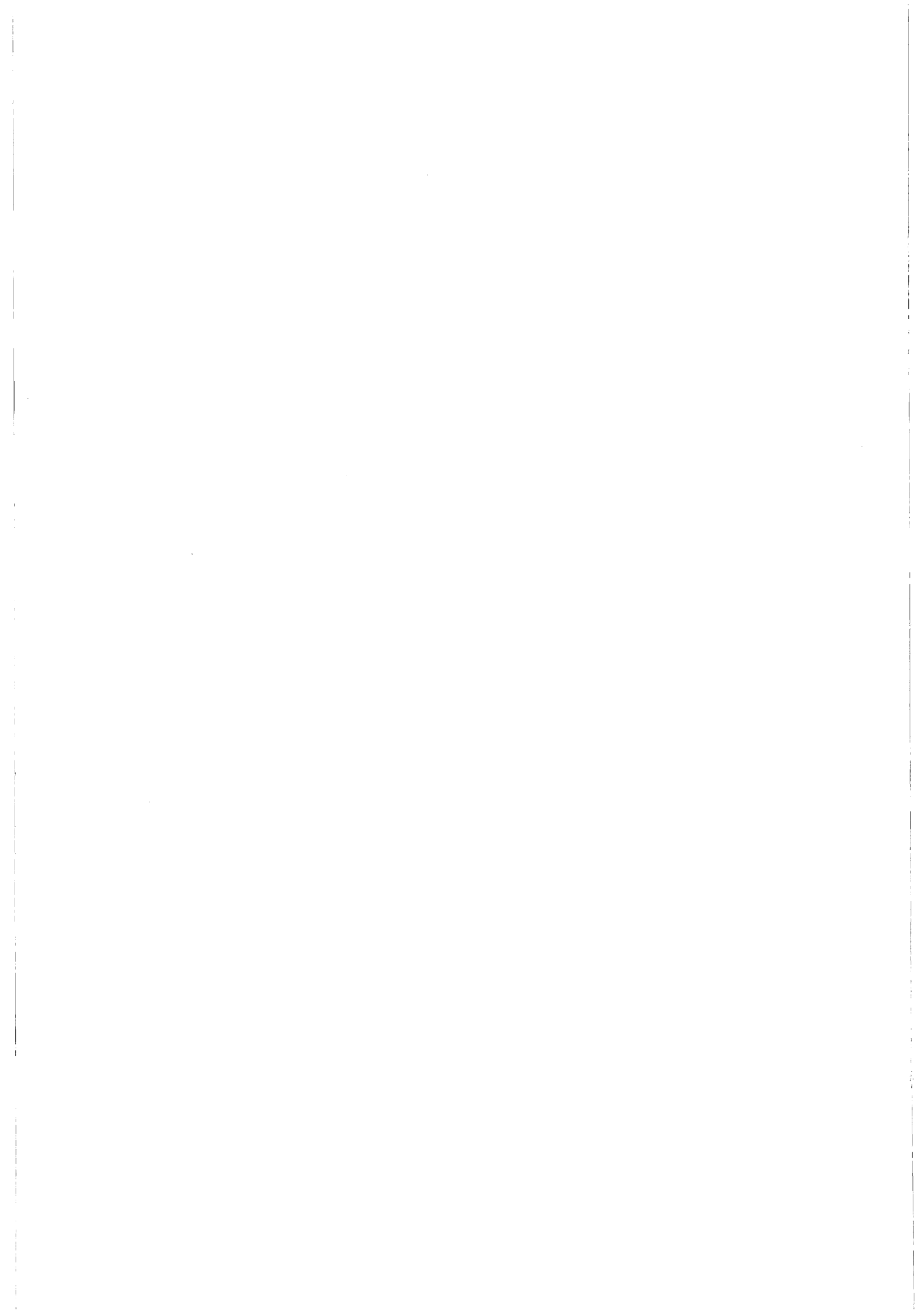
針葉樹と広葉樹の合計

24 科 30 属	32	115	925	1072
-----------	----	-----	-----	------



報 告 書 抄 録

ふりがな	ちとせし ゆかんぼししい15いせき 3
書名	千歳市 ユカンボンC15遺跡(3)
副書名	北海道横断自動車道(千歳-夕張)埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	北埋調報
シリーズ番号	146集
編著者名	西田 茂・三浦正人・鈴木 信・吉田裕吏洋・菊池育子
編集機関	財団法人 北海道埋蔵文化財センター
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地1 Tel 011(386)3231
発行年月日	西暦2000年3月31日
ふりがな	ゆかんぼししい15
所収遺跡名	ユカンボンC15
ふりがな	ほっかいどう ちとせし おさつ
所在地	北海道 千歳市 長都
市町村コード	01224
遺跡番号	A-03-263
北緯・東経	42度52分41秒・141度38分49秒
調査期間	19960626~19961030・19970506~19971031・19980506~19980912
調査面積	3,025㎡・8,855㎡・3,000㎡
調査原因	道路(北海道横断自動車道)建設に伴う事前調査
種別	集落跡
主な時代	続縄文時代初頭・擦文文化期・アイヌ文化期
主な遺構	続縄文時代初頭:土坑1・焼土21・集石2 擦文文化期:住居跡3・土坑1・焼土8・炭化物集中7・灰集中1・集石5・ 土器集中1・杭列1 アイヌ文化期:住居跡2・土坑墓3・焼土22・炭化物集中5・集石10・送り場1・ 柱穴列12・小柱穴多数・馬蹄跡
主な遺物	土器・土製品:続縄文時代初頭の土器・後北A式土器・後北B式土器・擦文土器・土師器坏・ 須恵器坏・線刻のある須恵器壺・土玉・炉壁片など 石器等:石鏃(黒曜石・片岩)・スクレイパー・Uフレイク・石核・たたき石・砥石など 金属製品等:刀・刀子・斧・鍬先・鎌・鍋・鉤状鉄製品・針・刀装具・耳飾・銅製品・キセル・ 熙寧元宝・寛永通宝・素材鉄・鉄滓・ガラス玉など 木製品:舟敷・櫂・キテ中柄・矢・矢中柄・杵・斧柄・槌・漆椀・篋・箸・串・竹・ イクバスイ・桎目板・板材割材等とその加工製品・柱・建材・建築部材・杭など
特記事項	★遺跡西地区のうち、台地部第I黒色土層以上、低湿部IB4層以下の報告である ★擦文文化期の竪穴廃用に係わるカマド祭祀を確認 ★近世の北海道和種馬の蹄跡を確認 ★擦文文化期前葉の木製品の出土



(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告第146集

千歳市
ユカンボシC15遺跡(3)

—北海道横断自動車道(千歳—夕張)埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成12年3月31日 発行

編集 財団法人 北海道埋蔵文化財センター

069-0832 江別市西野幌685番地1

Tel (011) 386-3231 (代表)

Fax (011) 386-3238

印刷 中西印刷株式会社

007-0823 札幌市東区東雁来3条1丁目1番34号

Tel (011) 781-7501

Fax (011) 781-7516

